

---

# 不可侵区域

初瀬こより

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不可侵区域

### 【Nコード】

N4031P

### 【作者名】

初瀬こより

### 【あらすじ】

祖父の実家である資産家一族の屋敷で暮らすことになった中学三年生の綾峰結恵。一族の絶対である本家の人間として認識されることになった彼女だが、広大な屋敷や一族の人間たちには結恵の想像しえない秘密が隠されていた。

引きこもり系伝奇ファンタジー。

## 序章（前書き）

この作品は少し前に書いたもので今以上に未熟さが際立ちますが、よろしければおつきあい下さい。内容は誤字脱字以外以前掲載していたものと変わりません。

## 序章

その日、村はその年一番の騒ぎになった。

「草次郎坊ちゃんが帰ってきたってよ！」

「天狗様に攫われたって聞いていたが、無事だったのか？」

「いやーよかったじゃねえか」

「でも一体今までどこにいたんだろうなあ？」

裕福な豪商の次男として生まれた彼は幼さゆえにまだ自分の身に何が起こったのか把握しきれないまま、両親に抱きしめられていた。ただ、確信するその事だけは伝えなくてはならないと本能的にわかつた。

「……父様、母様」

「ああ良かった、良かった」

「本当に。さあ、しばらくはゆっくり休みなさい」

「聞いて。父様、母様」

彼が少し語気を強めると、両親は喜びの声を静めて彼を見た。

「どうしたの？」

「どこか具合でも悪いのか？」

彼は生れてこの方見せたこともないような大人びた表情で静かに厳かに告げた。

「明後日、戦が始まる」

「そ、草次郎？ 何を言っているんだ？」

「だから、村の人達も一緒に逃げるんだ。そうしないと皆、火に吞まれてしまう」

「ふ、不吉なことを言っんじゃない！」

父に叱られても彼は言葉を止めなかった。

「早く逃げるんだ！ 隣国の殿様はこの辺りの村を焼く気なんだ！」  
彼の強い声音に両親は不安げに顔を見合わせた。

そして明後日。

彼の言葉通り、隣国との戦は唐突に始まり、国境にある村は丸ごと焼かれた。

天狗に攫われ異界から帰ってきた子供は不思議を見る術を持って帰ってきたのだと、誰もが知った。

## 始まり

学校の校門など比べ物にならない精巧な細工の施された巨大な門を車に乗ったままぐり、その地へ足を踏み入れた。

車窓からどこまでも続く敷地内の片隅に、オレンジ色の金木犀が見える。それからしばらく幾つもの豪邸と言つていい家を超えて緩い坂道を上ればイタリアルネサンス風の、今まで見てきた豪邸もかすむほどの広大な洋館の前へと辿り着く。

車は石畳のポーチの前で止まり、運転手が扉を開けてくれる。車を降り、その西洋の宮殿のような洋館を見上げた。これは既に数度目の経験なのだがたった二度では到底慣れない浮世離れた光景だ。「……いつ拝見しても凄いお屋敷です」

思わずそんな感嘆の声を上げると、隣に立つた萌黄色の和服を纏った上品な老婦人、血の繋がった実の大叔母は微笑んだ。

「気に入って頂けるといいのだけれど。ここが貴女のおじい様も過ごした綾峰家。今日からは貴女のお家よ」

「はい」

到底信じられない。緊張して手が汗ばんでいる。

「さあ、結恵さんのお部屋に案内するわ。遠いところをお疲れでしょう」

「きよ、恐縮です」

慌てて頭を下げると大叔母が戸惑うように眉を下げる。

「まあ。そんな他人行儀はしないでちょうだい。貴女は私にとっても実の孫同然なのだから」

「ありがとうございます」

そうは言ってもこの緊張はそう簡単には納まらない。自分で望んだこととは言え、ここは日本どころか世界屈指の巨大複合企業、トセグループの経営者一族の住む家なのだから。

綾峰結恵、あやみねゆえ中学三年生。この十五年間、そんな華麗なる一族とは

全く縁なく生きてきた。

そもそも自分がそのチトセグループと血縁があるということすら知らなかった。半年前、祖父が亡くなるまでは。

父にその手紙を見せられたのは春先の日曜日のことだった。

亡くなった祖父の初七日を終えた後もしばらくは弔問客だ、税理士だ、友人だと人の出入りがあつて居心地の悪かった家がようやく元の静けさを取り戻し、生まれてから十五年間一緒に暮らしてきた家族の喪失感が浮き彫りになった頃。

私はあれほどまでに確固たる自身という者を確立していた人を知らない。知識が豊富で頭の回転も早く自信家で、家族思いで時々子供っぽいところもあった最愛の祖父。何もかも知っていただろうに、私の屁理屈を受け入れてくれた懐の深いおじいちゃん。

自分で決めた事は、貫き通しなさい。

そう言われて育った。

祖母は物心つく前に他界し、祖父と両親、そして私の四人家族だった。

祖父は厳しさと柔軟さを兼ね備えた人で、私にとっては怖いおじいちゃんであると同時に頼りがいのある人だった。その祖父も年を重ねるごとに見るからに体が弱つていき、身の周りの整理を始めてそれから一年後、あらかた身辺整理が終わったところで老衰で亡くなった。

実に祖父らしい、潔い最期だったと多くの人達に言われた。

その祖父は自分が死んだら開けるようにと遺産に関するものとはまた別に手紙を遺していた。そこには祖母と駆け落ち同然で実家を出てきて以来、一度も連絡を取っていないという祖父の実家に関する

ることなどが書かれていた。

祖父は自分の出自に関する一切を、生前一度たりとも実の子供にすら話さなかった。墓まで持って行く気だろうと、父は常々祖父の頑固な性質を笑っていたが、まさか祖父の最後の最後にその復讐に遭うとは思ひもなかっただろう。

手紙は私、父、母。それぞれ個人にあてた生前の感謝などを記した手紙の他にもう一通、家族皆へ向けたものがあつた。

『我が愚息、愛嫁、愛孫へ。

早速だがこの手紙の内容を要約すると、これは私が一度として口にすることはなかった私が出てきた家について書かれている。私の実家は綾峰家の本家にあたる家だ。どの綾峰かと言われれば、旧千歳財閥、現在のチトセグループ経営者一族だ。私はその家の長男として生まれたが、妻と結婚するため家を出た。

両親、親族は私達の結婚に反対したが私の妹だけは唯一陰ながら私の味方をしてくれ、家を出る際にも随分世話になった。四十年ほど連絡はとらずにいたが、両親の死をきっかけにまた細々とだが交流を持つようになった。だがお前たちはそのことを知らないだろう。それ故私が死んだことを妹は知らないと思う。

どうか妹に私が死んだことを伝えてやってほしい。そしてその重責を負わせたことを幾重にも詫びていたと伝えてほしい。妹の名は綾峰桂子。現在の綾峰家当主だ。綾峰義将の身内と言えは話はすぐに通る。連絡先は 』

それが祖父の遺した手紙だった。読み終わった父の顔を見ると、父は疲れた風に肩を落とした。

「嫌だなあ」

そしてぼそり、と呟いた。

「何で親父、そんな面倒くさそうな家に生まれたんだ……嫌だなあ。肩こりそうなのは会社でたくさんだって言うのに」



「とても実の親の実家に対する意見とは思えないご意見で」

私の軽口に父は肩を竦める。

「だって結恵。お父さんはこの間人事部長になったばかりで一番苦勞が多いんだぞ？ この合併吸収のご時世に」

父は一年前の人事異動で見事それなりに大きな企業の人事部長に就任した。そしてそれから数ヶ月後、突如別企業とお父さんの会社は合併した。それによってとにかく人事部はより一層面倒になったらしい。

ちなみに父の勤め先はチトセグループとは関係ない。日本の企業の六割はチトセグループ関連と言われる中、偶然にしてはうまく出来すぎている気がするから、祖父がうまくチトセグループを切り離させたのかもしれない。

「あなた。子供に仕事の愚痴をこぼすのはやめてちょうだい」

母にたしなめられ、父はスマンスマンと言って話を切り替える。

「とにかくそんなご立派な家の人をお迎えするなんて、接待ゴルフ以上に肩がこるじゃないか。お父さんは家でくらは猫を外したいんだよ」

「父親として威厳もへつたくれもない言い分だね、お父さん。娘は悲しいよ」

そんなふざけ半分、真剣半分のやり取りをした後、父は祖父の遺言を忠実に守った。

そして、チトセグループ元会長の妻にして綾峰本家当主は黒塗りの高級外車でごく一般的な我が家にやってきた。

黒服の屈強な男二名を両脇に従え、黒紋付きを纏った穏やかながらも凜とした雰囲気なたたえた老婦人。私にとって大叔母にあたる人物との初めての対面だった。

「綾峰義将の妹、綾峰桂子と申します」

深々と頭を下げる初対面の血縁者に父は恐縮しきり、母は粗相のないようにと緊張しきり、私は可能な限り『大人受けのいい子供』を演じた。仏間に通し、線香を上げ、大人の会話がひとしきり交わ

されるのを黙って見届けた後、大叔母は私を見て微笑んだ。

「兄から貴女の事はよく聞かれました。こうしてお会いできて嬉しいわ。どうぞよろしくお願い致しますね、結恵さん」

そうして差し延ばされた手を握り、にっこりと笑った。

「こつ、こちらこそお会いできて光栄です。ご多忙なことは重々承知しておりますが、お時間があればぜひ祖父の若い頃のお話など聞かせて頂きたいです」

そこから、私の家と綾峰家の繋がりは確かなものとなっていく。

祖父から私の事は多く聞いていたという大叔母。

本当にその通りで、余計なことを話す手間が大きく省けた。

それでも私に「実の祖母だと思ってくれたら嬉しい」と言ってくれた。私を否定しないでくれた。

綾峰という家との繋がりが嬉しかった。

けれどそれ以上に、この人の存在は胸が痛むほど嬉しかった。

それからは既に隠居しているという大叔母から我が家に足を運んでくれたり、外でお茶をしたり、あるいは綾峰邸に招かれたりもするようになった。

密かに、静かに、私の胸の内にあつた小さな希望がより確固たる形を成していった。

これを希望と呼んでいいものかはわからなかったけれど。希望と呼ぶにはあまりに昏い願いだったけれど。

それから更にしばらく後、父は海外支社への辞令を言い渡された。

「できれば結恵も連れて行きたいんだけどね」

「一生懸命受験勉強をしていたのはわかってるし、やっぱり一人日本に残すのは心配だし……私が残ったほうがいいわね」

難しい顔をして話し合う両親に、私は笑って言った。

「私はもう大丈夫だよ。だからお母さんはお父さんに着いて行ってあげてよ。お父さん一人じゃ私も心配で心配で。お父さんの家事才

ンチは天才レベルだからね」

両親が何を心配しているのか、そんなことはよくわかっていたからこそ笑顔で送り出そうと決めていた。そしてこれを機に、私は自分で生きる力を身につけようと思った。

私なりに生き抜く術を身につけようと決めたんだ。

「では叔母さん、結恵が御厄介になります」

「ふつつかな娘ではありますが何卒よろしくお願い致します」

深々と頭を下げる両親に、大叔母は穏やかに笑った。

「何を仰るの。結恵さんは私にとっても孫同然。一緒に暮らせるなんてそんな嬉しいことはないわ」

両親が海外へ行く日から、私は綾峰本家の世話になることになった。

「これからお世話になります」

大叔母はつい最近初めて会ったばかりの私を善意で受け入れてくれた。

生まれてからずっと、この地位にいた人。

きつと下心を持って近づいてくる人間も少なくなかったろうに。

本当に、祖父みたいに懐の深い人。自分が嫌になるくらいに。

だけどだからこそ、私は祖父にも大叔母にも憧れるんだ。私にはない強さを持った人達に。

「結恵さん？」

大叔母の声に、意識は近い過去から今へと呼び戻される。

「どうかなさって？」

「い、いえ。今日から本当に私がこんなに立派なお家で暮らすのだと思うと不思議な感じがして……」

そう言って苦笑すると、大叔母は安心させるように微笑んでくれた。

「すぐに慣れますよ」

運転手が大きな扉の隣にあるベルを押すと、内側から扉が開かれ、大勢の使用人らしい人達に出迎えられた。

「お帰りなさいませ、奥様。お嬢様」

深々と頭を下げる人達。

呼ばれ慣れない『お嬢様』という呼称。

「ただいま戻りました。後程改めて紹介致しますが、こちらが兄の孫の結恵さんです」

毅然とした女主人といった風情で大叔母は出迎えにあたった人達に私を紹介した。

「……綾峰、結恵です」

使用人達の向こうに見える大きな吹き抜けになった階段。

赤い絨毯の敷かれた床。

天井高くから吊るされたシャンデリア。

高い天井に広い廊下。

……ここに私の望んだものがある。

「これからよろしく願います」

緊張を胸の奥に押し込み、軽く一礼した。

今日からここが、私の家だ。

これが私の欲しいものへの一歩だ。

## 綾峰家の子供たち

綾峰家敷地内の緩い丘陵は幼い頃からの彼らの遊び場だった。

「ねえねえ。桂子様のところに義将様よしまさの孫が来るのって今日でしょ？ もう着いたかな。ねえ鷹久たかひさは何か聞いてない？」

木陰になった芝生の上で、柔らかな髪を耳の後ろでそれぞれに結った少女、四葉よつばは緩いクセ毛の少年を見上げた。

「四葉は最近そればっかだな。けど本来の本家直系かあ。どんな子？ 俺会ったことないんだよな。な、鷹槻タカツキ」

「ああ」

共に落ち着いた雰囲気を纏いながら、穏やかと冷ややかに分かれる二人は頷き合う。

「お前らだけじゃねえよ。俺らもだつつの。親父らがうつせーんだもん。そもそも本家屋敷は俺らじゃ簡単に入れねーし。二ノ峰家にのみねのお前らですら会えないってどんだけだよ」

小柄な少年、律りつが苛々とした調子で毒づく。

「そんなに苛つくなよ。相変わらずカルシウム不足かあ？」

その横で意地悪げに笑うのは律の双子の弟、令りょうだ。

「おめーは何でそんなに呑気なんだよ。少しは軽んじられてるってことに憤れ！ 兄として恥ずかしいぜ」

そうして全く見た目も性格も違う双子の兄弟は木陰で暴れだす。

それを見ていた色素の薄い髪を背に流した少女、薫子かおるこは本から顔を上げず、呆れたように言う。

「近いうちにお披露目があるわよ」

それを聞いて四葉は勢いよく薫子を見た。

「本当？ 薫子ちゃん、何でそんなこと知ってるの？ あたし達は聞いてないよ。ね、律令」

「ひとまとめで呼ぶな！」

律は心底不快げに怒鳴る。

「そうそう。律なんかと一緒にされちゃ不本意極まりない」  
令はケラケラと笑う。

「んだと、オイ。てめ、お兄様を敬えつつってんだろ!？」

「いやー俺よりちっこい奴をお兄様って言ってもなあ」

そうしてまた双子は暴れ出す。

「うるさいわね」

薫子は眉を顰め、そんな様子を眺めながら鷹久は言った。

「いつになるかはともかく、近いうちに俺らにもお披露目があるさ」

「何で鷹久も知ってるの？」

四葉にシャツをつかまれて鷹久は苦笑する。

「例の『結恵様』っていうのは俺らと同じ年くらいらしいから、仲良くしなさいってなお達しがあると思うよ」

「『結恵様』っていくつなの？」

「何だよ、全然情報まわってねえのな」

不満げに律が声を上げた。

「大人たちの噂じゃ薫子と鷹槻とタメらしいぜ。来年高校だと」

「じゃああたしの後輩だあ」

四葉がにこにこ嬉しそうな声を上げる。

それを見て令は軽く笑う。

「どう見ても四葉のが後輩だとは思っけどなあ」

「確かに」

律の視線の先の四葉はどう見ても小学生。

小柄な身長と童顔、幼い物言い。何とかさは読んでも中学生だ。

「うーっ。確かにあたしは背が低いよ！でも律にだけは言われる

筋合いないもんっ」

「んだとおっ!？」

律が立ち上がり、四葉と睨みあう。

その光景はどう見ても小学生のケンカだ。つまるところ彼、律も

四葉同様幼い外見をもつ。

綾峰律と令は二卵生双生児で今年中学二年。だが律は小学生時代

から未だ成長期に入れず、声変わりもまだ済ませていない。その上、女顔と言つて通りそうな容貌から小学生に見られることは数知れず。それに対し、双子の弟の令は背も高く、髪を染めたりしているから高校生に見られることも多いから余計に律は氣に入らない。

背が低い、子供、という言葉は彼にとっては地雷だ。

「万年小学生に言われたかねえんだよ」

「うるさいなあ、人のこと言えるの？」

令はすでに飽きたらしく、他の三人へと視線を向けた。

「あつちの二人はうるさすぎるくらいだってのに、お前らは間逆に落ち着き払つてるよなあ」

鷹久は持参のペットボトルから口を離して令を見た。

「世の中なるようにしかならないからな。世の流れに逆らわず生きるのが楽に生きるコツさ」

「相変わらずじじくせえな」

「お前らというところ否応なく大人にならざるをえなかったんだよ。な、弟よ」

鷹久に背中を叩かれ、ぼんやりと本家屋敷　或いはそれよりずっと奥を見ていた鷹槻が振り返る。

「痛え」

二つ年上の兄に、鷹槻は文句を込めた眼差しを送るが当の鷹久は悪気なく笑っている。

「そりゃ悪かった。それより『結恵様』は最低でも三年は本家屋敷にいるらしい。その間の世話役はお前と薫子なんだから、ちゃんと仲良くするんだぞ」

「その『結恵様』も嫌だろうな」

いつの間にかケンカを終えた律がぼそりと呟く。

「何が嫌なのよ？ 律」

聞き捨てならないとばかりに薫子が冷やかな視線を向ける、律はにっと歯を見せて笑った。

「老け顔二人に挟まれちゃ、疲れるだろうよってハナシ」

老け顔という単語に薫子の細い眉がつり上がる。

「……それは童顔の癖みかしら？」

「老け顔を癖みやしねえさ」

途端、薫子を読んでいた本を律の顔めがけて放り投げる。

「老け顔じゃなくて、大人っぽいとおっしゃい！」

そうして顔を抑える律を仁王立ちになって見下ろした。

薫子は今年中学三年だが、年齢より落ち着いた物腰と雰囲気、端麗な容姿が実年齢より三つ、四つ上に見せる。四葉、律とは逆に何かと年長の扱いをされるのが彼女のコンプレックスだった。

「鷹槻！ あなたも何か言いなさいな」

「……他人を貶めてもお前の背が伸びるわけじゃないんだからやめておけ。律」

「なあっ……！」

綾峰鷹槻は薫子と並んで歩けばそれこそ中学生には見えない大人びた整った容姿と冷たげで落ち着いた雰囲気を持ち主だ。そしてその冷たげな雰囲気にならず、その口から飛び出す言葉、特に害意を向けてきた相手に返すものは氷のように冷やかなものが多い。

「あーあー鷹槻。たとえ本当のことでも、もう少し言い方って物があるだろ。ごめんな、律」

「謝ってんのかソレ!？」

鷹久は鷹槻の兄で、この場では最年長の高校二年生。穏やかでいかにも良家の子息という立ち居振る舞いだが、その穏やかな言葉の端々にはどうも刺と毒がたっぷりある。

この場の全員がこの綾峰家敷地内に暮らし、綾峰姓を名乗るチトセグループ経営者一族の一員だ。

「あ！ 皆様、お揃いでいらしたんですね！」

各々に過ぐす木陰に、本家屋敷の使用人らしい若い男が息を上げて駆け寄ってくる。この様子だと随分走り回っていたのだろう。

「どうかしたの？」

薫子の言葉に使用人は背筋を伸ばし、六人の顔をゆっくりと見回



した。

「桂子様からのお言葉です。明日十一時、本家屋敷前庭にて義将様のお孫様を皆様にご紹介したいとのことです。出来る限りご参加頂くようにと申し付かつて参りました」

「なら桂子様に伝えてくれる？ 『喜んで全員参加させて頂きます』って」

真っ先に人畜無害そうな笑みで答えたのは鷹久だ。

「え、はい。えーと皆様も……ご参加、で？」

使用人は勝手に答えられたようにしか見えない他の五人を見回す。

五人はお互いの顔を見やってから頷いた。

「このみねけいこ二ノ峰家戸主次男、鷹槻、参加させて頂く」

「このみねけいこ四ノ峰家戸主長女、四葉。参加しますっ」

「このみねぶんけい四ノ峰分家長男、律。参加する」

「このみねけいこ一四ノ峰分家次男、令も参加で」

「このみねけいこ五ノ峰家戸主長女、薫子。参加させて頂く旨、桂子様に宜しくお伝えを」

「はい。では皆様ご参加で。桂子様もお嬢様もお喜びになられると存じます。皆様のお越し、本家使用人一同お待ちいたしております。では」

使用人は安堵の表情を浮かべて緩やかな丘陵になった芝生から小道へと戻っていく。

それが見えなくなつてから、鷹久が軽く笑みを零す。

「思ったより早いお披露目だな」

「あたし達を探したーってことは、メインは大人じゃなくてあたし達ってことだよな？」

「それぞれ家にも連絡が行ってるだろうが、一応各自に確認を取つたあたりを見るとそうだろう」

鷹槻は本家屋敷を見ながら呟く。

「明日十一時ってことは昼食付きか。やりいっ！ 本家のメシは美味いんだよな」

「いやしいわよ、律。食事でなく、あくまでお披露目がメインなんだから」

「そーだぞ、バカ兄貴。健全な青少年として食事も大事だが、かわいい女の子を見るのが先だろ」

「てめっ……今バカって」

「仲良くなれるかな？」

再び不穏なものが流れ始めたところを四葉の高めの声が遮った。

しばらくの間、四葉以外の五人に妙に静かな空気が流れる。その視線は全て四葉へと向けられている。

最初にその沈黙を破ったのは鷹槻だった。

「……向こう次第だろ。『様付け』を当然と思うようなら四葉の言うような仲良くは無理だろうし、向こうが四葉みたいに望むんならなれる可能性はある」

「そつかあ。『結恵様』はどーなんだろ？ あたしは仲良くなりたいなあ。せつかく年の近い女の子なんだもん」

「うえ。様付け当然なんて高慢な女嫌だ」

心底嫌そうな顔で律が息を吐く。

「つーか四葉。綾峰暮らしが十六年でそんなすぐ分かるような質問しちやマズイだろー」

けらけらと令が笑う。

「うるさいな。令は年下のくせにナマイキっ。枯れたサヤインゲンみたいな髪の色しちゃって!!」

「何だそれ！？ 枯れたサヤインゲンってどんなんだよ」

「あーそれはきつと、初等部時代に理科の授業でサヤインゲンの栽培をした方がいいが、クラスで一人だけ枯らしてしまった四葉の悲しい経験がものを言ってるんだよ。あの生命途絶えましたっていう色は、確かに今の令の色抜いたり染めたりして痛みまくった髪によく似てるな」

どちらに対してもフォローともつかない言葉を鷹久がさわやかな笑顔で言う。

咄然と目を丸くして固まる二人に、律が吹き出す。

「枯れサヤインゲン…っ。アハハハハ！！　だっせー、カッコつけてそんな妙な色に頭染めるから」

「妙じゃねえだろー！？　この金とアツシユブラウンとの具合がいんだろが」

「何だ、それ色入れる時に失敗したんじゃないのだったのか。わざとだったのか」

鷹槻の本気の一言に、今度こそ律が地面を叩いて大笑いする。

「だよな、そう思うよな？　あははははははは」

「律っ。てめえ笑いすぎだっつの！！」

ケン力を再発させる兄弟の隣で、話題に飽きた四葉が薫子の腕を引く。

「ねえ薫子ちゃん。あたしお腹すいたし、そろそろ帰らない？　風も冷たくなってきたし」

「そうね。じゃあそろそろ帰りましょうか？」

「じゃあ俺らも。鷹槻？」

「……え？」

遠くを見ていた鷹槻が一瞬驚いたような声をあげて顔を上げる。

「俺ら帰るけど、お前はまだここにいる？」

「いや……俺も帰る」

鷹槻も立ち上がってジーンズについた芝生を掃う。

「おーいその双子。俺らは帰るぞ？」

「だめだねえ、全然聞いてないよー。ああなっちゃうと手がつけれないから先帰ろう」

彼らとは従兄弟同士の四葉がそう言うのならそうなのだろう。

鷹久は声をかけるのをやめ、小道へと降りて行く。

「呼ばれたのって私達だけかしら？　同世代ということだ」

薫子が零すように言う。

「どうかな。子供は俺達以外にもいるから」

「俺達だけだったとしても、桂子ばあさんや他の連中の判断次第じ

やこれから正式に一族の前でお披露目があるだろう。それから  
「それから、最奥に」

鷹槻の言葉をためらいなく四葉が続ける。

「逃亡者の血を、最奥に」

先程までの幼い言動も雰囲気も消え失せ、不思議に静かな声音で告げる。

湿った重苦しい沈黙が広がる。

「義将様はどこまでお話しになったのかしら？」

「さあ。けど知っててこの家に来させる親も、来る子供も相当酔狂だとは思っね」

鷹久が苦笑して答える。その目がどこか諦めを含んだ色に染まる。

「俺は早く、ここを出たいな」

その呟きに答える者はいない。

けれど、誰もが胸の内では思っているのは同じこと。

「ここは淀んでる。ずっと昔から変わらずに」

「百年先も、八百年先も、千年先もきつとずっとずっと変わらない

……」

鷹槻と四葉の抑揚のない声が、空に吸い込まれた。

明治時代の終わりに建てられたという綾峰本家屋敷は二階建て。

それに地下があるそうだが、そこは使用人が使う場所なので出来るだけ行かないようにと言われた。そんな話を聞きながらステンドグラスが見下ろす吹き抜け階段を昇り、二階の一室の前で大叔母は立ち止まった。

「今日からここが結恵さんのお部屋です。何か不都合があったらいつでも言いに行きましょう。私の部屋はこの階の南西にありますから。内線もありますから、詳しい事は三波さんに聞いて頂戴。詳しい事はまた午後のお茶の時にでもお話ししましょう」

「はいっ」

「では三波さん、結恵さんのことをよろしくお願いしますね」

「承知致しました。奥様」

大叔母様の足音が遠ざかっていくのを聞いてから部屋の扉が閉じられる。

バルコニー付きの部屋は二十畳ほど。

まず目についたのはクイーンサイズのベッド。それとは別に小花柄の長椅子。カーテンも同じ柄。木製のデスクと椅子。本棚、ガラス扉のチェスト、クローゼットなどなど。アイボリーカラーの壁には水彩画らしい風景画が飾られている。ベッドの横のサイドテーブルには柔らかな色調のランプ。

（眩暈がしそう……）

この部屋だけで、今まで住んでいた家のリビングサイズはある。

「お嬢様？」

「……」

「結恵様？」

「はっ、はいっ」

私のことかと慌てて振り向くと、二十代後半かそれくらいの彼女はにっこりと微笑んだ。

「私、三波祥子と申します。みなみしょうこ今日よりお嬢様付きの使用人となりましたので、何なりとお申し付け下さい」

「私付き？」

「はい」

三波さんは笑顔で小さく頷いた。

（……今度は貴族になった気分だ）

使用人……今の時代の日本にあったのか。少しの事じゃ動じないようにと自分に言い聞かせ、今日ここまで来たのだ。だがそんなことは全くの無駄だったらしい。

わかつてはいたが、世界が違いすぎる。

心臓がうるさいほどにその存在を主張する。……でも、決めたの

だ。

私はここで生きていく。そして、そして。  
きつく瞼を閉じて、三波さんを振り返った。

「あ、あのー！」

「はい」

三波さんは笑顔を崩さず答えてくれた。

私は一回深呼吸して、彼女の目をしっかりと見据えて口を開いた。  
「ご迷惑をおかけするかと思いますが、どうぞこれからよろしくお  
願います」

「はい。こちらこそよろしくお願い致します。かわいらしいお嬢様  
がいらっしゃると奥様から伺い、今日と言う日をとても楽しみにし  
ておりました。何かありましたら、遠慮なく仰って下さいましね？」

三波さんの笑顔は人を安心させる。

ゆつくりと、安心させるように言葉を紡いでくれるというのもある  
のだろう。

「はい。ありがとうございます」

正直、そう簡単に受け入れてもらえるとは思っていなかった。

使用人達にしか会っていないが、私はこの家を捨てた祖父の孫で、  
それもごく一般家庭育ちで本来ならばこんな大層な家など全く縁  
のないはずだったのだから。

これから会う親族が皆好意的な人達だなどと樂觀視はしていない。  
けど、こうして大叔母や三波さんのような人がいてくれることは  
心強い。

少なくとも私はこの家で、一人じゃない。

こんなことを思っているようじゃまだまだだと思いつつも、や  
はり好意的に思ってくれる存在はありがたかった。

それから三波さんに屋敷と敷地内の簡単な地図を持ってきてもら  
い、午後のお茶までの時間をつぶすことにした。

シモンズ社のものらしい寝心地のいいベッドに寝転がり、地図を

見た。

敷地内北側にこの本家のお屋敷。それからさつき車で入ってきた表門からは奥に向かうにつれていくつかの屋敷がある。

遠目で見た限り、この本家屋敷と変わらないくらい古い洋館、日本家屋。それから近代的な洋館などがあった。

門の近くから順に五ノ峰家、四ノ峰家、三ノ峰家、二ノ峰家、その他の分家と記載されている。

「分家……？」

それぞれの屋敷には注釈が書かれており、その五ノ峰家は戸主、綾峰誠一郎となっている。他の家も皆、戸主は綾峰姓となっている。

「呼称みたいなものかな。皆、綾峰だし」

詳しい説明は追い追いついていくとしよう。

「あ、そろそろお茶の準備をしないと」

せっかく大叔母からお誘い頂いたのに遅れるわけにはいかない。

ベッドから起き上がり、クローゼットの中を漁ると、そこには自宅から送った服の他に大叔母から贈られた服が何着かある。その中に濃いブラウンの飾りレースがついたベージュのワンピースがある。

「うん、これにしよう」

別に着替えて来いとは言われなかったが、何だか今着ているパーカーとデニムのスカートが場違いな気がしてならなかったから丁度いい。

袖を通してみると今まで着たこともない上質な生地と縫製に感激する。こんなに上等な服が似合うものだろうかと考えながら部屋を後にした。

「まあかわいらしい！ よくお似合いだわ」

三波さんに案内されてテラスに面したサロンに行くと、大叔母は両手を合わせて喜んでくれた。

「ありがとうございます」

落ち着かなくて何度も椅子に座り直してしまう。そうしている間

にもメイドが薔薇模様のティーカップに良い香りのするお茶を注いでくれる。

「いい香り」

「ダーズリンでございます。ストレートで飲まれるのがよろしいかと思ひましてミルクは用意致しませんでしたがお持ちしましょうか？」

「いいえ。ストレートで頂きます」

そう答えるとメイドは一礼し、カートを押してサロンを出て行った。

「おじいちゃんも紅茶が好きでした」

「昔から兄は紅茶好きでしたけど、結恵さんのおじい様となつてからも変わらなかったのね。随分好き嫌いの激しい人でしたけれど、紅茶に関しては特にうるさくなかったかしら？」

「あ、はい。いつもたたくさんの紅茶をストックしていて、飲む時は必ず自分で淹れていました」

「ふふつ。本当にここにいた時から変わらなかったのね。若い頃から兄は紅茶だけは人に任せず、自分で淹れていたんですよ」

「このお屋敷にいた時からですか？」

自分で淹れなくなつて全て使用人任せに出来たろうに。

「両親はそれをよくは思っていますでしたが、私は兄が淹れた紅茶を飲むのが大好きで。兄が淹れた紅茶ほど美味しい紅茶を私は知りません」

「私も、です」

祖父が淹れてくれる紅茶は私の好物の一つだった。

「結恵さんにとって、兄は良いおじい様でしたか？」

大叔母はまっすぐに私を見てきた。

「はい。とても良い祖父でした。祖父は私の憧れで、一生の目標です」

思つがままに口になると、大叔母は嬉しそうに口元を綻ばせた。「そうですね。生前兄から家族の話を伺つた際にも思ひましたが、



やはり兄は幸せに過ごせたんですね。本当に良かった」

優しい声色と目元には、祖父への愛情が滲み出ている。

この人は本当に祖父のことを大切に思ってくれたんだ。

「……あの、祖父は大叔母様にとってはどのようなお兄さんでしたか？ 私は晩年の祖父しか知らないのに、若い頃の祖父のお話も伺いたいです」

そう言うとお叔母は嬉しそうに目を細めた。

「そうですね……では私の昔話に付き合ってくださいるかしら？ 兄は私より十歳も年が離れていて……」

それからお茶をしながら祖父の昔話をいくつも聞いた。

大叔母の話す祖父はやはり私の知らない祖父だったけれど、根底は変わっていないように感じて、つい声を上げて笑ってしまったりした。

小一時間ほどそんな話をして過ごし、いつの間にか緊張はほぐれていた。

「あらいけない。つい私ったらおしゃべりが過ぎてしまつて。ごめんなさいね。結恵さんのこの家でのことをお話しなければならぬのに」

「いえ。私の知らない祖父の話をたくさん聞けてとても嬉しかったです」

「そう。良かったわ」

笑うと目元に皺ができてとても可愛らしい雰囲気になる人だ。

「そうそう。お勉強のことだけれど、結恵さんの通つてらした塾は遠くなつてしまつし、家庭教師をつけるのがいいと思うのだけれどどうかしら？」

実家からこの家までは車で一時間半ほど。とてもじゃないが通える距離ではない。

「はい。お願いします」

「ええ。では学校のことですけれど……」

つい顔が強張った。けれど大叔母は私の胸の内を読んだかのように

に、安心させるように穏やかな声で続けた。

「綾峰の子供は多くが幼稚園から大学院までの私立校に通っているの。古くから交流のある家の経営で、そこなら私も安心して結恵さんを預けられると思うのだけれどどうかしら？」

そして大叔母から続けられた学校名は国内の誰もが知る有名私立校だった。偏差値、学費、設備、あらゆる水準が国内最高クラスと言われる良家の子女御用達学校。

「わ、私なんか、とてもじゃないですがそんな立派な学校……」

思わず俯いてしまう。確かにそこも受験したいとは思っていた。

幼稚園からのエスカレーター式で、高校からの外部入学はほとんどないというし、おまけに内申書などの問題もある。だからせめて記念受験できればと思ってはいたが。

「そんなに自分を卑下してはならないわ」

大叔母は優しくそう言った。

「結恵さんが一生懸命お勉強なさっているということは貴女のご両親からもよく伺っています。もし本当に嫌だと仰るのなら無理強いはいませんが、そうでなければ考えて頂けると嬉しいわ」

大叔母は優しく微笑んでいた。

ぎゅつと膝の上で両手を握り締める。

願ってもない言葉。迷うな、迷うな……！

「出来れば私も通いたいです。けど、今の私の学力では到底授業についていけないとは思えません。ですから高校から……せめてあと半年必要な勉強をしてそれだけの学力がついたのなら、高校から緑櫻学院に通いたいです」

「わかりました。では最高の家庭教師を呼びましょう」

大叔母は頼もしく答えてくれた。

「……お世話をおかけします」

「ご両親や兄の代わりにここにいる間は私が結恵さんのことを守るのですから、そんなことは気にしなくてよろしいのよ？ 私も好きでさせて頂いているのだから。そうですね……せめてここにいる間

だけでも出来れば大叔母様ではなく『おばあちゃん』と呼んで頂けると嬉しいわ」

「そつ、そんなとんでもないです!」

いくらお世話になるからって、おばあちゃんだなんてそんな馴れ馴れしく呼べる立場の人だとは到底思えない。

けれど大叔母は言った。

「けれどそのほうが家族のようでしょう? 大叔母様だなんて何だか他人行儀で寂しいわ」

そう言った大叔母様が少し寂しげに見えて、つい頷いてしまう。

「で、では、おばあ様でどうでしょうか?」

祖母ではないのだから本当はおばあ様というのも変なのだろうけれど、これが私なりの精一杯だ。

「まだ少し固い気もしますけれど……そうですね。ではそこから徐々に慣れていって下さると嬉しいわ。今日から私達は家族なのですから、どうかそんなに緊張なさらないで?」

当たり前と言えば当たり前だけれど、気づかれていたんだ。

「この家は少々変わったところもあるから戸惑うこともあるかもしれませんが、何も遠慮はいりません。言いたいことがあったら何でも仰って頂戴?」

この人は、知っていても色眼鏡をかけたらししないで私を見てくれる。ほんのついこの間会ったばかりの私を家族だと言ってくれる。

「ありがとうございます」

嬉しくて嬉しくて、頬が弛みきっていた。

それから明日の十一時に私と同世代の親族を紹介してくれるという話になり、そのまま夕食まで二人で話し込んでいた。

祖父の若い頃の話。

他の親戚達の話。

温室にある蘭の話。

様々な話をして、初めての綾峰本家での夜を迎えた。

ベッドに入っても目が冴えてしまつて眠れない。柔らかく温かな羽毛布団もマットレスもこれ以上なく心地いいのに、興奮してしまつて眠れる気がしない。

どうしようか散々迷つた末、厨房に行つてホットミルクでも飲むことにした。

厨房には深夜にも関わらずシェフがいて、明日の料理の仕込みをしていた。

眠れないと話すると快くホットミルクを作ってくれ、私は温まつた体で部屋へと戻つた。

……戻っているつもりだつたのだが。

「ここはどこ？」

階段すら見当たらない。

この辺りはなぜか人気もなく、灯りも灯っていない。  
言つてしまえばかなり怖い。

「誰かぁー……」

夜なので小声で呼んでみるけれど、返事はない。仕方なくあちこちつろろろしていると一室から細い明かりが漏れていた。

地獄に仏の気持ちで細く空いた扉に掛け寄ると、その風圧で扉が開く。

「……通路？」

空いた扉の向こうには部屋ではなく、廊下が続いていた。  
明かりはその向こうから漏れてくる。

心細さに負け、私はその廊下へと足を踏み出した。  
知らず、綾峰家の最奥へと。

## 最奥の住人

その廊下には等間隔に壁に備え付けられたランプの明かりが灯っている。床は絨毯。人ひとり通れるくらいの狭い廊下。

けれどそれはどこまでも一本道に続いている。果てなど見えない。ここはどこに繋がっているんだろう。しばらく歩き始めてようやくそう思った。

窓の感じからしてあの部屋のあった辺りはこの屋敷の北辺だ。と言う事は、東西に伸びたこの屋敷の奥なのだと思うのだが。

ふと、眼前に入ってきたものを見て足が止まった。

まっすぐ平坦に続いていた一本道の廊下の先が下り階段になっている。

「……地下？」

地下は使用人のテリトリーだから、私達は軽々しく足を踏み入れてはいけないのだと言われた。

けど今の私は別に軽々しく足を踏み入れるわけじゃない。純粹に道に迷って、手助けが欲しいのだ。……情けない話ではあるが。

それに地下ならさつきも厨房に行っている。

道に迷った以上は誰かに聞くしかない。こう広い家だと自分の部屋へ戻るどころか、他に人を見つけたことすら出来ないのだから。

そう思い、地下への階段へと足を踏み出す。

いつの間にか絨毯はなくなり、石造りの階段にスリッパの足音が間抜けに響く。滑って転ばないように注意しながら先へと進む。

いつの間にか明かりが壁の上部と足元、二か所になっていた。転ばないようにという気遣いだろう。

パタパタと石造りの廊下に響く足音。

仄かな明かりに浮かぶ、自分の影。

何だか今までの場所と空気が違う気がする。

言葉にするのは難しい。けれどこの先は何だか、うすら寒い。怖

い、のだろうか。

何だろう。体中の血がざわめくような、この感じは。それにしてもよくよく考えれば、本当に私はここに来ても良かったのだろうか。居候一日目にしていきなり人の家を散策するなどマナー違反な気がする。

気がすると言つか絶対にそうだ。せつかく大叔母は私を家族と呼んでくれたのに、いきなり私は礼儀に反した行動を取るのか。

「……」

私はここには来なかった。

そう自己暗示をかけて来た道を引き返そうとした時。

「帰るのか？」

唐突な声が石造りの廊下に響いた。あまりの唐突さに心臓が飛び上がり、背筋が凍りつく。

「ひっ！　だっ、誰！？」

今まで誰もいなかったはずなのに。

ふいに、昔聞いたり読んだ話が急激によみがえってくる。

お城の地下に住む幽霊。

オペラ座に住む怪人、ファントム。

金田一耕助の八つ墓村では村の旧家の屋敷の地下へ降りると鍾乳洞に繋がっていて、そこには行方不明だった男の死体が……。

「嫌ーっ！！」

腹の底から悲鳴を上げてそのまま走り出そうとすると、腕を冷たい何かにつかまれた。

「まあ待てって」

その冷たさが恐怖を増長させる。

「ごめんなさいごめんなさい！　勝手に入ってすみませんでした！　だから勘弁して下さいっ！」

実は思っていた。

古い由緒ある洋館。

これで嵐の晩だったりした日には『出そう』とか。密かに思たり

していたのだ。

別に私は特別怖がりなほうではないつもりだが、目の前にしてしまつたらやはり怖い。腕を取る冷たい何かから必死に離れようと足掻くけれど、一向に腕が解放される気配はない。

ああ、このまま気絶できたらどれだけ幸せだろう。

でもこのまま気絶したら、もう二度と目が覚めない気がする……。

「じよ、冗談じゃない！ 私はまだやることがあるんだからっ」

今にも頭がショートしそうな中、力任せにその冷たい何かを引っ張る。

「悪霊だろうと怪人だろうと、私の野望の邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえっ！」

「え」

掴んでくるその冷たい何かを空いた片手で取り、そしてがむしゃらにかけていた力を一点集中。

「どっか行けーっ！」

「え、おい」

その声と共に腰を落とす。石畳に重いものが叩きつけられる音。気付いた時には冷たい何かは私の腕から離れていた。

代わりに私の手がその冷たい何かの正体、人の腕を掴んでいた。

「……人？」

思わず目を凝らすと、私の手が掴んだ腕の先には確かに人の形をしたものが仰向けに転がっている。人の形をした……と言うか、人そのものだ。間違いなく。

その仰向けに転がった『人』と目が合う。

「……気は済んだか？」

私が投げ飛ばした人は笑顔だけれど青筋を浮かべ、そう訊いてきた。

「す、済みました……じゃなくてごめんなさいっ！」

慌ててその転がったその人へ手を差し出すと、その人は眉間にたつぷり皺を寄せて私の手を取って立ち上がった。それから手を放す

と、いててと言いながら思い切り石畳にぶつけた背中をさすった。

「初対面で随分なご挨拶だなあ。最近流行りの挨拶の仕方か？」

その人は全然笑っていない目で、口元だけを笑みの形に歪めて私を見た。その笑っていない目つきに鳥肌が立ちそうになり、慌てて頭を下げた。

「ほ、本当にごめんなさい！」

そつと目線だけを上げると、視界に入ったその人は驚いたことに私より若干年上かという頃の男の人だった。それも随分と整った顔立ちをしている。

真っ黒な髪に真っ白な肌、睫毛の長いアーモンドみたいな形の目、かわいい、綺麗、かつこいい、そのどれにも当てはまらないけれど不思議に人目を惹く。

「お前、名前は？ どの家の誰？」

その人はじつと値踏みするように私を見てきた。

「綾峰結恵です」

「ユエね。で、どこの家の？」

何だか会話がうまく噛みあっていない気がするのは私だけだろうか。

「だから、綾峰の結恵です」

「綾峰は分かってたんだって。だからどの綾峰だって聞いているんだよ」  
若干呆れを含んだ声が嫌がらせの謎かけのようなことを聞いてくる。

その尊大な態度にこちらも苛立つ。

「綾峰は綾峰です。綾峰結恵！」

「だーかーらー」

その人は腕組みしていい加減うんざりした様子で言ってきた。

「本家、二ノ峰、三ノ峰、四ノ峰、五ノ峰。どの家の関係者だって聞いているんだよ」

「にのみね、さんのみね……」

それは確か三波さんにもらった地図に書かれていた言葉だ。



と言うことは目の前の彼が聞いているのは、私がどこの家に住んでいるのかということか。

「私は今日から本家でお世話になることになった綾峰結恵です」

「……本家？」

彼の目が丸くなる。

「結ぶに恵みって書く名前は、ユエって読むのか？」

「……そうですけど？」

何でそんなことを知ってるんだと不信感を隠すことなくその人を見上げる。だけど彼はそんな視線などまるで気にせず一人で納得している。

「あーそうか、あれでユエって読むのか。なるほど」

「ああ、あの」

「そう言えば年齢も聞いてた通りっぽいし、外見的特徴も一致するな。ふーん」

今度は悪意や害意ではなく、好奇心剥き出しでじろじろとそいつは私を見てきた。

「綾峰ユエ。十五歳。肩より長い髪に160センチくらいの背丈」

「あの……」

「へーそう言えばうちの家系っぽい顔立ちだな。目とか口の感じとか」

全く聞いていない。聞こえてないのか聞く気がないのか知らないが。

だけどこれでは埒が明かないと腹の底から声を出した。

「あのっ！」

「……あ、何？」

「あの、失礼ですがあなたのお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

棒読みに尋ねると、彼は私のほうを向いてから口を開いた。

「千歳ちとせ」

「千歳？」

「そう。俺の名前は綾峰千歳」

二つと笑って彼、千歳はそう言った。

「千歳って、千歳飴の千歳？」

「ああ。それで千歳」

「千歳財閥の千歳……」

そう呟くと、千歳は目を細めた。

「随分久しぶりに聞く名だな」

「じゃあ、あなたの名前って千歳財閥から取ったの？」

綾峰家の経営する複合企業名がチトセグループ。戦後の財閥解体までは千歳財閥を名乗っていたはずだ。

だけど千歳は笑って簡単に否定した。いつの間にか怒りも収まったらしく含みない笑顔で。

「違う違う。俺の千歳って名前の由来は長生きしますよーにみたいな意味で千歳」

「ああ、なるほど。縁起のいいお名前で」

「結うに恵みもなかなか縁起もいいし、いい名前だぞ？」

それは揶揄など感じさせない、純粋な褒め言葉。

「ありがとうございます」

「ああ」

千歳はにつこりと笑った。

初対面の険悪な雰囲気は一体どこへいったのかというほどに穏やかな笑顔。

（何か不思議な人）

妙に上機嫌になった千歳は一人言葉を転がしていた。

「そうかーお前が本家に引き取られたっていう奴かあ。早く会いたかったんだよな、義将の孫」

「……え？」

唐突に飛び出した祖父の名前に思考が停止する。

千歳は何を驚いてるんだという顔で私を見た。

「お前、義将の孫なんだろう？」

「そう……ですけど」

自分の祖父をその当人より遙かに年少の、それも自分と大して年の変わらないような相手に呼び捨てにされるのはあまり気分が良くない。だけど千歳はそんなことはお構いなしに続ける。

「桂子が大喜びしてたぞ？ 義将が見つかった時。お前がここに来るつても随分喜んでたし」

今度は大叔母を呼び捨て……。

「あの、ここでは年長者を呼び捨てにする習慣でもあるんですか？」  
「あ？」

「だってあなたはどう見ても私とそう変わらない年齢なのに、祖父やおばあ……大叔母様のことまで呼び捨てにしているし」

仮にも大叔母はこの家で最も権力ある人間なのに。お茶の時に言っていた、変わった風習もあるというのはこういうことなのだろうか。

千歳は薄く笑った。

「ふうん。お前は義将や桂子のこと、好きみたいだな」

「当たり前です」

即答すると千歳は楽しげに声をあげて笑った。

「そうか。ならあいつらは幸せだな」

毒気が抜かれるような笑顔でそう言う。

「……あの、私の質問にはまだ答えてもらってないんですけど」

「ああ、年長者を呼び捨て云々？」

「そうです」

「おかしい？」

「少なくとも私は年長者には敬意を払えと言われてきたので違和感があります」

「ふうん」

千歳は少し考えるように、壁のランプを見つめた。  
それからしばらくして唐突に口を開いた。

「腹、減ったな」

「……は？」

「俺そろそろ自分の部屋に戻るけど、お前も来る？ こないだベルギー土産のチヨコもらったんだ」

ベルギー土産？

チヨコ？

私は一体今まで何の会話をしていたのだったか。チヨコが出てくるような会話をしていたらどうか。

そうして私がひとり頭を抱えていようがどうしようが、千歳は勝手に話を進める。

「俺の場所はここから少し歩いたところにあるんだ。どうする？ この場所は少し変わった場所だし。今さっきお前が俺にぶつけた質問も含めてそういうのを道中少し教えてやろうか？」

「え。いやでも、時間も時間なんで」

さすがに親戚とは言え、初対面の男の部屋に行くのは……。そんな私の考えを読んだように、千歳は声を上げて笑いだした。

「言っとくけど、俺がお前に手を出すことはまずないから。お前に手を出す労力があるならネッシーを探しにネス湖まで行くから安心しろ？」

「……それは私に対する挑戦と受け取っても？」

既に悪戯だったと証言されたネッシーを探しに行くほうが大事だとは随分失礼な話だ。一体私はどれだけのつまらない女なのか。

「いやいや、ただ安心させてやろうと思って言っただけだって。ほら、こつちだ」

千歳は憤る私を置いてさくさく薄暗い階段を下って行った。

ここでついて行かないという選択もできるが、ここで退くのは何だか悔しい気がする。どうしようもなく悔しい気がする。

「来ないのかー？」

数段下から千歳の声がかかる。

「っ行く！ 行きますっ！」

そんな私の返答に、千歳が子供相手に遊んでいる時のような笑み

を浮かべていたことなど、私は知らない。

階段を十数段降りると、また平坦な石造りの通路が続いていた。一本道の石造りの廊下は綺麗に舗装されている。石造りと言うイメージとしてはカビ臭そう、苔が生えてそうというものがあるがこの廊下はそうじゃない。カビ臭くもなければ、苔も生えていない。

それは日常的に人が使っているからだ。

今まで歩いてきた距離を考えると廊下という範疇は超えているが。廊下ではなく回廊なのだろうか。

「ここは何なんですか？」

数歩前を歩く千歳に声をかける。

「ここって、どこを指す？」

千歳は振り返らずに答えた。

「この階段に廊下を含めた道です」

「あーこれな」

表情は見えないが声は明るい。特に聞いていけない話ではないらしい。

「秘密基地みたいだろー？」

「秘密基地なら楽しいですけど、何も知らずに歩くのは正直不気味です」

「率直な返答だなあ」

つまらなそうに千歳は言う。

「秘密基地じゃないが一応秘密の通路。この回廊を使う奴は限られてるんだ。あからさまな隠し通路になったりはしてないけど普通の奴はここへは立ち入らない。この場所の存在を知っていても入ってはいけないことになっているし」

「あなたはいいんですか？」

「俺はいいの。後はー……」

千歳は少し考える風に上向いてから続けた。

「本家屋敷の主の桂子はもちろん、上級使用人の一部に……」

「おばあ様も？」

こんな場所のことなど聞いていない。やはり昨日今日の居候には話せないようなことなのだろうか。

「本家の人間は基本的に全員入っていいことになってるんだよ。使用人は別だけど。あとは許可さえあれば一族は誰でも入れる」

「許可？ それって誰が出すんですか？」

「そりゃもちろん俺。この先にあるのは俺の部屋だもん」

「あんたがっ！？」

驚きすぎて、つい普段の言葉遣いに戻ってしまった。一応この家に来てから注意していたのに迂闊だった。

千歳は私に振り返り、いたずらっぽく笑った。

「ようやく素が出たな」

「……失礼しました」

「別に？ 言うかお前さ、何で大して年も変わらなそうな俺相手にまで敬語使うんだ？ 俺は最初から敬語なんて使ってないのに」

「何でって言われても……」

気まづくなつて目を逸らしてしまう。

世話になっているという立場だから。

本来こんな名家の人間と関わることができるような立派な育ちじゃないから。

どれもそれらしい理由だけど、違う。私が敬語を使っていた理由は、距離を取るため。一定以上に近づかない、近づかれないため。そのほうがやりやすいから。……楽だから。

無意識に左腕に右手の爪を立てていた。

「眉間に皺寄ってる」

降りかかった声に顔を上げると、千歳が人差し指で自分の眉間を指差していた。

慌てて私も両手を眉間に当てた。

「眉間に皺寄せるならもつと年いつてからでもいいと思うぞ？」  
そう言つて軽く首を傾げる。

「眉間の皺は残りやすいから気をつけろー？ 先代なんてくつきり

はつきり痕がついてたからな」

「先代？」

「桂子の旦那。綾峰本家の元当主。何年か前に死んだんだけど、眉間の皺がすっかり癖になつててさ。ま、婿養子つてやつだから気苦  
労もなくはなかつたろうしな」

千歳は苦笑し、それから私を見た。

「だからお前は笑つとけ。どうせ見るなら眉間の皺より笑い皺のほう  
が気分がいい」

「皺になること前提なわけ？」

「人間が老いて皺ができるのは自然の摂理。ゆるやかな流れに従つて  
生きてきた証。いいことだ」

そんなことを言つて千歳は満面の笑みを作る。

本当に変な人だ。

「何それ。私はコラーゲンでも何でもいっぱい摂つて、年食つても  
ぜーったい皺なんか作らない！」

「じゃあまずは眉間の皺寄せからやめることを推奨するな」

言われてカツと顔が熱くなる。眉間に当たった両手に力がこもる。

「結局そこに話を持っていくか……！」

上目づかに睨むと、千歳は口元だけで笑った。

「ーっ嫌な奴！」

「何だよ、今頃気づいたのかー？」

ああ言えばこう言う。

「あーもつっ！ やめた、あんたなんか敬語使うの！」

「はいはい。どうぞご自由に」

怒る私がおかしくてしょうがないとでも言わんばかりの態度で、  
千歳はまた先へと歩み出した。私も肩を怒らせて千歳の後を追う。  
道中説明してくれるとか何とか言っていたが、千歳はずっと肩を  
震わせて忍び笑いをしていて、私はそれに腹を立てて黙り通してい  
た。

そうして着いたのは、真鍮製のノブのついた木製の扉。階上で与

えられた私の部屋の扉とそう変わらない。

ということはこの扉も相当古いのか。そんなことを考えていると、鍵はかかっていなかったらしく千歳はそのままドアノブを回して扉を開けた。

「どーぞ。お客様」

ドアノブを握ったまま、千歳笑顔を向けてきた。

「……入った途端にドアを閉めて閉じ込めたりするんじゃないでしょうね？」

「何でお前の考えってそんなにひねくれてるんだ？」

「私がひねくれてるんじゃないくて、あんたが怪しさの塊だから。絶対に世の九割九分の間人はあんたを警戒する！」

「お前……初対面の奴をぶん投げるわ、無礼発言するわ、敬語使えばいいってもんじゃないぞ」

渋い顔をして千歳は先に扉の奥へと進んだ。

入ってすぐの壁にあるらしいスイッチを押すと、急に薄暗い廊下にまで光が射し込んできた。

「ほら、入れー？」

「……おじゃまします」

色々と言いたいのが、どこから言っているのかわからなくなつて大人しく室内へと足を踏み入れた。

そこは私が使わせてもらう事になった部屋よりも更に広い。学校の教室二つ分くらいはありそうだ。

「広っ！」

この屋敷は一体どれだけ広いんだと改めて思う。けれどそれ以外は割と現代的で普通……だと思う。同世代の男の部屋なんて入ったことないからわからないが。

床はフローリング。置かれている家具はモノトーンを基調にしていて、ベッドにソファに机に金属製のラックにパソコンにテレビに、とごく一般的なものだと思う。ただテレビは私が見た中で最大サイズだが。



その上、部屋の隅には簡易性のキッチンに小型冷蔵庫、更に扉があつてどこかへ繋がっていることがわかる。

「今、茶でも入れてやるからソファ座つてろよ」

千歳は鼻歌を歌いながら隅のキッチンでお湯を沸かし始めた。

「白茶はくちやでいい？」

「白茶はくちやって何？ どんなの？」

「中国茶の一種。福建省の特産品なんだと。俺の今一番のお気に入り」

鳳凰の描かれた茶筒を片手に千歳は笑った。

「お茶うけにチヨコつてのも変か。よし、チヨコはなしにしよう。それともチヨコ食いたい？」

「いや、あんたがチヨコ食いたいって言ったんじゃ……」

私は一言も食べたいなんて言つた覚えはない。

「そう言えば腹減つたんだつた。よし、じゃあせめてドラ焼きにしよう。結恵ーそっちの棚に箱あるから取つてー」

そしてやはり私も呼び捨てにされるのか。

ドラ焼きなら中国茶に合うのかも疑問だが、いい加減些細な事を逐一口にするのはやめるのが賢明だと思つた。

何と言つか、千歳は千歳の時間の中を生きている。きっとその時間に他人を入れる気はさらさらないのだろう。

「箱、箱……と。ねえ、箱が三つあるんだけど」

「んー煎餅、ドラ焼き、干菓子。あ、ドラ焼きやめた。干菓子取つて」

「はいはい」

つまりは究極のマイペースだ。

「あ、品名杯ひんめいはいがない。結恵ー」

「ヒンメイハイって何！？」

「中国茶飲むための杯。その棚のやつ、どれでもいいから取つて」  
シックな雰囲気の部屋に似つかわしくない、昭和的な形のヤカンから顔を上げずに手だけをこちらに向け、来い来いとするように振

った。

「いや、ありすぎてわかんないんだけど！ コーヒーカップとかもあるんだけど、ここ！」

「三つな。あー青磁のやつはこないだひとつ割っちゃったんだよな」

「だから聞いている！？」

「聞いている聞いている。もう何でもいいや。とりあえずそれっぽいもの」

「それっぽいものって……」

「えーと茶壺を温めて、それからー」

全く聞いている……無視してるのではなく、耳にすら入っていない気がする。

「ちよつと！ ねえっ！」

「それから茶海を温めて、茶壺の湯きりを……」

「人の話を聞けーっ！」

「あーうつさい！」

ずっとお盆のようなものに置かれた道具とにらめっこしていた千歳は声を張り上げて私を見た。

「話しかけるとわかんなくなるだろ。俺だって中国茶の淹れ方は覚えたてなんだからな」

「知ったことか！ もう普通にその急須みたいのに淹れて普通に注いでよ！」

「言われなくてもそうする。これじゃあもう手順がさっぱりだ」

せつかく見目のいい顔を拗ねた子供のようになにかめ、千歳はぶつぶつ言いながら急須にお湯を注いだ。

わからない。本当にどこまでもわからない。こんなにわけのわからない人間に会ったのは生まれて初めてだ。

「品名杯じゃなくていいよ。もう作法も何も跡形もなくぐっちゃぐちゃだし」

唇を尖らせて、がっかりしたように肩を落とす。

「だからその品名杯ってのが見つからないって。……これでいい？」

手近なところにあつた、白磁に朱で芍薬が描かれた碗を二つ渡す。  
ところが千歳は不満そうに私を見た。

「あとひとつ」

「は？ だってちゃんと二客出したじゃない」

「言つたら、三つって」

そう言えば言つていた気がする。聞いたけどそのまま耳から耳へ抜けて行つた気もするが。

「何で三つ？ あんたひとりで二つ使うの？」

「んなわけないだろ。変なこと言う奴だな」

「変なこと言つてるのはあんたでしょ！？」

なぜ私が変人扱いされなければならないのか。

とにかくあと一客、一客出せばこいつのこのムカつく口も閉じるわけだ。乱暴に棚を開けて、先程と同じ芍薬柄の碗を手渡す。

「ご満足頂けて！？」

「それなりに。アリガト」

千歳は打って変わって嬉しそうな笑みを見せ、手早く碗に残つたヤカンのお湯を注ぎ始めた。

変人な上に百面相。

掴みどころがないなんてものじゃない。千歳は視覚に捉えることすら困難だ。

「何か疲れた……」

「あれ？ 俺、ソファに座つてろつて言つたら」

「……あんたが呼んだんじゃないよ」

もうこの噛みあわない会話、本当に疲れた。とりあえずお言葉に甘えてソファに座らせてもらおう。

黒いソファに腰を下ろして辺りを見回す。やっぱり黒のラックには古びた本や遮光瓶、タツノオトシゴの剥製までがみっしりと詰め込まれている。入りきらない本やバインダーは本とラックの隙間を縫うように横向きに入れられている。

本のタイトルを見てみると『タチマモリと常世信仰』、『テロメ

アと老化く不老不死への夢く』、『世界の人魚く人魚が美女とは限らない』、『ギルガメシュ叙事詩』、『武田信玄の謎』、『世界怪異百選』、『カブトムシ大百科』など。

学術書の他に、内容的には面白そうだけれどくだらなそうな本やら何やらと、随分バラエティに富んでいる。

更に別のほうに目を向けると大きな机の上に置かれた地球儀型の時計が目に入った。ガラスでできた地球の部分半分が時計になっていて時刻がわかるというそれは既に深夜一時を示している。

「ねえ、この時計、時間合ってる？」

「何で合っていない時計をわざわざ置くと思うんだよ」

「あんたみたいなタイプはわざと合っていない時計を置いておく気がしてならない」

「失礼な奴だな。俺はどれだけひねくれてるんだよ」

千歳は呆れきった顔で私の前にある小さなガラスのローテーブルの上にごく薄い褐色のお茶が入ったお椀と、干菓子の入った箱の蓋を開けて置いた。

「……いい香り」

「華やかな香りではないけれど、お茶らしい香りだ。」

「どーぞ飲め」

こんな勧められ方をされるのも生まれて初めての経験だ。

「イタダキマス」

棒読みにそう言つて、湯気の立つ碗を取った。

一口飲むと香ばしい香りと味が広がる。渋くもないし、後味もすつきりしていて私好みだ。

「美味しい」

「だろー？」

千歳は嬉しそうに向かいに座つて身を乗り出してきた。

「こないだ渋谷に行った奴が買ってきたんだ」

「渋谷のお土産が中国茶？」

つい眉をひそめる。

お茶は美味しいけどその選択が分からない。

「何でも中国茶の専門店があるらしくてさ」

「へえ」

「それで美味かったから、せっかくだし中国茶淹れるセット全部買  
って来いって言って買って来させたんだー」

片手で碗を持った千歳はとても楽しそうだ。

「いや、それくらい自分で買ってきなよ」

ここはけっこう都心から離れた場所だから渋谷まで行くのは面倒  
だろうけれど、この家ならリムジンでも何でもあるだろう。このお  
坊ちやまめ。

ふと千歳の手元を見ると、千歳の碗の他にもう一客ローテーブル  
の上に置かれていることに気付いた。

「ねえ、その一客は誰のなの？」

「ん？そりやもう一人の奴の」

「もう一人って……私達以外誰もいないんだけど」

まさか既にこの部屋にいますとか、目に見えない誰かがいます  
とかでは……。

「おーい。顔、青いぞ」

「べ、別にっ！」

「何が『別に』？ ま、いいけど。そろそろだと思っただけだな」  
本当にどうでもよさそうに千歳は時計を見た。

「そろそろって……何？」

「んー今日のこれくらいの時間って言っただけだ……お」

千歳は座ったまま上体だけを後ろに逸らして背後の壁を見た。私  
もそちらを見ると、何もないはずの壁がカタカタと震えている。

「じ、地震？」

「いや、入口その二」

その言葉と同時に、震えている壁の一部分がまるでからくり屋敷の  
ようにぐるんと回り、外と室内を繋げる。開いた壁の向こうには先  
程まで通ってきた回廊のような薄暗闇が広がっている。

「おい遅いぞー」

「特に細かく時間指定された覚えはない」

低く抑揚の少ない声が外から聞こえ、回転扉の要領で誰かが室内へと入ってきた。

多分千歳と同じ年くらい、十七、八歳くらいの男。表情らしい表情がなく、言葉の割に淡泊な声音から感情はまるで窺えない。

だが彼も千歳に負けず劣らず整った顔立ちをしていた。鋭利な印象の切れ長の目に薄い唇の日本的な美形だ。

美形その二は私を見て、ほんの少しだけ目を丸くした。

「……女？」

「男ではないらしいぞ。それより座れよ。ほら、こないだお前が買ってきてくれた白茶淹れたんだ」

「ん」

その人は小さく頷いて、私と千歳の間に座った。

「結恵、こいつ多分お前の世話役になると思うから覚えとけ」

「世話役？」

「……『結恵』？」

その人とお互いの顔を凝視し合う。

見れば見るほど美形だ……千歳といい彼といい、綾峰は美形の血筋なのか。資産家な上に美形とは、格差社会をはつきりと目の当たりにさせられた気分だ。

「お前らにらめっこ大会？」

千菓子をかじりながら、頬杖をついて千歳は私と彼とを交互に見た。

「とりあえず自己紹介でもすれば？ あ、お前そいつの二ガテだっけ。俺がしてやるーか」

「冗談。お前に紹介されるのだけは世界中の他の誰にされるのよりも嫌だ」

小悪魔じみた笑みを浮かべた千歳を見て、彼は嫌そうに顔を歪めた。

「俺はお前の中じゃ世界最下位か」

「いや、銀河系最下位」

さらりと言つてのけて、その人は私を見た。

「二ノ峰家戸主次男、綾峰鷹槻。どうせ今日の昼食の席でも会う事になると思っけど一応言っておく。ドウゾヨロシク」

## 国家

「にのみねけ……の、タカツキさん？」

私のたどたどしい言葉に鷹槻は無表情に頷いた。

「え、と。ごめんなさい、私まだこの家に不慣れで。二ノ峰家とか三ノ峰家っていう意味がよく分からなくて」

「ああ。それじゃあこの敷地内には二ノ峰から五ノ峰っていう家があることは？」

「それは存じています」

「……俺は二ノ峰なんで、敬語はいらないですけど」

感情らしい感情を感じさせない声で鷹槻は言った。

「え。で、でも」

この人だつて今私に敬語を使つたのに、私ひとり偉そうにタメ口つて言うのは出来ない……というか居心地悪い。そういう決まりがあつたとしても、根っからの一般人育ちの私にはまだ無理だ。

「いいんじゃない？」

どう言つたものかと言葉に詰まつた私と口を閉ざした鷹槻の間に割つて入つたのは千歳だつた。

「ここはうるさい奴もいないし。結恵は別にタメ口でいいんだろ？」

「うん。申し訳ないけど私は小市民だから、初対面の人が敬語を使っているのに自分だけ使わないのは無理」

「だつてさ、鷹槻」

「ならやめる」

存外あつさりと鷹槻は承諾してくれた。

「様付けもしないほうがいいか？」

「様っ！？」

「結恵様って」

真顔で鷹槻は言う。

悪い冗談だ。



「え、いやあの私達、親戚……ですよね？」

「だから敬語はいらない。……一応遠いけど、親戚関係になる」  
「じゃあ」

「ここはそういう所だから」

間髪入れずに鷹槻は返してきた。

「この家はよそからすると妙な決まり事が多い。それは不文律だったり、慣例として文書に残っていたり色々だけど」

「はあ」

「その中で最も重きを置かれるのが、本家絶対主義とでも言えばいいのか。とにかくそういうのがある」

「……二ノ峰家、とかは本家ではないの？」

てつきり同じ敷地内に居を構えているくらいだから本家と同等の扱いだと思っただけだ。

「違うな。いわゆる分家って奴だ。他にも分家は多くあるが、その中でも最も古くに本家から分かれた四つの家を二ノ峰から五ノ峰って呼んでいる。まあ屋号みたいなものだと思うてくれればいい」

屋号。その家の苗字以外の通称か。

「だから本家は一ノ峰って呼ばれることもあったらしいけれど今は皆、本家って呼んでいる。今本家と言ったら桂子ばあさんとお前だけだ」

「何だ、桂子『様』じゃなくていいのかー？」

千歳が茶々を入れる。けど鷹槻は全く気にも留めない。千歳の扱いに慣れてるんだな。

「うるせー大人たちもないんだからいいだろ。話を戻すけど、この敷地内の本家っていうのは例えるなら王家だな」

「お、王家？」

随分話が大きくなってきた。だが鷹槻の表情も声も真剣そのものだ。

「ああ。それも絶対王制の、だ」

絶対王制。その名の通り、王が絶対的権力を持つこと。通常は法

によって制限される王の権限が、全く制限されていないということだ。貴族、議会、民衆……国王以外のあらゆるものに左右されない、絶対的な王の権力。

絶対王制の例として挙げるならフランスのブルボン王朝だろう。そのブルボン王朝期の国王、ルイ十四世の言葉は今なお残されている。

朕<sup>ちん</sup>は国家なり。

自身を国家と称した国王。もっともその子孫、かの有名なマリイ・アントワネットの夫、ルイ十六世の代でフランス王室の財政は破綻する。そしてそれをひとつの契機としてフランス革命は起こり、ブルボン王朝最後の国王ルイ十六世の処刑によって王制は廃止された。それが三百年以上も昔の話だ。

現代に絶対王制など通用するわけもない。それが実行されているか否かはともかく、 magari なりにも人類皆平等を謳う現代社会で。一人の人間が絶対的権力を持つことなどたとえ国内で受け入れられても、世界的に受け入れられない。それなのに。

「ここでは本家は絶対。本家の人間には最大限の敬意を払うが当然、それがこの家の法なんだよ」

何を考えているのか読めない無表情で、鷹槻は言う。

「そんな……今時？」

「だからここは特殊なんだ。それに違和感を持つ奴は少ない。生まれてからずっとそうなんだから当然と言えば当然だが」

鷹槻は白茶を一気に飲み干し、空になった碗を静かにローテーブルに置いた。

「言うなれば、この綾峰家は一つの国家だ」

鷹槻の口調も声音も軽い。なのにその内容の重みはそれにそぐわない。

古くから続く名家。その圧倒的財力。世界の政財界への影響力。まだ綾峰家をよく知らない私でも、この国における綾峰の強さを知っている。

けど、国家とまでいくものなのか。それも絶対王制の。そんなことが本当にこの現代社会でまかり通るものなのか。

「国家の三要素って知ってるか？」

黙り込んだ私に、明るい声で千歳が話しかけてきた。

千歳を見ると、私の目の前に人差し指を突き付けてきた。

「法学的、政治学的見地からすると国家は三つの要素から成り立つ。これを備えていると国際法では国家として認めてくれるそうだ。その一つが領土。その『国』を物理的に存在させる一定区画。この敷地内は十分その役割を果たしている」

確かに。

綾峰一族の居住地。言い換えればここは綾峰家の領土だ。

「二つ目」

千歳は更に中指を立てた。

「それは人民。どんな立派な統治者がいて、どんな広大な領土があるうとも、人がいなければそれは国じゃない。この二つ目の条件も満たしている。本家から五ノ峰までの五家。さらにそれぞれの家の分家もいくらかこの敷地内には住んでいる。それら全員が綾峰であり、永遠に綾峰の人間で在り続ける」

いつの間にか冷めていった声音に、その強い色の瞳に気圧される。その瞳から、表情からもたらされるものはどこまでも冷たい。

「三つ目」

そして薬指が立てられる。

「最後の条件は、権力」

冷え切った声が冷めた表情を通して告げる。

「平たく言えば、他者を支配する力。屈服させ強制する力……そんなものだろ。綾峰本家には権力がある。その有効範囲は綾峰家内部だけじゃない。もちろん、外部に対しても」

その声音があまりに冷たく無機質で、全身が凍りつくような錯覚に陥った。

怖い、と思った。

その言葉の重みが怖い。それを告げてくる存在が怖い。体中の血が、細胞のひとつひとつが、強く強く内側でざわめく。その権力の有効範囲は、外部とはどこまでのことだ。私は、私が思っていた以上の場所へ踏み込んでしまったのだとこの時初めて、本当の意味で気付くことが出来た。無意識に体が震える。綾峰本家という名の重さが今更のしかかってくる。

覚悟は決めていた。

強い地位はそれに比例した重みを持つ。だけどここへ来る前の私はまだ、本当の意味ではそれを分かっていなかった。

だけどその地位ゆえの負荷があることは覚悟して、それがどんなものでも絶対に手に入れると思った。私が私を貫くために。迷うことなく、私の意志を貫くために。

けれど初めてそれを怖いと思った。自身を貫き通すことが。正しいことの意味もまだ理解できない自分が、強さがなければ自分の意思もともに口にすることも出来ない程度の自分が、それだけの力を持つことが。

「結恵」

名前を呼ばれ、ぎこちなく顔を上げると口に何かを放り込まれた。それは口の中でさらりと溶け、舌の上に爽やかな甘みを広げていった。それがローテーブルの上に置かれた干菓子だと気付き、改めてそれを口の中に放り込んだ張本人を見た。

千歳は無邪気に笑っていた。

「甘くて美味いだろ？」

その笑顔に、先程までの冷たさは微塵も残されていない。口に広がる甘さとその笑顔に、自然と震えは納まっていった。

首を縦に振ると彼は満足そうにさらに笑った。

「和三盆の甘さっていいよな。チョコとかもいいんだけど、たまにこういうさっぱりした甘いものが食いたくなるんだ。なんか和んでさ」

明るく屈託ない声でそう言う。

それを見て、安堵すると同時に思う。

あの冷たい目をしていたのはいったい誰だったのか。あの冷たい声を発したのは……ここにいる彼は、一体誰なのか。

綾峰千歳。彼はこの不思議な家の何なのだろう……。

「千歳は……」

茶碗を両手で握りしめて、千歳を見上げた。

千歳は干菓子を頬張りながら首を傾げる。

「んー？」

呑気ともとれる声と仕草にもとぼけるといふ様子はなく、これから私が何を聞いてもあるがままに受け入れるといった風を感じられた。だから包み隠さず疑問を口にする。

「千歳は……何？」

人に対して「何」という聞き方もないだろうと思うが、その時は本当にそれしか思い浮かばなかった。そして一つの疑問から、次々と新たな疑問が生まれる。

「何でこんな地下に部屋があるの？ あの回廊を通るのに許可を出せるほど高い地位にいるの？ 何でおじいちゃんや大叔母様を呼び捨てにできるの？ 何で何で……」

まくし立てるような私の言葉を受け止めながら真っ直ぐに私の目を見てくる千歳に、少しずつ頭が冷めてくる。

「……ごめん。部外者が変なこと聞いて。忘れて」

千歳を異端者のように感じた罪悪感の分も、恐怖を感じていた分も含めて深く頭を下げた。

千歳と鷹槻の視線を感じる。

「部外者って誰のことだ？」

先に口を開いたのは千歳ではなく鷹槻だった。その声は抑揚少なく淡々としたもの。

「もうお前は関係者だ、綾峰結恵」

淡々とした、けれど抗い難い強い響きを持った声が降ってくる。

「……残念だけど鷹槻の言うとおり」

溜め息がちに千歳も言う。その声に顔を上げると鷹槻は相変わらず表情らしい表情はなく、千歳はどこか疲れたように頬杖をついていた。

「部外者でもそうでなくても、別に今しがたのことは気にしてないから結恵も気にしなくてもいいさ。まあ持つて当然の疑問だ。俺もさつき会った時に答えるって言うておきながら答えるのすっかり忘れてたし」

千歳は鷹槻の空いた茶碗に急須から新たに茶を注ぎながら言った。

「けど結恵はもう紛れもなく、この綾峰つて『国』の関係者だ」

「私が？　だつて私は単なる居候でおじいちゃんとは立場が違う。

育ちだつてあんた達みたいに立派なものじゃないし」

「そんなことは関係ない」

ぽつりと鷹槻が言った。その鋭い瞳と目が合う。

「さつき千歳は本家を王家と言った。そしてお前はその家の血族だ。お前のじいさん、綾峰義将は綾峰の当主となるはずだった人物なんだから」

確かに大叔母が当主を務めている時点でそうではないかと思つてはいた。家を継ぐのは男という意識が今より強かった時代なら尚更。祖父はやはり絶対的地位を約束されていたんだ。

けどだからこそ。

「だったら、そんな大層な地位にしながら家を出たおじいちゃんの孫の私がそう易々とこの家に受け入れられるものなの？　それもおじいちゃんは駆け落ちしたんだよ？」

それは家の意思に反したという事。国家にも例えられるこの家の意思に。

「絶対王制つて言つたろ？」

千歳が視線を寄こして言う。

ガラスのテーブルと陶器の急須が当たり、小さく音がする。

「駆け落ちした義将の話を出したけど、あれは本当に家の中の話だ。

本家の中の義将の両親、近い親族、側近達なんかだけが義将の意志を認めずに反対した。本家以外の家に義将の意思を止める権限なんて持たされてない」

「その時の人間で生きてるのは、桂子ばあさんや当時の下っ端使用人くらいなものだしな」

新たに注がれた白茶を一口飲み、鷹槻は言っただけから急に顔をしかめた。

「……千歳、渋い苦い」

何のことだと思っていると、向かいで千歳がカラカラと笑った。

「あー悪い。余ったやつを入れといたただけだから、出すぎたかも」

「お前、時間気をつけるって言っただけ？ 渋い茶は嫌いなんだよ」

「悪かったって。そんな泣きそうなお顔すんなよ」

「泣きそうじゃねえ！」

千歳は笑いながら鷹槻の背を叩き、鷹槻は碗を持ったまま憤慨する。

さっきまでの重苦しい空気はどこへ行ったのか。

そんな私の視線に気づいた鷹槻が千歳の手を強引に退けて一つ咳払いして仕切りなおした。

「とにかく、義将じいさんのことはもう関係ない。……ま、色々言う奴はいるだろうけどそんなことはこの家じゃ全く意味のないことだ。結局のところ、当主の桂子ばあさんとその兄貴の孫であるお前に逆らえる人間なんていらないんだから。社会でどれだけデカイ顔してふんぞり返った大人であろつと、ここで物を言うのは血だから」

「血？」

鷹槻は頷き続けた。

「綾峰本家の血。本来の当主のはずだった義将じいさんの直系に逆らえる奴はいない。よそじゃ奇妙なこともかもしれないがこの家じゃそれが普通。年齢も経歴も何も関係ない。問われるのはその血だけ」だから、と千歳はソファの背もたれによりかかって高い天井を見

上げた。

「ここの連中は思ってる。桂子や結恵にその気があるうとなかろうとこの家の次の当主候補……いや、次の王って言ったほうがわかりやすいか。それは綾峰結恵だって、そう思ってる」

「はあ!？」

見事に声が裏返った。だがそんなことは気にしていられない。

「なっ、おかしいでしょ、それ。まだ顔も中身も知らないような相手を手を？ 確かなのは私がおじいちゃんの孫で大叔母様と血が繋がってるってことだけに、他の誰かが本家を継ぐとかそういう発想はないわけ？」

「ないな」

「ない」

千歳と鷹槻が同時に言い切る。いつそ私のほうがたじろぐ程の自信を持つて。

「義将が出てかなきゃ、実際この家の跡取りだったのは結恵だろ？」  
「そうだけど、私はお父さんたちが海外に行ってる間だけお世話になる居候だよ!？」

「お前が何て言おうと他の連中はもうそういうものとして意識してる。お前がこの家に来る前から。きのうも俺、他の奴らとそういう話したし」

「他の奴らって誰!？」

「んー……トモダチ？」

鷹槻は無表情に首をかしげながら答える。

「『トモダチ?』って何……何で疑問形？」

「いや。一応親戚だけど、親戚の中でもまた別と言うか」

「わけわかんないんだけど」

「親戚多すぎてひとくりに親戚って言うものなんか変な感じなんだよな。デカイ家だから親戚同士と言ってもやっぱり派閥とかあるわけだ。ガキ同士でも」

「親戚同士で、派閥?」



本当にどこの幕府でどこの時代のどこの王室だ。

「結恵、眉間に皺。取れなくなるぞー」

いやに呑気な声を上げる千歳が腹立たしい。

「うるさいなあ……だってもう、わかんないことだらけなんだから仕方ないじゃない！」

つい声を荒げて当たってしまう。

「親戚同士で派閥とか絶対王制とか血とか……わけわからないよ！  
一体私にどうしろつてのよ！？」

覚悟はしていたのに。

欲しいものがあるから、それを得るためならって。

だから覚悟はしていた。していたがこんな大事だなんて想像もしなかった。

唇を噛みしめて俯くと、場違いな程に穏やかで明るい声がした。

「どうするも何も、結恵がどうしたいかは他人に決められることじゃないだろ？」

顔を上げると、千歳が不思議そうに私を見ていた。

「確かにここは変な家だけど、だからってお前のペースを崩す必要はない」

鷹楓も淡々と、取り繕うでもなくただ自分の意見を述べる。

「他人にどう評価されようと、自分の行動を決定するのは自分しかない。自分の行動に責任を持てるのも自分しかない。だから好きにすればいいだろ」

真実だから、慰めでも気休めでもないから、その言葉が染み渡る。  
膝の上で両手を握り締める。

「……それでも、いいの？ 私は私の意思を通してもいいの？」

それが正しいことだとは限らなかった。他人に巻かれることが一番楽な道だった。誰も個人の正義なんて必要としない。誰も私の意見なんて必要としない。必要なのは集団の意見。

「自分の行動に責任持てるなら、自分の意思通したってかまわないだろ？」

何でもないことのように千歳は言った。

「むしろ自分の意思を通したいんだったらこれ以上最適の立場はないぞ？ な、鷹槻？」

千歳に目を向けられて鷹槻も頷く。

「王の意思がこの家の意思になるからな。お前が何かしたいと言えば一族の財力権力惜しみなく使われて、それは叶えられる」

「……そこまでじゃなくてもいいけど」

「謙虚だなあ」

千歳が苦笑する。

「なあ結恵」

「何？」

形のいい手が伸びてきて頭の上に置かれた。

「せっかくの立場だ。憂うよりも最大限に利用してやればいい。迷ったら鷹槻でも桂子でも俺でも。誰かに意見を聞け。そして自分で決める。結恵は結恵以外の誰でもない。誰にも結恵の意思を損なう権利なんてない。この綾峰でも、外でも」

柔らかに紡がれる言葉。

両目が痛いくらい熱くて、気を抜いたら涙が零れそうだった。くしゃりと頭を撫でられてそのまま泣き出したくなる。他人の前で泣くのなんて大嫌いなのに、誰の前でも泣くものかって決めていたのに。

「……ありがとう」

それだけ言葉にするのが精いっぱいだった。

「うん。まあ面倒くさいことも多いだろうけど、好きにしろよ」

「……うん」

頷くと、髪をかきまわすように頭を撫でられた。

「……変な奴が来たら嫌だと思ってたけど、お前は合格ライン」

ふいに鷹槻がそんなことを言う。

千歳にぐしゃぐしゃにされた頭を撫でつけながら、謎の言葉を口にした鷹槻を見た。

彼はまっすぐに私を見て続けた。

「俺、さっき千歳が言ったとおり多分世話役だから。あともう一人いるけど。そいつもさっき言ったトモダチ。同じ年だからほぼ間違いないく俺らが結恵の世話役につけられる」

「……ごめん。同じ年って誰と誰が？」

「俺ともう一人。結恵と同じ年」

あくまでも淡々とそう言った。

「同じ年……」。

「スミマセン、鷹槻……は、おいくつ？」

「十五歳。今、中三」

表情一つ変えず鷹槻は答えた。

「……冗談？」

「戸籍謄本でも用意すれば満足か？」

心なしに鷹槻の声音に苛立ちが混じる。

言葉に詰まると、千歳がテーブルをバンバン叩きながら笑いだした。

「鷹槻くやっぱお前どう見ても十五には見えないって！ 詐欺だ、

詐欺！ アハハハハハハ！」

「おい、ちよつとお前は黙ってる！」

「え、本当に？ 本当に同じ年？」

「だからそう言ってるだろうが！」

今日初めて見る勢いで怒鳴られ、肩を竦める。

「う、うそ。すぐく大人っぽいし落ち着いてるし、私が見てきた同級生男子って何だったの！？ それともお金持ちだと皆そんなに落ち着いてるの！？」

「鷹槻は老けてるんだよ。顔も性格も」

「老けてるって言うな！」

「そうやって怒鳴り散らしてると年相応なのになあ」

鷹槻の怒りなど柳に風。千歳はひとり、うんうんと納得している。  
「じゃあ千歳も実は私と同じ年とか……？」

口元が引きつったままに千歳を見る。

千歳は鷹槻と顔を見合わせた。そしてにっこり笑顔で振りむいてこう言った。

「俺は見たまま十七歳……」

「バツイチ子持ち」

にこやかな千歳の言葉を鷹槻がうまく繋げてみせた。

「え？」

一瞬、時間が止まった気がする。千歳がにこやかな表情のまま、鷹槻が無表情のまま、私が「え」の形で口を開いたまま。

## 最奥を後に

「冗談……だよな？ それこそ……？」

語尾が震えているのが自分でもわかる。

いくらなんでも信じ難いのだが、いやでも最近は年齢的にあつてもおかしくない出来事で、だけど千歳はそういうタイプには見えなくて……。

「おい。瞳孔開いたままになりそうだけど」

冷静に鷹槻が言ってくる。

「だだ、大丈夫、閉じる。閉ざすから」

自分でも何を言っているのかよくわからない。

こつという時は深呼吸だ。これでもかというくらいに息を吸い、力いっぱい息を吐き出す。そんな作業を三回ほど繰り返してから改めて鷹槻と千歳を見た。

「で。変な冗談はやめてよ」

「いや、冗談でなく」

相変わらず憎いほど淡々と鷹槻は言つてのけた。

そのまま卒倒しそうになつたが、最後の望みをかけて千歳を見た。

「千歳サン……マジですか？」

「あはは」

花のような笑顔が今は哀しい。

別に悪いわけではない。昔なら十七で結婚して子供がいたって普通じゃないか。

若年層の結婚の負の面ばかりがニュースや新聞では取りざたされることも多いが、皆が皆、そうなわけじゃない。お互い相手の人生を考えて想い合い、新しい命を育て……そんな夫婦だっている。

だから悪いわけではない。

そう。悪いと言っているわけじゃないのだが意外というか、何というか、頭が酷く混乱している。

「何？」

じつと見つめていると、千歳が居心地悪そうに身じろいだ。

「いや、奥様とお子様はお元氣かなーとか……」

すると千歳の笑顔がわずかに翳った。

「死んじやったよ。だいぶ前」

その目は本当に悲しげで、嘘なんて一片も感じられない。聞くべきではなかったと痛感させられる。

「ごめん。私……」

「いいって。第一結恵より鷹槻だろ？　ったく。余計なこと言いやがつて。それに俺は厳密にはバツイチじゃないって。先立たれただけで」

「あーそうなんだ」

「何だよ、さっきの渋い白茶の仕返しか？　ガキだよなあ」

今までで一番大人びた表情を浮かべて千歳は息を吐いた。

「さて。そろそろ丑の刻だ。いい加減ガキ共はベッドに帰ったほうがいいぞ」

千歳の目線の先には、午前二時を指そうとしている地球儀型の時計。

「あ。うん……ごめん。遅くまでお邪魔して」

「いいって。それより説明してやれなかったな。鷹槻、明日昼食会だって？」

「ああ。敷地内のガキは全員呼ばれてると思う」

「そつか。大人たちへのお披露目はまだ先なら平気だろ」

千歳はまだ項垂れる私を見て苦笑し、力なく垂れた右手を取って何かを握らせてきた。手のひらを開くとそこには赤い包みの一口サイズの直方体。

顔を上げると千歳がにっこり笑っていた。

「さっき言っただろ？　ベルギー土産だって言うチョコ。美味いから一個やるよ。それ食って歯を磨いて、早く寝ろ？」

「……うん」

優しい言葉をかけてもらっても罪悪感は拭いきれない。掴みどこのない千歳が見せた、本当に寂しげで悲しげな目が忘れられない。いくら親しく接してくれるからといって、なぜ会ったばかりの人にあんなに踏み込んだことを聞いてしまったのだろう。礼を欠くにもほどがある。

「じゃあ途中までは鷹槻に送ってもらえな？ 鷹槻、結恵のこと頼むな」

「ん」

「じゃあな。結恵」

「うん……」

まだ俯き加減の私の頭上で、千歳と鷹槻が呆れたように顔を見合わせた。

「おい。嫌なこと言ったのは俺なんだから、結恵が気にする必要ないと思う」

「そうそう。悪いのは鷹槻だって。だから結恵は気にしなくていいんだ。むしろ鷹槻には一回くらい殊勝な態度を見せてもらいたいもんだ」

「ドーモスイマセンデシタ」

「……全然殊勝じゃないっての」

軽く笑って、千歳は私の両頬をつまみ上げて顔を上げさせた。

「ほら、どうせなら笑い皺にしろって言っただろー？」

「うひゃ」

顔が伸びる。かなり伸びている。

抗議の視線を投げかけると、千歳は勢いよく両頬をつまんでいた手を離れた。頬はゴムのように弾みをつけて元の形に戻る。

「いつ痛あ」

頬をさすりながら涙目で千歳を見た。

千歳は笑っている。どこまでも無邪気に。

「じゃあな。またいつでも来いよ。俺は大抵ここにいるから。出来れば大人たちのお披露目の前にもっかい来いよ」

「……来てもいいの？」

「ああ。結恵は本家だからめんどくさい決まり事は問題ないし、そもそも俺がいいって言ってるんだからな」

「じゃあ、また来る」

「ああ。待ってる」

につこりと笑い、千歳は言った。

「じゃあ千歳……っと。渡し忘れ」

鷹槻はジーンズのポケットから何かを取り出し、千歳に放り投げた。

それは円柱形の筒に、カラフルな丸がたくさん描かれているお菓子の箱だ。

「マーブルチョコ？」

尋ねると千歳は更に嬉しそうに答えてくれた。

「そ。いやーたまに食べたくなるんだ。サンキューな。鷹槻」

鷹槻は言葉少なに、初めに彼が来た壁を手で押した。それはやはりカラクリ屋敷のごとくくると回り、薄暗い回廊へと繋がっている。

「じゃあな。二人とも」

「ああ」

「結恵も」

「うん。あ、お茶と干菓子ありがとう」

お茶と干菓子に関するお礼は予想外だったのか、千歳は一瞬目を丸くしてから笑いだした。

「どーいたしました。結恵はその老け顔とは違うなあ。俺が茶を淹れてやったって礼なんて言ったこともないんだぞ？」

「うるせえな」

鷹槻はわずらわしげに言って、石造りの回廊へと足を踏み出し私を振り返った。

「来ないのか？」



「あ、行く」

鷹槻の淡白な言葉に答え、私も部屋を出る。

「それじゃあおやすみ、千歳」

「おやすみ。二人ともいい夢を」

くるりと扉が閉まるまで、千歳は手を振っていてくれた。

ゴトンという重い音と共に完全に中の光が遮断されてから鷹槻は前へと歩き始めた。私もその後を追う。

鷹槻は無言で前を歩いていった。けれど置いていかれることはなく、身長差などを考えれば多分私に歩くペースを合わせてくれているのだろう。

千歳といい、鷹槻といい、この二人は何と言うか話しやすい。波長が合うというか、同じ空気というか一緒に過ごしていて楽でいられる。初対面の人間には多少なりとも緊張して地を出せない私には珍しく、この二人とは普通にしゃべることができた。

千歳はあの独特のマイペースが。鷹槻は無関心なようで気遣ってくれるところが無意識に緊張をほぐしてくれて。

（いい人達なんだよな、きつと）

そんなことを思いながらペタペタと相変わらず間抜けなスリッパの音を立てながら、造り自体は来た時に通った道とほとんど変わらない回廊を歩く。

前を歩く鷹槻の足元を見ると、彼はスニーカーだった。確か室内でも靴を脱いだりしていなかったから千歳の部屋は土足厳禁と言うわけではないらしい。欧米だったら珍しいことでもないが、日本ではあまり見ない光景だ。

地上の屋敷では土足禁止で大叔母含め室内履きを履いていたが同じ敷地内、家屋内にあっても千歳の部屋に限っては別なのか。

本当に覚えなければならぬことは山積みだ。

先程の千歳と鷹槻との会話からも、この家が私の今まで十五年間の常識などこれっぽちも通用しない家だということがよくわかった。その上派閥。自分の置かれた立場。

（絶対王制……か）

綾峰という家の歴史は以前大叔母から少し聞いたことがあるし、自分で調べたこともあるので少しは知っている。

綾峰家というのは元は地方の豪商だったという。安土桃山時代。織田信長、豊臣秀吉が南蛮貿易を推奨する波にもいち早く乗り出し、以来常に時代の波に乗り綾峰家は時の有力者達の御用も受けるほどの大商家となっただけ。

その後、徳川幕府をはじめ各地の有力な諸大名の確かな信頼を得て、動乱の時代・幕末から明治時代にかけても確実な道を迷うことなく歩みその地位、財力、そして商人の命でもある信用は国内有数のものとなっていたと言う。そして宮内省御用達、爵位拝命など様々な名誉を経て、千歳財閥と名乗るようになった綾峰家の隆盛は留まるところを知らなかったそうだ。

それが第二次大戦で日本は敗戦。連合国軍最高司令官総司令部から財閥解体の指令があり、千歳財閥という名は消え、綾峰本家によって統括されていた事業も分散され個々に行われるようになったように見られたが、綾峰家の繋がりと言うのはそう脆いものではなかったらしい。それからまた時を経て、旧千歳財閥はチトセグループとして名乗りを上げた。

それからは国内外のあらゆる事業での成功、バブル崩壊すらまるで予想していたかのように最善の経済対策が整えられていたため、その損害はよそに比べれば無いも同然だった。過去にも同様に1923年の関東大震災、1929年の世界恐慌でも被害を最小限に留めてきた。

綾峰家は確実に時勢を読み取り、一度としてこの隆盛を衰えさせたことのない世界的にも伝説のような家なのだという。

こうして改めて考えてみれば綾峰家が絶対的地位、財力、権力を誇ることは間違いない。それだけ規模が大きな家だ。歴史上、血生臭い事件なく平穏無事に現代まで続いてきた王家などない。政争のひとつふたつ、王位継承争い、そんなものあって当然だ。

ではこの綾峰家ではどうなのだろう。この国で未だ絶対王制を敷く、この家では。

間違いない現代社会の上流に位置する綾峰家の人間たちは、自分たちより上の『王家』を認めるものなのか？

血と言っていたけれど今は古い時代じゃない。古い家は自分たちの血縁を重視する傾向にはあるようだけれど、一度は家を出た人間の子孫をその『血』として認めるものだろうか……。

考えれば考えるほどとてもそうは思えなくなる。

今更になって、なぜ自分がこの家に来ることができるようになったのか疑問に思う。大叔母は善人で、祖父の孫の私を可愛がってくれている。それはいい。けど他の人間は私という存在をそうも容易く容認できるものなのか？

思い切り頭を掻き毟りたい衝動に駆られたが目の前にいる鷹槻の存在を思い出し、何とか思い止まった。危うく初対面で変人というイメージが植え付けられるところだった。

そうやって気を抜いたためか、スリッパの中で足が滑った。そして滑った足ごとそのまま私の体は前のめりに倒れた。

「ーっ！」

ベチっというスリッパの音以上に間抜けな音が回廊に響く。

数歩先を歩いていた鷹槻は何事かと振り返った。

転んだ瞬間、地面に両手をついたので顔をぶつけるという失態は避けられた。ついた両手は多少擦りむけたが。

「おい、大丈夫か？」

呆れ混じりの鷹槻の声が降ってくる。

「大丈夫……」

心配してくれるのはありがたいがやはり恥ずかしい。十五にもなつて私は一体何をやっているんだろうか。慌てて立ち上がり、熱を持った両手の擦り傷に息を吹きかける。

「痛あ」

特に強くついた右の掌は血が滲んでいた。

薄暗い回廊の中。

白い掌。

滲み出る赤い鮮血。

高く、心地よく鳴り響く心臓。

あの廊下に足を踏み入れてからずっと感じていたざわめき。

ルビーのように鮮やかな赤。

珠のように滲み出た、赤い赤い血液。

「血が……」

掌を眺めながら、無意識にそう口にする。

心臓の音が、体中を巡る血液が、私を形作る細胞のひとつかけまでが、何かを訴えかけてくる。何か何か、何か……。

思考が闇に消えかける寸前、唐突に赤は私の目の前から消えた。いつの間にか掌は鷹槻の手によって、まるで私から隠すように握られていた。

「鷹つ……」

鷹槻の顔に焦燥にも似た表情を見る。

こんな顔もするのか、と呑気に思っている間に鷹槻は私の手を引き、足早に先へと歩き始めた。私が何度石畳に足を取られかけようと、決して止まることなく。

それはまるで何かから逃げるように。

長い長い回廊を進み、階段を昇る。そしてまた平坦な道を歩き、階段があれば昇る。その繰り返し。

そうしてようやく行き止まりへと突き当たった。

鷹槻は私の手を握ったまま片手で石の壁を押した。それは重い音を立てて、千歳の部屋の扉のように回った。

歩み出た先には暗闇の中に小さな明かりがぼつぼつと見える。

芝生を踏みしめる感触。

多分ここは本家の奥庭だ。そしてあの小さな明かりは庭先を飾る外灯だ。

冷たい夜風にさらされ、ようやくあの閉塞的な石造りの回廊から

外に出たのだと実感する。

それから背後でまたあの重たい石のこすれる音を聞き、鷹槻が壁に見せかけた扉を閉めたのだと気付いた。

いつの間にか手は放されていた。

「誰にも言っな」

私が何を言うより先、鷹槻が有無を言わせぬ口調でそう言った。

驚いて鷹槻を見ると、細い月の明かりに照らされた彼の顔はやっぱり綺麗で、けどどこか落ち着かない様子がはつきりと伝わってきた。

「……鷹槻？」

「桂子ばあさんにも、昼食会で会う奴にも、使用人にも、他の誰にも言っな」

「言っなって……何、を？」

頭の中では何となく答えが出ているのに聞かずにはいらなかった。

鷹槻の目が一層鋭くなる。そして今までで一番低い声で言った。

「血について」

右の掌に滲んだ血は既に止まっていた。

「どういう、意味？」

鷹槻の鋭い黒い瞳が月の光で褐色に映った。だがその鋭さはさらに増す。

「『当たり』の可能性があるから」

低く押し殺したような声がそう言った。

「当たり？」

その言葉に疑問を感じている間もなく鷹槻はさらに続けた。

「昼食会では俺とお前は初対面だというフリをする。お前もそうしろ。そのほうが色々と便利だ。それから……今日俺と千歳と会ったことも絶対に誰にも言っな」

「千歳も？」

「絶対にだ。お前は面倒事は嫌う性質に見えるがどうだ？」

鷹槻の強い視線に射られる。

ここまで流されるままだった自分が、その強い視線に呼応するように叩き起こされる。

一度目を伏せ、まっすぐに鷹槻を見上げた。

「鷹槻の言うとおり、面倒事は大嫌い」

鷹槻は頷き、壁にもたれかかった。

「出来るだけ早く千歳に会いに行つたほうがいい」

「会つたことを言うなって言つたばかりの口が言う？」

「他人に公言して会う事と、秘密裏に会う事じゃ意味が違う」

しれっとした顔で鷹槻は言った。そして鋭い視線を向けてくる。

「ここで自分の目的とそのための敵・味方の判別を誤るな」

その言葉の強さに一瞬言葉に詰まる。

だがその言葉は私がここに来た理由と繋がっている。

「わかつた」

「頼もしい限りの返事だな」

鷹槻は壁から身を起こし、都心より星の多い空を見上げて伸びをした。

その姿を見てみると、ふと疑問が湧き上がってきた。

「鷹槻と千歳は私の味方？」

瞬間、強い風が吹き抜ける。

巻き上げられた髪を押さえながらも鷹槻から視線を外さない。

黒髪をなぶられながら鷹槻はあの淡白で抑揚の少ない口調で、けれど確かな強さを持って答えた。

「俺はお前の目的を知らないから断言は出来ない」

けど、と鷹槻は続ける。

「進んでお前の敵になりたいとは思わない」

曖昧だが本心だと分かる言葉に思わず口元が弛む。

「そっか」

「千歳は絶対的にお前の味方だと思ってい。あいつは俺の味方だし、お前の味方でもある」

意図をくみ取りにくいその言葉に思わず眉を顰めた。

「それって私と鷹槻の利害が一致しなくても？」

「そうだ」

一片の迷いもない答えが返ってくる。

「千歳は俺の思いも、お前の思いも最大限に尊重してくれる」

その言い方に、初めて千歳は鷹槻より年長なんだと意識させられた。

「千歳もさつき言ってたろ。迷ったら千歳に相談するといい。あいつは信用していい」

「大叔母様は？」

あの人こそこの家で一番に頼るべき人だと思っていたのに。

「桂子ばあさんも信用していいだろうな。けど当面、少なくとも一度千歳に会うまでは余計なことは言わないほうがいい。ばあさんに心配かけたくないのなら」

「……私は本当にこの家のこと、何も知らないんだね」

「いきなり来たばかりの奴がこの家のこと把握出来たら怖えよ。それくらいここは奇怪な家だ」

「知りたいような、知りたくないような」

「怖いもの知らず」

ぽつり漏らし、鷹槻はまた歩き出した。

「ちよっ、待った！ 置いてかないでよ、迷うのよこの家！」

「わかってる。ほらここ。この壁も隠し扉になってる。階段下に繋がってるからここから入って見つからないように部屋に戻れ」

コン、と鷹槻はどう見てもただの壁にしか見えない部分を叩いた。  
「……ありがとう。でも何でこの家、こんなに隠し通路とか多いわけ？」

「そういう家だから。ほら、開いたからとつと入れ」

有無を言わず開いた扉に放り込まれあつという間に壁、もとい扉は閉められ、そのまま私一人が屋敷の中に入れられた。

女子に対し少々乱暴すぎやしないかだとか、なぜ鷹槻はこんなに

隠し通路に精通してるのかなど、言いたい事はまだまだあったけれど、言われたとおりそのまま大人しく部屋へ戻ることにした。確かにこの家のことなどまだ知らない私にとって、鷹槻はお釈迦様の蜘蛛の糸並みにすがりたい存在だ。自分で全てを判断できる材料が揃うまでは誰かを頼ったほうがいいんだろう。

そしてまるで泥棒のようにここそこそと誰にも見つからないように私室へと戻り、両手の擦り傷に軽く軟膏を塗り、再びベッドに入ったのはもう午前三時半になるつかという頃だった。

数時間のうちにあつた不思議で変な二人の親戚。分らないことだらけの家。

今日の昼食会。

そして何より、血。

この家が最も重視するという血。

あの全身がざわめくような感覚。

まるで自分が自分じゃない生き物になったようだった、と今にならと思う。

不安と不安に似た恐怖を感じながらきつく瞼を閉じた。千歳も鷹槻も、大叔母もいるから大丈夫だと言い聞かせて。

そして眠りについたのは遮光カーテンの隙間から薄い光が差し込み始めた頃だった。



## 昼食会

ほとんど眠れず迎えた、昼食会という名の同世代の親戚へのお披露目兼親睦会。

今日は気候も良いのでガーデンパーティースタイルで行うと大叔母から朝食の席で聞いた。

パールピンクのワンピースにオフホワイトのカーディガンを羽織ってスウェードのブーツを履いた自分の姿を鏡に映して、変なところはないかとしつこいほどに見てみる。変なところ、と言ったらこういう服を着なれていない私自身なのだがこの際それには目を瞑ろう。

慣れればそのうち似合うようになる。多分。いや、なってみせる。チェストの上に置いた写真立てに向かい、息を吐く。

小学生の時の家族旅行の写真には両親と私、そして在りし日の祖父の姿。

「それじゃあ行ってくるよ、おじいちゃん。おじいちゃんの実家なんだから、ちゃんと見守っててよね」

写真の中の祖父は変わらずいかにもひと癖あるという顔で笑っていた。

綾峰本家前庭、午前十一時半。

煉瓦の敷かれた広いテラスには十数人程度の私と同世代の男女が集まっている。その中には鷹槻の姿もあった。危うく声をかけそうになったが、会ったことは言うなと言われていたのを思い出して素知らぬふりで目を逸らす。

当の鷹槻は私になどまるで関心はないと言わんばかりに周りの人間と話していたが、他の人間はそうでもないらしい。不躰ではない

ものの視線はあちこちから投げかけられる。

居心地悪さに俯いていると隣でパンパンと乾いた音が響いた。それが大叔母の手を叩いた音だと知り、自然背筋が伸びる。他の人間も緊張したように顔を強張らせた。

けれど大叔母はどこまでも柔らかな笑顔を浮かべている。

「皆さん、今日は急なお話であつたにも関わらずお越し下さって有難う。それでは早速ですが紹介します。私の新たな家族となった結恵さんです」

大叔母に促され、私は一步前に出た。

目の前には綾峰姓を有する幾人もの十代の男女。

今まで私が見てきた同年代とは明らかに違った空気を纏い、私と言う存在を押し量ろうとするように見てくる。小さく震える体を抑え込み、彼らを見据える。

「綾峰結恵です。昨日よりこちらでお世話になることが決まりました。まだ慣れぬことも多いのでご迷惑をおかけすることもあるとは思いますが、どうぞよろしくお願いします」

僅かに震えた声で挨拶し、頭を下げると機械的な拍手が起こった。軽く安堵の息を吐くと大叔母がそれぞれ私に自己紹介をするように、と目の前の親戚たちに言った。

まばらに立っている誰から声を発するのかと思えば、少し外れた所にいた二人が迷わず私の前へと歩み出た。そのうちの一人は鷹槻だ。

「はじめまして。結恵様」

につこりと笑いかけてきたのは、少しクセのある茶髪の優しげな雰囲気のある少年。

「二ノ峰家戸主長男、鷹久と申します。今、高校二年です」

二ノ峰家戸主長男ということは、この人は鷹槻の兄なのか。

「仲良くして頂けると嬉しいです」

そう言っ鷹久は右手を差し伸べてきた。すぐに握手を求められたのだと気付き、その手を握り返すにつこりと微笑んだ。鷹槻と

違つて警戒心を解く雰囲気の人だ。

「どうぞよろしくお願い致します」

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

鷹久が軽くおじぎするのに合わせて頭を下げる。

そして顔を上げると、今度は鷹楓が口を開いた。

「二ノ峰家戸主次男、鷹楓。中学三年です。……どうぞよろしくお願いします」

無表情、淡々とした抑揚の少ないしゃべり方。無愛想を絵にかいたような人間性は人前であつても健在らしい。同じ兄弟でも鷹久とは真逆の雰囲気だ。だが、それでこそ数時間前に出会つたのは確かに彼なのだと、夢ではなかったのだと確認できて嬉しくもあるが。

軽く頭を下げ合つて、鷹楓はそのまま外れのほうへと戻つて行つた。ついその後ろ姿を目で追つてしまうと、それからすぐに別の人物が愛想よく声を上げる。

「お初にお目にかかります、結恵様。二ノ峰分家長女……」

そういえば二ノ峰とかも分家と聞いていたが、そこから更に分家もあるのだったか。ややこしいことこの上ないが、血筋を重視する家というのはこういうものなのかもしれない。一応の形式通りの挨拶を交わしながら、そんなことを思う。

二ノ峰、二ノ峰分家、三ノ峰……数字の順通りという慣例でもあるのか、挨拶は滞ることなくその順番通りに行われていった。

それにしてもこれだけの人間を全員覚えるのは大変な努力を要しそうだ。嘆かわしいことに私は人の顔と名前を覚えるのは得意ではないのだ。

早速最初のほうに挨拶を受けた人間の名前がかすみ始めた頃、小さな影が目の前に現れた。

つややかで真っ直ぐな黒髪をそれぞれの耳の後ろで結つていて、大きな黒目がちな瞳が可愛い。この中で最年少だろうか。小学四、五年生くらいに見える。

「初めまして、結恵様。私は四ノ峰家戸主長女、四葉です。高校一

年生なので結恵様より一つ年上になります。お友達になれたら嬉しいです」

そうはきはきとした声音で言っ、四葉は私の右手を握ってぶんぶん握手してきた。

その姿はどう見ても小学生にしか見えないのだが、彼女は今間違いない一つ年上と、高校一年生と言った。

これはもしやサプライズではないかとか、一族ぐるみで騙されているんじゃないかだとか頭の中はひどく混乱していたが、こういう場でそうそう戸惑いを表に出すべきではないだろうと思い直し、取り繕うように笑顔を作った。

「え、えっと。こちらこそお友達になれたら嬉しいです」

「本当に？」

首を傾げ、目を輝かせて四葉は詰め寄ってきた。

「わぁ嬉しい。それじゃあ私の事は四葉って呼び捨てに……」

「おい、四葉！」

不機嫌な声に遮られ、四葉はそちらを振り向く。

声の先にはこちらも小学生くらいの少年が立っていた。さらさらの黒髪に大きな吊り目の可愛い容姿の子だ。

「後にしろよ、まだ俺達も挨拶終わってねえんだから」

「はあい……それじゃあ結恵様、また後でお話しましょう？」

にこっと笑顔を残して四葉は小走りに鷹槻達のほうへと行ってしまった。

彼女が鷹槻の言っていたトモダチなのだろうか？

呆然としていると、四葉よりは背の高い先程の不機嫌な声の主が一步前へ出てきた。

「初めまして。四ノ峰分家長男、律。中学二年です。先程はうちの四葉が御無礼を働き申し訳ありません」

「いえ。気にしてないので……」

と言うか、彼もやはり小学生にしか見えないのに中学生なのか。私より低い身長にかわいらしい顔立ち、声も高めで黙っていれば女

の子でも通りそうなのに。四ノ峰というのは童顔家系なのだろうか。そんな私の思考を読んだかのように律の顔がわずかに不機嫌そうに歪んだ。それでも一礼を忘れないのは日頃の躰の賜物なのかもしれない。

鷹槻は実年齢より年上に見えて、四葉と律は実年齢より幼く見える。変わった家だ。おかげで鷹槻とあの二人のことは忘れられそうもないが。律を見送ってすぐに私の前に歩み出たのは金のメッシュが入ったアッシュブラウンの髪少年。

ああ、一応名家と言われる家にもこういう奇抜な髪色はいるのか。ついそんなことを思ってしまう。だが彼の顔立ちは人好きのしそうな柔和ものだ。この髪色させなければ万人受けするだろう。

「初めまして、結恵様。四ノ峰分家次男、令です。さっきのちびっこの律とは似てませんが一応双子の兄弟です。本家にお嬢さんがいらつしやると聞いて楽しみにしていたんですが想像よりずつとお可愛らしい方で嬉しいです。今後ともぜひよろしくお願いします」

そんなことをすらすらと述べて、令は手を握ってきた。この万人受けの顔がなければただの調子のいい男で片づけられそうだが、生まれながらの才能なのか。そう悪印象は受けないから不思議だ。これを普通の男がしたら絶対に悪印象と警戒心で固まって終わりだろうに。

双子の兄のほうは小学生に見えたが、こちらの弟のほうは加工された髪色と中学生にしては高めの身長から高校生に見える。双子だというから余計に極端だ。

「あ、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いします」

一応社交辞令として答えると令はにっこりと笑い、そしてどこから携帯電話を取り出した。

「ところで結恵様、携帯はお持ちですか？ よかったらアドレス交換なんか……ぶっ」

令は笑顔を張り付けたまま、地面に垂直に倒れ込んだ。背後から押し倒されたかの如く、顔面から地面へと。

「貴方は何をしているの」

高らかな声が惨めに煉瓦タイルの地面に這いつくばった令へとかかる。

令の安否を尋ねるより先、その声の主に目を奪われた。

おそらくは令を蹴り飛ばした、長く形のいい脚とピンヒールのブーツの右足が空中で静止している。その足を下ろすとカッンとヒールが鳴った。

色素の薄い緩いウェーブのかかったロングヘアをなびかせ、両手を腰に当てて仁王立ちした少女というよりは女性という印象のその人物。細い眉をひそめ、切れ長の瞳を据わらせてはいるがモデルか何かのように美人だ。

「い、痛えよ薫子」

「お黙りなさい。恥知らず」

薫子と呼ばれた女性は令の手を容赦なくヒールで踏みつけ、私と大叔母の前へと歩いてきた。そしてさらりと髪を揺らして頭を下げた。

「御前にて失礼を致しました。どうかご容赦下さいませ。桂子様、結恵様」

まるで貴族の令嬢のように気高い雰囲気。古風な言葉遣い。これが真正のお嬢様というものなのか。名前までがお嬢様の響きを持っている。

圧倒される私の隣で大叔母が目を細める。

「いいえ。けれど薫子さん、ほどほどにして差し上げてね。せつかくの良い日に流血沙汰は見たくはないわ」

「はい。失礼を致しまして申し訳ございません」

ゆつくりと顔を上げた薫子と目が合う。

「お初にお目にかかります。五ノ峰家戸主長女、薫子と申します。結恵様と同じく今年十五になりました。どうぞ今後ともよろしくお見知りおき下さいませ」

そうしてまた優雅な仕草で礼をする。

その姿も溜め息が漏れそうなほど優雅だが、それよりも気になることがひとつ。

（今、今年十五って言った？）

「あの、失礼ですけれど薫子さん、学年は……？」

「中等部の三年に在籍しております」

一瞬薫子の笑顔が凍りついた。だが私の頭も凍りつく。

（これで同い年……）

十五歳でこの容姿、この落ち着き。やはり育ちが違うのかと軽く衝撃を受けていたところに明るいう声が割って入った。

「すみません、結恵様。こいつ老けてて」

いつの間にか復活した令が片手で鼻を押さえながら、もくもくと薫子を指差す。

「指を差さないっ」

薫子の回し蹴りが令を再び地面へと反した。

令は無言でのたうち回り、薫子は何事もなかったかのようにさつとスカートについた皺を伸ばしていた。

そしてのたうち回る令を引きずっていく小さな影。律だ。

「……愚弟がお見苦しいところをお見せして申し訳ありません」  
ぺこりと一礼して令を引きずりながら去っていく。

「律、貴方も兄ならしつかりと弟の手綱を握っておきなさいな！」

「うるせえな、老け顔」

律の小さな呟きに薫子の目がさらに吊り上がった。

「あ、貴方といい令と言い……っ」

薫子は今にもが噴火しそうな勢いだ。これは放っておいていいのだろうか……止める勇氣も自信もないが。

すると薫子と律令兄弟の間に人影が割って入った。

「まあまあ薫子。落ち着こっ」

穏やかな顔立ちと柔らかな声。鷹久だ。

「鷹久！そこをお退きなさいっ」

綺麗な顔を憤怒に歪めて薫子は怒鳴る。

「いやね、薫子。お前の怒りはよくわかるから。けど後にしよう。結恵様もびっくりしてるからね」

そこで薫子はハツとしたように私を見て深く頭を下げた。

「し、失礼致しました」

「いえあの、お気になさらず……」

だから怒りを納めてくださいとは恐ろしくて口にはできないので、それだけ言うのが精いっぱいだ。

「そうだよー薫子ちゃん。あんまり怒ってばっかじゃダメだよってお兄にも言われたでしょ？」

呑気な高い声が薫子をいさめるように言った。勇気あるその声の主はあの童顔の少女、四葉だった。彼女は鷹槻の隣で困ったように眉を下げていた。隣の鷹槻と言えば、まったく興味なさそうに今にも寝そうな顔をしている。

この嫌でも覚えてしまった彼らが鷹槻のトモダチだと言うのなら、類は友を呼ぶという言葉がぴったりだ。

「よっ四葉！ 標葉<sup>はふ</sup>さんには黙<sup>もく</sup>っていてよ！？」

「んー後でお菓子買ってくれるならいいよ」

「いい年して菓子に釣られてんじゃねえよ、四葉」  
律が毒づく。

「何よう。律だってお兄の本をボロボロにしちゃった時、あたしのことお菓子で買収しようとしたくせに」

「あ、あれは！」

「ぷっ！ だっせえ律」

「令！ てめえ！」

「あーお前ら、いい加減にしろよ。鷹槻、お前も何か言え。本当にお見苦しくて申し訳ありません。桂子様、結恵様」

鷹久が申し訳なさそうに頭を下げる。彼はこの中で一人常識人なのかどうも彼らをまとめ慣れているように見える。だとしたら苦勞しているのだろうと思わざるをえなかった。

「いいえ。皆さんお元気でよろしいことだわ」



そんな彼らを前にしても大叔母はどこまでも寛容な人だ。

「さあさあ。それでは昼食に致しましょう。立食形式ですので好きに召しあがって下さいね」

朗らかに大叔母が控えた使用人に目配せすると、屋敷内から次々とワゴンに乗った料理が運ばれてきた。目の前ではテキパキとテーブルが整えられていき、シミ一つない白いテーブルクロスの上を様々な料理が彩っていく。

軽く感動していると使用人からグラスが渡された。

「ありがとうございます」

そこに黄色と赤褐色の液体が注がれる。りんごジュースと紅茶のセパレートティーだ。

全員にグラスがいきわたったところで大叔母が軽くグラスを掲げて声を上げた。

「それでは新たな家族と皆さんの幸いを祈って。乾杯」

乾杯、と声が上がってそれぞれグラスのセパレートティーに口をつける。

一瞬遅れて私もグラスに口をつけた。

それから大叔母は「私がいては皆さん緊張するようですから」と私に耳打ちして何人かの使用人と共に屋敷へと戻って行った。確かにそのほうが周りの人たちとは馴染みやすいのかもしれない。かもしれないが……。

「結恵様はどういった食べ物がお好きですか？」

「お取りますよ」

「結恵様、甘いものは好きですか？ あちらにシトロンタルトが

……」

……やはりいきなり様付け待遇は慣れない。高級店に入ったと思えば大人相手ならまだ何とか割り切れるが、同世代にというこの状況ばかりは。それも明らかに自分より育ちのいい人々にこんな風に接されるなんて。

二ノ峰家以下も序列はあるようだが本家は本当に別格らしい。

千歳と鷹槻が言った絶対王制という言葉がよみがえってくる。

そこでようやく、この昼食会の場に千歳の姿がないことに気付いた。軽く周囲を見回してみてもあの不思議と目を惹く容姿の彼はいない。

（同世代、だよな？ 鷹槻のお兄さんと同じか一個上だし。千歳は欠席なのかな）

鷹槻に聞けば分かるだろうか。

だが知らないフリをしろと言われているし、鷹槻はあの強烈な個性の人々と食事を満喫していた。

出来あがった輪の中に入っていくのは苦手だし、今度千歳に直接聞けばいいか。案外夕べは遅かったから寝坊したのかもしれない。

「結恵様？」

「はっ、はい」

突然呼ばれて声が上がった。……情けない。

「さっき言ったとおり、お話しに来ました」

そう言っただけ無邪気な笑みを浮かべていたのは四葉だった。

「四葉、さん」

「嫌ですねーお友達になったんですから、四葉でいいですよ？」

四葉はかわいらしく首を傾げてるところと笑う。

「えっと」

そうは言われても、自分は様付けされてるのに相手呼び捨てするというのはどうにも抵抗がある。

それに周りの視線が痛いのは気のせいだろうか……否、多分気のせいじゃない。派閥とやらの影響だろうか。

四葉は私の困惑を読み取ったかのように微笑み、その小さな右手を差し伸べてきた。

「あちらでお話しませんか？ ベンチもありますから」

四葉の指差した先には木製のベンチが置かれている。

敵・味方の判別を誤るな。

夕べ鷹槻に言われた言葉。

敵、と言われても所詮は子供。所詮は身内の問題。

常識的に考えたらそう大層なものだとは思えない。だがここで私の常識は通用しない。

（敵と、味方）

鷹槻は進んで私の敵になるつもりはないといった。

その鷹槻と親しいらしい千歳は絶対的に私の味方だと言った。

そしてこの子、四葉は鷹槻といた。多分彼女は鷹槻の言っていた、彼のトモダチと呼べる親戚の一人。

周囲の視線が無言の圧力をかけてくる。

選べ、と。

本家の肩書を得た私に、どの派閥に属するのか選べ、と。

ここで曖昧なことをして、この家に来た目的を泡に返すわけにはいかない。他の名前も覚えられない、媚を売ってくる親戚たちを信用するのは今はまだ無理だ。彼らが私を望むとしたら、それは私の後ろの『本家』。あくまで私を踏み台に本家に近づきたいだけ。

四葉達もそうでないとは言い切れないけれど、けど千歳と鷹槻は信頼出来る。まだほんの数時間程度の付き合いだけど、それは確かだ。

家の事を教えてくれた。忠告もくれた。それで十分だ。

何より私が彼らと過ごすのが心地いい。

「……じゃあ、あつちでお話しましょうか？」

声にならないざわめきが空気を支配する。

四葉はにつこりと笑って私の手を取った。あの幼い言動は何だったのかと思うほど大人びた笑みを浮かべて。

「では、参りましょう」

私の手を引き、四葉は少し離れたベンチへと歩き出した。追い風に押されるように私も前に踏み出す。

「何であんな連中が……」

「まだあの人、この家に来たばかりで何も知らないからよ」

「まだこれからだ。あんな連中と合うようなら、むしろ邪魔なだけだ」

そんな剣呑な声が風に乗って微かに聞こえてきた。  
ちくりちくりと刺さるように。

「驚いた？」

手を引いたまま振り向いた四葉は、いたずらっ子のような顔をして私を見上げてきた。

「やだよ、この人達。派閥とか権力とか大好きなの。本家にいると特にそういうのは面倒くさいだろうけど、自分がしっかりすればすぐに収まるから大丈夫だよ」

小さな手が私の手をしっかりと握ってくる。

「後悔した？ あたし達を選んだこと」

大きな瞳がじつと私を見上げてくる。どこか冷え冷えとした一片の嘘も通じない、そんな瞳で。

私はゆっくりと首を横に振った。

「むしろ人生ベストスリーに入る好判断をしたと思っているところ」  
そう答えると、四葉は声を上げて笑いだした。

「あははは。結恵様っておもしろーい。あたし結恵様好きい」

「ありがとう。えっと、出来ればその、結恵様とか敬語もやめてもらえると。様付けとか慣れないから、呼び捨てとか」

四葉は大きな目を一層大きく見開いた。

「いいの？ 様付けしなくて？」

「ここじゃそれが当たり前なのかもしれないけど、私はおとといまで本当に一般人育ちだから。友達になってくれるんだったら尚さら、様付けとか嫌だなんて」

綾峰本家の結恵としてなら割り切れる。

けど友達として一個人の私として付き合ってくれるのなら、そんな距離を置いた付き合いは嫌だ。今日、親戚だという色々な人達に会って余計にそう思う。

距離を取りたい相手。

近づきたい相手。

千歳や鷹槻のように、呼び捨てで私個人を見てくれた人達。

そうして接してほしいと、この不思議な家の中でも特に強烈な彼女達には思う。近づきたいと、距離を置きたくないと思う。

「結恵、でいいの？」

「うん」

呼び捨てで抵抗があるとすれば、彼女がどう見ても年下にしか見えないからだ。

その四葉は本当に子供のように邪気のない笑顔で言った。

「じゃあそうするー。皆、ここじゃ綾峰でしょ？ だから下の名前で呼ぶんだよ」

「ああ、そう言えばそうだよね」

綾峰さん、綾峰君だと誰だ誰だか分からない。

「親戚同士でもあんまり仲良くないと屋号で呼んだり呼ばれたりするんだけど、友達同士だと名前で呼ぶの。年も近いから呼び捨てであたし年齢的にはお姉さんなのに」

四葉は溜め息がちに言った。

言っていることはわかるが、やはりどう見ても小学生にしか見えないのが微笑ましいというか、可愛いというか。

「精神的にも四葉は『お姉さん』じゃねえだろー？」

茶化すような声をかけてきたのはあの金メッシュの派手な頭。確か、令。

四葉は両手に腰を当てて、眉を吊り上げた。

「何ソレ。どういう意味い？」

「そのまんまの意味だろ」

令から少し離れたところでサンドウィッチをお皿いっぱい持っているのは四葉に続く童顔、律。

律はじっと私を見た。

「……アンタ、こっち来んの？」

こつち、の意味するのが場所的な意味合いでないのはすぐわかった。

四葉の言ったベンチの側。律の近くには鷹槻にその兄の鷹久、そして薫子がいた。

鷹槻以外が視線を私に向けてくる。

攻撃的でも値踏みするようでもなく、ただ私の動向を傍観するように。

この綾峰家の敷地内の………という意識を持って集団を成しているのかは分からないが、彼らに属するのかどうかをただ見ている。きっと彼らは私を拒みもしなければ、去っても追うことはないだろう。

彼らは他の子供達とは違い、本家というものへの執着をそれほど持ち合わせていないように見えた。絶対的な力に追従するのではなく、隙あらば利用しようという野心すら感じる。

きっと私にはここが一番合ってる。

そう思い、一歩踏み出す。

「綾峰結恵です。よろしく」

そして一番に。

「様付け敬語、しないでくれると嬉しいんだけど」

令と薫子が目を丸くし、律は「物好き」と言い、鷹久は笑い、鷹槻は相変わらず興味なさそうに私を見た。

## 宵闇の太陽

昼食会の終わった日の夜、私は密かにあの石造りの回廊を通って千歳の部屋へと向かった。ドアをノックしてから室内に入ると、お線香の香りに似ているけど煙臭くない、独特の甘辛い香りが漂っていた。

「いらつしゃい」

明るい声と無邪気な笑顔が当たり前のように迎えてくれる。

千歳はソファに座って大きなファイルに目を通していているところだった。そのそばに黒い円柱形の物体が置かれている。それが香りの発生源らしい。

「それ何？ 変わった香り」

その黒い円柱形を指差すと、千歳は手のひら大のサイズのそれを軽く持ち上げて見せた。そこからは黒いコードが部屋の隅のコンセントまで伸びている。

「香炉。お香をセラミックヒーターであつたためて薫らせるタイプ」

「直接火をつけるんじゃないくて？」

お香と言ったら直接火をつけて煙が香るものだと思っていたが。そんな私の考えを読み取ったように千歳は笑い、少し手を伸ばして床の上に置いてあつたハマグリの貝を取って二枚に割った。中には黒い丸薬らしきものがいくつか入っている。

「練り香って言つて、間接的に熱を与えて薫らせる種類のお香。源氏物語なんかに出てくる薫物つてのはこれのことだよ。平安時代なんかはこれが一般的だったんだそうだ」

源氏物語自体はきちんと読んだことはないが、あの時代に香りが重視されていたらしいことは知っている。

「それ、平安時代のなの？」

「まさか。だいたい当時と同じ材料、製法だけどこれは俺の手作り」ハマグリを合わせて千歳はすごいだろーと言わんばかりに自慢げ

に笑う。

「自分で作れるものなんだ？」

「うん。材料さえあれば子供だって作れる。手作りキットとかも売ってるし、当時のレシピも残ってる。それを参考にして作ってみたんだよ。黒方<sup>くろほう</sup>って言うて主にめでたい時に焚くやつ」

「へえ。何かおめでたいことでもあったの？」

私が問いかけると、千歳は首を傾げて黙ってしまった。

しばらくそうしていたかと思うと、すっきりした表情で手を叩いた。

「あ、結恵がうちに来た。ほら、めでたい！」

そんな取ってつけたように言われたってあまり嬉しくない。

私が脱力していると千歳は床にファイルを捨てるように置き、立ち上がって向かいのソファに座るように促してきた。

「とりあえず座れよ」

「どーも」

遠慮なくソファに座ると千歳はにっこりと笑って「何か食う？」と聞いてきた。

それを辞退して、ここまで持って来た疑問をまずぶつける。

「ねえ、何であんたは昼食会に来なかったの？」

「んーだってアレは俺が行く席じゃなかったし」

千歳は簡易キッチンでマグカップにココアの粉とお湯とミルクを注いで持ってきて、そのうち一つを私の前に置いた。

「それより結恵は鷹槻のところを選んだんで？」

「何で知ってるの？」

「鷹槻に聞いた。メールって便利な。文明の利器ってやつだなー」  
からから笑いながら千歳はマグカップに口をつけた。

「昼食会は敷地内の十代の奴らが呼ばれたって聞いたけど、どうだった？」

「鷹槻とその仲間たちが面白いことがよくわかった」

率直に述べると千歳は一瞬置き、声を上げて笑いだした。



「あいつらはこの家でもかなり変わってるからな。俺は鷹槻以外は直接会ったことないけど」

何とはなしに千歳はそう言った。

けれどその言葉が今一番の疑問をより確かなものとした。

「千歳ってこの家でどういう立場なの？」

「どういうって？」

「最初に千歳、私にどこの家の奴だって聞いたよね？ それと同じこと、私も千歳に聞きたい」

千歳は笑みの形は崩さぬまま私を見た。

「十代が集まる席だったんだよね、昼食会。そこにも来なかった。鷹槻以外には会ったことはないって言った。けどこの家全体の事情には鷹槻よりも詳しくそうだし。千歳はこの家の何なの？」

うまく言葉がまとまらない。疑問が多すぎてどこから聞いていいのかも、何を聞くべきなのかもわからなくなりそうだ。

ただ一番に浮かぶのは、千歳がこの家にとってどういう存在なのかということ。

昼食会という短い時間だったが、綾峰家の側面に触れていくらか分かったことはある。

それは、綾峰家の序列は絶対だと言う事。

本家の絶対的意識は聞いた通り。後は家格とでも言えばいいのか。二ノ峰を屋号とする鷹槻達兄弟に対し、二ノ峰分家以下他の家に属する人間は不満があったとしてもそれを口にする事は許されず口先だけでも敬うということ。

鷹槻達がこの家の子供達の派閥の中で一風変わっていること、それを快く思わない者達は少なくないこと。だがあの強い個性の一派の頂点は鷹槻・鷹久の二ノ峰家の兄弟である以上、この家で彼らに意見できるのは本家の人間だけだということ。

ほんの数時間でくだらないほどに封建的な家風を垣間見た。

そしてそれをくだらない、と強く認識しているのは彼らに不満を持つ他の派閥の子供達ではなく鷹槻や四葉達であるということ。

「……ここは確かに他人の目の届かない場所だけど、千歳と鷹槻は同等のように見えた。それによく考えたら、この部屋だって本家屋敷の一部だよな？」

じつと千歳を見つめると、彼はマグカップを置いて重く息を吐いた。

「全てに目を閉じて静かに穏やかにここでの時間を過ごすのと、目を開いて全て見ることで奇怪な現実には巻き込まれる時間を過ごすの、どっちがいい？」

千歳の質問は抽象的だった。だが何となくの意味はとれる。だから迷わず答えた。

「もう半分目を開いたようなもの。奇怪な現実の存在を知ったからには無視して過ごすなんて気色悪くて無理」

その答えに、千歳はもう一度息を吐いて膝の上で両手を組んだ。

「口達者」

「おじいちゃんに言われた。自分で決めたことは貫き通せて。片足突っ込んだからには中途半端も曖昧も嫌。気分が悪い」

「その上頑固」

頑固さはじいさんの遺伝子だよな、と言って千歳はソファの背もたれに肘をついた。そうして無感情な瞳が長めの前髪の間からまっすぐに見てくる。

「どの家に属するかって言われたら、一応俺も本家に属することになるかな」

やはり。口に出しそうになったが、黙って先の言葉を待つ。

「けど俺は少しばかり特殊。本家に属してはいても、それが表沙汰にされることはない。そんな存在」

「え……？」

無感情な声が紡ぐ言葉がいまいち理解できない。

この家は本家の絶対王制だと言ったの張本人が、その本家に属する自分の存在は表沙汰にされないと言う。

私の戸惑う様子を見て千歳は薄く笑い、背もたれに寄りかかった。

「だから十代限定の昼食会に出席することもない。鷹槻も言ったんじゃないか？ 俺に会ったことは誰にも言うなって」

「……言われた」

確かに言われた。

俺と千歳に会ったことも誰にも言うな。

低く押し殺した、けれど強い声で。

絶対にだ。

確かに言われた。暗にそれを口にしたら面倒事になる、とも。

鷹槻と私が会っていたら面倒だと言うのはおそらくお互いの立場的な問題。本家である私が二ノ峰の鷹槻を贔屓していると周囲に思われないため。そうなると自然、本家は二ノ峰家を擁護しているような形になるだろうから。

では千歳は？

本家に属するのに表に出ない存在。

接触したことを口外すべきでない存在。

「今日の昼食会の参加者で俺がここにいてことを知っているのは、鷹槻と結恵くらいのもだろうな。あとは……四ノ峰のチビ共も侮れないらしいからもしかすると薄々感づいてはいるかもな」

「それじゃあ……他の人達は千歳がここにいてことを知らないの？」  
そんなことあるわけない。

一人の人間の存在をこの狭い社会で隠し通せるわけ、そんなわけがない。

だが千歳はそんな私の思考を容赦なく切り捨てる。

「俺は本来ここにいないべきじゃないんだよ。宵闇の太陽、灼熱の雪、千年万年尽きない命。それくらい俺は不自然にここにいて」

歌うように、そんな詩的な言葉を他人事のように紡ぐ。

「……意味わかんないよ」

俯いて、何とかそれだけを言葉にした。本当は何となくわかってるのに。

夜に太陽は浮かばない。

灼熱の雪は存在しない。

尽きない命は有り得ない。

そんなこの世の道理に反する程に、千歳はここにしていることがおかしな存在だと言うことなのか。

「……でも昨日、千歳は言ったよね？ 私がこの家の跡取り候補だって他の親戚の人たちは思ってるって。だったら条件は千歳も同じ……ううん、ずっとこの家にいた分だけ千歳のほうが立場は上でしょ？ それなのに何で」

「ここが綾峰だから」

千歳の言葉は短く穏やかで、残酷な程に簡潔なものだった。

綾峰だから。

全てはその言葉で片づけられる。ここが特殊な場所、綾峰という家だからという理由で、私が見てきた常識なんて何ひとつ通用しなくなる。私からしたら不条理でしかないことがまかり通る。

「おかしいよ、そんなの……」

嫌だ。ものすごく嫌だ。

そんな簡潔な言葉で千歳の存在が否定されているようで。

当の千歳は気にもしていないのかもしれない。こんなことを感じるのは、ここでは私だけなのかもしれないが。

だけど嫌なんだ。

千歳は私の目の前にちゃんという。食べて笑って、言葉をくれる。当たり前のように存在しているはずの彼なのに、ここに存在することが不自然だという事実がどうしようもなく嫌だ。

「……っ」

言葉にもならない。ただ悔しい。何が悔しいのかもよくわからないけれど、悔しくて仕方ない。この悔しさを伝える術がないことも、自分が無力なことも悔しい。他にももっとたくさんある気がするがわからない。

言葉にならない。形にならない。

どうしていいのかわからない。

「結恵」

優しい声が降ってくる。

その声が本当に穏やかで泣きたくなくなった。けれどそんな顔、絶対に見られたくなくて俯いた。

そうすると頭に手を置かれた。子供にするように、安心させるように。

瞬間、一滴だけ涙が零れ落ちた。

気を抜いたらそのまま泣き喚いてしまいそうになる。

千歳の前では小さな子供のようになってしまう。そんな自分を抑え込んで、強く強く思いを言葉にする。

「……千歳はここにいる」

今にも涙が溢れ出しそんな顔を上げ、千歳を見据える。

「私の前にいる。不自然なんかじゃない。千歳はここにいるから、触れられるから、言葉をくれるから。ちゃんという。不自然なんかじゃない。おかしいことなんかない。絶対ない！」

自分でも何を言っているのかわからない。

でも伝えたかった。

まるでどうでもいいことのように、自分の存在を不自然と言い切る彼に。

千歳は私の頭に手を置いたまま少し目を丸くした。

「私はここの常識なんか知らないから、今目の前にあるものが『自然』なの。だから千歳がいることが当たり前で、一緒にお茶してお菓子を食べて、しゃべって……全部全部、ここに千歳がいるから出来ることで……」

ああ、もう。本当に何を言っているのか分からない。

「私は千歳に会えて嬉しい。あんたの変なところもマイペースすぎるところも好き。だから自分で自分が不自然だなんて言わないで」  
そんな悲しくなること言わないで。それが当たり前のように思わないで……。

勝手な自分の意見を押しつけて、何をやっているんだろう。

千歳は黙って私を見下ろしていた。困ったのか呆れたのかわからないが、不思議そうな顔をして。

やがて口を開いた千歳の声には困惑にも似た感情が滲んでいた。

「それってさ」

鬱陶しい奴と思われたかもしれない。それが子供だとか物知らずだとか。

そんなことを考えていると知らずまた俯いてしまう。

けれど千歳の行動なんて、私ときにはこれっぽちも測れやしなかった。

「もしかして告白？」

千歳の困惑を滲ませた声音が、どこか楽しげなものへと変わっていた。

顔を上げると、千歳はあの無邪気な子供のような笑みを浮かべて私を見ていた。

「……は？」

「だって今、好きって言ったろ？」

楽しげな千歳の言葉が頭の中で何度も何度もリピートされる。そしてつい先ほどまで勢いのままに口にした言葉を何度も何度も再生させる。

好き？

好き、好きって……言ってい、た。確かに言った！

そう認識した途端、体中の血液が顔に集まったように熱くなる。

「違っ、そういうんじゃない！ 好きって言ったのはだからほら

アレ！ 普通に友達とかそういう……」

「何だ、男心弄んだのかよ。ひっでー」

笑いをかみ殺すように千歳は体を震わせる。

「そっ、そんなこと微塵も思っただけに！」

「んなことないって。あー傷ついたなあ。何かついでに貶されてた気もするけど、すごい嬉しかったのになあ」

白々しい！

「う、嘘つけえ！」

「嘘じゃないって。マジだよマジ。神仏に誓って真実」

真っ赤になって訴える私の言葉なんて柳に風。だけど頭に置かれた手だけは相変わらず優しい。

「本当に嬉しいよ」

そう言って穏やかに目を細める。その表情にからかいの色はない。ただ優しい。

そんな顔をされるとこれ以上何も言えなくなる。

滅茶苦茶だった心が静かに落ち着いていく。顔は相変わらず熱いけれども。

「結恵はいい子だな」

「いい子なんかじゃないよ」

本当に子供に対してのような物言いについ唇を尖らせる。

「何だ、拗ねた？」

「拗ねてない」

ぷいと横を向くと、また千歳はおかしそうに笑った。

大人の余裕のようなその態度がまた腹が立つ。

「あーもう！ 二歳しか変わらないんだから大人ぶらないでよ！」

「十代で二歳差ってでかくない？」

「全っ然！」

力を込めて言うのと千歳は声を上げて笑った。

絶対にからかわれている！

少し早くに生まれたからって、こんなに露骨に子供扱いすることないだろうに。確かに高校生から見たら中学生なんてまだまだ子供だろうが。

……あれ？

「そう言えば千歳って高校行ってるの？」

「ん、何？ 急に？」

「いや、ふと思っただけ」

どうにも千歳はこの地下にいるイメージが強くて、ここ以外にい

る彼は想像できない。会ってまだ一日しか経ってないのにそんなことを思うのも変な話だが。

「んー俺は高校行ってないよ」

欠伸をしながら千歳は答えた。大したことじゃない、と言わんばかりに。

それは千歳が『不自然な存在』だから？

そう聞こうとして慌てて口を噤む。

別に高校に行っていないこと自体に偏見はない。学校という場所へ行かなくても勉強は出来るし、勉強することだけが生きる道じゃない。

けれど千歳の場合は、それは彼のこの家での立場からなのかと思ってしまう。この家の主である大叔母が本人の自由意思を奪うようなことをするとはとても思えないが……。

(……そう言えば)

大叔母には娘が一人、孫が一人いると一度耳にしたことがある。

大叔母はあまり進んで話したがらないことだったが使用人の誰かがそんなことを言っていた。

綾峰本家当主夫妻の一人娘はあまり素行のよろしくない、いわゆる不良だったそうだ。十代のうちから通常なら警察沙汰になるようなことに何度となく関わり、実家の権力、財力を使って放蕩の限りを尽くしたらしい。日常生活や異性関係、そんないくつかが重なって厳格な大叔母は一度はその実の娘と絶縁したと言う。だが今は亡き大叔母の夫、元当主は密かに娘にお金を手渡したりなどして生活の手助けをしていた。それから後に娘は誰の子とも知れぬ子供を出産し、大叔父の説得もあつて大叔母も折れ、娘は綾峰家へ戻ることを許されたのだそうだ。

だがその孫も成長するにつれ素行不良が目立ち始める。何が原因かは詳しく知らないが数年前、やはり過ぎた素行不良が原因で母子共々再び絶縁されたという。

本来ならばその孫がこの家を継ぐ予定だったのだと若い使用人が



口を滑らせる形で話してくれた。そしてその孫は、私よりいくつか年上の男だとも聞いた。

思わず千歳を見た。

私より二つ年上の男。

バツイチ……十七では結婚はできないから正確には違うのだろうが、子供を産ませた相手がいたという、古い世代の人間からしたら受け入れがたい事実。

本家でありながら表沙汰にされない存在。

もしかして千歳が……。

「結―恵っ」

明るすぎるほどに明るい声がかかり、我に返る。

千歳が笑っていた。

唇だけで。その瞳はどこまでも鋭い。

「あ……」

思わず言葉に詰まってしまふ。

千歳は軽く笑って、手つかずの私の前に置かれたマグカップを見た。

「もう冷めちゃったろ？ それ」

「え、ああ、ごめん。せつかく出してくれたのに」

「いいよ。新しく淹れ直してくる」

千歳は軽やかに立ち上がってマグカップを持ち、簡易キッチンのほうへと向かった。

その背に、これ以上詮索するなという無言の意思を見た気がした。確かに詮索されて気分が良い人間なんていないだろう。

千歳は話しやすい。だからつい踏み込みすぎた。誰にだって踏み込まれたくない部分はあるのに。

（私、昨日と同じことしている……）

自分の学習能力のなさに心底嫌気がさす。

甘辛いはずのお香は辛さばかりが鼻に残る。

「結恵―、砂糖いる？」

簡易キッチンから声がした。その声音からは何の頓着も感じない。マイナスな感情を引きずらない。引きずらせない。

……千歳は大人だ。

湯気の立ったマグカップが再び私の前に置かれる。

「砂糖入れたけど、足りなかったら自分で足して」

そう言ってシュガーポットも持ってきた。

「うん。ありがとう」

「どーいたしまして。それで今度は俺にも話聞かせてくれよ。昼食会はどうだった？」

「緊張した」

「そりゃご苦労さま。でも飯は美味かったろ？」

何事もなかったように千歳は笑みを湛えている。私の後悔なんて吹き飛ばすような明るい声で、表情で。しつこく気に病まなくていいから、と言われたような気になってしまふのは自己肯定が過ぎるだろうか。

マグカップ片手に千歳は、お香の香りとココアの甘い香りは最高に合わない失敗だったなどと言っている。

マグカップの温かさが、白い湯気が罪悪感を包み込んでくれる。

「……鷹楓に前もって、夕べ会ったことは誰にも言っな、知らないフリしておけて言われたからその通りにしてただけだよ」

「うん」

少し楽しげに聞こえた相槌に、いつもの調子で舌が回り出す。

「私はすっかり話しかけたりしないようにすごく気を遣ったのに、鷹楓は今にも寝そうにボケーっとしていて何かこっちまで気が抜けた」

それを聞いた千歳はおかしそうに笑った。

「あいつはそういう奴なんだよ。三度の飯より睡眠が好きって。前にすっげー真面目な顔して「三年寝太郎になりたい」とか言ってたし」

「うわ、似合わない！ けど言いそう」

「夕べは遅かったしな。家の奴に叩き起こされて昼食会に行つたんだろつよ。家に誰もいなかったらアイツも昼食会は欠席だったな、絶対」

「お兄さんのほうはしっかりしている感じなのに」

甘いココアに口をつけて、愚痴を零すように呟く。

「タイプは違うけど皆も美形だったな。特に鷹槻と薫子と千歳は揃って並べたらモデルみたいだし」

「俺も？」

意外そうに千歳は聞き返してくる。

「何だ、無自覚？ 身長はモデルには少し足りないかもだけど、顔と雰囲気で十分カバーしてるじゃない、千歳は」

千歳は身長は平均的だと思う。鷹槻よりは確実に低いし目算で170センチくらいか。身長だけを見たらモデルになるには足りないが、その圧倒的な存在感はどんなモデルや俳優にも負けないと思う。「でもびつくりしたな。鷹槻もだけど薫子も私と同じ年って。それに四葉と律もここだけの話、小学生かと思つたらひとつ上とひとつ下なだけで。大人っぽい家系なのかと思つたら極度の童顔まで何でもあるだよね、この家」

「へえ」

千歳が興味深そうな声を上げる。

「そんな童顔なのか？」

「そりゃあもう！」

思わず言葉に力が入る。

「かわいい子供がいるって思つたら私より一個上だって言うんだもの。本当にびつくりした。それで次に出てきた子も小学生みたいだなんて思っていたら中二だって言うし。出来るだけ感情を顔に出さないようにって意気込んでいたんだけど、驚きすぎてそんな意気込みもすっかり忘れたくらい」

一気に今日の昼間見た不思議を口にする、千歳がにこにここと私を見ていた。

「……何？」

「いや。呼び捨てするくらい仲良くなっただんなーって」

「また子供扱い……」

だがどう足掻いても千歳は私より大人だってことは認めざるを得ない。気恥ずかしくなつてマグカップで顔を隠すようにする。

「妙に格式ばつたところがなくて取っ付きやすいから。鷹槻とその仲間たち」

「変わり者ばつからしいからな。類は友を呼ぶってやつか」

「私から見たら千歳も十分変わり者だけだね。確かに類は友を呼んでる。……ああ、だから千歳と鷹槻は仲がいいのか」

その仮説に納得がいつて手を叩くと、千歳は一瞬渋い顔をして言った。

「それ、ケンカ売ってるのかー？」

「別に売ってないよ。素直に感想を述べただけで」  
にこつと笑つてそう言つてやる。

「……その発言だけで十分売ってるよな」

呆れたように千歳は自分のマグカップにシュガーポットから砂糖を小さじ一杯突っ込んだ。

そしてカチャカチャと陶器と金属のぶつかり合う音を立てながら、先を促してきた。

「で、その変わり者共とはどうだったって？」

「えっと、挨拶をしたら」

頭の中で昼食会での記憶を再生させながら、それを言葉にしていた。

## はぐれ者たちの昼食会

強烈な個性の持ち主である綾峰家の人々に「よろしく」と様付け敬語はやめてくれと言って。

彼らは料理の置いてあるテーブルから少しはずれたところに、固まっているというにはそれぞれ好きに過ごしていた。

六人の視線を浴びて心臓は大きく音を立てる。そのどこか張りつめた空気を破ったのは四葉だった。片手で私と手を繋ぎ、もう片方の手を突き出してピースをして。

「ほら！ 結恵っちと仲良くなれたよ」

胸を張って四葉は言う。

「結恵っち……？」

ある意味「お嬢様」以上に慣れない呼称に四葉を見ると、まるで小動物のように大きな目が潤んで見上げてきた。

「ダメ？ 結恵っちって呼んじゃ」

その弱々しい声音に何だか幼児虐待している気分になってきた。

実際は年上だと分かっているのに、視覚情報というのはこうも厄介なものなのか。

「うっん、別にいいよ」

ひきつった笑顔で答えると四葉の顔がぱつと明るくなった。

「ほらあ。あたしと結恵っちはもう仲良し！ やーっぱりあたしは正しかったあ」

四葉の言葉の意味が理解できず他の五人に目をやるとあの目つきの悪い童顔、律がそっぽを向いて呟いた。

「別に正しいとか正しくねえとかの話じゃなかっただろ、それ」

可愛い顔しているのに何て可愛げのない態度だろう。いや、見ようによってはこれは可愛いとも言うのかもしれないが。

「まあ、四葉と言うよりも鷹楓が言ったことが正しかった証明にはなっただわね」

初対面の印象としては最も強烈だったお嬢様、薫子が上品に膝の上のハンカチにサンドウィッチを置いて言う。

鷹槻が？

何を言ったのかと、思わず彼に視線をやった。

だが鷹槻はジュースを片手にあからさまに興味のなさそうな顔を上げた。

「そんなこと言ったか？」

「言っただろ。自分の発言には責任持ちなさいっていつも言ってるだろうが」

無気力な鷹槻の頭を鷹久が軽く叩いた。それから鷹久は私のほうを向いて済まなさそうな顔で軽く笑った。

「コイツいつもこんな感じなんだ。一応本人に悪気はないから怒らないでやってくれると嬉しいんだけど」

「あ、別に怒ってないですから」

慌てて顔の前で手を振ると鷹久は苦笑する。

「本家のお嬢様に敬語で話すことはあっても、敬語を使われるとは思わなかったな」

「公私問わず、私達に敬語を使う必要はありませんよ？」

薫子が長い睫毛を瞬かせ小首を傾げて言った。

そこに茶々が入る。

「てか薫子。俺らも今は敬語ナシでいいって言われたじゃんかよ。場合によっちゃお前、本家の意向に逆らったーって見なされるぞ」

金メッシュの髪が笑うたびに揺れる。

「私は貴方と違って礼儀を重んじる傾向にあるの。令」

出来の悪い子供に言っただけじゃねーの？」  
笑う。

「単に柔軟性が低いだけじゃねーの？」

「……うるさいわ」

目にも止まらぬ速さで令はその場に撃沈する。どうやら薫子が令の顎に拳を叩きこんだらしい。

見かけによらず随分好戦的なお嬢様だ……何か格闘技でもやっているんだろつか。護身というより、明らかに先制攻撃を目的としたような類の。

「薫子……さつきも注意されたばっかだろ？」

鷹久は呆れかえったように息を吐いた。

「標葉がいねえとすぐこれだ」

わざとらしく律が溜め息を吐くと、薫子の瞳が鋭く光ると同時にあたりに鈍い音が響く。

それが薫子の右ストレートとそれをガードした律の腕だと気付くのには少し時間がかかった。

「ハン。お前の攻撃なんて単調すぎて令はともかく俺には通じねえよ」

「……兄弟揃って口が減らないわね。それから『標葉』じゃなくて、『標葉さん』でしょう？」

「標葉がいいって言ったんだからいいんだよ」

「改めなさいな」

「俺がお前の言う事聞くと思うか？」

「全く思わないわ」

それから演武のよう、と言っていいほど律は綺麗に薫子の攻撃を流して行った。律のほうが強いのかと口を開けて軽く感動していると突然カーディガンの袖口を引かれた。

「結恵っち、すっごい目え輝いてる」

四葉が楽しげに話しかけてきてようやく我に返る。

「え、や。ごめんなさい、見事だなーと思ってたらつい夢中に」

「別に謝ることじゃないよ。薫子ちゃんはあるで凄く手が早いからね。令はそれをどうこう出来るほどちゃんと護身術とか習ってなくて、律は格闘バカだから薫子ちゃん相手でも負けないんだよ」

「格闘バカなんだ？」

あんなに可愛い外見に似合わず、とは口にはしない。

「格闘技は一通りやってたって記憶してるよ？ 空手、合気道、柔

道、ボクシング、剣道、少林寺拳法、居合、ムエタイ、テコンドー、鎖鎌、それからあ……」

「ガキの頃からほぼ毎日何かしら習ってたからな。筋金入りだからからと鷹久は笑う。

「笑い事じゃねえよ」

顎を押さえながら涙目になって令が言う。

「薫子といい律といい、どいつもこいつも俺で新技練習しようとするんだから嫌になる。俺はサンドバッグじゃねえっつの」

項垂れる令にも鷹久は笑みを崩さない。

「律も凝り性だからなあ。一時期は鷹槻に毎日決闘だとか言いに来てたし」

「鷹槻に？」

思わず呼び捨てしてしまったけれど、誰も気にはしていないみたいだった。

「こいつも昔、キックボクシングを軽くやってたことがあるから」

「へえ」

何だか意外だ。今はこんなにやる気なさそうなのに。

実際自分に話題を向けられた今、鷹槻はものすごく面倒くさそうな表情をしている。

ちらりと鷹槻を見ると、話しかけるなど言わんばかりに顔を逸らした。

……どこまでも無気力な奴め。

「護身術の延長だったんだ。俺よりやる気ないのに、けっこういいところまでいかれて兄としては悔しかったな」

「鷹槻は昔から適当にやっても何でもできちゃうもんねえ」

それは腹が立つな。当の鷹槻はそんなことお構いなしに欠伸しているけれど。別にいいがどこまでやる気ないのか、こいつは。

周りに一切興味を示さずに船をこぎ出した鷹槻を見ていると、鷹久が声をかけてきた。

「ところでもう一度改めて自己紹介したほうがいいかな？」



「え。あ、はい。出来れば」

何となくは覚えただけれど、これだけ人数がいると混乱しそうになるからそのほうがいいだろう。

鷹久は笑顔で頷いて、まだ打って流してを続けている薫子と律に声をかけた。

「お前ら、いつまでも遊んでないでこっち来ーい。もっかい自己紹介！」

鷹久の呼び声に二人はぴたりと動きを停止させてこちらを見た。

「もっかい？ さっきやったろ？」

律が早速不満げに声を上げる。それから私を見てあからさまな溜め息を吐いた。

「これくらい的人数、一回で覚えろよ」

案の定可愛げのないセリフを吐いた律の頭を背後から薫子が叩く。「だったら貴方は覚えられたって言うの？ あれだけ的人数が一度に似たり寄つたりな挨拶をしたのよ。まともに覚えられる人間のほうが少ないわよ。自分が出来ない事を他人に求めるのはおやめなさい」

「ってーな、おい！」

頭を押さえて睨みつける律など視界にも入れず、薫子が右手を差し出してきた。

「薫子です。さっきも言ったとおり貴女と同年だから学院での世話役を務めさせて頂くことになると思います。何かわからないことがあったら遠慮なく仰って」

律や令に向けていた剣呑な雰囲気とは打って変わったように柔らかな笑顔で。

「あ、ありがとう。どうぞよろしく。えっと、薫子……さん」

彼女の右手を取って握手すると、薫子は柔らかな笑みを浮かべた。「薫子で結構よ。私も結恵と呼ばせて頂くから。こちらこそよろしく」

そう言って軽く首を傾げる姿は大輪の薔薇のように綺麗で無駄に

緊張してしまう。テレビでもそうそうお目にかかれなほどの美人で、とても同年代とは思えない上品な物腰と言葉遣い。

現実こんな人がいるとは。それも一応とは言え親戚だなんてまだ信じ難い。

「次、あたしー！」

大きく挙手したのはある意味、薫子とは正反対の四葉。

「あたしも四葉でいいからね。今日は来てないけど上にお兄ちゃんが一人いるよ。でー薫子ちゃんと付き合ってるの」

「よ、四葉っ！！」

薫子が綺麗な顔を真っ赤にして四葉に詰め寄った。

「あはは。薫子ちゃんが照れてるう」

「お黙りなさいっ」

真っ赤になっ慌てる姿を見ると、やはり彼女の年頃の少女なんだと初めて思った。

「四葉……のお兄さんでどんな人？」

つい「さん付け」しそうになったところを堪えて尋ねると、四葉はにっこりと微笑んだ。

「んつとね、あたしより六歳年上の大学生だよ。ちよつとぼーっとしてるところもあるけど、でもすごく優しい人なんだ」

「シバさんって言うてマジにいい人だよ。俺たちも昔はよく遊んでもらったんだ」

鷹久が真っ赤になった薫子に水の入ったグラスを渡しながら言う。律が何かしら皮肉を言うんじゃないかと思ったけど、意外にも彼も鷹久の言葉に頷いている。

「どうやらその標葉さんという人は本当にいい人らしい。」

「あ、でもね」

思い出したように声をあげ、耳打ちするように小さく言ってきた。「本当は内緒なの。このこと知ってるのはここにいるあたし達だけだから、結恵っちも内緒にしてね？」

「内緒？」

「……標葉さんは四ノ峰で、私は五ノ峰だから」

私が疑問を口にするより早く、俯き加減に薫子が口を開いた。

「ここでは家の序列がとても重視されるの。四と五は隣り合った数字だけれど、ここでその差はとても大きい」

乾いた声がそう告げる。その表情は酷く悔しそうで、それでいて寂しげだった。

けれどももう一度顔を上げた彼女は一番最初の印象と変わらない、凜とした強い瞳をしていた。

「だから私は綾峰のこの封建的な制度を壊してやりたい。私が標葉さんといえることを、誰にも文句なんて言えないように。そのために、私は貴女を利用することがあるかもしれない」

ああ、そうか。

彼らが他の子供達と違って見える理由。

他の子供達は、ただ本家の威光にあやかろうとしているようにしか見えないのに、薫子たちは違って見えた。

今まで流されるように生きてきた私が彼らに惹かれる理由。

薫子も他の皆も、自身を確立している。

誰にも何にも侵されることのない、自分をしっかりと持っている。近づきたいと思ったのはきつと彼らのようになりたいと思っていた自分がいたから。誰にも侵されることのない自分になりたいと思っただけからだ。

「……私も、私の目的のためにこの家に来た。だからいいよ。利用できる時は利用してくれれば。私もきつとそうすると思うから。でも出来れば協力が必要だって言うなら協力させてほしい。一方的に利用されるんでなくこちらからも助力させてほしい」

薫子の大きな瞳が一層大きくなる。

「わ、私に出来ることはまだほとんどないけど、出来ることはする。だからどうしてもって時以外は一言言ってほしい。それで最大限に協力できればって……思うから。私じゃダメだって判断したなら利用でいいけど。だけど最初から利用されるだけの関係だって言うな

らない」

そんな考え、ここじゃ甘いのもかもしれないけれど。  
でも利害関係だけというのも嫌なんだ。

そんな関係慣れきっているけれど、でも出来ることなら対等な関係を築きたい。こうして素で話すことを許される相手となら尚更。利用してされて、という関係も私には必要だ。けど、どうせならそれだけじゃないほうがいい。

それはきつと、私が他人を利用しようとしているから。矛盾した考えだけれど、だからこそ『対等な』利害関係でありたいと思うんだ。  
「……変わっているのね」

薫子はまだ目を大きく見開いていた。

「下手すると損しそうだけど、ある意味フェア。ある意味自信家」  
そう呟いたのは鷹槻だった。

興味なさそうにしていたはずなのに、いつの間にか私を見ていた。  
「フェアなだけの人間より自信家で、自信家よりはフェア。俺は嫌いじゃない」

淡々とした彼特有の抑揚の少ない落ち着いた声音がそう告げる。

嫌いじゃない、か。

特別好かれない、嫌われたくないとか考えていたわけじゃないがそれでもやはり嬉しい。

はつきり物を言う鷹槻みたいな奴なら尚更に。

胸の内が少し温かくなった。

そして鷹槻は無感情に私を見て口を開いた。

「『ハジメマシテ』。二ノ峰の鷹槻。俺も薫子と同じで世話役になると思うからヨロシク」

そしてやはり『初めまして』なのか。

鷹槻の言ったトモダチの前でも言ってはけないのか。そう思いながらも顔には出さないようにする。

「……初めまして。よろしく」

理由は後で聞けばいい。

郷に入っては郷に従え、だ。

悔しいけれど私はまだ右も左も分からないような状態だ。長い物に巻かれたほうがいいに決まっている。今は、まだ。

「お。珍しくちゃんと挨拶できたな、鷹槻。偉いぞ」

鷹久が豪快に鷹槻の頭を撫でた。

「やめろつての。それより鷹久。お前が言い出したんだから自分こそちゃんと自己紹介しろよ」

鷹槻は鬱陶しそうに鷹久の手を払った。

鷹久はそんな弟の態度に慣れているのか、気にする様子もなく「そうだな」と手を打った。それから薫子同様、笑顔で右手を差し出してきた。

「俺は鷹槻の兄の鷹久。この中では最年長。でも誰も年上扱いしてくれないから呼び捨てでいいよ。俺は何て呼んだらいい？」

「あ、どうぞご自由に」

「俺も敬語は使わないから、敬語じゃなくてタメ口にしてくれると嬉しいんだけど」

「は、はい。努力しま……する」

ああ、変な日本語に……。年上を相手に敬語を使わないというのは今までの人生の中ではなかったからどうにも慣れない。

「じゃあ結恵ちゃん、でいいかな？ いきなり呼び捨ては抵抗あるから。慣れてきたら呼び捨てになるかもだけど」

「はい……じゃなくて、うん。それでよろしく」

首を縦に振ると背後から呆れたような声がかかった。

「努力しまする、って何時代の何語だよ？」

この小生意気な声。振り返るとそこには予想に違わず律が立っていた。

私より低い身長なのに見下ろすような態度で強い意志を宿した目がまっすぐにしてくる。

「俺は律。たった二文字だ、忘れるなよ」

可愛い顔から可愛げの欠片もない言葉を吐き、さらに律は続けた。

「俺もお前の事はせいぜい利用させてもらう。言っておくが俺は他人に利用されてやる気なんかさらさらねえ。俺を利用したいっ言うならせいぜい知恵と自分を磨け」

私より年下とは思えないような強さを持った声でそう言っ、律は私から視線を外した。

「おい律、もうちよつと言い方あるだろうよ?」

律の頭の上に、シルバーのバングルをつけた腕が置かれた。

「人の頭上に乗るんじゃないやねえ、令」

舌打ちして律がその腕をどける。腕を退けられてバランスを崩した令は不満そうに口を尖らせた。

「何だよ。お前の頭が俺の腕置きにいい高さにあるのがいけないんだろーが」

「てめえが無駄にでけえだけだ! その軽い頭をかち割って低くしてやろうか!？」

「いや俺はフツーだろ。律がちっこすぎるだけで」

「ちっこくねえ!」

そう怒鳴る律は毛を逆立てた猫のようだ。

はいはい、とそれを軽く受け流すと令は私に向きなあって笑った。  
「はぐれ者の群れによっこそー。で、俺は令ね。呼び捨てでいいから。俺は何て呼んだらいい?」

「好きでいいよ」

「じゃあ年上だし敬称をつけよう。結恵ちゃんって呼ばせてもらうわ。よろしくー」

大きな右手に手を取られ、握手する。

金メツシユの派手な髪に全身を飾るごついシルバーアクセ。それに似合わない人好きのする顔立ち。

不思議な人だ。

そう思っていると令はその柔らかな笑顔を崩さずに小さく口を開いた。

「俺も、せっかくの縁はフル活用させてもらっから」

律よりずっと穏やかな物言いなのに……いや、だからこそ体感温度が数度下がったように感じた。

彼もまたこの集団の一人、やはりただチャラいだけじゃない。殴られたり蹴られたりしていた姿やその雰囲気からは想像もつかない、彼の本性を垣間見た気がした。

「……こちらこそ、これからよろしく」

だが私だって彼らに吞まれるだけのつもりは毛頭ない。  
対等な立場でいる。

その意味を込めて、力を込めて令の手を握り返した。  
ひと癖もふた癖もありそうな、自らをはぐれ者と称する人達。  
秋晴れだった空に、いつの間にか灰色の雲が現れ始めていた。

## 通り雨

「とにかく変わった人達だなんていうのが第一印象」

一旦記憶の再生を止め、ココアを一口飲んで千歳を見上げた。

「けど何て言うか、流されない強さみたいなものがあって凄いなって思った」

「へえ」

楽しげに相槌を打ちながら千歳はソファに寄りかかった。

「鷹槻から聞いてはいたが面白そうな奴らだな」

「うん。かなりだよ」

笑ってマグカップをテーブルの上に置く。

「他の人達とは雰囲気違った。何て言うんだろう……鷹槻達は生命力が強そうっていうか、自尊心が強そう……意思が強そう、そんな感じ」

「うちの大半は流されるままに生きてるからな。そういう奴らは少数派だから面白いだろ？」

「面白いね。自分たちを『はぐれ者』って言うあたり、自覚はあるんだなって思ったけど」

令は自分たちを『はぐれ者の群れ』と言った。

確かに綾峰の封建的体制からは外れているように感じる。薫子の話からも律と令の言葉からも、この家の絶対王制を受け入れているようには到底思えなかった。

「現状に満足してこの家の古い体制を疑問に感じない奴が多い中で、よくそんな道を選ぼうと思えたものだ。拍手でも送りたい気分だな」  
本当に手を叩きながら、千歳はくつくつと笑う。

「面倒な道だと知りながらその道を選び進む。なかなか骨のあるガキ共だ」

「それ、褒め言葉なの？」

下手をすると皮肉に聞こえそうだが。



だが千歳は笑顔のまま、至って真剣な眼差しを向けてくる。

「もちろん。古い中で新しい事を成すには気概がいる。それは楽な道じゃない。だからその楽でない道を選んだガキ共に我が身内ながら心から賛辞を送るよ」

「本家の千歳がそんなこと言っちゃっていいの？」

「それを言ったら結恵だつて本家だろ？ 俺は本家つて言ってもいないも同然。せいぜい傍観して楽しませてもらうよ」

そう意地悪く言つて千歳は天使のように笑った。

「つてわけで続き続き」

子供のようにせがむ彼に溜め息を吐きながら、私は話の続きを始めた。

「それから空が曇つてきて、雨が降りそうになって」

「なかなか気丈だねえ」

令は半ば感心したような声を上げた。

「それはどうも」

握手した右手を握りつぶす気満々で握つて皮肉に笑つてやる。

「いやーホント、すごいすごい。すごいからスミマセン。手え痛いんでもう少しお手柔らかにしてくれろと」

「いや全然お手柔らかに握つてるから」

そう言いながらも全力で令の手を握り締める。爪を立てて。

令の笑みが引きつる。

「あのほんとごめんなさい。威嚇するようなこと言つて申し訳なかったのでマジで離して下さい」

「いえいえ。全然気にしてないんで」

「言葉とは裏腹に手の力がどんどん強くなつてる気がするんですけどー」

「気のせい気のせい」

笑顔で更に力を込める私と、引きつつても笑顔を絶やさない令。見兼ねたように鷹久が声をかけてきた。

「えーと結恵ちゃん、こいつがちよつと挑戦的でムカツクこと言ったのはちゃんと謝らせるから離してあげて？」

「いえ、本当に気にしてませんから」

「じゃあ離して下サイ。マジで」

泣き笑いに近い顔で言ってきた令を見て、渋々力いっぱい握りしめていた手を離した。

令は解放されるなり右手を引っ込めて爪の痕がついた手に息を吹きかけた。

「痛ててて」

「舐められるだけのつもりはないから、どうぞそのつもりで」

力を込めすぎて筋がつりそうな右手をぶらぶらと振りながら律と令を見た。

短気なチビとチャラ男だと思つて油断していたら、きっと利用されるだけで終わる。ならば先にこちらが強気なところを見せておかなければ。

令は顔の前で止まれの合図のように左手を突き出した。

「や、結恵ちゃんの心意気はよくわかった。すいやせんでした。流されるままだけのお嬢ちゃんなら利用するだけしてやろうと思つたけど、敬意を持つて接させてもらいます」

「それはありがたいわ」

「律も。いいだろ？」

令は離れたところで傍観していた律に声をかけた。

「……まあ及第点か。かなりギリで」

「律う」

情けない声を出す令は無視して律は挑むような視線を私に向けてきた。

「バカでも鈍いわけでもなさそうだし、自分で考えられる程度の脳みそはあるみたいだしな」

律は高めの声音でそんなことを言いながら私の前まで歩いてきた。そして少し私より低い位置にある双眸が真っ直ぐに見上げてきて、まだ華奢な右手を差し出してきた。

「一応認めてやるよ。利害関係が一致しそうな時はこっちもてめえに付き合ってやる」

「どこまでも偉そうなことで。……でもま、よろしく」

律の右手を握ると、肩の力が抜けた。

「よかったよかった」

「だなー」

四葉と鷹久が呑気に笑い合う。

「律、令。あなた達はもう少し礼儀をわきまえなさい」

「っせーよ、薫子。てめえだって似たようなこと言ってたろうが」

「そうぞ。同罪だよ、同罪」

「あなた達と一緒にしないでちょうだい」

律令は薫子と火花を散らし始める。

随分短気な人達だ。そう思いながらベンチ横の芝生に座っていた鷹槻にこっそりと近づく。

「……これが鷹槻の『トモダチ』？」

小声で尋ねると鷹槻はだるそうに私を見上げた。

「そうなる」

「なかなか個性豊かな面々で」

「まあ退屈はしねえよ。で、これで一応こいつらは結恵の味方だと思っっている」

腕をコキコキと鳴らしながら回して鷹槻は言った。

そして顔は律達に向けながら声のトーンを極力下げた。

「けどまだ、夕べのことは言っなよ」

夕べのこと。それは千歳のことがか。

「わかった」

わからないけれど、一応了承しておく。

それから小さく尋ねる。

「あんたに会ったってことも言うべきじゃない？」

「ああ」

短い答え。

それ以上ここでは話してくれる気はさらさらなさそうだ。

「次にあいつの所で会った時に話す。いつになるかはわかんねえけど」

あいつの所は千歳の所、だろう。

「じゃあそれまで私達はさっき初めて顔を合わせたってことで」

「ああ」

そして鷹槻は私を見てきた。

「律令にびびるようなそれまでの奴だと思ったけど、意外にやるよな。お前」

「それ、褒め言葉？」

「純然たる褒め言葉」

そう聞こえないのは彼の淡々とした声音のせいか。

律や薫子と違って鷹槻は感情の起伏に欠ける。けれど無駄な嘘がなくていい。そう思うと急に気分が晴れてきた。

「ここに来る前に腹はくくってきた」

苦笑して灰色の雲に覆われてきた空を見上げる。

「私もあんた達が傲慢なだけの人間だったら適当なお付き合いで済まそうと思ってたけど、思っていた以上にあんた達は面白そう。さっすがおじいちゃんの生まれ育った場所！」

「お互い仲良くやっていけそうってことか」

「うん、そう」

こくと頷くと鷹槻は僅かに口元を弛めた。

あ、笑った。人形のように整っているけれど無機質な印象の顔は、笑うと急に生氣に満ちた人間のものになった。

軽く見惚れていた私の前に右手が伸びてくる。

「ヨロシク」

「あ、よ、よろしくっ」

右手を握り返して手を離す頃にはもう元の無表情に戻っていた。

（何だか偶然希少生物を見かけたみたいない気分）

それとも鷹楓は予想に反して意外と笑うのだろうか。夕べは全く見ることがなかったが。

するとふいに誰かが声を上げた。

「あ、雨」

ぽつり、ぽつり。

灰色の空から細かい雨が降り始めた。

「こりゃ本降りになるかな」

鷹久が空を見上げると、使用人の一人が声を上げた。

「皆さま、濡れますのでどうぞお屋敷のほうまでいらして下さい」

その声に従ってその場にいた人間は揃って前庭に面した部屋へと駆け込んだ。そして最後の一人が室内に入ると同時に、雨がバケツをひっくり返したように地面を叩きつけた。

「危機一髪だったね」

「通り雨っぽいな」

窓から空を見上げて四葉と令が言う。

すると広い室内の扉が開かれた。

「あらあら。雨が降ってきたの？」

柔らかな声と共に、大叔母が室内へと入ってくる。

皆その声に打たれたように頭を下げるので、私も慌てて頭を下げた。

「挨拶はよろしいからそれよりも皆さん、濡れませんでした？」

「はい、大丈夫です」

何ノ峰だったか、多分序列は上のほうだった気がする人がそう言う。他の人たちもその声に続いて頷く。

「そうですね。それは良かったですわ。けれど残念ですがこれでは昼食会はお開きですね。随分強い雨ですので車を出させましょう」

大叔母が指示を出し使用人数名がそれを伝えに部屋を出て行く。

「……敷地内を車で移動」

あまりにスケールの大きな話に呆然としてみると、鷹久が小さく笑った。

「田舎だからだっ広くてね。ここから薫子の家までだと直線距離で六百メートルくらいあるんじゃないかな」

「そうね。今朝も車で送ってもらったし、それくらいあるかしら」

「はあ……世界が違うわ」

この綾峰家の居住地は東京の郊外にある。

東京と言っても緑豊かで夜には多くの星が臨める場所だ。なので地価も都心よりはずっと安く、ここまで来る時に何件か見かけたよその民家も大きな物が多かった。

だがそう言った事を差し引いてもこの敷地は広い。常識はずれに広い。遊園地か小さな町くらいのサイズはある。大富豪一族の住居区なのだからそれくらいあってもいいのだろうが、自分がその敷地に暮らしているという事実がどうにも信じ難い。

「すぐに慣れるわ」

薫子が安心させるように笑ってそう言ってくれる。

「慣れるまでは戸惑うこともあるでしょうけれど、そういう時は遠慮なく言ってくれば力になるわ」

「……薫子さん」

優しい人だと地味に感動していると薫子の顔が引きつった。

「あの、薫子さんてやめてくれないかしら？ 一応私達は同い年なのだけど」

「え、ごめんなさい。大人っぽいからつい敬語使わなきゃいけない気になって」

まずい、せっかくのご機嫌を損ねかけている。

「老けてるって素直に言っていないんだぜ？」

追い打ちをかけるように律が皮肉った笑顔でそう言ってきた。薫子の眉と右手がぴくりと持ちあがる。

「か、薫子さ……じゃなくて薫子ストップ！ 落ち着こう！」

「そうだ、落ち着け。桂子様もいるんだぞ」

鷹久がこつそりと耳打ちすると薫子はハツとしたように手を納めたが、代わりに強く律を睨みつけた。美人は睨み顔も凄い迫力だ。

「……後で覚えてらっしゃい」

「やなこつた」

舌を出した姿は可愛らしいのに、その表情には可愛げの欠片もない。

薫子の拳がぶるぶると震えていたが、辛うじてそれ以上にならないように抑え込んでいた。これが大叔母の前でなかったならばさっきの見事な格闘劇がまた見れたんだろう。

怒りの納まった薫子に肩を撫でおろしていると、ポンと背中を叩かれた。振り返ると四葉が笑っていた。

「薫子ちゃんの喋り方は薫子ちゃんのおばあちゃん譲りなの。一応本人は頑張って標準学生っぽくしたいらしいんだけど、長年の習慣でなかなか消えないんだよねえ」

「ああ、おばあちゃん譲り。道理で」

あの喋り方が一層彼女を年齢より上に見せているのは間違いない。今時ああいう喋り方をする中学生は日本中探してもそうはいないだろう。

「で、薫子ちゃんて若く見られる分には構わないんだけど、一個でも年齢より上に見られるのって我慢ならないみたいだから気をつけてネ」

「……了解」

実年齢なんて言われなければ絶対にわからないだろうと思いがながら答える。

四葉はにこにこと背後を振り仰いだ。

「鷹槻はそんなに怒んないのにね」

彼女の視線の先にはやっぱり実年齢と外見年齢の一致しない鷹槻の姿。腕を組んで壁を背にもたれかかっていた鷹槻はどうでもよさそうに答えた。

「別に他意がないならどうでも。あるならこつちも他意を以て応じ

るけど」

無表情のままなのに、絶対零度の響きを持って聞こえるのが怖い。

「昨日は律に倍返ししてたよな」

令が朗らかに笑いながら、鷹槻の肩を叩いた。

「だってアイツのは他意满满だろ。て言うか悪意だろ、あれは」

「悪意ってか単なるねた……っ！」

へらへらと笑う令が一瞬で視界から消え失せる。何が起きたのか理解できずに目を見張ると、不機嫌な高めの声がした。

「別に妬んでねえよ」

不機嫌そのものの表情で律はいつの間にか地面に這いつくばっている令を見下ろした。

「おー見事な足払い。一瞬だったなあ」

鷹久が呑気に拍手を送りながら言う。

「あ、足払い……」

「うん、そう。あの一瞬でスパーンと」

鷹久は笑いながら手刀を右から左へと真横に滑らせて見せた。それからこっそりと耳打ちしてきた。

「律と四葉は年齢より下の扱いすると怒るから気をつけて」

二人には聞こえないように言って、鷹久は人の好さそうな笑みを浮かべた。善人そうだがやはりこの人も読めない感じだ。

そうこうしていると部屋の扉が開かれた。

「皆様、お待たせ致しました。お車の準備が整いました」

「それでは皆さん、今日は有難う。結恵さん？」

「……はいっ！」

大叔母に呼ばれ、人混みをかき分けてその隣へと小走りで向かう。

「貴女からお礼を言っておいて下さるかしら？」

「あ、はい」

言われるがままに頭を下げる。

「今日はお越し下さり、どうも有り難うございました」  
これでいいのだろうか？



こういう時にどう言ったらいいかなんて分からないけれどそれでは良かつたらしく、他の人達からも頭を下げられる。「お招き有難うございました」だとかそんな挨拶が返ってくる。

そんな相手の名前がさっぱり思い出せない自分に胸の内で軽く溜め息を吐きながら、彼らが退室して行くのを大叔母の隣で見送った。そうやってあらかた見送ったところで突然四葉がジャケットを引いてきた。

眉を下げ、大きな瞳を子犬のように潤ませてじっと見上げてくる姿はとても可愛らしい。そしてどう見ても高校生には見えない。

「え……と、四葉？ どうしたの？」

「まだおしゃべりしたりないなあって」

四葉はジャケットを片手で引いたまま寂しげに俯いた。相手は年上の高校生だと分かりながらも、その姿はどうにも胸に訴えかけてくるものがある。

「あら。結恵さんは四葉さんと仲良くなったの？」

大叔母が嬉しそうな声を上げた。

「あ、はい」

「お友達になつて頂いたんです。結恵様はとてもお心の広い方で」

四葉は顔を上げ、にっこりとひまわりのように笑った。

大叔母はそんな様子をにこにこ見ていた。

「まあ。そうでしたの」

「はい。先程も一緒にお食事致しました。少しですがお話もさせて頂けてとても楽しかったです」

四葉は少しばかり舌足らずな声でかつ三割増しほど可愛らしく、いたいけな子供のように微笑む。確かに可愛らしいし保護欲を誘う事は確かなのだが、どこか違和感があるのは気のせいじゃないと思う。

けれど大叔母は気にする様子もなく嬉しそうにする。

「まあまあ。良かつたわ。結恵さんが少しでもこの家に馴染んでくれたようで」

「はい、お陰さまで」

「四葉さん。それに皆さんももう少し留まって行かれない？ 結恵さんも年寄りの相手ばかりで退屈してらっしゃると思うの」

「そんな、退屈だなんて滅相も……」

「そこではたと気付く。皆さん……？」

「そんなご迷惑でしょうか」

鷹久がやんわりと笑う。

「私共のような者がいつまでも本家にお邪魔するわけには」

薫子もしおらしく首を振る。

「何を仰るの？ そんなこと仰らないで。皆さんも私にとっては大切な身内なのですから。それに結恵さんのお友達なら私には家族として歓迎する義務がありますもの」

大叔母はにつこりと笑い、壁際に控えた使用人たちに目をやった。

「お茶の用意をして頂戴。もう午後のお茶の時間だわ。さあ。こちらよりもサロンのほうがよろしいでしょう。そちらに準備をさせますからせめてお茶くらしして行つて」

「それでは…… お言葉に甘えて」

令が気色悪いほど控え目に答える。

「もう少しお邪魔致します」

鷹槻と律が頭を下げる。

「勿体ないほどのお気遣い痛み入ります、桂子様」

四葉が満面の笑みでお礼を言う。

「いいえ。それよりも皆さん、これから結恵さんのことをよろしくお願いしますね」

「はい」

仲がいいのか悪いのか測りかねる六人の声が、この時ばかりはぴたりと重なった。

## 異形伝承

シンプルなデザインのシャンデリアが優しい色調の壁紙を照らす  
本家屋敷サロン。

ボウウィンドウに叩きつける雨の音も弱まり、もう小雨程度にな  
ってきた。

「それでは失礼致します」

若い使用人は一礼してカートを引き静かに扉を閉めて退室した。  
その足音が遠ざかるにつれ、室内の空気が緩んでいくのを肌で感じ  
た。

「あー疲れた」

足を投げ出し、背もたれに寄りかかって最初に声を上げたのは律。

「四葉は相変わらず人をたぶらかすのが上手だなあ」

「それ褒めてないでしょ？ 鷹久」

「褒めてる褒めてる」

令が言ってケラケラと笑う。

「まさかこの年で本家屋敷のサロンに招かれるとは思わなかったわ」

「俺らの年で正式な招待を受けたのなんて前代未聞じゃないのか」

薫子と鷹槻はそんな会話を交わしながらお茶に手をつけた。

私はそんな六人をじっと見て、あの前庭に面した部屋から今まで  
ずっと思っていた事を口にした。

「……なんか私、早速利用された？」

各々テーブルについた六人の視線が一斉に集まる。

「まさか」

律が愛らしく微笑む。この可愛らしさが彼の場合曲者だ。案の定、  
その笑顔が一転して悪魔の笑顔になる。

「この程度で利用なんて言われたらこの先困るぜ」  
やはり。

「何だかおばあ様を騙したようで良心が痛む」

重苦しい息を吐くと、意外そうに鷹久が言った。

「何だ。結恵ちゃん、気付いてなかったの？ 桂子様もあれは演技だよ。まだ他の家の連中の耳があつたから」

「え？」

「私達の考えなんてお見通しよ。あの方も伊達に本家で七十年も過ごされているわけじゃないわ」

「え？ え？」

鷹久も薫子も何を言っているのだ。

それを説明してくれたのは鷹槻だった。

「桂子ばあさんも、基本的に考え方は俺らと近いからな。立場上それを表には出せないけど。端的に言えば、あの人は俺達の一番の庇護者」

「はあっ！？」

つい声を荒げてしまう。

「わ、私そんなこと一言も聞いて……」

「だから表に出せないって言つたろ？」

けるりと律に言われ、脱力して椅子に深く座り込んだ。

「狐と狸の化かし合い……」

「お、いい例えだ」

思わず出た言葉に、令と四葉が楽しげに笑い合う。

「ここで化かし合いは日常茶飯事、慣れるしかないわ」

隣の椅子で優雅に紅茶を飲んでいた薫子にぽんと背中を叩かれる。

「がんばる……」

額に手を置いて力なく答えた。

「なあ。それよりお前も半魚見たか？」

律が向かいのテーブルからずっと身を乗り出し、真剣そのものの表情で尋ねてきた。

「は、ハンギョ？」

頭の中でどう言う字を書くのか変換できず戸惑っていると、鷹久が説明してくれた。

「半分魚って書いて半魚。半魚人のことなんだけど、敷地内の子供の伝説みたいなものなんだ」

「伝説？」

それにしたって何だって魚の伝説なんだろう？

それも半魚人。伝説なら龍とかユニコーンとか、もつと子供向けで見栄えもするものを持つてくればいいだろうに。

そんな私の頭を読んだかのように、律が高らかに言った。

「言っておくが、綾峰本家の半魚伝説は俺らよりずっと昔の世代から代々伝わる伝説だ！一過性の都市伝説なんかと一緒にするなよ？」

「はあ……」

そうは言われても胡散臭い。

だって半魚。そもそもこの屋敷の庭に池はないし魚なんて飼えないだろう。いや、この屋敷ならばどんなサイズの水槽も置くことは可能か。それに半分人なら水がなくてもいいのかもしれない。

そう意識半分に思いながらテーブルの上のプレートに置かれたフイナンシエを口にした。

「なんかお前、全然信じてねえだろ？」

律が目を据わらせて不満げに言う。

「いや、信じてる。信じてますって。本家に妖怪……じゃなくて人面魚？ うん、超信じてる」

「人面魚じゃなくて半魚だ！」

どっちだって似たようなものだろう。

「はいはい。じゃあ人面魚じゃなくて妖怪だ」

「お前、そんなこと言っただけいいのかよ？」

律が腕を組んで私を見てきた。

「だってどう考えてもそうじゃない」

「まあそれはそうだけだな。仕方ない。ここは新入りに俺が綾峰の半魚伝説を教えてやらないこともない」

「そんなの本当にあるの？」

律の隣に座っていた鷹久に聞くと彼は苦笑した。

「あるんだよ。これが本当に」

「恥ずかしいけれど小さい頃は本気で怯えたものだわ。大人達が興が乗ってくると身振り手振りつけて脅かしてくるのよ」

薫子がはあと小さく溜め息を吐く。

「そんなに怖いのか？」

「伝説って言うよりは怪談だよな、ガキには」

令が笑って四葉を見る。四葉もマドレーヌをかじりながらこくこくと頷いた。

「へえ」

「今晚寝れなくなっても責任は取らないけどな！ それでもいいなら話してやるぜ？」

上から目線で律がにと笑う。生意気だと思いながらも彼の容姿は可愛い。可愛いものは生意気でも何でも可愛く見えてくるから不思議だ。

「はい。じゃあ教えて下サイ」

殊勝な態度が気に入ったのか、律は上機嫌に口の端を吊り上げた。「半魚伝説の始まりは、もう五百年も前。応仁の乱から幾ばくか経った戦国時代のことだ」

戦国時代、綾峰家の遠い先祖。

当時既にとある地方の豪商として名を馳せた綾峰家の子供が神隠しに遭った。数日間、家人や村人達の必死の搜索が続いたが子供の行方は依然として知れなかった。誰もが子供は帰ってこない、と諦めた頃。突然子供が帰ってきた。

神隠しからの生還を喜ぶ家人や村人たちに子供は幼子らしからぬ儼かな雰囲気纏い、こう告げたという。

直に戦が始まるからすぐに逃げるように、と。

そして実際に子供の予言通り、戦が始まった。誰も予想がつかなかった寝耳に水の戦が。それによって家人達は子供が神隠しにあっ

たことによつて、予知能力のようなものを天狗か何かから授かつてきたのではと考えた。

その後も子供の先を見る力は確かだった。その力を活用して綾峰家は戦国の世を生き抜き、商家としてより一層の繁栄を遂げたと言ふ。

「……すみません、半魚人どころか魚一匹出てこないんですけど」  
「話は最後まで聞け！」

話の腰を折るなど律に叱られ、渋々と黙つて話の続きを待った。

「とにかく、綾峰家はその子供の先を見る力によつて戦国の混乱を逆手に取つて衰えるところを知らずに繁栄していったんだそうだが」  
「」

子供は成長しても、先を見通す力は衰えることを知らなかった。その異形から授かつた力を以て、家を栄えさせていった。

だが異形から授かつた力ゆえか。子供は成長するにすれ、次第に自身の肉体までも異形の者へと変じていった。気付けば子供は半身が鱗に覆われ、その身は魚の物となっていたと言ふ。

誰もが不気味がつたが子供の予知は変わらず健在で、最早綾峰家は子供の存在なしでは考えられなかった。家人は異形と化した子供を屋敷に隠し人目から遠ざけた。それからも屋敷に隠された子供は家のため幾つも予言をしたと言ふ。

そうして綾峰家が繁栄するにつれ、子供は見たこともない奇妙な魚へと変じていきやがて頭を残した体全てが怪魚のそれとなった。しかしその異形の子供のおかげで綾峰家は今日まで衰えることなく来た。

そのため綾峰家では今も尚、その半魚となった先祖を生き神として祀っているという。

「……五百年も前の先祖が生き神？　生き神って生きているから生

き神って言うんじゃないの？」

「それを今から話してやるよ」

律の笑みが仄暗いものとなる。

「ありがたい予言を授けてくれる半魚。綾峰家は何としてもその予言を少しでも長く授かるうとしたんだ。そして知ってしまう。悪夢のような事実を」

半魚が四十を越え、その顔に年輪が刻まれ家人の誰しもがいつまで予言を得られるのかと不安を感じ始めた。

いかに異形と言えどその顔は通常の人間と変わらず老いて行く。人生五十年の世の四十過ぎ。異形の子供といえど人並みに寿命を迎えるのではないか？

四十年近くも予言に頼ってきた者達はどうかならないものかと頭を抱えたと言う。

そんなある晩、半魚の元へ予言を聞きに行った当時の当主がいつまで経っても戻って来ない。どうしたのかと疑問に思った家人が半魚のいる間へと足を踏み入れると半魚は笑っていた。どうしたことか、その容貌は神隠しに遭った幼い頃のものへと若返っていた。

一体何があつたのかと尋ねる家人に、幼い子供の頭に魚の体の半魚は告げた。

『私は永遠にこの家を守ろう。そのための方法をたつた今、見つけた』

その小さな口からは赤いものが滴っていた。家人は更に半魚のそば、あちこちに散らばる『それら』に気付いてしまう。

それは人の腕。脚。ばらばらに食い散らかされたかのような、血にまみれた人の身体の欠片。

半魚が見つけた永遠に家を守る方法。

若返りの法。

それは自らと同じ血を流す者の血肉を口にすることだった。



「だけど誰かを犠牲にすることで家は安泰となる。そして家人達は決めたんだ。数十年に一度、一族の者を半魚に選ばせその糧とし若返らせることによって永遠に綾峰のもとへ留め置こうと……」

律は淡々と言葉を紡ぐ。

「その風習は今も続く。綾峰が世界大恐慌でもバブル崩壊でも物ともしなかったのは、この半魚があらかじめ予言を与えていたからだと言うもつばらの噂だ」

サロン内はすっかり静まり返っていた。

薫子の横顔は青い。

「一族にとつて不都合な者などから選ばれた人間は半魚の糧となる。奇怪な魚の体と人間の頭を持ち、人語を話す、綾峰家の最奥に祀られる生き神の……」

その律の声は雨音に溶けていった。

今まで食べたあらゆるものが消化不良を起こした気がする。

「……しょ、食事中にそんな話しないでよ！」

怖い云々より、気色悪いのが先に立つて涙目になって律を睨む。

「全くだわ」

薫子が口元にハンカチを当てて忌々しげに言う。

「そんなグロテスクな部分まで詳細に話必要はないでしょう」

「せっかくだから怪談調に話したほうが盛り上がるかと思って」

けるりと言いつつ律に、更に非難の声を浴びせる。

「何がせっかくなのかさっぱりわからないわ！」

「グロイ！ 本当にグロイ！ ホラーじゃない！」

薫子と二人、涙目で叫ぶが当の律はどこ吹く風だ。

「久々に聞いたけど俺、しばらく肉いたくない……」

令がテーブルに突っ伏して呟く。

「律……最後のほうは演出過剰。俺も胸やけしてきた」

鷹久も胃を押さえて言う。そんな様に律は不満げに声を上げる。

「何だよ、いつもこいつも。せっかく俺が綾峰家半魚伝説を眠くて退屈にならないように話してやったのに」

「眠くて退屈でいいから、気分悪くなるような話しないでよ!」  
令じやないが、私もしばらく肉や魚は見たくない。

もくもくと焼き菓子を頬張り続ける四葉がうらやましい。鷹槻も平然としている。確かにこれくらい気にもしなそうだが。彼といい、千歳といいマイペースぶりはこの家随一か。

……千歳。

心臓がその存在を全身へ主張する。

どくん、どくと規則的な音を以て。

綾峰家の最奥。

不都合な一族の人間。

頭の中で幾つものパズルのピースが嫌な具合に噛み合い、いびつな形を作り出す。

まさかそんなわけない。

そんなことあるはずがない。

「ちなみに、数十年に一度という数十年単位はそろそろだそうだ」  
律が胸を張って言う。

「や、やめなさいってば!」

薫子の悲鳴が遠くで聞こえる。

なぜ彼はあんな地下にいる?

なぜ本家の人間でありながら、その存在は表に出ない?

思わず鷹槻に視線をやると、鷹槻はふいと目を逸らした。

そんな何気ない行動すら不安を煽る。

まさか。

まさか。

この家で最も重視される、血。

最奥で感じたあの血のざわめき。

鷹槻に誰にも言つなと言われた、血。

千歳は綾峰家の生き神の糧……?

じゃあ私は……?

鳴り響く心臓の音。

窓の向こうで小さくなっていく雨音。小刻みに震える指先。

荒唐無稽だと分かっているのに、この不吉な考えは止まることを知らない。

顔を伏せ震えを堪える私を鷹槻が見ていた。

## 地下の語り部

昼間聞いた伝説もとい怪談を話し終え、私は黙って俯いた。

話したことで頭から背筋まで凍りつくようなあの不安がリアルに蘇ってきた。少し時間をおいてしよせん子供用の作り話と考えるようになったのに、口にすることで妙なりアリテイを感じるようになってしまう。五百年間、綾峰が没落したことの無い理由づけにぴたりと合う趣味の悪い話に。

千歳は小さく零した。

「半魚伝説か」

顔を上げると千歳は考え込むように口元に手をあてていた。

「いつからそんな話になったんだ……ベースは件と人魚伝説ってとこか。誰だよ悪趣味な改ざんしたの」

「……千歳は何か知ってるの？ その伝説」

千歳は私を見てあっさりと言った。

「そりゃ知ってるさ。俺は一応本家だつて言つたらー？」

「そうだ、よね。……ねえ千歳、その伝説って本当なの！？」

掴みかからんばかりの勢いで身を乗り出した私に千歳は若干驚いたように身を引く。そしてその整った顔が人の悪い笑みを浮かべた。

「さては結恵。その半魚伝説が怖くて寝れないんだろ？」

「なっ……そんなわけないでしょ！ 怖いんじゃないじゃなくて気色悪くて真偽を確かめずにいられなかっただけ！」

まさか千歳が半魚の生贄なのではと思っていたなんて間違っても言えない。この様子じゃ自らからかって下さいって言うようなものだ。

「ふーん？」

千歳は私の言葉など全く信じていない様子で口元は楽しげに吊り上げられている。

「とにかく！ その伝説とやらを千歳はどれだけ知ってるの！？」

「半魚伝説自体は今初めて聞いたけど、その元になった神隠しにあった子供の話なら全部知ってる」

「え。……全部？」

「うん。全部」

につこりと千歳は後光が差しそうな笑顔で答えた。

「半魚伝説つてのはだいぶ脚色されてるな。この家に半魚はいないから安心しろー？」

その声や表情に嘘や誤魔化しのようなものは一切感じられない。

そんな千歳の姿を見て、ようやく自分がどれだけ馬鹿げたことを考えていたのかがわかった。

「何だ……心配して損した」

気が抜けてつい口走ってしまったそんな言葉。それを千歳は耳聡く拾う。

「へえ、やっぱり怖かったのか」

「ちーがーうつ！ そうじゃなくて……」

千歳が。そう言いかけて口を噤む。

「……何でもない」

「件っていう妖怪を知ってるか？」

相変わらず千歳の言葉は唐突だ。

「クダン？」

「そう、人偏に牛って書いて件。文字通り牛の体に人の頭を持つ妖怪。生まれて数日間で死ぬんだけど、その数日の間に決して外れない予言をするんだそうだ」

「予言……」

決して外れない予言。それは。

千歳は笑って頷く。

「多分、その半魚伝説のベースはそれだろうな。飢饉や豊作の予言、日露戦争を予言した奴なんかもいるらしい」

そう言って千歳は立ち上がり、壁に並んだラックから古びた一冊の本を取り出した。そして差し出した本の表紙には『日本妖怪事典』

の文字。

「子供の本？」

思わず眉をひそめて千歳を見上げる。

すると千歳は少し不満そうに口を尖らせた。

「失礼な。一応学術書だつて。著者は名の通った民俗学者だぞ」

「妖怪つて子供の専売特許だと思つてた」

「そりゃ逆だ。子供がきやいきやい楽しめるのは研究者達が各地の伝説なんかを研究としてまとめて、それを子供でも楽しめるように分かりやすくしてくれたからだろっが」

「ああ、そういう見方もあるか」

「そうそう。分かつたら見ろ」

千歳の形いい指先が押さえて開かれたページ。

「……嫌がらせ？」

自分でも分かるほど、眉間にしわを寄せて千歳を見る。

開かれたページには横書きされた文章に古めかしい画風の絵。すぐ下に天保年間の瓦版のものだと説明がある。

真っ黒い牛の体。その首の先には人間の男の頭。けれど耳の少し上から牛の角らしいものが生えている。

はつきり言つて気色悪い。

「それが件」

千歳は笑顔で私の抗議を受け流した。

「予言する化け物」

「……本当にこんなのがいたの？」

「さあ？ 俺は見たことないけど」

にこにこ千歳は笑顔で言う。その笑顔を見ると怒っている自分がバカらしく思えてくる。

「結恵は本当にいると思う？ 件」

「突然変異でもこれはないと思うけど。人為的に掛け合わせたって無理でしょ。もしいたらマスコミが殺到するだろうし」

「だよな」

くつくつと笑って千歳は本を閉じた。そして私を見やった。

「なら半魚もそうじゃね？ 半牛とニュアンス的には大して変わらないんだし」

「確かに」

「結恵は現実見れる子なのになーんでそんな面白い作り話を信じちやっただらうなあ」

「信じてないってば！」

笑いを押し殺す千歳を怒鳴りつけて、自分でも何でこんなことを信じていたのかと恥ずかしくなってきた。

「この家って私の常識が通じないから……これだけの敷地があれば魚一匹隠すくらい訳無いだろうし」

ぶつくさとはやく私の前で、千歳は呟いた。

「確かに訳無い」

「……千歳？」

千歳の顔からは笑みが消え、十七という年齢よりずっと大人びた表情をしていた。

「この家に半魚はいない」

「……うん」

「半身に鱗が生え、怪魚となった者もない」

千歳の深い色の瞳から目が離せない。口どころか指一本動かせない。

「人肉を食い散らかす者もない」

まただ。

全身の血がざわめく。

「いるのは、人の血をすする化け物だけ」

千歳の言葉ひとつひとつに呼応するように、体中の無数の血管を流れる血がその存在を主張する。

「人の姿をした忌むべき化け物がいるだけ」

千歳がまっすぐに私を見る。その表情にも声音にも一切の感情はない。

全身が総毛立つ。

「ち、千歳が、生き神の生贄……なの？」

千歳は答えない。それでも私は続ける。

「生き神……じゃなくて化け物に血を与えるのは千歳なの？」

今は怖いばかりの整った表情は一切揺らがない。

「血が……私の中で血管一本一本がはつきりわかるくらいに存在を主張するの。夕べも変で……鷹楓に出来るだけ早く千歳に会いに行つたほうがいいって言われた」

何か、何か言つてよ。

「千歳。私は何？ 千歳と私と化け物って何か関係があるの？」

気付けば齒の根も噛み合わないほどに体は震えていた。

聞かないほうがよかったのかもしれないと思う。

けれど聞かなければいけないことだと思った。千歳に嫌な思いをさせても、それでも……。

「ごめん、変なこと聞いて。でも知りたい。ちゃんとこの家のことを知りたい」

大叔母は私を家族だと言ってくれた。

私はこの家で生きるって決めた。

見ないふりはしないと云つたのも私だ。

一度強く目をつぶり、正座して深く頭を下げた。

「どうか教えて下さい。神隠しに遭つたつていうご先祖のことも、血のことも」

長い沈黙の後、頭の上で溜め息を吐く気配がした。

「そんな頭下げなくたっていいのに」

目を開けて頭を上げると、千歳が困った風に眉を下げていた。

そこにいるのは感情の窺えない、怖いとすら感じる人物ではなく紛れもない千歳。マイペースで変なところ凝り性で、でも優しい人。「いずれ話すつもりではいたんだ。この家のこと全て。それが本家に生きる奴の義務だから」

微かに笑つて千歳は言う。



「桂子はもちろん知っているし、義将も知っていたことだ」

「おじいちゃんも？」

当然と言えば当然なのだが、どうしても祖父がこの家の人間だという意識は薄い。そのため今までそこまで考えは回らなかった。

千歳は頷いて続けた。

「仮にも跡取りだったからな」

「そっ、か」

「もちろん、この家に化け物がいることも知っていた。綾峰の先祖が神隠しに遭ったということも知っていた。血のことも知っていた」  
血という単語につい過剰反応してしまう。

千歳は大丈夫だ、と言って頭を撫でてくれた。

「結恵が怯える必要はない。血は……当たり前なんだろうけれど」  
そう言った千歳は複雑そうに薄く笑った。

当たりという単語に聞き覚えがあった。

タベ鷹槻に言われたんだ。当たりの可能性があるから、と。

きつといい意味でない。それだけは分かった。だから半魚伝説とやらの生贄のことかと思ったのに、千歳はあの話のほとんどが嘘だと言う。

だけど千歳の表情を見るに、あの話の真偽がどうであれ実際に良い意味ではないのだろう。

その意味まではわからないが、知らないということに対する恐怖はじわじわと広がってくる。

「当たりって、何？ 鷹槻も言ってた。私は当たりの可能性があるって……」

息が苦しい。

「私は、何……？」

呼吸を繰り返しても楽になれない。

恐怖と不安は止まることなく押し寄せてくる。

「……っ」

「結恵？」

何でもないと伝えるため首を横に振る。

けれど無意識に胸を押さえた私に気付いた千歳は立ち上がって何かを持って近づいてきた。

「これ、口に当てて息をしろ」

言われるがまま、千歳が手渡してきた紙袋を口に当てて呼吸する。そのまま千歳にソファに横になるよう言われるがままに横になる。

相変わらず息苦しくて不安はあったけれど、ずっと手を握っていてくれる千歳を見たらそれが少しずつ和らいでいくのを感じた。

千歳が済まなさそうに私の前髪を払った。

「ごめん。まだ慣れない環境だつていうのに急に妙な話をしたりしたから驚いて過呼吸を起こしたんだ。本当に悪かった。俺の配慮が足りなかった」

本当に申し訳なさそうに言う千歳を見ているのが辛くて、私は一度袋を口から外した。

「千歳のせいじゃないよ。前から、時々あったの」

千歳は意外そうに少しだけ目を見張った。

彼でも驚くことはあるのか、と思うと少し笑えた。

「考えすぎたり不安が強くなったりすると、家にいる時にもなつたんだ。最近はあまりなかったから少し驚いただけ。……過換気症候群って医者で言われた」

「そうか」

「ごめん、驚かせて……。少しすれば納まるから」

「いいから袋、口に当てておけ」

言われてまた袋を口に当てる。

大叔母には事前に話していたが千歳は知らなかったのか。何となく私の情報は既に知っているのだと思っていたが。

千歳はずっと私の手を握っていてくれた。お互い少し冷たかった手が、ずっと握り合っていることで温かくなっていく。子供の頃、風邪をひいた時に両親や祖父に同じようにしてもらったことを思い出したからか随分と安心して、いつもよりずっと早く呼吸は楽にな

ってきていつの間にか不安も消えていった。

千歳が大丈夫だと言ってくれたんだから大丈夫だ。

鷹楓だって言っていた。千歳は私達の味方だって。

千歳は不思議だ。

話していると、そばにいらるととても安心する。小さな子供が親のそばに行くみたいに、千歳のそばにいたくなる。その居心地の良さと優しさに甘えなくなる。

一緒にいると泣き出したくなるほどに、優しくて温かい。

きのう初めて会ったばかりなのに不思議だ。

血の繋がった相手だからなのか、彼特有の不思議な空気のおかげなのかはわからない。

でも思う。

もっと千歳といたい。

そばにいたいと、そう強く思う。

ただ手を繋いでもらって横になっていた。まだ僅かに残ったお香の香りが鼻腔をくすぐる。

何だか落ち着く香りだ。日本の香りは沈静作用があると聞いたことがある気がするからそのせいかもしれない。

## 壁際の無力な子供

「……もう平気」

紙袋を外して上体を起こす。随分楽になって呼吸も落ち着いてきた。

「そうか？」

「うん。ありがとう」

千歳はまだ少し心配そうな顔をしていた。

そんなに驚かせたのかと申し訳ない気持ちになる。

「本当に大丈夫だよ」

片手を繋いだままソファから降りて床に座った。

「ごめん。驚かせて」

「驚いたと言うか……こつちが悪かったから」

千歳は伏し目がちに言う。

「別に千歳は悪くないよ。それより話、続き聞かせてよ」

これ以上千歳にこんな顔をさせたくなくて、努めて明るく言う。

「このままじゃ気になって夜もおちおち寝てられないし」

「今日はもうやめたほうがよくないか？」

千歳は意外に過保護だ。

一応既に子持ちらしいから、そのせいかもしれないが保護者っぽいところがある。

「大丈夫。このまま中途半端に話を切られちゃったほうが気になって精神衛生上よくないよ」

「まあ、そうなのか……？」

千歳は難しい顔をして黙った。

こんな顔もするのか。いつも楽しそうな顔をしているのに。それか、私が見たのは別人のように冷たい表情か。

「……それにほら！ さっきベースは件か人魚かとか言ってたじゃない？ 何、半魚じゃなくて人魚も何か言い伝えとかあるの？」

「あー人魚な。人魚も予言するとか色々逸話があるからそれも混じってるんだと思う」

千歳はベースになった話くらいならいいかと思ったのか、軽く息を吐いてから話し始めた。

「土地によつて違うけど、人魚は吉兆、凶兆とか」

「日本にも人魚っていたの？ 私も子供の頃、人魚姫読んでもらつて泣いたっけ」

王子様に恋をして声を引き換えに陸に上がった人魚姫。最後、海の泡になる人魚姫は子供心に悲しいものがあつた。

「それつてアンデルセン童話の？」

「うん、そう。幼稚園の紙芝居で先生が読んでくれたんだけど、先生がまた上手く読む人でさ。最後はクラス全員号泣して大騒ぎだったな」

「確かその人魚姫つて若くて美人で健気で歌が上手いんだつたよな？」

「そうだよ。他にもあるの？ 人魚の話。人魚はジュゴン説なら知ってるけど」

千歳は気まずそうに目を逸らした。

「……何？」

「いや。まだ結恵は夢を見ていい年頃だ、うん」

「ちよつと。人魚姫で泣いたのつて幼稚園の頃だからね？ 今はむしろ、そんなボンクラ王子のために命を無駄にしなくても、くらいしか思わないから」

我ながら十年程度で随分すれてしまったとは思つが。

千歳はちらりと私を見た。

「夢を壊されたとか言つなよ？」

「は？ 言わないよ」

「怒るなよ？」

「怒らないつて」

「……泣くなよ？」

「だから泣かないってば」

一体なぜそんなに念押ししてくるのか。

千歳は諦めたようにさっきの『日本妖怪事典』を片手に取った。

そして繋いでいた手を外してページをめくり出す。

ずっと繋いでいたから少し寂しく感じた。

当の千歳は特に気にする様子もなくページをめくりながら話を続けた。

「人魚はヨーロッパのほうがポピュラーか。ローレライとか聞いたことないか？」

「んーと、名前くらいは」

「ローレライって言うのはドイツのライン川にある岩山の名前なんだけど、伝説だとそのローレライっていう若くて美人な人魚がライン川を渡る船の人間に歌を歌うんだそうだ。けどその歌があまりにも上手くて船の奴らは聞き惚れて舵を取り誤って川底に沈んでしまふんだと。他にギリシア神話にも出てくるセイレンっていうのは海で似たようなことをしている。海で歌って船を難破させるんだそうだ」

「へえ。人魚姫とは随分イメージ違う」

聞いた限り、ローレライには健気で薄幸という人魚姫のイメージは見当たらない。

「あとはアイルランドのメロウ。女は美人らしいけど男はブサイクなんだと」

「何それ」

不細工な男の人魚を想像してしまいつい吹き出す。

「それこそ人魚というより半魚って呼んだらいいのに」

「まあ見た目は置いといて、こいつが出てくると嵐が起きるって言うて船乗り達が嫌がったらしい」

「そりゃあ嫌がるね」

船に乗っている時だったら遭難、悪くすれば難破するかもしれないし。

「そういうわけで基本的に人魚にはいいイメージっていうのは少ない」

「あ、確かに」

「アンデルセン童話の美人で歌が上手い人魚っていうのはヨーロッパの人魚の特徴だろうが、最後幸せにならないのも悪いイメージが強いからかもな」

「なるほど」

パラパラと乾いた紙をめくる音を聞きながら相槌を打つ。

その音が止み、あったあつたと千歳は私の前に本を広げて差し出した。

「これが和製人魚」

受け取った本を見て絶句する。

「……半魚っ！」

「イメージはその瓦版の挿絵だったんだろうなあ」

千歳は苦笑して言う。

渡された本には、鬼の角のようなものを生やした女の首から下が魚になっている絵が描かれていた。こちらも瓦版のものと注釈してある。

「文化二年、今から二百年前に越中……今の富山県に人魚が出て漁船を悩ませたから鉄砲で仕留めたって書いてあるんだ」

千歳は横から覗き込み、瓦版の内容らしいものを現代訳してくれた。

「全長が約十メートル五十。髪の毛の長さは約五メートルってところが両方の腹に目が三つずつついていて、金色の角が二本生えている。

下腹は赤く、鳴き声は約四キロ先まで響く」

「ば……化け物じゃない」

人魚姫のイメージが音を立てて瓦解していく。こうして絵を目の当たりにすると少しショックだ。

「んーでも外見はいかついけど、最後のほうに書かれてる。この人魚を一目見ると災難を逃れ、長生きして一生幸せになれるって」

「幸せどころかこんな姿を目撃ただけで一生もののトラウマだと思っただけ」

「違う」

間髪入れず言った私の言葉に千歳は声を上げて笑った。

「これが半魚の姿のモデルで、話は件がモデルになったわけね」  
「た、多分」

千歳は笑い過ぎて苦しそうな息を整えながら答えた。

「他にも日本各地で人魚は目撃されている。祟ったり、絵姿が魔除けになったり、予言を受けて津波を逃れたり」

「じゃあ、どつちかと言うと人魚の話のほうが半魚話のベースとして強め？」

「かもな。人魚って意外とポピュラーで偽物のミイラなんかが多く輸出されていた時期もある。『実際にいそう』な感じがしたんだろ人魚のミイラが有形民俗文化財に指定されている市もあるって言うし」

「美人の人魚ならともかく、半魚風人魚のミイラのどこに需要があって輸出なんてされてたの？ それとも半魚風人魚が美人認定される国でもあったの？」

真顔でそう言うとき千歳は笑い出した。どこでツボにはまってしまったのか、おなかを抱えて涙まで浮かべて笑い転げている。

この笑い上戸め。

しばらくまともに息もできないくらい笑い続けてからようやく千歳は涙の浮かぶ目をこすった。

「そりゃあ俺も美人の人魚のほうがほしいけどさ……」

そう言った千歳のあらゆる行動が停止する。目をこすったまま、ぴくりとも動かない。

「……千歳？」

恐る恐る声をかけると千歳は一切の笑いをおさめて私の腕を取った。

「結恵。悪いけどちょっとあっち行ってる」



「へ？」

千歳に引つ張られ、入口や隠し扉とは別のドアの前へと来た。

「しばらくここで大人しくしてる？ 灯りは点けてもいいけど絶対ここから出てくるなよ。出来るだけ物音も立てるな。寝ててもいいから」

そうして真つ暗な部屋の中へ放り込まれる。パチンと音がして部屋が明るく照らされると同時に千歳はそのまま外に出てドアを閉めた。

「え？ ち、千歳！」

ドアノブは回るのにドアはピクリとも動かない。千歳が押さえているのか。

「ちよつと何なの？ どうしたの？」

「後でだ。客が来る」

短いがそれ以上反論する氣力を削がれる程に強い力を持った声に、私は渋々ドアから離れた。

突然押し掛けたのは私だし、客があるならば追い返したっていいところを話に付き合ってくれただけでも温情だ。

これ以上はただの我がままになってしまう。そう思って室内を改めて見ると、十畳ほどの部屋にクラシックな木製のベッドとサイドテーブルが置いてあった。

この部屋の外にもベッドはあったが、こちらのベッドのほうが大きくて部屋の印象も寝室らしく落ち着いている。あちらのパイプベッドには毛布が丸まっていたのに対し、こちらのベッドはあまり使われている様子がなく布団も枕もホテルのようにきれいに整っている。

あちらが仮眠用でこちらが本来の寝室というところだろうか。となると普段千歳はあの仮眠用ベッドしか使っていないのか。

（……って、人様の私生活を推察するなんて悪趣味だ）

雑念を振り払うように頭を振ってそのまま膝を抱えて座り込んだ。物音を立てるなど言われたのだからこのまま動かないようにしなけ

れば。

それにしても表に出ないはずの存在の千歳の客とは一体誰なのだろう。

大叔母だろうか。それとも使用人。鷹槻……だったら私が隠れる理由はない。

考えているうちについつい好奇心が芽を出す。

話を聞くなとは言われなかった。言われなかったが、聞くのはやっぱり失礼だろう。

だがもしかしたら、この家でも特別な千歳に何か深く関わるようなことが聞けるかもしれないし。いや、それこそ千歳本人に聞けばいいだけで盗み聞きなんて礼を欠くにも程がある。

一人で座り込んだまま葛藤し続けていると、壁の向こうで千歳の声がした。

「入っていいぞ」

壁際にいるから声が拾えるんだ。今から動いたら物音が外に漏れるかもしれないし、動くわけにもいかない。

「遅くに前触れもなしに失礼致します」

千歳の声が続いて聞こえてきたのは落ち着いた、威厳に満ちた大人の男性の声だ。

「別にいいさ。とりあえず座れよ」

対して千歳は声音も口調も軽い。

相手はその千歳に丁寧な口調を使わなければならない誰か。

使用人という雰囲気ではない。……本家以外の親族か。

「よく来たな、和典<sup>かずのり</sup>」

「はい。失礼致します」

和典……やはり呼び捨てか。

この家で一番の権力を持つ大叔母を呼び捨てにするくらいなのだから、他の誰を呼び捨てにしてもおかしくはないが。

「で、要件は？」

「はい。もちろん……私の前に桂子様がおいでに？」

和典という人の声が訝しげなものに変わる。

「ああ、そのカップな」

千歳の言葉で気付く。

テーブルの上に置きっぱなしにした私の分のココアだ。

どうしよう。バレたらまずいんじゃないのか。

体を強張らせて成り行きを見守っていると、千歳が軽い調子で言った。

「そっちは砂糖抜き。こっちは砂糖入り。両方飲みたかったから両方用意したんだ。お前も飲む？」

「いえ。私は結構です」

その声からは怪しむ様子はない。

どうやらこの人は千歳のマイペースで常識で捕えられない行動を知っているらしい。

運が良かった。

「ところで本日伺った要件ですが」

「ん、ああ」

「敷地内の子供らへの披露目の席については滞りなく終了したそうです」

私の事か。ここにいるというのに何だか気まずい。

「それは何より。お前のところの子供達も出席したのか？」

「はい。先程長女から報告を受けておりました」  
報告？

「逃亡者の血はあまり好ましくない者達と親しくなさっておいでだったとか」

逃亡者の血？

好ましくない者達？

何の話だ……？

「桂子様も彼らを本家屋敷へ招待したとか」

やはり好ましくない者達というのは鷹槻達のことだ。

と言う事は、逃亡者の血は私。

逃亡者。

その単語を頭の中で反芻すると共に、一人の人物の顔が鮮明に蘇る。

駆け落ちした、跡取り。

それは……『逃亡者』は祖父？

心臓が外にまで響くんじゃないかという程に鳴っている。

「和典。その呼び方はあまり気分のいいものじゃない」

子供を窘めるように千歳が言う。

「は。失礼致しました。結恵様は二ノ峰の長男を筆頭とする者達と親しくなさったご様子」

「うん。いいんじゃない？」

「千歳様」

和典の声が咎めるようなものになる。

「そのように軽々しく」

「お前たちが重々しく考えすぎなだけだって」

溜め息がちに千歳は言う。

「子供には好きにやらせてやれ。でないとこの家の大人達みたく歪ゆがむぞ？」

「私どもは歪みですか？」

「歪みだろう」

苦笑するような千歳の声が小さく聞こえた。

和典は重々しく息を吐く。

「そのような事を……ですから貴方にはこのような場所にいて頂かなければならないのです」

いて頂かなければならない……？

「けっこう快適だし別に俺は構わないけどな」

「千歳様。私どもとて好き好んで貴方をここに隔離しているわけではないのです」

……隔離。

この人が千歳を？

「本来ならば、敷地内の者達には家格年齢を問わず貴方に会わせても良いと考えております。ですが貴方がそのようなお考えでは子供らに示しがつきません」

「んー和典は考え方が古いよな。いや、お前に限ったことではないけど」

「こうして綾峰家は代々続いて参りましたので」

千歳の呆れがちな言葉にもきっぱりと言い切る。それから声をごく低くして呟くように言う。

「……私どもからすれば、『歪み』は逃亡者です。裏切り逃げ出した者」

祖父が裏切り……？

思わず声を上げて部屋を飛び出しそうになったのを何とか堪えた。ここで出て行ったらせつかく千歳が隠れさせてくれた意味がなくなる。手を強く握りしめ、小さく身を固めた。

「和典。俺や桂子は義将を裏切ったとは思っていない。二度とそういう言い方はするな」

怒気の混じる強い声で千歳が言った。初めて聞く千歳の強い言い方に怒りよりも驚きが勝る。

「本家は絶対なんだろう？　ならば当主である桂子の意向に逆らうお前は反逆者か？」

「……申し訳ありません。言葉が過ぎました」

和典の声が怯むように弱々しいものとなる。

「ですがこれ以上は他の者達の不安は募るばかり」

「……」

「せめて結恵様が義将様のように『当たり』であられるなら、皆が安心することでしょう」

当たり……祖父は当たりだったのか。私と同じように。

和典の言葉に対し千歳は冷めた声で返した。

「俺は『はずれ』であることを祈るよ」

「千歳様っ」

「当たり前であつたなら、お前は義将の孫を代わりにこの家に縛りつけようとする気だろ」

「そうでなければ綾峰家が……」

「そうでなければ続かないなら、それまでだったと言う事だ」

何の感情も映さない言葉。

冷たさも、温かさもない、乾いた言葉。

「それがあるべき姿。この家は歪んでいる。それに気付いた者が歪み。歪みに従う者が正道。……奇妙なことだ」

「立ち位置によって変わるものが正道。綾峰家の正道は外界には歪みでしょうが、綾峰に生きる者には正道です」

「一体正しいことって何なんだろうな」

心から疑問に思うように、千歳は呟いた。

「貴方でも分かりませんか？」

「分からない」

迷いなくはつきりと。

「俺はお前たちが思っているほど立派なものじゃない」

「千歳様」

咎めるような声に、千歳は寂しげに言った。

「あいつが死んで、俺が生き続けるようになってからずっと考えている。一体何が間違っていたのか……全て俺が間違っているのか」

あいつ？

「そのようなことを申しては、リク様が悲しまれます」

リク？

「……そうだな」

小さくそう言ってから微笑する気配。

「悪い。話を中断させたな」

「いえ。では続きを」

「ああ」

死んでしまった『あいつ』。

それは千歳の亡くなった恋人？

リクというのはその人の名前？

何だか嫌だ。

聞きたくない、考えたくない。千歳の好きだった人なんて考えた  
くない。

好きだったじゃないかもなんて、過去形じゃないかもしれない。  
あんな寂しげな千歳の声なんて聞いたことない。千歳は今もその人  
が好き？

……何で私はこんなことを考えているんだろう。

千歳がすごく遠くに感じる。さっきまであんなに近くに感じたの  
に。扉一枚向こうにはちゃんというのに。

嫌だ、私。

何でこんなことを考えるんだろう。

何でこんなに千歳に想われているというその人が嫌なんだろう。

嫌な人間なのは、私じゃないか。

何これ、何これ。

これじゃあまるで、私が千歳の大切な人に嫉妬しているみたいだ。  
まるで、私が千歳を好きみたいじゃないか。

小さく小さく体を丸めて、必死にそんな考えに蓋をする。

私にそんなことと思う資格なんかない。

私みたいな薄汚い人間に誰かを好きになる資格なんてない。

だから駄目だ。好きになったら駄目だ。

今ならまだ間に合うから。好きじゃない。そうじゃない。

ただここへ来て一番最初に近づいた年の近い人で、優しくしてく  
れたから勘違いしているだけだ。そうに決まっている。

「……では、今日のところはこれで失礼致します」

「ああ、報告ご苦労な」

「いえ。これも三ノ峰戸主の務めですので」

小さく扉が閉まる音がして部屋に静けさが戻る。

あの人は帰ったのか。

三ノ峰と言っていた。あの人が三ノ峰の戸主なのか。

何とはなしにそう思った。



## 貧弱な子供の決意

足音が去って行ってしばらくして突然ドアが開いた。

「そんなところにいたのか。冷えたる？」

ドアの横で小さくなつて座っている私と視線を合わせるようにしやがみ込み、千歳は首を傾げた。

「ん……大丈夫」

何となく千歳の顔を見れないままに乾いた口を開いた。

「私も、そろそろ戻るね」

「全部聞いたか？」

相変わらず千歳は人の話なんて聞こうともしない。故意になのかそつでないのかはわからない。

顔を上げられず黙っていると、優しく頭に手が置かれた。

「ごめんな。口が悪い奴で」

その手が優しく温かくて泣きそつで嫌になる。

「……千歳」

「ん？」

「私は嫌な人間だよ」

千歳の手を頭から払つて、俯く。

「私はおばあ様があんなに良くしてくれるのに、この家の権威を利用することしか考えていない、最悪な人間なんだよ」

吐き捨てるようにそう言つて。

「この家に来たのは綾峰の財力と地位と権力が欲しかったから。あのまま普通に暮らしていたんじゃ到底手に入らなかっただろう力が欲しかったから。そのためにここに来た」

千歳は何も言わない。

一体どんな顔をしているのか見ることもできない。

でも、嫌ってくれればいい。

そしてもう私になんて優しくしてくれなくなればいい。

そうでない、好きになっちゃったから。

もともと好きになっちゃったから。

こんなに優しい人を、こんなに汚く最悪な私が好きになっちゃったから。

だから嫌って、疎んで、突き放してくれればいい。

姑息で最悪な私は、自分からなんて離れやしないから。

「そこら辺の俗物連中よりずっとずっと汚いの。あんなに優しいおばあちゃんに取り入ってやろうとしてる。おじいちゃんの孫だって立場を利用して、この家の力を手に入れたいだけ」

ああ、口にして分かる。

本当に私は最悪だ。

性悪にも程がある。

昔から口ばかり、悪知恵ばかり回る。

「……力が欲しいんだ？」

そう言った千歳の声は信じられないくらい穏やかだった。反射的に顔を上げようとしたのを抑え込む。

「っそう。私は力が欲しい。誰にも侵されない力が欲しい。だから

私は

「何でそう思うんだ？」

どこまでもその声は優しい。

少しでも体の力を抜いたらそのまま崩れ落ちてしまいそうなほどに。

「何で？」

もう一度尋ねてくる千歳の声に、両手をぐっと握り締めて答える。

「私が私のために生きるために」

「そうか」

静かな声が降ってくる。

さすがに呆れただろうか。自己中心的な子供だ、と。

いくら優しい千歳だってさすがに呆れただろう。

そう望んだはずなのに、そう思うと視界が涙で滲んだ。

……もう行こう。そしてもうここへ来るのはよそう。

千歳がこのことを誰かに話せばこの家にいらなくなるだろうか。きっと大叔母は既に気づいているのだろうか。

でも他の家の人間は黙っていないだろう。こんな子供が家の地位財産を狙っているなんて知って、それでも置いておこうなんて言うような酔狂な人間がこれだけ大きな家にいるとは思えない。

千歳の顔は見ないまま、立ち上がってドアノブに手をかける。

「それじゃあ帰るね」

「昨日もさー」

私の言葉など聞こえていないかのように軽い調子で千歳は言った。「自分で自分の責任が取れるなら自分の意思を貫き通していいに決まってるって言ったろ？」

しゃがみ込んだまま、千歳は私を見上げて続けた。

「自分のために生きていいに決まってる。自分の人生なんだから」思わず千歳を見ると、彼はいつもと変わらない表情をしていた。私と目が合うと千歳は小さく笑って立ち上がった。

「だけどこの世界で自分の意思を貫き通すのは難しいよな。これも最初会った時に言ったけど、せつかくの立場なんだから最大限に利用してやればいい。この面倒くさいことこの上ない家にいるってことは、それだけの物を得るだけの代償になり得る」

この人は他人を蔑むとか嫌うとかないのか？

「結恵が結恵の思うままにしたいって言うなら俺はそれを止めない」何でこの人はこんな矮小で卑劣なだけの子供に優しい言葉をくれる？

「だから自分で自分を傷つけるようなことばかり言わなくていいんだ。泣いてしまうほど嫌なことを言わなくていいんだ」

目尻に溜まっていた涙がずっと流れ落ちた。涙は千歳の手の上に落ちる。

「何でそんなこと言うのさ……私は最低な人間だよ」

「本当に最低な人間だったら、まず自己申告はしないだろうな」

千歳は笑って私の両手を握り、額に自分の額を寄せた。

「結恵は悪役になりきれないタイプだ」

そう言って小さく笑う。

それを否定するように声を荒げた。

「そんなことない。私は最低だ。汚くてずるくて、酷い人間だ。自分のことしか考えてないような最悪な」

「結恵は言うほど汚くもずるくも酷くもないよ」

ごくごく柔らかな声音でそんなことを言う。

「千歳はここに来る前の私を知らないから……！」

「うん、知らない」

「だったら」

「でもここにいる結恵は知ってる」

「ここでは猫を被ってるだけ！」

「そうか」

どんなことを言っても柳に風。

優しい言葉も気配も、これっぽちも変わらない。

ああ、好きだ。

この人のことが好きだ。

こんなに優しい人を想うなんてそんな資格、私みたいな人間にあるわけないのに。

「……千歳」

「ん？」

千歳は額を外して私の顔を覗き込んできた。

「私は友達を売ったんだよ」

友達を売るなんて最低！

今も鮮明に思い出せるあの時の彼女らの表情が、言葉が胸に突き刺さる。

「それでも私は、言うほど汚くもずるく酷くもない？」

千歳は屈んで私と視線の高さを合わせた。

「結恵は友達を売って喜ぶような人間じゃないよ」

「まだそんなことっ！」

「だって喜んでたらそんな顔しないだろ？」

まっすぐな千歳の視線に、両目から涙が溢れ出していたことに気づく。

「……違う」

「何が？」

「私は酷いんだよ」

「結恵が思っているより酷くないよ」

「酷いよ」

「何でそう思う？」

静かな声がそう尋ねてくる。

私の思いと反比例するように、千歳の声はどんどん静かになっていく。

それが何だかとても腹立たしかった。だからむきになって叫ぶ。

「だって、言われたもん！ 私は友達を売った、酷くて最低な人間

だって！」

「売ったのか？」

「売ったよ……」

両膝から床に崩れ落ちる。

「私が迷ったから……」

涙が止まることなく溢れてくる。

疼くような痛みが一年前の記憶をはつきりと呼び起こさせる。

「私、は……最悪なんだよ……」

一年前。中学二年の夏。

蝉の声がうるさくて、強い日差しが鬱陶しい日の帰り道。

「ねー結恵、帰り寄ってこ」

「……あ、うん」

数人の友人に誘われ、私は楽しげに喋る友人達の後を黙ってつい

て行った。

今日の言い訳はどうしようか？

もう言い訳も限界な気がする。

うっん。気がするじゃない。絶対にそうだ。

今度ダメだったら……。

考えたら体が震えた。それでも足は止められない。楽しげな友人たちの後を追う。

するとそのうちの一人が振り返って言った。

「ねー結恵。結恵はうちの友達のよね？」

彼女はねじ曲がったような笑みを浮かべた。

「う、うん。当たり前だよ……」

「じゃあ今日こそは結恵もうちらと友達って証拠、見せてね？」

無邪気なように強い口調。それは寒気がするほどに。

気付けば前を歩いていた全員が私を見ていた。貼り付けたような顔で笑いながら。

「結恵はうちの友達だもんね？」

「そうそう。友達はイチレンタクショーでしょ？」

「ねー結恵？」

くすくすくす。

笑い声が強い日差しと蝉の声に溶けていく。

「う、ん」

無理矢理作った笑顔で答えると、彼女たちは満足そうにまた笑ってしゃべりながら歩きだした。

どうしよう。どうしよう。

心臓が今にも飛び出してきたきそうなくらいに鳴って、私の周りだけ酸素が薄くなってしまったかのように息苦しかった。

それから私達は通学路にあるドラッグストアに立ち寄った。店内はクーラーが効いていてずっと日差しに照りつけられた身には心地よかった。けれど心臓の音と薄い酸素は変わらない。むしろ酷くなっている。

色とりどりの化粧品や生活雑貨の陳列された棚の前を皆でうろろしながら歩く。そしてそのうちの一人の子が笑って私達に『合図』する。

その手がリップグロスへと伸びて、すっと制服のポケットへとしまわれる。

数人がそれに続く。

他の客も店員も、誰も気づいていない。

ここが死角になるって学校では評判になっていたから。

これが私達の友達の『証拠』。

万引きして、そのスリルを共有し合うということで『友達』だというもの。

それが出来ないものは友達じゃない、異端者。

「ほら、結恵もー」

一人に小突かれて我に返る。

今の今まで、何とか誤魔化して免除されてきた。けどもう無理だ。心臓が怖いほどに鳴り、酸素はどんどん薄くなっていく。

「結恵ーやんないの？」

冷やかな声に、震える手をかわいらしい化粧品の並ぶ棚へと伸ばす。

万引きって犯罪なんだよね？

窃盗罪になるんだよね？

そうしたら私、犯罪者だよね？

心臓は早鐘のように胸を打ちつけるように鳴り響く。

「ちよつと、早くしなって。気づかれるじゃん」

「結恵え？」

わかってる。

大人の言う正しいことが、私達の世界の正しいこととは限らないことくらいわかってる。

ここでやらなかったら友達が離れていってしまふ。学校での居場所がなくなってしまう。

やらなきゃ、やらなきゃ……

でも……。

瞬間、私の周りから酸素が消えた。とうとう心臓が胸を突き破ってきたかのようだった。

それからよく覚えていない。

伸ばした手は鈍い衝撃を感じた。

耳に入ってきたのは雪崩のように物が落ちる音。

それから少し遠くで知らない悲鳴が上がった。

数人が慌てて立ち去って行く足音を聞きながら、一度そこで私の意識は途切れた。

目を開けるとそこはドラッグストアの休憩室だった。

白衣を着た、いかにも医師らしい男性が目を開けた私に笑いかけた。

「大丈夫かい？」

「私……どうしたんですか？」

「君は過呼吸を起こしたんだね。それが酷くなって失神したらしい。息が苦しくなったり動悸はなかったかい？ あとはその原因になるようなストレスは？」

「ありました……」

まだぼんやりとする頭で答えると、ドラッグストアのエプロンをつけた中年の女性が医者らしい人の隣から顔を出した。

「もう起き上がれるかしら？」

その女性が手伝ってくれ、今まで寝ていたソファから上体を起こした。

「あなたには少しお話を聞かせてもらう事になるけれど……」

「店長。彼女の場合は強要されたのではないかと医師としては。過度のストレスの原因はそれでしょう。それに彼女の持ち物からは商品は見つからなかったのでしょうか？」

「いえ。この子を疑っているわけではなく念のためですよ」



何の話だか話についていけずにいると、店長だという女性は穏やかに笑った。

「あなたのおかげでこのところの万引き犯が分かったわ」  
その言葉に一気に背筋が凍る。

「あ、あの、私……」

「ああ、大丈夫。わかってるわ。あなたはそんなことしてないって。平気で盗めるような子だったらあそこで倒れたりはしないものね」

また、酸素が薄くなる。

「今、あなたが倒れた時に逃げ出した子たちとその親御さんに話を聞いているのよ。本当に被害額が酷かったから……あなたがあのまま物を盗んで帰って行っていたら、被害はますます大きくなる場所だったわ」

優しく言う店長の言葉が、今は地獄からの言葉のようだ。

「一応あなたのおうちにも連絡してあるからもうじき親御さんが見えるわ。事情はこちらから説明するからそうしたら帰っていいからね」

ドアの向こうから怒鳴り声が聞こえてきた。

それに身を竦ませ自分のしたことの結果へ体を震わせると、何を勘違いしたのか店長はそつと肩に手を置いてきた。

「警察の方にも来てもらってるの。大丈夫、あなたは違いますって伝えてあるから」

……じゃあ、ドアの向こうで怒鳴られているのは。

「っ、はあっ、はあっ……」

「どうしたの!？」

「また過呼吸だ……店長、紙袋を」

「は、はい！」

店長が部屋を出ていくのにドアが開けると別室との仕切りが消え、部屋が一時的に繋がった。

警察官らしい人と、彼女らとその親が見えた。

一人が私と目が合うと親や警察を無視して叫んだ。

「あんなわざとらしい演技までして友達を売るなんて最低！」

「あんななんか友達じゃない！」

「嫌だったからってこんなことしなくてもいいじゃない！」

「こんな汚い奴だなんて思わなかったし！ 酷すぎ！」

次々と投げかけられる言葉に、目の前が真っ暗になった。

全部終わった。

最低で汚くて酷い私は、絶望を目の前にしながらそんなことを思った。

「やめないかつ」

「ドアを閉めろ！」

警官や店の人によって部屋は再び遮断されたが、それでも彼女たちの声が嫌でも聞こえてきた。

それから親が迎えに来て、店員から事情を説明されて家に帰った。そんなことがあつて私は学校へ行かなくなった。

当初は行こうとすると過呼吸を起こしてしまつて行くことが出来なかったと言うのが正しかったが、次第に自分の意志で行くことをやめた。

休んでいる間中、携帯電話に誰からかもわからない無言電話や悪戯メールが毎日のように来た。

それが誰からのものかなんて、考えるまでもなかった。

あそこで私が嫌だと思つていたからこんなことになった。けど嫌だと思わないことは不可能だったろう。

その時思った。

一生こうして何も言えずに過ごすのか、と。

一生じゃなくてもいい、いずれは自分の意思を言葉にできるようになろうとそう思った。

でもどうすればいい？

長いものには巻かれなければいけない社会。

大人になればなるほど柵しきいみの増えるこの世界で。

…… ああ、簡単だ。

弱い者は皆長いものに巻かれるのなら、私がその長いものになればいいんだ。

絶対的な地位と後ろ盾を持てばいい。

幼い私はそう単純に思った。

今はまだ無理でも、大人になった時には必ず地位も権力も手にする。

高級官僚でも政治家でも何でもいい。

派閥でも何でもうまく生き抜いて、確固たる権力を持つ。

だからそれまでは今までよりずっと強かにずるく生きなければ。

どんな手段をおおうと冷たい人間になろうと、自分を隠してうまく生き抜いてやる。

嫌がらせの電話が鳴り響く携帯を叩き割って、その時仄暗い復讐にも似た決意をした。

社会的な力を手に入れると。

たくさん勉強していつか必ず地位を手に入れると。

それが私の十四歳の夏の、昏いばかりの決意だった。

## 脆弱な子供／探る子供

「私、学校行かないで家で勉強するから。どうせ荒れてて授業になんかならないし。私立高なら内申より実力主義のとも多いし、私はそういうところに進学するから問題ないよ」

十四歳の秋、私はそう家族の前で宣言した。

戸惑う家族の中で、おじいちゃんだけが不敵に言った。

「自分で決めたことなら、貫き通しなさい」

「うん、そうする」

本当は学校に行くのが怖かっただけなんて、おじいちゃんじゃなくても分かったろうに。強がっているだけなんて分かっていただろうに。おじいちゃんも、お父さんもお母さんもそれに気付かないふりをしてくれた。

それからずっと、私は学校に関するあらゆるものを遠ざけてきた。塾で勉強している。模試で結果も出している。

なら問題なんてないだろう？

そうしてどんどん、私は汚くて酷くて、最悪な人間になっていった。

自分でも分かるほど嫌な人間に。元友人達などよりよほど嫌な人間になっていった。

それでもこういう方法でしか自分を保てなかった。

それからおじいちゃんが亡くなり綾峰家との繋がりができ、非現実的な逃げ道は現実的なものとなった。

汚い私。

それを最初に打ち明けたのは大叔母だった。

私はやっぱり小心者なんだ。優しくしてくれる大叔母を利用することができない偽善者。

祖父から既に私の話を聞いていた大叔母はそれでも私を受け入れてくれた。

強がる私を受け入れてくれた。

それから、この人と家族だけは裏切らないと決めた。私を信じてくれる人たちを裏切ることだけは絶対にしないと。

それが汚い私のせめてものけじめだ。

どれだけ酷い人間になっても、自分を信じてくれる人達だけは裏切らない。絶対に。

家族と大叔母。祖父が亡くなっているから既に三人。

それ以上なんて、現れないと思っていた。

なのに。

「何で千歳は、そういうことばかり言うのさ……」

「そういうって？」

千歳は小さく首を傾げる。

「何で私のこと、汚い人間だって罵らないの！？　今言っただしょ！？　私は友達だった人間を売ったんだよ！？」

「だってそれ、別に結恵は友達売ってないじゃん」

本当に軽く言う。

その上欠伸までして言った。

「て言うか俺、結恵の元友達なんてどうでもいいし。俺は身内以外にはけっこうどうでもいいからさ。他人なんてどこでくたばろうが知ったことじゃないよ。ましてそれが俺の大事な身内を泣かせるような奴らなら」

「でも……」

「汚い汚いって結恵は言うけどさ。本当に汚い人間は自分を汚いなんて言わないぞ？　まあ、結恵が自分を汚い人間だって思いたいならそれでもいいけど」

そういうわけじゃない。

汚い自分なんて好きなわけではない。

だけど汚くなければ私は生きていけない。

私は弱くて、あまりに弱すぎて、汚く生きる以外の生き方なんて想像もつかない。

言葉にできずに唇を噛みしめる。口を開いたらそのまま声を上げて泣き出してしまつのは目に見えているから、血が出るほど強く噛みしめた。

そんな私の今の顔はきつと物凄く不細工だろう。体を震わせて感情の爆発を抑える私を見て、案の定千歳は笑った。

「我慢しないで泣け？」

必死でかぶりを振るも、今にも涙腺は決壊しそうだ。

千歳は少し考えるようにしてから私の頭を撫でてくれた。

「……今までよく頑張った。だから、少し息を抜け」

そんな言葉。

そして涙腺が破壊される。

私のちつばけな意地もプライドも全て、木端微塵に破壊された。

そのまま私は声を上げて泣いた。千歳にすがりつくようにして、大声で泣いた。

何がそんなに悲しいのかなんて自分でもわからなかった。ただただ涙が溢れるばかりで。ずっとずっと張りつめていたものが緩んだ、そんな気がした。

千歳は小さな子供みたいに泣きわめく私の背と頭をなでてくれながら、ずっとそばにいてくれた。

「結恵はまだ十五歳なんだから、まだまだいっぱい悩んでいっぱい泣いていっぱい笑って、それで年食ってばあさんになった時、あんなこともあったなっと思えるような人生過ごせ」

「……っん」

「化けて出るような後悔のないように、やりたいようにやるといい」「っん」

「結恵の好きに生きる。義将も桂子もお前の両親も……俺も、それで前が少しでも幸せに過ごすことを祈るよ」

「……っん」

その後もずっと泣き続けた。どこからこんなに水分が出るんだろうというくらい泣き続けた。

そうして泣き疲れて夢心地に千歳の声を聞いた気がする。  
次に会うのは正式な場でだ、と。

その時には全部話す、と。

そして、結恵には拒否する権利があるから、と小さく付け足すように言った。

それが夢だったのか現実だったのかはあまりに記憶が曖昧ではつきりとはしないが。

「今日は千客万来だ」

「結恵が来たのか？ …… って、何で寝てるんだ？ と言うかそいつ、泣いてたのか？」

鷹槻は眉根を寄せ、瞼を腫らしてベッドで寝入っている結恵を見下ろした。

「人魚姫や人生論なんかについて話したりしてね」

「人魚姫？」

鷹槻はますます分からないという顔をした。

「まあいい。……こいつから聞いたか？」

「血のことか？」

「ああ。当たり前だからさ、コイツ」

「結恵はどうも義将に似ちゃったらしい」

千歳は小さく笑って結恵の布団をかけ直してやり、鷹槻を連れて部屋を出た。

「そついや半魚伝説ってお前も聞いた？」

「ああ、律が話した時に俺もいたから」

鷹槻は興味なさげに答えてソファに座った。

「何か食うか？」

「この間のチヨコ。まだある？」

「あれ俺の秘蔵なのになあ。お前は本当に遠慮がない」

千歳は不満そうに言いながらも鷹槻の前にチョコ入った箱を置いた。

鷹槻は遠慮なくそのうちの一つを手に取り、包みを剥きながら言った。

「最奥へ意識を向けながらも、真実への目くらましってところだろ。最奥はこの家の絶対。けど真実は知る者だけが知ればいい。そんなところか」

「さつきも和典が面倒なこと言いにくたしな」

「三ノ峰の親父が？」

そう言った鷹槻の声に棘が混じる。

「俺がちゃんとしないとお前らに示しがつかないってさ」

千歳は笑って自分もチョコを口に放り投げた。

「あの親父、苦手なんだよな。三ノ峰の役割をそのまま人間にしたような親父だよな」

「まあそう言ってやるな。あいつはそれが仕事だ」

鷹槻は嫌そうに顔をしかめた。

「この家のそういう面倒くさいところが嫌いだ」

「ははっ」

「俺みたいな奴には特に」

「……なあ鷹槻。お前は義将を恨んでいるか？」

鷹槻は軽く肩を竦めた。

「はっ。恨むなら義将じいさんじゃねえだろ。実の親なら死ぬほど恨んだけどさすがにもういい。どうせもう死んでるしな」

「そうか」

「千歳は？ 千歳はこの家を恨んだことねえの？」

鷹槻の切れ長の瞳がまっすぐに千歳を射る。

「この家のせいで千歳はこの家に捕らわれてる。今までだけでなく、この先も」

「鷹槻」

「何で千歳はこの家の言いなりなんだよ？」



千歳は目を伏せ、噛みしめるように答えた。

「ここは俺の家だから」

「……わっかんねえ」

「それでいいんだよ。お前まで俺みたいになることはない」

言いながら千歳はテーブルの上のチョコの包み紙をまとめてごみ箱に放った。そしてふいに笑う。

それを見た鷹槻は訝しげに眉根を寄せた。

「何だよ？」

「いや。昔、義将にも同じこと言われたなあって」

「へえ？ あの人も同じこと思ったのか」

「はつきり物を言う奴だったから。結恵はあいつに比べればかわいいもんだ」

千歳はソファの背もたれに身を預けて苦笑する。

その様子を見ながら、鷹槻は呟くように言った。

「あの人も当たりだったんだよな」

「ん？ ああ。当たりも当たり。大当たり」

おどけたように千歳は言う。

「よくこの家を出したな。お前はともかく他の連中がよく見逃したよな」

「俺が見逃せつて言ったから、それでおしまい」

無邪気に言ってみせる千歳に鷹槻は額に手を置いた。

「さっすが綾峰本家は違う。鶴の一声か」

「桂子も俺と同意見だったからなあ」

「でも他には？」

「他って？」

千歳は知りながらとぼける。彼はこの話題を好まない。

鷹槻がいつ口にしてもいつだつてのらりくらりとはぐらかしてきた。

そしてその奥にあるであろう真意を読みとることは今なお不可能だ。

今日もやはり無駄だったかと思いつながら鷹槻は口にする。

綾峰一族の、本家の、綾峰千歳の禁忌を。

「鶴でなく、鵠ねえの一声」

鷹槻の言葉に千歳は失笑するように言った。

「くくつ。お前も大概口マンチストだなあ。半魚の次は鵠か」

不自然なほど穏やかに千歳は笑う。

子供に見せる大人の顔で笑う。

そんな千歳に鷹槻は軽く苛立ちながら、半ば自棄になって口を開いた。

「鵠で悪ければ、この家に呪いをかけた奴だ」

その言葉は痛いほどの静寂を呼んだ。

目の前に座る千歳は笑いを納め、あらゆる表情を失くし鷹槻を見た。

「鷹槻」

静かな声なのに畏怖を感じずにはられない。

鷹槻は小さく身震いし、目を伏せた。

「……悪い」

「口は禍わざわいの門だ。俺だからよかったけど、次からは気をつけろよ？」

千歳はにこりと笑って立ち上がった。

こういう時、思う。

千歳の笑みは時として、威嚇でもあるのだと。

「さーて。俺は結恵を部屋に届けてくるよ。朝起きて部屋にいなかったら桂子が心配するだろ」

「……お前が？ 上に行くのかよ？」

鷹槻は心底驚いて目を見開いた。

千歳ですら初めて見るレベルかもしれないほどあからさまに驚いている。

「ま、たまにはない。屋敷内だけだしいいだろ。桂子には連絡入れて行くよ」

「桂子ばあさん、お前が結恵と会ってたこと知ってるのか？」

「さあ？ でもこれで分かるだろうしどっちでもいいだろ。ついでに『正式』に本家の結恵を俺の前に連れて来てくれって催促してくるよ」

「お前、結恵をどうするんだ？」

戸惑うような鷹槻の言葉に千歳は笑顔で答える。

「どうもしないさ。けど結恵が当たりである以上、いつまでも先延ばしにできそうもないし」

「……そうだな」

「大丈夫。悪いようにはしないから安心しろ」

「わかってる」

千歳が自分たちに不利になるような事をしないことくらい。

それくらいは鷹槻だってわかつている。

「じゃあ俺も今日のところは帰る」

「ああ。悪いな、大して構ってやれなくて」

「別に。寝れなくてヒマだったただだし」

「寝れない暇つぶしに人を使うなよ。俺が安眠中だったらどうするんだよ」

不満げに口を尖らせる千歳を背に、鷹槻は隠し扉に手をかけた。

「その時は叩き起こして茶でも淹れさせるよ」

「こーのクソガキが」

「ガキじゃねえし。じゃ」

「気をつけてな」

「だからガキじゃねえって」

鷹槻は振り返ることなく部屋を後にした。

千歳は小さく笑い、結恵の眠る部屋のドアノブに手をかけた。

## 猶予期間

高い天井が視界に入った。

…… ああ、ここは私の部屋だ。

ベッドサイドにある時計を手にとると七時半だった。

欠伸をしてベッドを抜け出し、カーテンを開けると朝日が射し込んできた。

「眩し」

暗がりになっていた目には強烈な光が半分寝ぼけていた頭を覚醒させる。

「あれ……私、いつベッドに入った？」

千歳の部屋へ行ったのに、なぜ私は自分の部屋にいるんだ？

あれは夢？

チェストの上の鏡を覗き込むとそこには瞼が腫れ上がった自分の顔が映る。

そうだ。千歳の部屋で大泣きして疲れて寝てしまったんだ。

やはりあれは夢じゃない。じゃあなぜ私は自分の部屋にいる？

自分で帰ってきた記憶は全くないのに。

さつと冷たいものが背筋を伝い、慌てて部屋を飛び出した。

この時間なら大叔母は起きているはずだ。いつも通りなら既に食堂にいるはず。

「あら、お嬢様。おはようございます」

部屋を飛び出してすぐ、ちょうど三波さんが私を起こしにきてくれたところだった。

「あ、おはようございます。あの、おばあ様はどちらに？」

「奥様でしたら先程食堂に降りていらっしやいましたが」

「ありがとうございますっ」

すぐさま食堂へ降りようとした私の肩を三波さんが笑顔で掴んだ。

「あの……？」

振り返ると三波さんはにっこりと笑った。

「そのようなお姿ではお風邪を召されますよ?」

言われて自分がパジャマ姿だったと気付く。

「ご、ごめんなさい」

「いいえ。それより何か羽織るものを取って参りましょうか?」

「大丈夫です。着替えてから私もすぐに食堂に行きます。……あの、

三波さん」

「はい」

三波さんは笑顔を崩さずに答えた。

「私を着替えさせてくれたのは三波さんですか?」

千歳の部屋へ行った時、確かに私は部屋着だった。パジャマに着替えた覚えはない。だとしたら誰かが着替えさせてくれたのだろっ。

三波さんは曇りない笑顔で答えてくれた。

「はい。勝手ながらあのお姿では寝辛いのではないかと思います。お召しになっていた服は今洗濯しております」

「そう、ですか」

「はい。千歳様が結恵様を送ってくださったんですよ」

私の聞きたかった一番のことを三波さんは躊躇いなく口にした。

思わず顔を上げて詰め寄る。

「三波さん……千歳のこと?」

「もちろん存じております。私も長く本家にお仕えさせて頂いておりますから。さ、お話はこれくらいにして先にお召し変えなさって下さいな。今朝は少し冷えますからね」

三波さんに言われるがまま私は部屋に戻って顔を洗い服を着替えた。それから食堂へと降りると、大叔母がダイニングテーブルで新聞に目を通していた。

「お、お早うございます。おばあ様」

大叔母は私の姿を認めると新聞を置いてにつこりと微笑んだ。

「お早う。結恵さん」

その様子に普段との違いは見られない。

「さあ、朝食にしましょう」

「はい」

促されるがままに大叔母の向かいの椅子に座る。

まだ慣れないが座れば次々とオムレツやサラダが目の前に用意されていき、朝食は始まる。

昨日までと同じ平和な朝食。

壁際に控えた使用人も、大叔母も、誰も千歳のことは口にしない。自分から口にするべきなのか考えているうち、皿の上の料理は綺麗になくなった。そして食後に濃い目の紅茶を出され、片付けに控えていた使用人の多くが食堂を出た時。

「結恵さん」

大叔母が優しく微笑んで私を見た。

「はい」

自然、背筋を伸ばす。

大叔母は私の目を真っ直ぐに見て、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「近く正式に貴女を綾峰家の最奥、千歳のもとへと連れて参ります」それはいつもの大叔母よりも、ずっと無機質で義務的な言葉。

「……はい」

私の知らない大叔母の姿に不安を覚え俯いた私に、聞き慣れた優しい声がかかる。

「こう言ってから最奥へと連れて行くことが、代々の綾峰家の仕来たりなの」

顔を上げると大叔母は困ったように微笑んでいた。

そこに義務的で機械的な様子はどこにもない。目の前にいるのは祖母と呼んでくれと言った、優しい大叔母だ。

「怖がらなくても大丈夫ですよ。私も貴女のおじい様も皆、こうして最奥へ足を踏み入れてきたのですから」

「あの、申し訳ありません。おばあ様。勝手に千歳に会いに行ってしまうて……黙っていて、申し訳ありませんでした」

申し訳なさに深く深く頭を下げる。

『仕来たり』に『正式』な行き方。

そんな面倒な決め事があるほど、千歳のいるあの地下はこの家にとって重要なものだったのだ。それを新参者の私は独断で侵していた。

「結恵さん、顔を上げて頂戴？ 黙ってらしたことはやはり悲しいけれどこうして一言、貴女は謝ってくれた……それでよろしいじゃないませんか」

顔を上げるとやはり大叔母は優しげに笑っていた。

「素直に自分の非を認め、謝罪することができ。それは貴女の誇るべき長所ですね。兄もよくそう言っていました」

「祖父が？」

「ええ。自らの非を認めることはなかなか難しいことです。ですがそれが出来る孫がいる、と兄は生前私に自慢げに話してくれました」

「おじいちゃんが……」

そんなことを言っていたんだ。そう思うと胸が熱くなる。

「それに正直、千歳さんについて黙っていたのは私も英断だったと思いますし」

それは辺りを憚るような小さな声だった。

「え？」

「もうお気づきでしょうが、千歳さんはこの家において特殊な方です」

大叔母は目を伏せ、薄く笑った。

「出来るのなら貴女を千歳さんと会わせたくはありませんでした。最奥へ行き、彼に会って頂くということは、この家の最も暗い部分を見せるということにもなりますから」

「……」

「全ては『正式』に千歳さんのもとへ行く際にお話します」

「……はい」

「もしも全てを聞いて、貴女がこの家に留まることが嫌だと思ったら遠慮なく仰いなさい。住居などは手を尽くさせて頂きます」

「え？ そんなことあるわけ……」

反射的に答えると、大叔母は悲しげに息を吐いた。

「全てを知ったなら、考えが変わることがないとは言えませんが」  
最奥へは七日後に。

そう言われてからはお互い千歳のこと、最奥のことについては触れなかった。

それから私は何となく、千歳のもとへは行けずにいた。  
夢だと思った千歳の言葉を思い出す。

全ては正式な場で話す。

千歳もそう言っていた。

『正式』というのがこの家の仕来たりに則った形なら七日後、大叔母と共に彼を訪ねる時がそうなのだろう。

では『全て』は？

血のこと。それから千歳自身のことだろう。

奇妙に騒ぐ血の意味と、この家において特殊な千歳。それから。

生き神……否、千歳曰くの化け物について。

全て聞いた時、私はどんな選択をするんだろう。大叔母の言うとおりこの家を出たいと思うのだろうか。でも少しくらいのことでの家を離れようなんて思えない。最初にこの家へ来た動機はつまらないちっぽけなものだったけれど今はそれだけじゃない。

千歳といたい。

私を撫でてくれる優しい手。まっすぐな言葉。不思議で優しい空気。

もっとたくさん話したい。もっともつと一緒にいたい。

この感情を何て呼ぶのか何となくわかる。わかるけれどそれが正しいのかは分からない。そんなもの自分とは無縁だと思っていたから。

恋だなんて甘くかわいらしい感情は、私には最も縁遠いものだと思っていたから。



ただ優しくされて勘違いされているだけかもしれない。私の汚い部分を受け入れてくれたからそう思うだけなのかもしれない。

きつく瞼を閉じて浮かぶのは、整った顔で子供みたいに笑う千歳。これが恋かなんてわからない。この家のことだって私はまだ何も知らない。千歳があんな場所にいる理由だって知らない。

だけど。

「……会いたい」

それだけは確か。

会ってまた一緒にお茶をしたい。千歳のあの不思議なペースに乗せられるおしゃべりをしたい。出来るなら、また頭を撫でてくれたらいい。

今すぐ会いに行きたいと思う反面、何となく『正式』な時まで会いに行つてはいけない気がした。多分、会いに行つても千歳も会つてくれない。そんな気がする。

「七日……」

長い。

一週間はこんなにも長かっただろうか。

「早く七日経てばいいのに」

この家の闇を知つても何を知つても、また千歳に会いたい。そうだ。その時は昨日の夜のお礼も言わなければいけない。あんなに泣き散らしたのに根気よくそばについていてくれた、そのお礼を。

七日。

長い長い七日。

家庭教師に勉強を教わり、大叔母とお茶をして、時折屋敷や敷地内を散策したりして過ごした。少しでも忙しくて千歳やあの地下の事を思い出さないようにしていた。

それでもふとした瞬間に千歳の空気が懐かしくなったり、敷地内を歩いていてもこの屋敷内の奥深くに隠された何かについて考えて

しまう。

そんな折、午前中の授業が全て終わってお茶を飲んで一息ついていた時のこと。

「お嬢様。二ノ峰家の鷹久様、鷹槻様。四ノ峰家の標葉様、四葉様。四ノ峰分家の律様、令様。五ノ峰家の薫子様がお見えですが、お通ししてもよろしいでしょうか？」

「鷹槻達？ 私は構いませんけど」

そしてメイドさんに案内されるままにサロンへと足を向けた。サロンへ足を踏み入れると、先日の半魚伝説のはぐれ者メンバーに更に知らない男の人がお菓子片手にくつろいでいた。

「それでは皆様。ごゆっくり」

扉が閉じられ、メイドさんが下がっていくと律が大仰に息を吐いた。

「あーかたつくるしいな、おい」

「本家は肩凝るなあ」

令も肩をぐるぐると回しながら言う。

「やほー結恵っち」

四葉がにこにこ椅子から飛び降りて寄ってきた。

「遊びに来たよ！」

「お邪魔しているわ」

薫子が優雅に小首を傾げて微笑む。

「今日は学校が創立記念日でさ、急にどうかなーとは思ってたんだけど遊びに来ちゃったよ」

そしてすっかり説明役が板についている鷹久が教えてくれる。鷹槻もその隣でもくもくと出されたスコーンを半分に割りながらこちらを見た。

「今日は標葉はしを連れてきたいって四葉が言うから連れてきた」

「標齒？」

聞いた気がするけど誰だったか？

「お兄、結恵っちに自己紹介」

四葉に引つ張られてきたのは典型的な中肉中背に眼鏡をかけた、いかにも人の好きそうな好青年、といった雰囲気の男性だった。ここに在る皆と比べると一番の年長者、多分二十代前半くらいだろう。鷹久や令と比べると地味な雰囲気はあるけれど穏やかな表情は安心感を与える。

「初めまして。四ノ峰家戸主長男の標葉と申します。先日はうちの四葉達がお世話になりました」

標葉さんは優しいな笑みを湛え、右手を差し出してきた。

「こちらこそ初めまして。綾峰結恵です。えっと四葉のお兄さん、ですよね？」

「はい」

にこにこ答えてくる標葉さんはこの面子の中では信じ難いほどに真つ正直そうだ。

するとぴよこんと四葉が飛び出してきて楽しげに言った。

「でもってー七歳年下の薫子ちゃんと付き合ってるんだよー。このロリコン」

四葉の明るい声に、標葉さんの顔が真つ赤に染まる。更に薫子がむせ込む。

「ロ、ロリコンはないだろう、四葉」

標葉さんは慌てふためきながら妹に言い聞かせるように言った。

薫子もそれに便乗する。

「そうよ！ 標葉さんはロリコンなんかじゃないわよ！ だいたい七歳くらい之差なんて」

「年なんて関係ない。そう言ってお人好しな標葉を言いくるめたんだよね？」

意地悪く笑うのはやはり律。薫子は耳まで真つ赤にして一触即発の雰囲気。これはまたあの演武もどきが見れるかと密に期待していたものの、今日はなぜか薫子は黙って顔を歪める程度に留めている。したりとばかりに律は更にわざとらしく言う。

「あーあー。うちの標葉が薫子の毒牙にかかった時はどうしようか

と令と額をつき合わせて考えたもんだね」

「毒牙ですって……？」

薫子の声の不穏なものを帯びて行く。

「こら。律くん、そんな言い方は……」

標葉さんが少し強めの口調で律を咎めるが、律はふいつと顔を背けただけだ。

「標葉さんが話しているのだから無視するんじゃないわっ」

ついに怒髪天を突いた薫子の右ストレートが律の顔面めがけて放たれるが、律は余裕でそれをかわす。

「そんな怒り狂って当たるかよ」

「何ですって！？」

「薫子さん、暴力は駄目だよ」

標葉さんの落ち着いた声に、薫子は更に振り上げた手を降ろした。

この人、あの薫子を黙らせた。つい感動してしまう。

「律くんも。女性に失礼なことを言っちゃ駄目だよ」

「……へーい」

あの律が、素直をとはい難いけれど従っている。実はこの人、地味に見えて最強か。

標葉さんは困ったような笑顔で私を見た。

「先日もこの調子だったって聞いたんですけれど皆、根はいい子達なんで仲良くしてあげて下さい」

「いえ、こちらこそ！」

慌てて言つと標葉さんは嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとうございます」

本当にいい人だ。

薫子が好きになるのはどんな人間なのかと思つたが、いい人だ。格別変わったところがない、普通という美德を持ったいい人だ。良くも悪くもクセのある綾峰の中では貴重なタイプの気がする。

そんなことを考えていると、クセのある妹が標葉さんを見上げた。「ねえねえお兄、結恵っちは敬語はやなんだよ？ 言つたじゃない」

「え、いやでも……」

「いいじゃないですか、標葉さん。俺達にもタメ口なんだから結恵ちゃんもタメ口で。ねえ？ 結恵ちゃん」

鷹久に聞かれ、大きく頷く。

「あまり敬語を使われるのとか慣れてなくて……差し支えなければ私も他の皆と同じように扱ってくださると嬉しいです」

「でも、いいのかな？」

恐縮しきった様子で標葉さんが尋ねてくる。

「はい。私は所詮しがない居候ですから、そんなに気を遣わないで下さい」

標葉さんは困ったように頬をかいたが、すぐに穏やかに笑った。

「それじゃあ妹達共々、よろしくね。結恵さん」

「はい。どうぞよろしく願います」

「僕のほうも敬語はいいけれど……」

「いえ。慣れないので敬語使わせて下さい」

そう言い張ると標葉さんは渋々とだが了承してくれた。

## 異形伝承 2

和んだところで四葉がにこにこ話しかけてきた。

「あのね、結恵っち。こないだは律が気色悪い怪談したでしょ？」

「怪談じゃなくて伝説だっつーの」

「それでね。お兄がもつとちゃんとしたお話知ってるって言うから今日はそっちを話してもらいに來たの」

律の抗議を綺麗に無視して四葉はにっこりと笑う。

「ちゃんとした話？」

標葉さんを見ると、標葉さんは少し困ったように言った。

「ちゃんとしたと言うか、あの半魚伝説の元になった言い伝えがあるんだ。僕は子供の頃にたまたま祖母に聞いたことがあって」

「元になった話って、やつぱりあるんですか？」

「うん。あの半魚伝説はそれをかなり脚色したものだと思うよ」

「標葉、今までそんな話してくれなかったじゃんよ」

律が不満そうに声を上げながら椅子に座り直す。

「いや、何だか四葉も律くんも令くんもえらく盛り上がっていたから水を差しちゃ悪いかと思うって」

「標葉は変なところで几帳面だよなあ」

まだ不機嫌な律の隣で令は楽しげに笑う。

ずり下がった眼鏡を直しながら標葉さんは眉を下げて笑った。

「この間の昼食会の時にその半魚伝説で皆随分気分が悪くなっていたって四葉から聞いて、だからもういいだろうと思ってその話は嘘だって言ったんだ」

「結恵っちと薫子ちゃん、半泣きだったって言ったらあたしと律が怒られたんだよー」

「そう言えば半泣きしたっけ」

いくら気色悪い話だからといって、十五にもなって半泣きになったと人に言われると恥ずかしいものがある。薫子を見てみると、彼

女も顔を赤くして椅子の上で小さくなっていた。

「で、その話の元を知っているって言ったら四葉が皆の前で話してくれて言って、今日押しかけちゃったんだ」

「そうだったんですか」

「せっかくの本家の半魚伝説の真実の言い伝えだし、皆で聞いたほうが楽しいと思って。実際はそんなにグロくないんだって」

「それは俺も聞いてみたいな。でもガキの俺達が聞いちゃっていいんすか？」

鷹久の言葉に、確かに、と鷹槻と薫子から同意の声が上がる。

けど標葉さんは柔らかに笑って言った。

「それは構わないと思うよ。僕も聞いたのは小学生の頃だったから」

「へえ。じゃあ標葉さん、早速話して下さいよ。ほら、結恵ちゃんも座って座って」

鷹久に促され、私も上座下座などは関係ないらしい空いた椅子に座る。隣は丁度鷹槻だった。

「あ、おはよう」

「……どうも」

目線だけをこちらに寄こして、鷹槻はそれだけ答えまたそつぽを向いてしまった。

本当に愛想のない奴だ。別に悪い奴ではないし、少し慣れたてきたが。

「お兄。ほら皆揃ったから話して」

「えーと……せっかく皆で集まったのに、本当にそんな話でいいのかな？」

標葉さんがぐるりとテーブルに集まった顔ぶれを見渡すとそれぞれが頷いた。

「僕が亡くなった曾祖母から聞いた言い伝えはそんなに詳しくはないんだけど。とりあえず始まりは同じ。この家の先祖が行方不明になったところから始まる。当時は綾峰という姓ではなく、峯<sup>みね</sup>という姓で商いをしていたそうだよ。その時代の当主の次男、草次郎<sup>そうじろう</sup>と

いう子供がある日突然姿を消したんだそうだ」

じきに七つを数えようかという頃、隠れ鬼をしたまま草次郎は姿を消した。それを人は山の天狗によって攫われたのだと噂したと言う。

「隠れ鬼っていうのはかくれんぼのことだね。昔は夕暮れ時にかくれんぼをすると神隠しに遭うって言われていたそうだよ。それから神隠しって言うのは別名天狗隠しとも言って、天狗に攫われてしまったという考え方もあったんだ」

そう言って標葉さんは更に話を続けた。

七日七晩山狩りをして草次郎は見つからず、誰もが草次郎はもう帰って来ない、そう思った。

だが八日目の朝、草次郎は村へ帰ってきた。そして村が戦によって焼かれる、と予言した。

「その後は半魚伝説と同じで草次郎という人の予言は当たり、その後もいくつもの予言でこの家を助けたそうだよ」

「え？ まさかそれで終わり？」

令がまさか、という顔で標葉さんを見ると、標葉さんは首を縦に振った。

「一応僕が曾祖母に確かに聞いた話はここまで」

「本当に詳しくないな」。神隠しにあった先祖の名前が分かっただけだよ」

令はつまらなそうにテーブルに突っ伏した。

「神隠しなんて、本当にあったのか？ それに予言つてのも。ガキに先祖を敬わせるためのデマじゃねえの？」

律が訝しげに尋ねると標葉さんは苦笑した。

「神隠し自体は昭和初期くらいまで本当にあったんだよ。ただその原因はヒステリーや精神疾患、人為的な誘拐、事故なんかが主らしいけれど」

「なーんだ。ロマンないー」

四葉も令の真似をしてテーブルに突っ伏する。



「神隠しはわかった。けど予言は？ やっぱデマか？」

「うーん……ここから先は僕の推測なんだけれど」

ここから先、という言葉にすっかりやる気をなくしたかに見えた四葉と令が起き上がった。

「何？ この先って何？ お兄、何に気づいちゃったの？」

「標葉の推測って？」

四葉と令に詰め寄られて標葉さんは後ずさりした。

「そ、そんな期待した顔されると……本当にこの先はあくまで根拠のない推測だから」

「いいよーそれで！ だから教えてよ！」

「そうそう！ 標葉、かわいい妹と従兄弟がこんなに頼んでるんだからさ」

標葉さんという人は見た目に反せず押しに弱いらしい。

本当に根拠はないけど、と前置きをして話し始めた。

「天狗小僧を聞いたことがある？」

聞き馴染みのない言葉に目を見張ると、標葉さん以外の全員が似たような反応をしていた。

それで理解したらしく標葉さんは続けた。

「文政年間……1800年代に天狗に攫われて、異界を見たり不思議な術を覚えて数年後に帰ってきたっていう子供のことだよ。天狗てんぐ小僧こそう・寅吉とみきちっていう」

「天狗小僧、寅吉……」

いかにも昔の響きを持った名前だ。

「彼は元から予知能力を持っていたとも言われるけれど、神隠しから帰ってくるとますます不思議な術を覚えていたそうなんだ。もともと天狗の中には人に剣術を教えたり、超能力を与えたりすることが好きな大天狗という話もあるから、もしかするとうちのご先祖様も天狗に不思議な力を授かって帰ってきたって一族は考えたんじゃないかなと思って」

「……帳尻合わせには良さそうだな」

「当時の国学者の平田篤胤ひらたあつたねという人の『仙境異聞』という著書に、彼の異界で見聞きしたことが書かれているらしいよ。読んだことはないから詳しい事は知らないんだけど」

「つまりうちのご先祖は天狗に攫われて予知能力みたいなものをもらって、それで帰ってきたんじゃないかと」

頬杖をついて、鷹久は標葉さんを見た。

「あくまで推測だけどね。天狗から予知能力をもらいました、なんてさすがに大真面目には考えられないし。でも昔の人ならそういう意識があってもおかしくないと思って」

「本気でそんなこと言ったらドン引きだよな」

「やっぱりウソだ。大ウソ」

令と律が互いに頷き合う。

「あの」

私が小さく声を上げると、部屋中の視線が集まった。

「あの……その神隠しに遭ったご先祖はその後どうしたんですか？」

小さな疑問に皆がそう言えば、という顔をして標葉さんを見た。

「えーと……そこまでは聞いてな」

「半魚になったんじゃないの？」

言い淀む標葉さんの代わりに律が言った。

「いやさ、よく考えたら神隠しに遭って魚になるって辻褄合わかね？」

令も腕を組んで首を九十度近く傾げながら言う。

「そもそもどこから半魚なんて持ってきたんだよ。誰だよ、そういう無責任なこと言ったの。律令。お前らは知らないのか？」

「だからひとまとめて呼ぶな。誰だったか……確か新年会か何かの時に大人達が言ってたんだよな」

「私も確かそう。お酒が入って随分楽しそうに話されたわ」

「何だよ、それって単なる酒の席でのノリじゃねえの？」

大げさに溜め息を吐いて、令がこの話題に終止符を打った。そう思った時、標葉さんが至極冷静な口調で言った。

「半魚の話は僕も四葉から聞いたんだけど、それってもしかして人魚の話から来てるんじゃないかな？」

「人魚お？」

標葉さんの言葉に揃って声を上げた。

「人魚姫？」

「アンデルセンの？」

「いやジユゴンだろ？」

四葉、令、律が順に言って行く。

ああ、この間の私と全く同じことを言っている。案の定、標葉さんも千歳のように少し困った様子だ。

「えーと。アンデルセンの人魚姫じゃなくて、日本に伝わる人魚のほうなんだけど……」

標葉さんも千歳と同じことを言っている？

「それって首から下が魚で、化け物的外見でどう見ても人魚姫のイメージはなくて、外見はいかつくても一目見ると災難を逃れたり長生きしたりしちゃうっていう奴ですか？」

一息で千歳に聞かされた話を覚えている限り口にする、と、標葉さんは驚いたように目を見張った。

「よく知ってたね。あんまり日本の人魚って有名じゃないのに」

「あ、えっと。偶然妖怪図鑑っぽいものを見たことがあります……」

……

千歳から聞いた、とも言えず適当に誤魔化す。

「妖怪図鑑って……お前いくつ？」

律が呆れ顔で聞いてくる。当然と言えば当然の疑問だ。

「いいでしょ、ほっといて！」

「えっと。とにかく結恵さんが今言ったような日本の人魚が関係してるんじゃないかって僕は思う。半魚伝説ではご先祖様はまだ生きていて、生き神としてこの家に祀られてるんだよね？」

「うん」

四葉が力いっぱい頷く。

「その内容の真偽は正直嘘っぱいなと思うんだけど、それならその半魚は人魚の話をかけ合わせたんじゃないかな」

「人魚って他にも何かあるんですか？」

鷹久が不思議そうな顔をして標葉さんを見た。

標葉さんは、気分のいい話ではないと思うけどと断ってから続けた。

「人魚の肉は食べると不老長寿を得られるって言うんだよ」

「不老長寿……？ その化け物っぽい人魚とやらの肉が？ とんでもないゲテモノ食いだな」

「うん、まあ、勇氣あるなとは僕も思う。八百比丘尼やぶくひにという女性がいてね、その人は若い頃に人魚の肉を食べてしまって、以来ずっと若くて美しい姿のまま八百年経っても死ぬ事はなかったそうだよ」

「へえ。それでそのビクニさんはどうしたんだ？」

「確かどこかの洞窟に住むようになったんじゃないかな。そしてそのまま亡くなったって聞いたと思うけど。話によっては八百比丘尼と言う人は不老不死になったという話もあるそうだよ」

「肉を食べて不老長寿、あるいは不死。首から下が魚。……確かに半魚伝説に似てるっちゃ似てるな」

鷹久がぼつりと言い、甘い香りのする紅茶をひと口飲んだ。

「つまり結局伝説は伝説ってことか」

「だな」

律と令は顔を見合せて頷き合った。

「それってー」

四葉が無邪気に口を開いた。

「暗にその草次郎って人が人魚の肉を食べて不老不死になって、今もこの敷地内で生きてるってことじゃないのかな？」

「え？」

その場の全員が四葉を見た。

四葉はにこにこその視線を受け止め、高すぎる椅子で床につかない足を揺らした。

「半魚伝説ではその神隠しに遭った人は半魚になって今も生きてるでしょ？ それも子孫の肉を食べて。それって、半魚になったんじゃないの？」

「いや、だって不老長寿だ不死だなんてありえないだろ？ そもそもそんな奴が実際にいたとしたら、綾峰の医療・製薬業はもつと劇的に進歩したろうし」

鷹久が頭をかきながら戸惑うように言うが、四葉は笑顔を崩さずに言った。

「進歩のためには解剖とか投薬とか、色々試さなきゃいけないよね？ そんなことして万が一死んじゃったら、せっかく予言なんてありがたいものをしてくれる人がいなくなっちゃうんだよ？ 医療関係の事業の進歩と予知能力による綾峰家全体の利益を秤にかけたのなら、予知を取ると思うな」

子供のような無邪気な笑顔。

だけどその断定的な物言いは子供のものとは到底思えない。外見にそぐわない、この場の誰をも圧倒する強さがある。

「……するってーと」

最初に口を開いたのは令だった。

「この家にいる生き神様とやらは、半魚じゃなくて人間の姿をしてるってことか」

「だと思っよ。もし本当ならの話だけどね。でも半魚の話よりは現実味があると思うな」

「そ、そうか？」

一番常識的に物を考えるらしい鷹久は疑問を隠すことなく顔に出している。確かに常識的に考えれば不老不死も予知能力も荒唐無稽もいいところだ。まして五百年前の先祖が人魚の肉を食べて今も生きてるだなど。

……それに、まだ噛み合わない部分がある。  
いるのは、人の血をすする化け物だけ。

無機質な声が、そう教えてくれた。

人の姿をした、忌むべき化け物がいるだけ。

一切の感情を消した声で、表情で。

千歳はそう言った。思い出すと背筋が凍るほど、冷たく別人のよう。  
うに。

……人の姿をした、化け物。

それは草次郎という人のこと？

まさか本当に今も？

でも人の血と言ってた。人魚の肉でなく人の血と。私やおじいちゃん  
は当たり前だと。

当たりの意味はわからないけれど、私とおじいちゃんが人魚だなんて  
気色悪い考えは思いつかない。

少なくとも私は人魚じゃないことは確かだ。体に鱗が生えていない  
のはもちろんだが、水泳の授業では可もなく不可もなく。特別泳  
ぎが上手ではなく、泳ぐことも好きというほどではない。そういう  
ことで人魚かどうかを量れるのかは知らないが。

千歳が人魚の話をしてくれて、その人魚と不老長寿に関する話と  
繋がるからと言って、本当に人魚が存在するなんて考えにくいが。  
それにもう一つ。気になる事はある。

予知能力。

予め知る力。

あの時、なぜ彼は気づいたのか……。

「結恵？」

顔を上げると薫子心配そうな顔でこちらを見ていた。

「大丈夫？ 急に黙ってしまうから」

「あ、ああ。大丈夫！ 本当にあんな気色悪い人魚なんていたら嫌  
だなあって考えてただけ！」

心配してくれる薫子には申し訳ないが、まだ全部話せない。それ  
が居候としてでも、この家に生きて行く上でのルールだろうから。

「確かに嫌よね。そんな妖怪じみた生き物が本当にいて、それがう

「ちの先祖だなんて言うのなら」

「んー確かに」

鷹久も同意する。

「よし！ 話を変えよう。そうだと結恵ちゃん、それぞれの家の役割とかもう知ってる？」

「役割？ ううん。それぞれの家って、二ノ峰とかのこと？」

「そうそう。この敷地内の家にはそれぞれ役割があるんだ」

そう言って鷹久は薫子からメモを借りて何かを書き始めた。

## 形作るもの

鷹久はまずメモ用紙の一番上に「本家」と書いた。そしてその下に縦書きで、二ノ峰家、三ノ峰家、四ノ峰家、五ノ峰家、と左から右へと書いていった。

「これが綾峰の主な形なんだ。本家は多分結恵ちゃんもこの間の昼食会の時なんかで気付いたと思うけど、綾峰全体の中でも別格の存在。その下にこの敷地内の分家の俺達がいる」

「もつともその分家の私達も同等ではないけれど」

そう言ったのは薫子。その表情は暗い。四ノ峰の標葉さんと五ノ峰の薫子では立場が違う、以前そんな風に言っていたことと関係するのか。標葉さんも複雑な表情で薫子を見て俯いた。

「ここでは数字の小さい家ほど強い地位を持つんだ」

鷹久は一度目を伏せてから言った。

「序列がある。それは多分、各家の役割が関係するんだと思う」

「役割？」

「うん。例えばうち、二ノ峰は本家直轄として一族を取り仕切ることになっている。チトセグループの重要事業は大概うちがトップに立つ。それから敷地内外に住む一族を取りまとめたり」

「基本、二ノ峰は本家の代行みたいな感じだな。本家の次の権力者は二ノ峰って意識がここにはある」

律が窓の外を見ながらさほど興味もなさそうに言う。

「三ノ峰は敷地内の法の番人とも言えるか。あの家のことは俺もよく知らねえけど確かそんな話を聞いたことがある。四ノ峰、うちや四葉の家は綾峰とよそのパイプ役。企業関連だったり友好関係にある家とかと敷地内を繋ぐ。そして五ノ峰は敷地内の警備員みたいなもんだ。不審者が敷地に入り込んだり、客人が妙な動きをしないように見張ったりとか。だいたいこんな感じだな」

「何かわかったようなわからないような」



鷹槻と千歳が以前にこの家は国家だと言った。確かにそれらしくこの家を守るいくつもの役割があるということは分かったが、こう一度に言われるとさっぱりだ。またバカにされるかと構えていると予想外に律は真面目な顔をして言った。

「言ってる俺もよくわかんねえもん。この家。つーか完全にこの家理解してる奴なんてこの中にいねえよ」

「知ろうと思つて手を突っ込んで底なしなんだよ、ここは」

鷹槻が小さく呟いた。

この家の事情にはこの中の誰より通じていそうな鷹槻でもそうなのか。

重苦しくなった空気を払うように鷹久が努めて軽い調子で言った。

「綾峰は秘密主義的などころがあつてさ。この敷地内に住む家と敷地外に住む家との差は大きいし」

「敷地外にもやっぱいるの？ 親戚」

「いるね。ものすごく」

鷹久は先に書いた本家と二ノ峰から五ノ峰をまとめて丸で囲った。「この丸が今俺達のいる敷地内。丸の外にも一応親族はいるよ。たとえばこの敷地内の家から嫁に行ったりとか」

「あ、なるほど」

婚姻関係によつて親戚が増えて行くと考えたら、これだけ大きな家ならそれこそ無限に増えて行きそうなものだ。昔から政略結婚は地位と財力を持つ者の常套手段だろう。

「それはとりあえず置いておいて、とにかくこの敷地内は一種独特なんだよな」

重苦しい溜め息を吐いて鷹久は言う。

「ここにいる俺達が知ってる事なんて、大人達の一握りにもいかないだろうし」

「……そうなの？」

「そーなんだよ」

律が忌々しげに顔を歪める。

「ガキは蚊帳の外。それがこの家。今でこそ俺らもこうしてつるんでられるけど、学生つー身分がなくなつて綾峰の齒車のひとつになつたらそうも言つてられなくなるだろうしな」

「家の序列に関係なく過ごせるのもガキの特権」

令が続けた。

「綾峰の内部事情……企業とかじゃなくて、家自体のほうね、それに関しては俺達は何も知らないんだよ」

「各家の役割は知ってるけど、その役割の中心にあるものが分からないって言えばいいのかな？」

四葉が今まで見たこともない大人びた表情をして言った。

「綾峰家は統制されている。それは本家によつて。けど何故、本家がこれほど絶対的な力を持つのかまではあたし達には分からない。今時ありえないくらい封建的だと思わない？　うちって」

「思う。もしかして、だから生き神の話とか考えたりするの？」

「うん。本家に予言する生き神でも何でもいるんならこの家の本家絶対主義つても頷けるかなーって。ねえ？」

律と令も四葉の言葉に頷き合う。そして令は真面目な表情で私を見た。

「結恵ちゃん、本家つてチトセグループ内でのという役職か知ってる？」

「えっと、おばあ様のご主人が前のチトセグループの会長だよな？」

「そうそう。桂子ばあちゃんの死んだ旦那、元会長はずーっと形だけ社長とか会長とかだけ。グループ全体に関わるようなデカイ仕事とかつてしたことないんだよ。言い方は悪いけど、どんな時でも絶対安全な場所にいた感じで」

「形だけ？」

令は頷いて続けた。

「代々本家はそうらしいんだ。代表取締役とか会長とか務めるんだけどそれはあくまで形だけで、いざという時責任を取るようなのは他の分家筋なんだよ。綾峰本家に生まれればたとえどんな災禍に見

舞われようと、生まれてから死ぬまで頂点に居続けることが約束されるようなもんなんだよ」

「グループ内でも一族の中でも、本家の権威は絶対。……綾峰にとって絶対的な『何か』が本家にはあるから？」

口から衝いて出た言葉に四葉が強く頷いた。

「少なくともあたしはそう思ってる」

「綾峰、特にこの敷地内の人間ってのはプライドの塊みたいな奴らがゴロゴロいる。選民思想とエリート意識がバカみたく強え自分大好きナルシストだらけだ」

鼻で笑いながら律は言う。

「そういう奴らは他人を見下す傾向にある。そんな奴らが世襲制の形だけトップになんて大人しく従うかよ？ 特に五年前に死んだ先代当主、桂子ばあさんの旦那なんて事業家としても人間としてもカスの部類に入るぜ。そんな奴に従うようなかわいらしいタマはいやしねえ」

「律、あなた口を慎みなさい！」

さすがに薫子が律の毒舌を止めにかかるが、律はしらけた表情で彼女を見上げただけで平然として続けた。

「何だかんだ言ったってお前だって同じこと思ってたんだろ？ 先代はただの無能。そのくせ女癖は最悪、趣味は度を外れた浪費。絵にかいたような駄目な逆玉の輿ってな」

「おばあ様のご主人が？」

その存在自体は知っていたが人となりまでは知らなかった。

「本来なら本家で言うようなことじゃねえけどな」

ぼそりと律は私から視線を逸らして言った。

「でも悪いがあいつは最低だぜ。歴代最低の当主だって評判だ。もともと三ノ峰からの婿養子だったんだけどな。桂子ばあさんと結婚して本家の人間になり、絶対安泰な地位に胡坐をかいていた野郎だよ。ろくでもねえよ」

吐き捨てるような言葉にその場にいた皆が目を伏せ押し黙る。そ

の空気から律の言葉が全て事実なのだと知った。

「……そんなわけで先代はともじやないが、人が下につくような器じゃなかった」

場の空気を経ち切るように、律は強い口調で言った。

「けどそんな男が自分たちのトップだってことに表立って不満を漏らす奴はいなかった。不思議な話だとは思わねえか？」

「……確か、に」

義理の大叔父にあたるその人が実際にどんな人だったかは知らないけれど、鷹久や標葉さんすら律の雑言を止めないような人。自分の目で見ただけじゃないが、少なくともこの家の人からあまり良くは思われていなかったことだけはわかる。

思案し俯く私に律は言った。

「けど本家には最奥がある」

最奥という言葉に思わず顔を上げた。そこにある律の表情は厳しい。

「『最奥』って大人達はそう呼んでいる。それがどういう意味なのか俺達は知らねえ。けどそれが本家にある『何か』で、何より綾峰全体にとって最も重要なものだってことだけはわかる。それがあるから本家は未だに一族内で絶対的権威を持ち、この古臭え封建制度がまかり通ってるんだってな」

「律。何も今結恵ちゃんにそんな話をしなくてもいいだろう？」

鷹久が少し語気を強めて咎めるが、律は鷹久を睨んだ。

「今だからこそ言っただろ？ こいつとは一応協力関係にあるんだからな。何も言わずにこそこそするなんてフェアじゃねえだろうが」

口の悪さはともかく、律の意外に公平な性格に軽く驚く。

「おい、結恵！」

「なっ、何！？」

初めて律に名前を呼ばれた。驚きでつい声が上ずってしまふ。それに気付いた律は苛々とした様子で眉を吊り上げたが、一度息を吐いて言った。

「胡散臭え大人に取り込まれるんじゃないぞ」

「え？」

「本家の人間はある程度分別のつく年頃になったら最奥へ連れて行かれる。そこで何を見て知ることになるかは知らねえが、最奥にはこの家最大の秘密があることだけは確かだ。それがこの家を呪ってる」

「呪ってるって……」

「一体何を言い出すんだ。そんな非現実的な。けれど律は尚も言う。」

「この家は呪われてる。俺達の知らない何かに。その呪いによってこの家は永遠に栄え続ける。そう、この家の立場の強い人間達が話しているのを昔聞いたことがある」

「呪われてるのに栄える？ それって矛盾してない？」

「してるな」

そう言ったのは今まで黙っていた鷹槻だった。相変わらず淡々と、抑揚少なに。

「けどそれが事実。この家は呪われたことによって栄え続ける。この先もずっと。……その分の犠牲を支払い続けて」

「犠牲……」

それが呪いという言葉にリアリティを持たせる。

「人柱って言い換えてもいい」

鷹槻はその鋭い目を私に向けた。

「本家の選ばれた人間だけが綾峰のための人柱になる。呪いが消えたらこの家の永遠は保障されなくなる。だから本来は、呪いにすぎるところとするこの家の人間達こそが『呪い』なんだろうが」

そう言っ鷹槻はまた私から視線を外した。

その横顔は怖いほどに綺麗で、今にも消えてしまふんじゃないかと思う程に儚げだった。

「た……」

「あーもう暗いっ！ 話題変更ー！ 何で俺らさっきからこんな暗

くなる話ばかりしてんだあ？」

パンパンと手を叩いて立ち上がった令の声に、私の声はかき消された。

けどあのまま鷹槻の名前を呼んだとして私は彼に何を言うつもりだったのだろう。

何も知らない私は何も出来ない。下手なことを言つて、鷹槻を傷つけるような真似はしたくない。善意のはずの言葉は時として逆に人を傷つける。何も知らないのに知つたような口を聞いて傷口をえぐることがある。

時には何も聞かず、触れないことがいいこともある。少なくとも鷹槻に関しては生半可な気持ちで近づいてはいけないような、そんな雰囲気がある。

思えば鷹槻も謎が多い。

この中で一番綾峰という家のことに詳しいだろう鷹槻。

だけど皆がその事を知っている様子はない。千歳や千歳の部屋への隠し通路について、誰も触れない血の『当たり』についても彼は知っている。

この中で鷹槻以外に千歳の存在を知っている人はいないようだし千歳自身、鷹槻以外には会つたことがないというようなことを言つていた。

鷹槻はなぜこんなにもこの家の事情に詳しいんだろう。

好奇心で調べるタイプには見えないし、もし仮に好奇心で調べて知つたことならここに在る皆にも話すと思う。

二ノ峰という本家に次ぐ地位の家の子供だから？

でもそれならば、鷹久のほうがもっと詳しいはずだ。

鷹久は鷹槻の兄だ。それも長男と言つていたのだから彼が二ノ峰家の跡取りだろうし、二ノ峰家という家に生まれたことで鷹槻が人より多くを知っているのなら鷹久もそうであるはずだし、あるいは鷹槻以上に知っているはずだろう。

盛り上げようとしてくれる令の話もあまり頭に入らず、そん

なことを考えていた。

## 鷹槻

「せっかく遊びに来たのに辛気臭い話ばつかの上にとどめが令の滑ってばつかの話でごめんね」

本家屋敷の玄關ホール。

見送りに出た私に四葉はしゅんと頂垂れながらも、その『滑ってばつかの話』をしていた令を見た。

「す、滑ったって言うなよ！」

「滑ってたる。痛くて寒くて滑りまくり。聞いてて俺は涙が出そうになったぜ」

更に律が追い打ちをかける。

「律を泣かせそうになるなんて令も成長したなー。ガキの頃はいつも律に泣かされてたのに」

呑気に鷹久が笑う。

「そう言えばそうだったね。律くん到新技を試されそうだからくまってくれてよく僕のところにも来てたっけ」

「標葉まで人の恥ずかしい過去を暴くなよっ」

「大丈夫よ。あなたの人生は九割が恥で構成されているから。その枯れたサヤインゲンで外を出歩ける時点で」

ブリザードが吹き荒れそうなくらい冷たく薫子が言い放ち、一瞬令が固まった。

枯れたサヤインゲンという単語と令の髪を対比させ、思わず吹き出してしまう。

すると令は乾いた笑顔を向けてきた。

「結恵ちゃん……」

「ごっ、ごめん。つい……」

「笑え笑え。それだけ変な頭だってことだ。お前もいつまでその枯れサヤの頭でいる気だ？ 兄の俺が恥ずかしいから早く何とかしろよ」



「枯れサヤじゃねえっつの」

「そうだよ。枯れたサヤインゲンだってこんな変な色合いじゃなかったもん！ 皆して酷いこと言わないで！」

「四葉……お前だよ、一番酷えのは」

「だって、あたしが育てたサヤインゲンを皆でこんな変なのと一緒にするなんて酷すぎる！ あたしだって一生懸命育てたけど枯れちゃっただけなのにつ」

四葉は俯いて肩を震わし、傍から見ると今にも泣き出しそうな子供だ。

だがやはり付き合いも長ければ分かるものらしく、鷹久が苦笑しながら四葉の肩に手を置いた。

「はいはい。嘔泣きやめような」

「嘔泣きしたくなるくらい心外だって気持ち伝わった？」

顔を上げた四葉の顔には涙一滴ついていない。

「うん、まずは嘔泣きしたくなるくらい心外っていうわけのわからない気持ち的理解できない」

爽やかな笑顔でさらにと鷹久は言っただけ。

「鷹久は理解力が足りないね。感受性も乏しいんだね」

可愛らしい笑顔で四葉はそれに応じる。鷹久は鷹久で笑顔一つ崩さない。

「だってほら。カテゴリの違う生物の思考を理解しようって言うってなかなか簡単にはいかないだろ？ 例えるならクジラと火星人が理解し合おうってくらい」

さらっと毒を吐いた……。

やはり鷹久もこの面子の中に組み込まれているだけだった……それにしてもクジラと火星人といたとえは一体どこから来たのか。

四葉の笑顔は可愛らしいのにどこか寒気を誘う。

「そうだね。あたしも変なこと言っちゃった。土星人に地球人の思考を理解してもらおうなんて」

毒には毒で、か……でも土星人って何だ？

「やだなあ四葉。土星人はまだその存在は確認されていないし、その姿形に共通の認識も広まってないよ?」

「存在を確認されていないのなら火星人もだよな? タコみたいな宇宙人なんて、実際に見た人は誰もいないもん。鷹久知ってる? 火星って昔は微生物が住んでいたらしいよ? タコじゃなくて残念だね」

この二人、笑顔で毒を吐き合っている……。

「気にしなくていいわ」

溜め息がちに薫子が言った。

「口論になるといつもこうだから。気が済むまでやらせてあげて。仲が悪いわけではないから。本人たちも楽しんでいるのよ」

「あ、そう?」

仲がいいのか悪いのかよく分からない。いや、ケンカするほど仲がいいとは昔から言ったものだし、ある意味とても仲がいいんだろう。ケンカしてもまた元通りの関係になれるのは根底に互いの信頼関係があつてこそだろうし。

「ごめんね、結恵さん。四葉達が迷惑をかけて」

標葉さんが軽く頭を下げてきて、逆にこちらが恐縮してしまう。

「いえ。別に迷惑はかけられてませんから。見ている分には楽しいです」

人のケンカを見て楽しむという言い方もどうかとは思っただけど事実だ。

「そう? ならいいんだけど」

「傍で見ているだけなら下手なコントより俺は面白い」

ぽつりと鷹槻が漏らす。

「鷹槻は本当に見ているだけだからな」

令がけけらと笑いながら鷹槻の背を叩いた。

「そう言えば鷹槻だけはまだ誰ともケンカしてるの見てないや」

初めて会った夜は千歳に子供のようにあしらわれていたけれど、昼間この面子で会った時は鷹槻は基本的に無関心に近い無言。千歳

の部屋で会っていなかったら未だに何を考えているのか全くわからない近寄りがたい人という印象しかなかっただろう。

「たまに律なんかに吹っ掛けられてケンカ買ったりはしてるんだよ、こいつも。な？」

「まあたまには」

楽しげに言う令に対し、鷹槻はあくまで気の抜けた返事。

それを見ていた薫子が小さく言う。

「……もう少し鷹槻は思う事を口にしてもいいと思うわ」

「面倒だからこれでいい」

心底どうでもいい、と言わんばかりに鷹槻は目を伏せて答えた。

「あなたって人は……」

まだ何か言いたげな薫子の肩に標葉さんが手を置いて抑えた。

標葉さんを見上げた薫子の表情は不満そうだったが、すぐに俯いて唇を噛み締めた。そばで令も軽口ひとつ叩かず困ったように笑みを歪めた。

……何だろう、この空気。

何か言うべきなのか迷っていると、使用人が車の準備が出来たと声をかけてきた。

「それじゃあ結恵、また。今度はよければうちにも遊びにいらしてちょうだい」

「うん。ぜひ」

「あーズルイ薫子ちゃん！うちも来てね。皆の小さい頃の写真とかもあるよ」

鷹久との笑顔の毒吐き合戦は終わったらしく、四葉が小さな体で目いっぱい挙手してくる。

「うちもここからなら一番近いし、落ち着いたら遊びに来てよ」  
につこりと笑って鷹久も言う。

「うん。ありがとう」

こうして普通の友達関係を築けるのはやはり嬉しい。またこんな友達関係を築ける日があるなんて思ってもいなかったから余計に嬉

しい。

「皆もまた遊びに来て」

「お。本家令嬢からお招き受けたぜ、律。俺らも出世したよなあ」  
令が茶化すように言う。

「だな。親父たちが聞いたら腰抜かすぜ」

「はいはいっ！ あたしまた桂子様のお手製ケーキ食べたいつ」

「四葉、そんな子供じゃないんだから……」

「そうよ」

「だあって桂子様のケーキ買ってそこらへんで売ってるケーキよりよ  
っぽど美味しいんだもん」

目を輝かせる四葉は本気で言っているらしい。

「おばあ様にお伝えしておくよ。きつとすごく喜ばれるから」

「ほらお前たち。いつまで車待たせる気だ？」

鷹久の声に、皆一家に一台用意された車にそれぞれ乗り込もうとする。

「じゃあ結恵ちゃん。桂子様にもよろしくお伝え願える？」

「ん、わかった。今は手を離せないけど、おばあ様も皆によろしく  
って」

そうして皆が車に乗り込んだ時、鷹槻が声を上げた。

「……そう言えば俺、本を見せてもらおうと思ってたんだ」

「本？」

鷹久と私の声が被る。

「本家の図書室は貴重な蔵書が多いから。発表演習があるからどう  
せならより詳しく調べたいと思って。そういうわけで図書室を少し  
だけ見たいんだけど駄目か？」

鷹槻は無表情に私を見た。

「いいと思うけど。おばあ様も特に何も言ってなかったし」

「なら俺はもう少しだけ邪魔する。鷹久。悪いけど先に帰っててくれ」

「付き合おうか？」

鷹久が車から降りかけたのを鷹槻が制する。

「いや、せっかく車用意してもらったし。俺は歩いて帰るから」

「わかった。じゃあ結恵ちゃん、こいつがもう少しお邪魔します」

鷹久が車窓越しに頭を下げる。

「あ、はい。それじゃあ皆、今日は来てくれてありがとう。すごく楽しかった」

そうして軽く言葉を交わし合い、車はポーチを離れて行く。

後には私と鷹槻と使用人数名が残された。

「……えーっと。すみません、図書室って一階でしたよね？」

「はい。ご案内致します。どうぞこちらです」

笑顔で老齡の執事は答え、私達は一階の東棟の外れにある一室へと案内された。古めかしい時代を感じさせる扉の前で執事は一礼した。

「こちらでございます」

「ありがとうございます。えっと、中って私も入っていいんでしょうか？」

「もちろんでございます。さ、どうぞ」

にこやかに執事は扉を開け、私と鷹槻を中へと入れてくれた。

部屋の明かりが一斉に点くと、天井近くまである書架で埋め尽くされた広い室内があらわになる。

「それでは何かありましたら内線でお呼び下さい」

「はい、ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

鷹槻と小さく会釈してお礼を言うと、老執事は軽く微笑んで退室した。

そうして図書室に二人取り残されると意外にも先に口を開いたのは鷹槻だった。

「千歳は何だった？」

日が暮れ始めて少し暗い室内が、元から黒に近い色の鷹槻の虹彩をより一層黒に近づける。

「んーよく覚えてないんだけど、正式な場で話すって言われた気がする……」

「じゃあ桂子ばあさんも知って？」

「やっぱり図書室というのは口実で、本当の目的はこの話か。」

「うん。私がすっかり千歳のところで寝ちゃって、千歳が部屋まで運んでくれたらしくてさ」

あんなに人前で泣き喚いて、思い出すだけでも恥ずかしい。

思わず顔を伏せた私に鷹槻の淡々とした声がかかる。

「どのくらい聞いた？」

『何を』どのくらい、なのかなんて聞かなくても分かる。

「化け物がいるってことくらい」

「まだ全然ってことか」

「だから正式な場で話すって言われたって言ったじゃない」

全然知らない、と人から言われると何だか面白くない。特に知っている人間から言われると。

「……そう言えば、鷹槻は全部知ってるの？」

今日のメンバーの中で最もこの家に通じていそうな鷹槻。けどそれがどの程度のものかまでは知らない。全てを知っているのか、それに近いところまで知っているのか。

「そもそも鷹槻は何でそんなにこの家のことに詳しいの？ 二ノ峰だからなんて言われても信じないからね。鷹槻は明らかに鷹久より多くの事を知っている」

まくしたてるように言う私を、鷹槻はどこか呆れたような目で見下ろしてきた。

「そんな一度に聞くなよ」

「ご、ごめん」

思わず謝ると、鷹槻は息を吐いて私から視線を外した。

「俺は多分、全部知ってる」

私の隣で鷹槻は正面の窓を見ながら低い声で言った。

「これからお前が正式な場で聞くだろうことは全部」

「……何で、鷹槻は知ってるの？」

兄である鷹久も知らないのに。他の誰も、鷹槻がそれを知っているということも知らないのに。

それに対する鷹槻の答えは簡潔だった。

「俺も本家の関係者だから」

言葉の意味を理解しかねる私を置いて鷹槻は言葉を続けた。

「俺と鷹久、実の兄弟じゃないから。鷹久は正真正銘二ノ峰戸主の子供だけど俺は違う。養子ってヤツ」

「養子……」

「俺の母親は鷹久の父親の妹なんだ。だから俺と鷹久の本当の関係は従兄弟ってことだな」

決して軽い話ではないのにどうでもいいことのように鷹槻は話す。まるで他人事のように。

「俺の実の父親は綾峰先代当主。桂子ばあさんの死んだ旦那」

淡々と告げられた事実言葉に言葉を失う。

「……それって」

「俺を産んだ女と浮気してたんだよ。先代は婿養子だけど、それでも当主って立場だったから不義の子供とはいえ俺も微妙に本家に近い所にいるんだよ。まあ分家も本家ももとは一つだったからこその一族だけだな」

綺麗な顔を微かにしかめ、鷹槻は心底忌々しげに呟いた。

世界屈指の資産家。

その主が正妻以外の女性と関係を持っていたとしても不思議はない。その女性との間に子供がいたとしても驚くことでもないのだろう。

鷹槻の告げた彼の身の上は、決して珍しいことじゃない。あくまで他人事として聞いている分には。

「そんな顔するなよ、俺は別に気にしてねえし。ム力つく事実ではあるけどな。けどそれだけ。桂子ばあさんには申し訳ねえなって思ってたこともあるけど、ばあさんが俺がそれを気に病むことはない

って言ってくれたし。正直なところもう引け目とか負い目とか全くないから」

鷹槻は遠慮がちに小さく笑った。

「話、戻すな。先代も何世代か前の本家の血縁だとかで一応俺も本家の人間みたい扱われるところがあって、三年前に俺も仕来たりに則って正式に最奥へ行つたんだよ」

「それ、他の皆は……？」

「誰も知らない。基本的に俺達は慣れ合いみたいな付き合いってしねえし。けど黙ってるって、薄情だと思つか？」

鷹槻は色味のない目を私に向けてきた。

混乱する頭の中から、その言葉への答えを引っ張り出して言葉にするのに少し時間がかかった。

「薄情だとは思わない。……私はまだよく知らないけど、この皆はそれぞれ独立してるって思うし。何て言うか、大人の付き合いって言うか」

お互いに秘密を持たないことが良い関係のようにも言うけれど、鷹槻達は違う。まず自分の考えを貫いて、それを理解し合った上でお互い繋がっているように感じる。それは決して繋がりが弱いわけではなく、自分とは違う個人である相手を尊敬するからこそ出来る関係なのだと思う。

「よくわかってない私が知った風な口叩くものじゃないってわかってるけど、鷹槻が誰かに強要されたくでなく自分の意志で話さないならそれでいい気がする」

「……まあ、話すなどは年寄り連中に言われはしたけど、言わないでいるのは俺が決めたことだな」

鷹槻は真顔で言った。

まっすぐに迷いない瞳で。

「この家のム力つく呪いをぶっ壊してやりたい。この家の未来永劫変わることない体制。犠牲の上の不自然な繁栄。理由はそれぞれだがそれが気に食わないってところで俺達は一致してる。薫子は標



葉とのこと。俺なんかはガキの頃の名残……先代への反抗心みたいなものだ。だから本来なら俺が知るもの全てを話したほうが話は早いかもしれない」

「でも、話さないでいるの？」

私の言葉に鷹槻は書架にもたれかかって目を伏せた。

「この家の体制が気に入らないなら、この家を出るっていう手段もあるだろ？」

「……そのほうが手っ取り早いと思う」

「そうだ。四葉に律令あたりは『逃げ』だって嫌がるだろうが、俺はこの家を出るのが一番早い道だと思ってる。本気で嫌がるなら、本家の人間でなく、それもまだこの家の闇に片足も突っ込んでいないあいつらなら出ることもできる。誰が文句を言っても千歳や桂子ばあさんが一声言えばいい。あの二人は俺達の意味を尊重してくれる」

「やつぱり……千歳も強い立場なんだ？」

鷹槻はやや間を置いてから頷いた。

「あいつは桂子ばあさんよりも強い立場にいる」

絶対王制国家と称される家の当主である、大叔母よりも。

「今現在、この家に千歳の言葉より重いものはない」

日が傾いてきて、より濃い影が鷹槻を覆う。

「本家が今も王である理由は、千歳にとって本家が必要不可欠なものだからに他ならない」

鷹槻の顔は影に遮られてほとんど表情が窺えない。

「千歳なしに、こう浮き沈みの激しい国際社会は生き残れない」

それはこの家が千歳なしにはやっていけないと言う事。

それはまるで……。

「それじゃあ」

考えたくない。考えたくないけれど思いついてしまった。酷く嫌なことを思いついてしまった。

「それじゃあまるで、千歳が鷹槻達の言うこの家の『呪い』みたい

じゃない」

影の向こう、鷹槻は今どんな表情をしているのだろう。

「千歳が犠牲の上に立っているみたいじゃない」

暗がりでも鷹槻が目を逸らしたのが分かった。

「……鷹槻は犠牲を人柱って言ったよね？ その言い方じゃまるで千歳が他人を犠牲にして生きているみたいじゃない」

少しずつ少しずつ。私の中でピースが嵌っていく。

「千歳が……この家の呪い？」

鷹槻は何も言わない。

否定もしない。

肯定もしない。

「バカなこと言ってるって笑ってよ。私、千歳が予知することができるとかそんなことまで思ってる」

昼食会の日の晩、千歳のもとへ行った時。

三ノ峰の誰かが千歳のもとを訪れる事を、彼は事前に察知した。それは彼が予め知ったから。

そんな風に考えている。

「荒唐無稽だって、笑うなり怒るなりしてよ」

すぎるような私の言葉にも、鷹槻は何も言わなかった。

## 綾峰家の子供たち 2

「一階中央階段から西、北側七部屋。南側八部屋」

「あ？ 北と南で部屋数違うじゃん」

令が訝しげにモニターから顔を上げる。

「北側は扉が七つしかなかったよ。間違いない。メイドさんが西端の扉に出入りしてたから、多分物置として一部屋分広くなってるんじゃないかな」

「四葉がそう言うならそうなんだろ。一階西は外れか。あの屋敷はシンメトリーが売りだから、東も同じだろうな」

律は机に手をつけてモニターを覗き込んだ。

そこにはところどころに空白の目立つ製作途中の図面が表示されている。

「中央階段の下にも部屋が左右それぞれ三つずつ」

四葉はモニターを指差し、令はその指示通りに図面を新たに埋めて行く。

規則的な音を立てながら令はキーボードを打っていき、そうしてその音が止まると空白が多少残るが建築物の図面が出来あがった。

「こんなもんか。本家屋敷図面」

「知っちゃいたが、だだっ広いな」

令と律が感嘆とも呆れともつく声を上げると、四葉が鋭い声音で言った。

「狭かったら今まであたし達から生き神様を隠すなんて出来るわけないよ」

「確かに。レトロな造りのくせしてあの屋敷、セキュリティも並みじゃない。図面ひとつ閲覧出来ないようになってるしな」

「図面自体は本家と二ノ峰のコンピューターにあるっばいけど、ガードが異様に固いんだよな。下手うつたら俺ら自体がやべえよ。つかこの部屋の中身だって偽装がばれたらどうなるか」

令は大きく伸びをして、三人の会議室と化している四ノ峰邸の一室を占拠したコンピューターに古い資料の山を見渡した。

それらは少し見た限りではIT系統に興味ある令、古文書学に興味ある律と四葉の趣味としかとれないが、その偽装がはがれれば現れるのは本家に関するあらゆる情報だ。

「知らなければいいんだよ」

そう言い切るのはこの部屋をうまいこと両親を言いくるめて手に入れた張本人、四葉だ。

「ただそれだけ」

短く言って二人を見る四葉の表情は常の幼い様子も無邪気さも欠片もない。

年齢より遥かに大人びた冷めた表情を浮かべる。実年齢よりずっと幼く見える容姿をした彼女には不釣り合いな表情を。

知らない人間にはさぞや奇妙に映る事だろう。だが律も令も驚きなどしない。生まれた時からの付き合いであり、同じ目的を持って行動する彼らにとっては今さらの事だ。綾峰四葉が幼い外見と幼い言動を隠れ蓑に、異様に切れる頭脳と冷徹なまでの行動力を持つことなど。

冷めた表情のまま、四葉は苛立ち混じりに呟く。

「生き神がこの家の封建体制の要だってことは確かなのに。分かっている手が出せないって苛立つな」

「そう簡単に手出し出来るもんなら、俺らよりずっと前の世代がこの家の制度ぶっ壊してたろうよ」

「そーそ。下剋上狙いが無駄に長い綾峰の歴史上に俺らだけなわけねーもん」

薄い笑いを浮かべて令は言う。

そんな弟を見ながら、ぽつりと律は零した。

「鷹槻は最奥を見たんだろうな」

四葉と令の視線が律に向けられた。

「一応鷹槻も本家だからね。言わないけど多分そうだろうね」

「あいつ、何を見たんだろうな」

独白めいた呟き。

「あたし達に言わないんだから、言つべきでない何かに決まってるよ」

軽い調子で四葉は言った。

「鷹槻が俺らを裏切ったとは考えないんだ？」

「からかうような令の言葉に、律と四葉の鋭い視線が向けられる。

「当たり前じゃん。何言ってるの？」

「お前、バカだバカだって思ってたけど、本気で大バカだよな」

間髪入れずに返ってきた二人の刺々しい言葉に、令は軽く肩を竦めた。

「言ってみただけであって」

「言わないなら言わないりの理由があるに決まってるでしょ」

四葉は頬杖をついて令を睨んだ。

「あたしはこの家の中、無条件で信頼できるのは鷹久と鷹槻。薫子ちゃん、あんた達。それに結恵っちもかな、ただだと思ってる」

「あとは標葉な」

律が補足するように言うと、四葉は頷いた。

「そーいう事。うちのぼーっとしたお兄のためにもあたしは呪いを解く。理由は違ってたってそれを願ってるのは皆一緒。だからこそあたしはあんた達も皆も信じてる」

「ついでに薫子のため、か」

「二人には幸せになつてほしいって妹ながらに思うからね」

四葉は胸を張って言った。

「そのためにはこの家の呪いも、封建体制も邪魔でしかない。だからあたしはこの家の呪いを解いてやる」

「標葉には俺らも世話になつてるしな」

律と令が頷き合う。

「幸い呪いを解くのは俺らも利害が一致してるわけだし。俺らはこの家で四ノ峰分家なんつー中途半端な地位から一番上を目指す。そ

れにはやっぱりこの家の体制はうざいことこの上ない」

「四ノ峰で、それもその分家筋が上に登ろうつつつても限界あるもんな」

令はパソコンを閉じて呟いた。

「鷹久や鷹槻なら我慢してやるけど、二ノ峰分家や三ノ峰なんかにかいツラさせるくらいなら俺らが上に行く。誰にも邪魔なんかさせるかよ」

赤い夕焼けを窓の外に見ながら、律は強い口調で言った。

「俺は親父みたいにはならねえ」

「……だな」

令は厳しい表情をした律を見て頷いた。

「律って面倒くさがりっぽいのに熱血だよ」

四葉が意外そうに言う。

「熱血じゃねえよ。ただ単に俺はうざい連中に自分の上に立たれるのが嫌なだけだ」

「四葉こそ意外に兄ちゃん思いで薰子思いだよなあ」

にやにやと言ってくる令に、四葉は胸を張って答えた。

「大事なたったひとりの兄弟と、大事な親友だもの。当たり前ですよ。あたしはどうでもいい人間に情なんかかけない。そんな余分な情けがあるなら、その分をどうでもよくない人間にかける」

「結恵、今のお前見たら驚くだろうな」

「ムービー撮っとけばよかったな。そしたら見せてあげれたのに」  
双子は笑いあって四葉を見る。

そんな二人に四葉は目を据わらせた。

「うるさいな。必要があれば見せるよ。普段の性格だって別にあたしじゃないわけじゃないもん」

そう言ったところで、部屋の外から声がかかる。

「四葉？ 律ちゃんと令くんもいる？」

「標葉だ。いるー！」

律が声を上げると、扉が開かれて標葉が姿を現した。

「夕食を一緒にどうかって母さんが言ってるんだけど、どう？」

「ああ、もらってく」

「わかった。じゃあそう伝えてくるね。あんまり根を詰めすぎないようにね」

緩やかな笑顔でそう言って、標葉は部屋を後にした。

「今日の夕飯何だ？」

「んーとビーフシチューって言ってたかな」

「やりいっ！ 俺、ビーフシチュー好きなんだよな」

「んじゃ連絡入れとかないとな」

嬉しそうに声を上げる令の隣で律は自宅へと電話をかけた。

「帰ったのか、鷹久」

自宅に帰り着くなり出迎えたのは使用人ではなく実の父親だった。

あまりに珍しい光景に鷹久は軽く目を見張った。

「帰ってらしたんですか、お父さん」

「さっき戻ったところだ。またすぐ出なければならぬがな」

そう言った父親は相変わらず厳しい表情を浮かべていた。

「本家に行っていたと聞いたが鷹槻はどうした？」

「何でも本をお借りしたいとかで、俺だけ先に帰ってきました」

「そうか」

父親は何を考えているのかわからないままに相槌を打った。

鷹久は昔からそんな父親が苦手だった。何しろ実の父とはいえ自宅にいることは稀で、顔を合わせ会話することなどもっと稀なものとして育ったためどう接していいのかわからない。

「それでは俺は部屋に戻ります」

父親の横をすり抜けようとする低い声がそれを妨げた。

「義将様の孫はどうだ？」

鷹久は顔を逸らしたまま答えた。

「……普通の可愛らしいお嬢さんですよ」

「鷹槻はあちらとうまくやっていけそうか？」

「図書室に案内頂くようでしたからそうじゃないでしょうか」

あくまでも当たり障りなく鷹久は答える。

「そうか。お前もすっかり見ていてやれ。あれは我が家の切り札であると同時にアキレス腱でもある。風向きが悪くなるような気配があれば逃亡者の血には退いてもらうようお前が計らえ」

それだけ言い父親……二ノ峰家戸主は鷹久には一瞥もくれず隣をすり抜けて行った。

結恵に対しても、義理の息子である鷹槻に対してすらも情の欠片もないような物言い。

鷹久はその場に立ったまま、両手を握り締めた。

「だからあんたは……この家は嫌いだ」

吐き捨てるようにそう呟く。

叔母と先代当主との不義の子である鷹槻は生まれてすぐに二ノ峰家に引き取られた。

先代の妻であり、本家直系の桂子の不興を買う事を恐れて叔母から鷹槻を取り上げ、本家とは何の関係もない我が子として育てるために。本当は本家との繋がりを持つために引き取ったことなど、周囲の誰もが知っていたが。

そんな鷹槻に媚売る者、露骨に侮蔑の眼差しを向けてくる者、腫れものに触るように接してくる者と大人たちの対応は様々だったが、それに対して幼い鷹槻が傷ついていたことだけは今もよく覚えている。

だから自分は兄として鷹槻を守ろうと決めた。泣いている弟に守ってやると約束した。それは自分たちが実の兄弟じゃないと知ってからも変わらない。

実際の血縁がどうであろうと鷹槻は大事な弟だ。自分以上にこの家の柵に捕らわれた弟。

いつも鷹久の実の母親であり、鷹槻の義母に邪険にされて泣いていた。



「泣かなくていいんだ、鷹槻」

人前では決して涙を見せなかったが、いつも一人で泣いていた二つ年下の弟。

「お母さんはお父さんとケンカしてるから機嫌が悪いだけだよ。だから鷹槻は何にも悪くないんだよ」

綾峰とは血縁のない名家から嫁いできた神経質な母親。父とはいっても衝突していた。

「お父さんは僕を他の家への『きりふだ』にするためにうちに置いてくれているんだって」

小さくうずくまって、幼い弟は言った。

「本当なら僕みたいな子、ここにいちやいけないうて。お母さんだけじゃなくて家の皆が言ってた」

「そんなことないよ」

「僕の本当のお父さんとお母さんは最低な人間なんだって。だからその子供の僕も最低なんだよ」

まだ小学生になるかならないかという子供が、そう言った。

「ごめんね鷹久。僕みたいなのが弟だって言わなくちゃいけないって、ごめんなさい。ごめんなさい」

何度も何度も謝ってくる鷹槻の姿が痛々しくて、血の繋がりなど関係なく大事な弟を守らなきゃいけないって強く思った。

「鷹久。あまりあの子に構うのはおやめなさい。貴方にまで悪影響があつては家の名が下がります」

ヒステリックな母親の声。

「お母さん。鷹槻は僕の弟です。そんな言い方はやめて下さい。鷹槻は僕よりずっと優しくていい子です」

「鷹久。貴方もあの子の出自は知っているでしょう？ 本家の子だからなど、この家の中でしか通用しません」

「そんなこと知りません。鷹槻は僕の弟です。血の繋がりなんて関係ない。鷹槻は僕のたった一人の大切な弟です」

物心ついた時からそんな言葉に鷹槻はさらされてきた。

母親の露骨な態度に、使用人の陰口に。

父親は何も言ってくれない。

だから兄である自分が守らなきゃいけない。

周囲の人間からも、鷹視を追い詰めるこんな体制の家からも。

「……呪いなんてものがあるとしたら、それはこの家だ」

自室に戻り、薫子は机の上に飾られた写真立てを手に取った。

そこには小さな子供達に囲まれ、穏やかに笑っている標葉。彼の周りのいるのは四葉と律令。それに自分。

確かこの時も律令はくだらないケンカをして律が力技で令を制し、令が大泣きして標葉がそれをなぐさめ、四葉は横でそれを見て笑っていたのだった。

「……変わらないわね」

口にしてみて笑みが零れる。

もう九年も前だというのに彼らは今と全く同じ行動を取っている。自分もそうだ。

標葉の隣で彼の制服の裾を引き、少し俯いていてうまく笑みを作れない自分。

あの頃の薫子は標葉を実の兄のように慕っていて、本を読んでもらったり遊んでもらうことが何よりも好きだった。

標葉も標葉で、嫌な顔一つ見せずによく付き合ってくれた。

薫子の家、五ノ峰家はこの敷地内では最も地位の低い家でどこか他の家に遠慮する気風がある。それは幼い薫子もそうで、例えば自己より年少の者であろうとも他家の子供には一歩退いて接することが常だった。

そのせいか薫子は人見知りが激しく、近しい人間にも甘えることができない子供だった。

寂しくても寂しいと言えない。

構ってほしくてもそう言えない。

そんな薫子に、標葉は家の序列など気にせず妹や従兄弟たちと同様に接してくれた。集団の中でひとりになりがちな薫子をいつも気にかけ、いつも手を引いてくれた。

薫子さんもおいで。

そう言つて差し伸べられた手がどれほど嬉しかっただろう。

どれほど心強く、安心できただろう。

標葉が大好きだった。

幼い頃からの安心感は年を重ねるにつれて次第に恋心へと形を変えていく。

標葉さんが好きです。

そう告げたのは去年の末。

四ノ峰の跡取りである標葉に、七つも年上の彼に受け入れてもらえるなんて思いもしなかった。そう思っていたのに、膨らんみきつた想いは爆発するように薫子の口から言葉となつて発せられた。

それを受け入れてもらえた。優しい顔を真つ赤にして受け入れてもらえた。

そしてもつと彼を好きになった。

何を気にすることなく、彼といたい。

「……だから私は、呪いを壊す」

決意を込めて、今一度そう呟いた。

夕暮れ時の図書室は赤く染まり、濃い影を落とす。

「千歳は間違いなく、呪いの一端を担つてると思つていい」

鷹槻の抑揚の少ない声が図書室に響く。

「一端、てことは他にもまだあるの？」

鷹槻は小さく頷いた。

黒く強い瞳がまっすぐに見てくる。

「お前は呪いやこの家の奇妙な繁栄云々より、千歳がどうかってことのほうが大事みたいだな」

改めて鷹槻に指摘され自分でも驚く。

自分が何故この家に来たのかを考えれば不思議なことだ。

呪いなんていう得体のしれない何かを信じ、会ったばかりの誰かがそんな得体のしれない物かもしれないと不安になるなんて。

だけど私は確かに綾峰の権威より呪いの真偽より、千歳の無事を祈るように願っている。

「……何度か顔を合わせたら情が移ったんだよ」

「ああ、まああいつはそういう奴だよな」

言い訳のように言った私に被せるように鷹槻も頷いた。

見上げた鷹槻の顔に表情はない。けれどその目の鋭さは変わらず、その口から発せられる言葉に嘘や冗談がないと理解させられる。

「俺はこの家なんかどうでもいい。嫌いだから」

「嫌い……なんだ」

「ああ。面倒だしな」

その言い方はどこか投げ遣りなもの。

「だから呪われてたってザマーミロって感じだし、俺がそれをどうこうしようなんて間違っても思わない」

鷹槻の言葉はどこか自分の考えと似ている。やはり少なからず血の繋がりがあからなのか。

そんなことを思いながら彼の言葉に耳を傾けていた。

「けど俺は、千歳の呪いだけは解きたい」

「千歳の、呪い？」

その言い方だと彼自身が呪いその物であると言つより、千歳にかかった呪いと聞こえる。

そしてその考えは間違っていないらしい。

「千歳はこの家の呪いの一環だけど、けど思うんだよ。本当はあいつが一番呪われてるって」

「どういうこと？」

「そのままの意味だ」

淡々と鷹槻は答える。

「あいつに比べりゃ俺の生まれなんて大したことじゃねえって思える。千歳は……俺にとって数少ない、大事な人間の一人だから、どうしてもお節介したいて思う。あいつの呪いを解いてやりたいって思う」

あくまでも淡々と、けれど強い決意を滲ませた声がそう告げる。

「……私も」

知らず呟いていた。そしてさらに言葉を続けていた。

「私も千歳のこと、大事だ」

マイペースで、何考えているのかわからなくて不思議で、そして優しくて温かい千歳が。

一緒に過ごした時間なんて関係なく私は千歳が大事で、恋愛感情かどうかはわからないけれども好きだ。

「千歳にとってその呪いがよくないものなら、私も千歳の呪いを解きたい」

鷹槻をまつすぐに見据えて、そう言葉にする。

「千歳にはたくさん優しくしてもらった。身勝手で汚い私にも優しくしてくれた、身内扱いしてくれた。私はこの家の呪いなんて何も知らないけど、それが千歳を苦しめるものだったらどんなことをしてもそれを失くしたい」

それは結局、私の自己満足でしかないのだけれど。この家の事情も何も知らない身が軽々しく口にしていいようなことではないのかもしれないけれど。

それでも自分の思いに嘘を吐きたくない。そのために私はこの家に来たんだ。

鷹槻は黙って私を見ていたかと思うと、静かに口を開いた。

「正式に最奥へ行ったら全て教えられる。千歳本人から」

「……うん」

「それでもお前がこの家に留まろうって思うような変人だったら、その時はよろしく」

「変人？」

どういう意味だ、と鷹槻を見るが彼は最早私と視線を合わす気すらないらしい。

けれど小さく、本当に小さな言葉を口にした。

「お前が変人だったらいいと思うよ」

「……よくわかんないけど、私はそう易々とこの家から出て行くなんて思わないだろうから今から言っておく。今後ともよろしく」  
胸を張ってそう言うと、鷹槻は見逃しそうなほど小さく口元を弛めた。

「ああ、よろしく。変人」

「変人て言うな」

「変人は変人だろ。事実を認めろよ」

「確かに私は一般的じゃないのは認める。でも事実だからこそ尚更オブラートに包んで言ってよ」

「悪いな。俺にそういう気遣いを求めても無駄だ」

まるで悪びれずに鷹槻はそう言った。悪びれるどころかどこか楽しげに。

## 正式な場での昔語り

月が綺麗だ。

雲に隠されることなく輝く望月。その柔らかい光はいつも見慣れた月より力強く、妙に胸が騒いだ。

それは月のせいではなくこれから先への不安からだろうか。

遮光カーテンを閉め、私は部屋を出た。これから大叔母の部屋へ行き、そしてそれから改めてこの屋敷の地下へと向かう。

正式に、綾峰家最奥へと。

三つ紋の蘇芳色の色無地を纏った大叔母があのだを、この屋敷の地下への道を先導するように歩く。朱鷲<sup>とぎ</sup>色の訪問着を着た私もその後が続く。

初めて正式に最奥へと足を踏み入れる場合、準礼装で行くことが代々の習わしだと言う事でつい先ほど着付けてもらったものだ。

少し窮屈な和装と歩き慣れない草履。それすら忘れそうになるほどの、全身の血がざわめく感覚。

二人分の足音だけが石造りの廊下に響く。

大叔母は何も言わずまっすぐに地下への道を辿る。私もその後を黙って歩く。

私を知る限り、いつも朗らかでおしゃべりな大叔母がこんなにも喋らずにいるところを見るのは初めてだ。それが余計にこの沈黙を重く息苦しいものへとする。

この奥には千歳がいる。一週間ぶりに会う、あの不思議な雰囲気の人。

会いたい、と何度も思った。けどそう思う反面、鷹槻も知る全てを知ることが怖いとも思った。鷹槻の言葉を聞く限り、最奥で聞くこの家の秘密は決して優しいものではないようだから。

「……体調は」

前を歩く大叔母が前を向いたまま、歩みを止めぬまま口を開いた。  
「体調はいかがですか？」

「あ……大丈夫です」

多分過呼吸の事を言っているのだろーと思ひ、敢えて力を込めて答える。

「そうですか」

大叔母は歩みを止めて振り返った。その顔には子供を心配する親のような儂げな笑み。

「もし、体調がよろしくないようならすぐに仰って下さいね。無理はなさなくて良いのですからね」

心底労わるような言葉に胸が熱くなる。

「ありがとうございます」

心から笑って深く頭を下げた。

そうして千歳の部屋の扉の前へと出た。大叔母が扉を二回、軽く叩く。

「綾峰家二十八代当主、桂子です。綾峰結恵を連れて参りました」

凜とした声が扉へ吸い込まれていく。鳴り響く心臓を抑え込むようにして扉の向こうの反応を待っていた。重々しい儀式めいた仕来たり。

いくらこの向こうにいるのが千歳だと分かっているても緊張せずにはられない。

「入れ」

少し高めの千歳の声の中からして、大叔母がそつと扉を開いた。

「失礼致します」

「……失礼致します」

大叔母に続いて室内に足を踏み入れると千歳はソファに座ってこちらを見ていた。

その服装はレイヤードのＴシャツにジーンズと私達に比べるとカジュアルすぎるくらいカジュアルで、私が初めて彼に会った時と大差はない。



ただしその顔に表情らしい表情はなかった。

「こつち来て座れ」

素っ気ないくらいの口調でそう言っ、私は扉を閉めて大叔母と共にソファに腰を降ろした。

大叔母はぴんと背筋を伸ばしてから深くおじぎした。

「御無沙汰致して居ります、千歳様」

千歳『様』か。

「うん、久しぶり。この間は直接は会えなかったからな。元気だったか？ 桂子」

「はい。お陰様で日々つつがなく過ごしております」

「そつか。それは何より」

そう言っ、ようやく千歳の顔に笑みが浮かぶ。ただ私が知っているような無邪気なものではなく、どこか控え目なものだが。

ここに来てはつきりした。

明らかに千歳のほうが大叔母より立場は上だ。この敷地内で最も地位ある人間であるはずの大叔母より、どう見ても十代そこそこの千歳のほうが。

「結恵も一週間ぶり」

私にも笑顔が向けられ、反射的に頭を下げてしまう。

「はい」

すると千歳は怪訝そうに眉を顰めた。

「何で敬語？ キモイ」

キモイと言われた……。

「んじゃ桂子。せつかく来てくれたところをもてなしてもやれなくて悪いけどここで」

「はい」

「え？」

「ひとりですてのが一応決まり事なんだよ」

疑問が顔に出たらしく千歳が説明してくれる。

「それじゃあ桂子。息災で。時間が出来たら遊びに來い。義将ほど

美味くはないが紅茶を淹れてやるよ。それとも毬つきのほうがいいか？」

「私ももうそんなに幼くはありませんよ」

大叔母は苦笑して答え、私を見た。

「結恵さん。ここからはおひとりになりますが、何も心配はいりません。貴女は貴女の思うようになさい」

「はい」

「それでは千歳さん」

「大丈夫だ、悪いようにはしないから。何と言っても義将の孫だしな。全力で守るよ」

「ええ。どうぞよろしくお願いしますね」

大叔母は立ち上がって深く頭を下げ、そうして静かに部屋を出て行った。

私は黙ってそれを見送り、千歳は呑気に手を振っていた。

再び扉が閉ざされ室内には私と千歳の二人になる。

この間までと同じ。同じはずなのに違うと感じるのはこの着物のせいか、それとも……。

「いい色だな」

優しい声がかかり、そちらへ顔を向けると千歳がにっこりと微笑んでいた。

「朱鷺色か。よく似合ってる」

にこにここと、この世のものじゃないくらい透き通った綺麗な笑顔でそんなことを言ってくる。

さっきまでとは違った緊張で軽く俯いてしまう。

「ピンクっぽくて可愛いから、私には似合わないんじゃないかって思ったんだけど、準礼装じゃないといけないって言われたから……」

「似合ってるって。俺は似合わなかったら素直にそう言うから安心しろ？」

確かに千歳ならはつきり言いそうだ。そう思うとこの色の着物で良かったと今さら思えてくる。

「紅葉の刺繍に、地は銀で紅葉の西陣帯か。即席で用意させたんだろうになかない物だな」

「千歳、着物詳しいの？」

「詳しくはないけど、なーでも現代人よりは詳しいか？」

首を傾げながら千歳は言う。けどすぐに飽きたように顔を上げた。  
「それよりここに来て二週間足らず。それなのに早速こんな面倒なところまで来たこと、とりあえず御愁傷様」

「……嫌味？」

「いや、本気で同情」

「やっぱり嫌味だ」

軽く睨むと、千歳は声を上げて笑った。

それは私の知る千歳の表情。そのことに妙に安堵している自分がいた。

「正式にここに来るってことは」

千歳は笑いを納め、私を見た。

「この家の一番暗い部分を知るってこと。面白おかしさなんて欠片もない、ツマラナイ昔話に付き合わされるってことだ」

「昔話がこの家の秘密？」

「そう、秘密。敷地内でもごく限られた人間しか知らない秘密」

千歳は薄く笑い、ソファにもたれかかった。

「これから昔話をひとつ聞かせる。聞く聞かないの選択権はない。けどその後の選択権はあるってことを覚えておけな」

「わかった」

千歳の強い瞳に気圧されないよう膝の上に置いた両手に力を入れて答えると、千歳は軽く目を伏せ静かに口を開いた。

「始まりは……俺が六歳の頃」

坦々と、淡々と。

「西暦で言つと1500年代初期。　　今から五百年近く前の話だ」

静かに、唐突に。

言葉の意味を見失ってしまいそうな、そんな言葉を千歳は口にし

た。

呼吸の仕方すら忘れそうになるものの、心のどこかでその言葉を納得して受け入れている自分がいた。

「迷ってはいるけど信じてないわけじゃないみたいだな？」

千歳はじつと私の目を見て軽く笑った。

「悪いな。最初に会った時、俺は嘘を吐いた。俺は確かにこんなナリをしてるけど、実際は五百年ばかり生きてる」

嘘、と口を衝いて出そうになる。けどその言葉を飲み込んで千歳の言葉を待った。

だって本当はそう思っていた。

千歳がこの家の生き神様とやらなんじゃないかと、そう思ってた。大叔母より強い地位にあつて、予知するようなところがあつて。あり得ないと、そう思いながらも確信していた。

千歳は私の想像を超えた存在だと。

「この間、四ノ峰分家のガキ共がしたっていう怪談があるだろ？」

「……うん」

「あれで神隠しになった先祖の話。そこから始めようか」

「う、ん」

「あれは俺が数えて六歳の夏だった」

高めの千歳の声が低く静かに研がれる。

そしてその声が紡ぐ。

綾峰家の昔話。

この家の呪いの始まりを。

「その時既に大きな家だったこの家のクソガキが黄昏時に隠れ鬼……かくれんぼをしようと言ったんだ。黄昏時は人とそうでないものが混じる時間帯。そう言われてたから大人達は絶対に隠れ鬼はしちやいけないってよく言ったのに、それを面白がつて」

千歳は膝の上で両手を組み、無感情な声で続けた。

「大人たちの懸念を裏切らず、そのクソガキを含め数名が行方不明になったよ。そこは山に囲まれた土地でな。天狗に攫われたんだっ

て、家の連中や村では大騒ぎになったらしい」

自嘲気味に千歳は笑い、子供に昔話を聞かせるかのように話し始めた。

村の有力者だった綾峰家の先祖、峯家は村人たちを含め、必死に子供達の搜索をした。けれど七日七晩、山狩りをしてあちこちを探し回ったにも関わらず子供達は誰一人見つからない。

もう駄目だろうと誰もが思った時、峯家の子供を含む数名の子供達がぼんやりとした様子で帰ってきた。

他の行方不明の子供達はどうした？ と聞いても要領を得ない。よほど怖い目に遭ったのだらうと大人達が帰ってきた子供達を休ませようとした時、峯家の子供が言った。

明後日、戦が起こる。

村は焼かれるから逃げよ。

最初は誰もそんな事は信じなかった。

だがそのあまりに懸命な様子と天狗隠しから帰ってきた子供の不思議な雰囲気には半ば気圧される形で、峯家の人間といくらかの村人達は一時的に村を出た。それを笑い飛ばす村人達の声を聞きながら、そして明後日、戦は起こった。

誰も予想し得なかった戦が起こり子供の予言通り、村は隣国の兵に焼かれて子供の予言を笑い飛ばした者達のほとんどが命を落とし、家や田畑を失った。

明後日、隣国との同盟になる。

今年は飢饉になる。

あちらの国が戦で負け、国主様が自害なさる。

そんな子供の戯言であってほしい言葉の数々は決して外れることなく、現実となって起こった。

けれど皮肉にもその言葉によって、商家としての峯家は繁栄の一途を辿った。明日の見えない戦国乱世において、子供の言葉はなくてはならない物となっていた。

だが子供とて人間。

いかに不思議な力を持ち合わせていようと、その命は永遠ではない。

そして当主らは考えた。この不思議な力を永遠のものと出来ないだろうか、と。

いくつもの予言をしてきた子供は妻を娶り子もなしたが、その子にまでは予知の力は授かれなかった。

家人達は永遠ではない予知の力を何としても繋ぎとめようと必死になった。

大陸に伝わる不老長寿の食物。

不死をもたらすという伝説の霊薬。

そんなものを大商家らしく、金銭を惜しまず与えた。

ただしそのどれもが眉唾もので、真に不老も不死も与えられはしなかったが。

子供……峯家の次男、草次郎はその頃にそんな家人らの願いを込めたトキワと名を改めた。永久に変わらないもの、常磐<sup>ときわ</sup>と。

だが名に込められた意味も虚しく、常磐は年を重ねて行った。彼から子供らしさが抜けて行くにつれ家人らの焦燥は募る。

そんなある日、旅の呪術師の親子が村へとやってきた。旅籠<sup>はたし</sup>も営んでいた峯家は親子を屋敷へと招き、人を不老不死とする術はないものかと詰め寄った。

呪術師の父親は旅の途中で聞いたという話をした。人魚という人の顔と魚の体を持つ化け物の肉を食べれば永遠に年を取らず、いつまでも生きることが出来るらしいと。

その言葉に家人達は湧き立った。すぐに峯家は各地に人魚の肉を探すよう手を尽くさせ、呪術師の父親はまた旅立たねばならないと言っのを強引に押し留めていた。

それを見かねた呪術師の娘が言った。

それならば、修業中の身ではありますが私が残りますしう。

私も呪術師の端くれ。西行様の流れを汲む術師の名に懸けて、必ずや常磐様に不老不死を。峯家に永久の繁栄を。

まだ娘と呼んでいい年頃らしからぬ、大人びた笑みを浮かべてそう言った。

西行とは後の世に歌人として伝わる平安時代の僧侶、西行法師のことであり、彼には様々な逸話が伝わっていた。

そのうちの一つが反魂はんこんの秘術を施し、骨を集め人を作り出したというもの。結果は確かに骨を人にしたものの心が伴っていなかったという。

そうして術は失敗したものの、後に西行法師は正しい法を教えられたという。

その後西行が再び反魂の術を行ったという話は聞かないが、その逸話は様々な『命』に関する話を集めていた峯家の者達も当然その逸話については知っていた。

訪れた呪術師の親子はその西行法師の流れを汲む者であると言う。当然峯家は喜び、家に残った娘を手厚く遇した。

それが後の綾峰家、峯家の呪いの始まりだなど、誰ひとり思ひもせず。

或いは先を知りたいときだけ知ることが出来る……常磐が十年の時を経て予知能力の扱い方を学んだことが徒となったのか。

娘の存在が何をもたらすことになるのか見ようとしなかった、知ろうとしなかったことが過ちだったのか。

ただ家人達が喜ぶことに安堵した自身がいけなかったのか、それは分からない。

ひとつ確かな事は彼女が峯家に留まること、峯家に不老不死を授けようとしたこと。

それが後々まで峯家の血を縛ることになる呪いの始まりだったということだ。

「呪術師……」

あまりにもファンタジーじみた単語に思わず眉をひそめると、千

歳は零すように笑った。

「今じゃ信じられないだろ？　けどあの時代は武将同士が呪い合ったりするのなんて当然。別におかしくも何ともなかったんだぞ」

「呪いが市民権を得ていたんだ？」

呪いと言われても、藁人形に五寸釘くらいしか思い浮かばない私には呪いを扱う職種だの、それを当り前として受け入れる当時の人間が理解できないが。

「それに常磐って人は本当に予知能力なんてあったの？　ってことは、天狗に会ったって言うのも本当なわけ？」

天狗から予知能力をもらいました、など到底信じ難い話だが。だがそれを言ったら瓦版に人魚が捕まったなどと載るのも随分荒唐無稽な話だ。

千歳は軽く息を吐いて言った。

「神隠しに遭って行方知れずだった間の記憶は一切なし。ガキだったって言えばそれまでだけど。……確かなのは村に帰ってきた時にはそれまではなかった予知能力ってやつを身につけてたってことだけで」

「……」

「予知能力も本当にあつたから皆躍起になつて常磐をこの家に留めようとしたんだよ。老いからも死からも解放させようと馬鹿みたいに騒いで、本人も不老不死って言葉にすっかり酔っていてな。頭は悪くなかったんだが妙に単純なところがあつたからな」

乾いた声で千歳は呟いた。その瞳に浮かぶ色は呆れにも諦めにも似たもの。

「本気で不老不死なんて望んだんだ。本人もその周りの人間も。どうかしてたと思えない。終わりのないものなんて、そんなものあるわけがないのにな」

静かな部屋に千歳の高くも低くもない声が吸い込まれる。

「……千歳が、『草次郎』なんだと思つてた」

千歳の瞳がまっすぐに私に向けられる。



思わず目を逸らしたくなるくらい、綺麗な瞳でまっすぐに。

「千歳に予知能力があつてここにいるんだと思つてた。今まで聞いてきた話の感じからそうじゃないかなつて思つてたんだけど、でも何か違う」

「何か？」

「千歳は常磐じゃない」

千歳は目を瞠った。

「最初は名前を変えただけなのかと思つた。でも違う。千歳が常磐つて人の事を話す時の感じは、自分のことを話している感じじゃない。」

じつと千歳が私を見てくる。

「千歳の話し方はどこか第三者目線っぽい。千歳に近しい、親しいけど千歳でない誰かのことみたいに聞こえる。だから常磐は千歳とは別人だと思う」

「勘？」

「勘」

「じゃあ」

千歳は悪戯を企む子供のような笑みを浮かべて言った。

「俺は誰？」

## 千歳

千歳の笑顔から逃れるように俯いて、頭の中に浮かぶ幾つもの言葉を何とか形にしようとしてみる。そして浮かんだ考えをひとつ、口にした。

「……神隠しに遭って、帰ってきた子供はひとりじゃないんだよね」  
数人の子供が行方不明になって、そのうちの数人だけが帰って来れたと言った。

「常磐……草次郎以外の複数人が神隠しから帰って来たのなら、千歳はそのうちの一人じゃないの？」

何の根拠もない私の勝手な憶測。

けれどそれなら何となく、私の中で辻褄が合う。

「神隠しから帰ってきた他の子供がどうなったのか話してくれなかったよね？ 複数帰ってきたのなら、草次郎以外にも予知能力を持つて帰ってきた子がいたっておかしくない。それが千歳じゃないの？」

強い強い、千歳のまつすぐな瞳が私を射る。今すぐに逃げ出したくなる程に強い目が。

張りつめた空気の中で千歳の口元が緩い弧を描き、そして開かれる。

「ちゃんと人の話を聞いてたんだな」

そう言って明るく笑う。それと同時に空気が緩んだ気がした。

「……バカにしないでよ」

それだけ言うのが精一杯だった。

「バカになんてしてないって。うん、大当たり。俺は草次郎のバカと一緒に隠れ鬼をして神隠しに遭った子供の一人。ついでにどういうわけか草次郎と共に先を見る力を、予知能力を持って帰ってきた」  
やっぱり。そう思ったけれど言葉にはならない。

「別に答えられなくても取って食ったりしないのに」

「うるさいなあ」

取って食われなくてもあそこで答えないのは何となく嫌だったのだ。

そんな私の心情を察してか千歳は苦笑して続けた。

「その時の俺の名前は照三<sup>しやうぞう</sup>。峯昭三」

「峯？ それじゃあ」

思わず出たその言葉の続きは、千歳本人の口から発せられた。

「俺は草次郎の弟。峯家で大事に大事に育てられた草次郎とは対照的に、汚らわしい存在って絶賛嫌われ中だった双子の弟」

その口元に自嘲めいた笑みが浮かべられた。

かつては獣のように一度に複数の子が生まれることは畜生腹と忌み嫌われた。当時の峯家の長男は病がちだったため、次男として生まれた草次郎は歓迎すべき存在だったのだろう。だが草次郎がいるのなら昭三はいらない。

「よく殺されなかったものだと思っただに思うよ」

まるで他人事のように千歳は言う。

「まあ長男がいつ死んでもおかしくないような病弱だったし、あの時代って成人するまで生きられる確率も低かったからさ。万が一の保険ってことで一応俺も生かしておくかって話になったらしい」

「……本当にそれは親なの？ 千歳のお父さんとお母さんの？」

千歳が嘘を吐いていると思うわけじゃない。だがそれを事実として受け入れるのはあまりに辛い。

千歳は苦笑して答えた。

「そういう時代のそういう家だったんだ。そう珍しい話じゃなかったさ」

そう言って千歳は話を続けた。

草次郎は健やかで利発な子として家族中に愛され、昭三は草次郎と全く同じ容姿をしながら別人という不気味な存在として隠すように育てられた。

その昭三の境遇が変わる日は、彼らが数えて六歳の夏の日に訪れ

た。

ある日、常に屋敷の離れで暮らす昭三の元に草次郎がやってきた。  
「おい、昭三。これから村の奴らと隠れ鬼をするからお前も来いよ」  
「は？ だってもう黄昏時だろう。黄昏時に隠れ鬼は駄目だって」  
「知ったことか。これは度胸試しだ！ それともお前は怖くてこの薄汚れた離れを出ることもできないか？」

「そんなわけないだろう」

昭三が声を荒げると草次郎はにっと笑った。

「じゃあ決まりだな」

それから草次郎と昭三、それに村の数人の子供達はこっそりと山の近くで隠れ鬼をすることになった。

そして、そこで一度彼らの消息が途絶える。

一番の年長者だった草次郎と昭三をはじめ、まだ幼い子供達のとだから山で迷っているのかもしれない。村一番の権力者である峯家の子供がいなくなったことにより大規模な山狩りが行われ、七日七晩搜索は続けられたが、村人達は彼らの痕跡すら見つけることは出来なかった。

それが八日目の早朝、草次郎と昭三、それに数人の子供達が村の外れで発見された。

そして草次郎は戦を预言する。

そして昭三がどこまで逃げればよいかを告げる。

それが峯家の双子の最初の予知。

双子の予言はその後も峯家を助ける。それによって峯家は栄えてゆく。

隠されるようにされていた昭三も相変わらず離れに置かれることは変わらなかったが、以前のようにあからさまに家族に避けられ、下男下女にまで軽んじられることはなくなった。

やがて草次郎は隣村の庄屋の娘を娶り子を成す。病弱な長男は子を成すことが出来なためその子が峯家を継ぐことになった。

そして草次郎が常磐と名を改め、昭三は千年の時という意味を込

めて千歳と名を改める。

それから程なくして千歳が幼馴染みでもある村の娘を妻として迎え、双子の子供達が数えて十七になった年、あの呪術師の娘が屋敷に迎えられた。

庭に面した座敷には優しい日差しが降り注ぎ、藺草いぐさの青い匂いが心地いい。心地よいまどろみの向こうで、優しい声が響く。

「千歳様」

そう呼ぶ声は愛しいもの。

「千歳様」

けれどももう一度呼びかけてきた声に、狸寝入りを決め込む。

それから少しして、傍らで大きく溜め息が吐かれた。

「……昭ちゃん」

その声に満足して、千歳は満面の笑みで身を起こした。

「何だ？ 里久りく」

声の主は眉を下げて困ったように千歳を見ていた。

「起きてたんなら返事して下さい」

「だって呼び方が気に入らなかったから。いつも言ってるだろ？」

昔のままがいいって」

彼女、里久は同い年で、あまり外へ出ることが許されない千歳の数少ない友達でもあった。

幼い頃から不吉な子と呼ばれ、村でも厭われた頃から彼女は普通に接してくれ、異界帰りと更に忌避されるようになってからも変わることもなく付き合ってくれた。

嫁を取れと両親に言われた時、自分が近隣の村でまで気味悪がられていることを知っていた千歳は自分は一生独り身でいると言った。家の力を使えば強引にどこぞの娘を嫁にする事は出来ただろうが、そんな歪な形で他人と生涯を共にする気にはなれなかった。

だが峯家は千歳を独りにはさせてくれなかった。

名家の出ではないが、せめて千歳とうまくやっていける相手をと

して連れてこられたのが里久だった。

『ごめんな、里久』

『何で謝るの？』

『お前だって嫌だろ？ 不吉で不気味な男の嫁なんて』

けれど里久は言った。

『あたしは小さい頃から昭ちゃんのこと大好きだったんだよ？ だからあたしは嬉しいの。本当だったら昭ちゃんとはとても釣り合う生まれじゃないのにこうして昭ちゃんのお嫁さんになれて、本当に嬉しいの』

そしてためらいがちに言った。

『昭ちゃんはおたしなんかじゃ嫌かもしれないけど。でも、でもあたし頑張るから！ 昭ちゃんのお嫁さんにふさわしくなるように頑張るから！』

必死になって言うてくる彼女の存在がどれほど嬉しかっただろう。独りに慣れていた。

一生独りで生きて、そして独りで死んでいくんだとずっと思っていた自分にとってどれだけ嬉しい言葉だっただろう。

誰かが想ってくれること、想うことが出来ること、それがこんなに嬉しいなんて知らなかった。

彼女が好きだって気持ちは幼い頃からあったんだと思う。けれどそれを口にはいけないと、何となく思っていた。

不吉で不気味な自分などが彼女を好いてしまったら、彼女が損なわれてしまう気がして怖かった。

だから彼女に対して感じる好意は気のせい。

ただ単に良い人間だと感じているだけ。

それだけだと、そう思ってきた。

『……里久』

『なあに？』

明るい声で聞き返してくる彼女は、こんなにも綺麗だったのだろうか。

『有難う』

『やだ、何ー？ 昭ちゃんってば』

里久は顔を赤くして落ち着かない様子で両手を振り回した。

『俺も好きだよ、里久のこと。子供の頃から、ずっと』

里久の顔が真っ赤に染まる。真っ赤になってそのまま後ろにバタンと倒れた時はどうしようかと思った。

まだ一年も経たない昔を思い出し、千歳はひとり笑いをかみ殺した。

「何？ どうしたんですか？」

里久が訝しげに顔を覗き込んでくる。

「んー単なる思い出し笑い。それより里久。その話し方も嫌だって言ってるだろー？」

「え、だ、だって。昭ちゃんは旦那様で、昭ちゃんは筆家の人で、とつても立派なお家の人で、だからちゃんとしなきゃって……」

「俺の前でまで立派になんてしないでいいよ。いつもの通りじゃないと嫌だ」

拗ねるように言って、千歳は里久の肩にあごを置いた。

「で、でも」

「どうせこんな離れにはほとんど人だって来ないんだからいいだろ」

「だって普段から気を付けてないと、必要な時までついいつもの口調に……」

ふいに里久の言葉が途切れた。

彼女の肩にあごを置いた千歳が、小さな子供のような心細いような目でじっと見上げてきていた。

「……昭ちゃん、ずるい」

彼は自分の整った容姿には全く頓着がない。なのに必要な時は最大限利用してくるから性質が悪い。言う事を聞かせたい時はこうしてじっと子供のような目で見上げてくる。

この目に逆らえる人間なんていないだろうと里久は常々思っている。少なくとも、自分は一生逆らえないだろうと確信している。

「ずるい？ 何で？」

目をきらきらさせて里久の平凡な顔立ちを覗き込んでくるのは、子供のようにも大人のようにも見える整った綺麗な顔立ち。

里久は顔が熱くなるのを感じながら、ぷいと顔を背けた。

「もういいつ。それよりお義父上様と義兄上様が母屋の座敷へ来るようにだそうです」

「父上と兄上が？」

長い睫毛を何度も瞬かせながら、千歳は不思議そうに聞き直してくる。

「何で？」

「さあ？ ただ使いの人がそう言ってたから。昭ちゃんだけじゃなく、草ちゃん……じゃなくて常磐様もお呼びになったって」

「常磐も？ 何だろ。あいつも呼ばれたってことは何か変なモノでも見たかな」

「昭ちゃんは何も見えてないの？」

「見てないって言うか、見る気がないと言うか……まあいいや。行けばわかるか」

千歳はそう言って立ち上がり、猫のように大きく伸びをした。

「それじゃあ俺は行ってくるけどあまり動き回ったりしたら駄目だからな？ 用事は全て人にやらせる。それから何かあったらすぐに俺に……」

「昭ちゃん。あたしは大丈夫だから」

里久が呆れ顔で言い切る。

その腹は緩やかに膨らんでいる。あと三月もすれば子が産まれるのだ。千歳と里久の子が。

千歳はその腹に手を当て頬を弛ませた。

「いいから大人しくしてくれ。でないと俺はここから一步も動かないからな。誰に呼ばれようと天変地異があろうと動かないからな」子供のような物言いに、里久は諦めた風に溜め息を吐いた。

「わかりました、大人しくしてます。だから早くお義父上様達のと



ころへ行つて差し上げて。そうしないとさっきの使いの人が怒られちゃう」

「わーかった。けど本当にくれぐれも大人しく……」

「昭ちゃん！」

千歳は肩を竦ませて笑った。

「それじゃあ行つてくるよ」

「行つてらっしゃい。お義父上様達によろしくね」

「ん。里久も腹の子が動いたらすぐ知らせるよ？」

「はいはい」

里久は呆れながらも笑つて手を振った。

それを見ながら千歳は座敷を後にする。

「千歳様」

座敷を出てしばらくすると母屋に仕える若い下男が今にも泣きそうな顔で現れた。

「大旦那様がお早くお越しになるようにと仰つていたので、後生でございましてどうぞお越し下さい」

どうやら先程使いにやつて来たというのはこの男のことらしい。

この様子だとなかなか姿を現さない千歳に業を煮やした父の叱責をくらつてきたのだろう。

「今行くよ。悪いな、俺が勝手に遅れたんだつて父上には説明するからさ」

さほど年の変わらない下男に軽く詫びて、千歳は母屋へと向かった。

母屋と離れとは父の意向で細い板張りの廊下で繋がっているもののそれなりの距離がある。

「父上達は何の用だつて？」

千歳が下男を振り返ると彼は首を傾げた。

「私もお客人がいらしているとしか」

「客？」

千歳は眉をひそめた。

「また長寿の食い物だとか、秘薬だとかを持つてくる胡散臭い連中じゃないだろうな」

今まで千歳はそういう出所も分からない奇妙なものを散々試させられてきた。特に効能がないまでならまだしも、時には腹を下したりもしたのだから冗談ではない。

千歳の待遇は変わった。

変わったが所詮自分は常磐の次なのだ。

それは永遠を意味する兄の名前と、千年である自分の名前からも明らかだ。

峯家は常磐の子が継ぎ、常磐は峯家のために予言し続ける。そして自分は常磐を少しでも長くこの家に留めるためにあらゆる長寿、不死の法を試す。

自分はいくまでも常磐の次。

よくても代替品。

そんなことを考えているといつの間にか座敷の前に着いていた。下男が声をかけ、中から父の音がすると襖が開かれる。促されるままに千歳が座敷内に足を踏み入れると襖は閉じられた。

「人払いをしてある」

老いても尚、強い威厳を持った父の音がそう告げた。

「お前も座りなさい」

「はい」

有無を言わず父は千歳を常磐の隣へ座らせる。

そこで気付いた。この座敷にいるのは自分と常磐、それに父と長兄の他にもう一人いたのだと。

一番の下座に楚々として座し、緋色の小袖の頭を垂れた女。顔は見えないが若い女だろう。

「面を上げなさい」

父の声に女が顔を上げる。

隣で常磐が息を呑むのが伝わってきた。

艶やかな黒髪が肩にかかり、細面の顔には形の良い赤い唇。千歳

と常磐とそう歳は変わらないだろうが稀に見る美人だ。

だが、常磐が息を呑んだのは彼女の目が良いからだけでないのは千歳も分かる。彼女は顔の右半分近くが怪我でもしたかのように白布で巻かれていた。その隙間からは僅かに火傷跡のようなものが覗く。

女は小さな赤い口を開いた。

「リクと申します」

「この者にはこれから当家で呪術師として働いてもらうことになった」

父の言葉に千歳と常磐は思わず顔を見合わせた。

「呪術師、ですか？」

ある程度の発言権がある常磐がさすがに聞き返す。

不審を隠す気もない常磐の顔も見ずに、父は言った。

「彼女にはお前達に長寿、或いは不死を与えるために働いてもらう」  
その言葉に千歳も常磐も得心がいった。

今までにも散々にそういった呪いだ何だと受けてきたが、とうとう父はお抱えの呪術師まで雇う気になったのか。

「話とはそれだけですか？」

「そうだ」

愚問だと言わんばかりに父は一言で片付ける。

千歳は見えないよう息を吐き、立ち上がった。

「わかりました。ではまた御用の際は人を遣わして下さい」

「千歳」

「不老不死の妙薬でも大陸伝来の呪いでも、私が必要であればその都度言いにして下さい。拒むつもりはありません。では失礼します」

父の渋い顔を見ずに千歳は座敷を後にした。

常磐と兄の声を背に聞き、細い渡り廊下へと向かう。そして渡り廊下に一歩足をかけたところで大きく息を吐いた。

「……また面倒な」

先を知る力というものが、この明日の知れぬ乱世において重要なのはよく分かる。

分かるが、それを少しでも長くこの家に留め置くためにと奇妙な食物、呪い、薬。そんなものを試すほうの身にもなつてほしい。

千歳も常磐の次であるとは言え、三日に一度は先を見てそれを報告する。

その結果が常磐と違ったことはない。千歳と常磐は全く同じ未来を見ることが出来る。

同じなら、より望まれるのは最初から愛されてきた常磐のほうで当然だ。それに関してはもういい。

血の繋がった親兄弟より自分を一番に想ってくれる者は別にいる。彼女がいればそれでいい。

そして峯家にいれば彼女に何不自由ない暮らしをさせてやれる。

予言をして、そして多少の面倒……長い生を得るための法を試しさえすれば。ただそれだけの代償で大切なものを守る。それならば安いものだ。

「千歳様」

鈴を転がすような声。

いつの間にか、千歳のすぐ後ろに先程のあの呪術師だという女が立っていた。

緋色の小袖に白い肌が映え、柔らかな風に長くまっすぐな髪が揺れる。

そうしている分にはごく普通の娘にしか見えない。とてもではないが、呪術師などという大層なものには見えない。

「もう何か用か？」

笑顔の面を張り付けて、千歳は尋ねた。

すると彼女はためらうように目を伏せた。

「あの、先程は私何かご気分を害するようなことを致したかと思

い……」

「は？」

何の事だかさっぱりわからず、千歳は大きく目を見開いた。  
すると彼女は小さな声で言った。

「急に席を立たれましたから……常磐様も私の顔をご覧になった際に随分驚かれたようでしたし、やはり千歳様にも御不快な思いをさせてしまったかと」

「は？ 待った。席を立つたのは別にあなたのせいじゃなくて俺があれ以上あの場にいる必要がないって思ったからで、別に不快に思っただけじゃない」

彼女は顔を上げ千歳を見た。

顔の右上半分、目も頬も白布に覆われているが、左は切れ長の黒目がちの瞳、磁器のような頬も隠すものは何もない。見上げてくる左目は不安に揺れている。

それはかつての自分のようだと、そう思った。

いつも隠されていた頃。人の顔色を窺っていた幼少期。

彼女はあの頃の自分と同じ目で、千歳を見上げてくる。

「ですが私の顔は人を不快にさせますから……その。この布の下は火傷の痕があつて常は布で隠すようにしているのですが、ふとした弾みに布から覗くことがあります。もしこの顔がお目に留まること が不快だと思われましたら仰つて下さい。面を被るなりして、お目に触れぬように致しますから」

何かを諦めたようにそう言ってくる姿に既視感を覚える。

ああ、やはり似ている。

目の前のこの少女は昔の自分と似ている。

「あのさ」

「はい」

「俺は別に不快だとか思わないから、気にしなくていい」

彼女は目を瞠った。

「常磐が驚いたのはせっかくの美人が布で隠されてたから。だからあんたが気にする事じゃない」

「私は醜いです」

千歳の言葉の一切を拒絶するように彼女は言いきった。

「美しいなど私ではなく、千歳様や常磐様のような御方のためにある言葉です」

「あんたの審美眼が歪んでるだけなんじゃ？」

対して千歳は無礼としか取れないような言葉を、真顔で吐く。

「まあ好みなんて人によって違うし、俺が口を出すようなことでもないけど。でもあんたが自分を醜いつて思っても、別の誰かは綺麗だって感じるよ。この国だけでなく大陸に住む人たち含めたらどれだけ人がいると思うよ？ そいつら全部が同じ価値観しかないわけではない。中には真逆の奴もいるだろう」

千歳にとつてはただの事実。

事実でしかない言葉を聞いた彼女の左目から涙が一筋零れる。

これにはさすがの千歳もたじろいだ。女を泣かせたなど里久に知られたら盛大に叱られる。

「あ、その……何も知らない俺が勝手を言つて悪かった。だから気にするな！」

「……違います」

涙を零したまま彼女は赤い唇を弛めた。

「そんなことを仰つてくださる方がいるなんて、思いもしませんでした」

涙に濡れた目で彼女は千歳を見上げてくる。

「有難うございます。千歳様」

「……いや。俺は言いたいことを言っただけだから」

「その言いたいことのおかげで、私は今、とても晴れ晴れとした気持ちです」

その言葉を示すように、彼女はまだ涙が残る目を細めて柔らかな笑みを浮かべていた。

千歳は居心地悪く頭を掻いた。

「えーと……呪術師なんて言うからどんな怖い女かと思ったら、意外と普通だな」

「私は呪術師と申しまして修業中の身ですから」

「修行が終わると怖くなるのか？」

「さあ？ 私はまだ女の呪術師には会ったことがないので存じませ  
んが……」

彼女は真剣そのものの表情で首を傾げた。

自分にとって面倒をもたらす存在以外の何物でもないと思ってい  
た娘は、意外に面白い。

「なあ。お前、名前何だっけ？ 確かさっき名乗ってたよな。悪い。  
眠くてちゃんと聞いてなかった」

千歳のどこまでも無礼な発言にも、彼女は気を悪くした風もなく  
素直に答えてくれる。

「リクです」

「リク。字は？」

「里に、数の玖と書いて里玖です」

「それは奇遇だな」

リクの言葉に千歳はにこやかに声を上げた。

「俺の妻もリクと言うんだ。字も近い。うちのリクは里に久しいと  
書く」

「そうでしたか」

「年の頃も近いと思うし、気が向いたら話相手にでもなってやって  
くれると嬉しい。今あいつは身重であまり動けないんだ」

「私などでよろしければ奥方様のお相手を務めさせて頂きたく存じ  
ます」

リクははにかむように笑って言った。

つられるようにして千歳も笑う。

「人に奥方と呼ばれると何だかこそばゆいな。奥方か。うん、あい  
つは俺の奥方なんだよな」

「千歳様は奥方様を大事にされているのですね」

「当たり前だろ？ あいつと腹の子は俺の一番の宝なんだ。あいつ  
と俺の子ならきつと三国一の良い子が生まれる」

臆面もない千歳の言葉にもリクは笑顔で頷く。

「千歳様とその宝である御方の御子でしたら、必ずや良い御子でしょう」

呪術師の少女、リクが峯家の食客となった葉桜の季節。

各地で戦が絶えない世。

そんな中でも、彼らにとって一番幸福な時だった。



## すべては泡沫

「本当に、幸せな時だったよ」

懐かしむように、噛みしめるように千歳は言った。

本当に大切な記憶なのだろう。彼にとって五百年経った今も、里久という女性と過ごした日々は。

だけど私はそんな千歳を見ていると何だかとても胸が痛い。泣きたくなるような、そんな胸の痛みを覚えた。

……私の知らない千歳。

私の知らない誰かを愛した、優しい目をして彼女の名前を語る千歳。

何でこんなに胸が痛むんだろう。

千歳にとつてとても幸せな過去だったのだから、つられて和つあしも幸せな気分になったつていいのに何でこんなにも焼けつくような痛みがあるんだろう……。

「結恵？」

思いもよらず名前を呼ばれ、弾かれたように顔を上げた。

「な、何？」

千歳は少し瞳を陰らせた。

「どうした？ 具合悪いか？」

本気で千歳が心配してくれているのが伝わってきて、私は慌てて首を横に振った。

「大丈夫。ただ、生の戦国時代の体験談を聞いてるなんて不思議だなんて思ってただけ！」

そう言くと千歳は苦笑した。

「そうだな。なかなかできない経験だよな」

「うん。本当だったら色んな人に自慢したいくらい」

出来るだけ明るくそう言くと千歳は目を細めた。

「自慢できるようなネタがあればよかったんだけどな。織田信長と

か上杉謙信には残念ながら会ったことがないんだ」

「なーんだ。つまらない。当時の文書とかあつたらネットオークションにでも出したのに」

「うん、今になると俺も会っておいてサインでももらっておけばよかったって思ってる」

そんな軽口を叩き合つて笑い合った。

そうして千歳は一呼吸置いてから再び話し始めた。

私の知らない、千歳の過ごした時を。

空の色が少し薄くなり、入道雲はいつの間にかいわし雲になっていた。

千歳は座敷の中央の寢床ですやすやと眠る赤子をただ見下ろしていた。

「興太郎」

父の呼び声に気づくこともなく、赤子はよく眠っている。

「こうたらー」

「昭ちゃん、せっかく寝たんだから起こさないでよ」

座敷に入ってきた里久が頬を膨らませて言う。

「だって可愛いすぎるだろ？　こんな可愛い子供は史上初、この先だつてないに決まつてる。そんな可愛い子供が目の前で可愛い顔で寝ているって言うのに構わずにいられる奴なんているもんか」

早くも親バカぶりを発揮して、真顔でそんなことを言ってくる彼までもが子供のようだ。

千歳は興太郎が生まれてからひと月、初めての我が子に構いたがつて仕方がない。朝から晩まで飽きることなく興太郎のそばに居座っている。

元から子供が好きで常磐の子供が生まれた時は随分喜んでいたが、それが我が子ともなるとまた格別らしい。

「里久もまだ産後ひと月しか経ってないんだから、あまり動くなよ」

「あたしはもう大丈夫よ。元から健康だけが取り柄だもん」

里久は乳母をつけるよう言ってきた父達の言葉を断り自分の手で興太郎を育てたいと言い、常磐の妻がふた月は床でゆっくりしていたのに対し、彼女はすぐに床から起きてまた以前のように活発に動き始めた。そんな彼女の活動的ところも、まるで存在そのものが太陽のようなところも千歳は好きだがやはり心配にはなる。

「里久は働き過ぎだろ。何のために人を雇ってるんだよ？」

「だってあたし、動いてないと落ち着かないんだもの」

「けどなあ」

渋い顔をする千歳の隣に里久は腰を降ろした。

「昭ちゃんだって、あたしが何もしないで黙って座ってるだけだったら気持ち悪くない？」

「……気持ち悪いと言うより、具合が悪いんじゃないかって疑う」  
つわりの酷かった時期、常は強靱な里久が珍しく床についていたことがある。

いつも明るく笑顔で動き回っている彼女しか知らなかった千歳は随分と戸惑い、里久以上に動揺した。

「昭ちゃんて意外と心配症だよね」

「心配症って言うか、普通心配するだろ？」

千歳にとっては至極当然のことなのだが里久は明るく笑い飛ばす。  
「そんなことないない。うちのお父なんて、お母が弟を産んで産後の肥立ちがよくなかった時だって寝てれば治る！　って言って全然心配してなかったし」

「んー里久の父上は昔から豪快だからな。けど別に心配してなかったわけじゃないと思うぞ。俺、その頃に村外れの社に里久の父上が毎日詣でてるの見だし」

「お父が？　本当に？」

里久は丸い目をますます丸くして千歳に詰め寄った。

「本当に。何を祈ってたのかは知らないけど、時期的にも里久の母上の回復祈願だろ」

「お父がねえ……」

信じられない、とばかりに眉を寄せて考え込む里久を眺めていると座敷の外から声がかかった。

「失礼致します。千歳様、奥方様。いらつしやいますか？」

「お、リクだ。入れー」

千歳が声をかけると、控え目な声がして襖が開かれる。

「失礼致します」

長い黒髪の手を結び、萌黄色もえぎいろの小袖姿こそでのリクは楚々とした様子で盆に乗った器と紙包みを運んできた。

「奥方様。お薬の時間でございます」

「うー……ねえリクちゃん。それってまだ飲まなきゃダメ？」

里久が上目づかいに尋ねると、リクは笑顔で言った。

「駄目です。まだまだ本来なら安静にして頂きたいところをこうしてお動きになられているのですから、せめてお薬くらいはお飲みになつて下さいませ」

「そうだぞ。リクの言う通りだ、里久」

便乗して千歳が言うのと、里久は世にも情けない顔をした。

「そうは言うけど本当に苦いんだよ、この薬。確かに回復が早いのは認めるけど。すーっごく苦いんだよ？」

「良薬は口に苦しと申します。その分効果もありますので、千歳様と興太郎様のためとお思いになつてどうぞお飲み下さいませ」

リクの真剣な眼差しに負け、里久は渋々と碗を手にとって丸薬を数個、口に放り込んだ。更にこの場でリクが調合している薬湯を飲むのだが、これがどうしようもなく苦いらしい。

リクは千歳が頼んだ通り、出産を控え出歩くこともままならなくなつた里久のもとへ通い話相手を務めてくれた。そのお陰で初産ついでんで緊張していた里久の気も晴れたらしく、今では長年の友人のように接している。

リクは少しばかり他人と接するのが不得手なところがあるが、里久の生まれつきの明るい気性と物怖じしない性格から親しくなるの

に時間はかからなかった。峯家に嫁に来て以来、同年代の友人と気軽に話すことが出来なくなった里久にとってもリクの存在はよいものだったのdarou。

「さ、奥方様。出来ました」

碗に注がれた濁った液体を見て、里久は眉を下げた。

毎日飲んでいるのに慣れる様子が一向にないところを見ると、リク特製のこの薬湯はよほど不味いのか。

呪術師は薬も扱う。それ故リクは峯家の専属の薬師くすしでもあった。その薬の効果は確かだが、苦さもその効果に比例するところがあるらしい。

里久は覚悟を決めたように両目をつぶり、一気に薬湯を飲み干した。

「えらいぞー里久」

飲み終えて肩で息をしている里久の頭を撫でながら千歳は笑う。

「お見事でございました。水を飲めますか？」

「の、飲む……口直し……」

「はい。ただ今」

くすくすと笑ってリクは水を別の碗に注いで里久に手渡した。

それを受け取るなり、里久は勢いよく碗を煽った。そして碗を置の上に置いて、大きく息を吐いた。

「はぁ……生き返ったぁ」

「うん。よしよし。ちゃんと飲んでえらいぞ。なぁ興太郎？ お前のかか様は働き者で器量よしでとても偉いんだぞ」

「そうですよ。興太郎様の母上様はともにご立派なんです」

千歳の親バカ夫バカに便乗するリクに、里久は呆れ半分に笑う。

「リクちゃんまでやめてよ。昭ちゃんてばすぐつけ上がるんだから……って、リクちゃん？」

里久は驚いたようにリクの細い腕を取った。

「やだ……また痩せたんじゃない？ それに何だか顔色も良くないし……またお薬を試していたの？」

心配そうに覗きこんでくる里久の手をやりわりと離して、リクは微笑んだ。

「それが私が峯家にお世話になっっている理由ですから。当然です」  
不老不死。

長寿。

そのためにリクは様々な呪い、薬を彼女の今までの経験、書物などから日々試行錯誤していた。千歳を常磐のために使うくらいなら自分が言い、リクは自らの体で様々な呪いや薬を試していた。

当然誰も成し得ないことを完成させるには、今まで誰も行ったことがないような事も行わなければならない。そのためリクは自らの薬の作用によって寝込むことも度々あった。

「……リク。薬や呪いの完成は確かにお前への依頼の範疇だろうが、それを試すのはお前じゃなくていいんだ。むしろそれは俺の役目だろう」

日々やつれていく彼女を見かね、何度か千歳はそう言った。だがリクは断固として首を縦に振らなかった。

『千歳様にそのようなこと、これ以上させられません』

千歳が今まで何度となく常磐のために奇妙な植物や薬、その他諸々を口にしてきたことを聞いたリクははつきりとした口調で言った。  
『千歳様と常磐様。お二人に優劣などありません。ですから千歳様が犠牲になどなれる必要はありません』

(……俺ごときにそこまでする必要なんてないんだけどな)

だがリクは笑みさえ浮かべて言うのだ。

『初めて私を厭わずに下さった千歳様のために何でもいいのです。』

何か、私に出来る事があるのならさせて頂きたいのです

不死を得る前に、そのための手段を得る過程で死ぬかも知れない。リクがこの家に来る前からそんな漠然とした意識があった。

昔はそれでもよかった。

けど今は……。

「昭ちゃんに辛い思いさせるのも嫌だけど、リクちゃんまでそんな

にならなきゃなんないの……？」

まだ幼さが残っている横顔は興太郎が生まれてからどこか母らしい強さを感じさせるようになった。ひとつ下だったはずの里久が、時折自分よりずっと年長にすら思える。

里久が妻として母として自分のそばにいてくれるのなら自分は夫として父として、里久と興太郎を守る。そのためには、本当に得られるかもわからない不死なぞのために自分を犠牲にするわけにはいかない。

（俺は卑怯だな）

リクの申し出を、本当は心のどこか有難いものだと思っている。里久と興太郎を守って平穏な暮らしを望むのなら、峯家を出ればいいのに。

近隣の村に自分の存在が知れ渡っているのなら、それよりももっと遠くへ行けばいいのに。

……けど、逃げられない。

間違いなく、他国へ逃げても峯家に連れ戻される。

この異形の目を以て先を見なくても分かる。

峯家はどんな手段を使っても千歳を逃がさない。

峯家の人脈、財力、それに何よりも常磐。常磐が見ようとしたのなら千歳の行動など筒抜けだ。

例え千歳が彼と同じものを見てそれに抗おうとも、常磐はその先を見る。

……イタチごっこだ。

この身は峯家と常磐のために在るもの。千歳をこの家に繋ぎとめるためならば、里久や興太郎を人質とすることも辞さないだろう。

「昭ちゃん？」

気付けば里久が心配そうに顔を覗き込んできていた。

「どうしたの？ 難しい顔をして」

「……何でもないよ。それより里久の額は今日も可愛いな」

里久の少し広い額に触れると、彼女は眉を吊り上げて手を払って

きた。

「あたしがおでこのこと言われるの嫌って知ってるでしょ？」

「可愛いんだしいいじゃないか」

「いやーなーのっ」

両手で額を隠すようにして、里久は口を尖らせた。

千歳はつまらなそうに小さく呟いた。

「可愛いのに」

「まだ言うかつ」

「あ、あの……」

控え目な声に、千歳と里久の視線が向けられる。

碗や薬を脇に置き、背筋を伸ばしてリクは控え目ながらも凜とした表情で告げた。

「千歳様。母屋までお越し下さいますよう大旦那様より託って参りました」

「……それは火急の用か？」

「はい。奥方様がお薬を飲まれたらならば、すぐに奥のお座敷へお出でになるようにと」

見えない。

見ようとしなければ、先は見えない。

それをこの十年で学んだ。

だけどこの時ばかりは、見るまでもなく気付いた。

その時が、来た。

リクの声や表情が、それを伝えてくる。

リクがこの家にいる理由が果たされたのだ。

不死か長寿。

そのどちらかが現実のものになるのだということ。

「……わかった。すぐに行く」

そう答えるとリクは深く頭を垂れた。

日が傾き始め、外からは秋らしい虫の声が聞こえ始める。



空は橙に染まり、影が濃くなり夜が近づいてくる。

渡り廊下を踏みしめる千歳とリク、二人分の足音が今日に限っては妙に大きく響いた。

リクは無言で千歳の後に付き、千歳もまた口を閉ざしたまま、暗がりに沈みゆく母屋から目を逸らしながら重い足を進めた。

思えば、こんな刻限だった。

自分と常磐の人生を大きく変えたに違いない、神隠しに遭ったのは。

黄昏時。

人とそうでないものが混じる刻限。

あの日。

神隠しに遭ったと言われ所在の知れなくなった数日間。自分たちは一体どこにいて、誰と何をしていたのだろう。

今更思い出せるはずもないのに、何故かそんなことを思った。

## 背理

奥の座敷には既に父と長兄、それに常磐が集まっていた。

一步座敷へ足を踏み入れれば、表の世界と分離されたような奇妙な緊張感に支配されていた。

薄闇に溶け始めた座敷内はふたつの灯りがゆらゆらと揺れる。背後で閉められた障子の音が今までの日常との別離の証のように感じられた。

柄にもなく緊張している。

いざ不死だの長寿だのを目前にして。

今まで現実味のなかったその言葉が実現するかもしれないことに畏怖している。

「里玖」

父の重々しい声にリクが一步前へと進み出た。

「はい。大旦那様」

リクは下座に就き、袖から竹筒を取り出した。

千歳と常磐はそれを黙って見ていた。

リクは竹筒から黒い丸薬を取り出し懐紙かいしに乗せた。その外観は普通の薬と大差ない。

「先日、人の頭に魚の身を持つ異形が国の外れで捕獲されたそうです。それを旦那様の指示によりこちらまで運んで頂き調査したのがこの薬になります」

「兄上、本当に人魚などが？」

常磐は訝しげに長兄を見上げた。

今や峯家の当主となったものの、病がちで細面の兄は小さく頷いた。

「使いの者をやって調べさせたが確かにそのような物だったと言う。こちらへは解体して運ばせ、私もそれを実際に見たのだが……」

そう言った兄の顔色が薄闇と灯りのせいではなく実際に陰る。

「私も確認致しましたが」

兄の言葉を継いでリクが続けた。

「頭はまさに人の女の物。しかし大きさは二尺（約六十センチ）ほど。通常の人の物ではありません」

リクの言葉に生来神経質で潔癖な気のある兄の顔色はますます陰る。

確かにそんな気色悪い物体を生で見たと言うなら、この兄には刺激が強すぎただろう。

さすがの常磐も口を開けて言葉もないらしい。

「それ故、運ばれてきた物はほぼ間違いなく人魚の肉。ですが実際に不老不死をもたらすかは不明でしたのでこのふた月ほど、様々な法を試して参りました」

淡々と薬師、或いは呪術師としての義務を果たす時のリクは常よりずつと年長の者に見える。

年長の者……と言うより、まるで別の者のように。これが呪に携わる道の者なのだろうか。

「この丸薬は人魚の肉、それに加え私が呪術師として学んできた知識から様々な物を調合したものです」

「様々な、って……」

常磐が顔を引きつらせてリクを見る。

「それは食える物なのか？ 毒とか妙な物とか入っていないよな？」  
リクは常磐から目を逸らさずに答えた。

「薬は用い方によつては毒にもなります。毒も同じように扱い方次第で薬にもなります。ですので常磐様の仰られる毒も調合されていることになります」

常磐の顔が一気に引きつった。

だがリクは気にする様子もなく続けた。

「作用はまず蝉で確かめました」

「蝉？」

「はい。蝉は通常、夏のごく限られた日数を生きるものです。です

がこの薬を服用させましたところ、水無月の終わりに飼育を始めた蝉はつい先日まで生きておりました」

水無月の終わりから、と言う事はふた月程度か。確かに蝉にしては長い。それに暦の上では今はもう秋だ。外へ出たところで蝉の声など聞こえてくるわけもない。

そこへ未だ顔色の悪い兄が口を挟んだ。

「だが不老不死ではないのか？　生きていた、と言う事はその蝉はもう死んだのだろうか？」

「仰る通りでございます。秋まで生きた蝉は人の手により、容易にその命を摘み取ることが出来ました」

千歳と常磐、長兄が揃って眉をひそめる。

「リク。悪いがもう少し分かりやすく言ってくれるか？」

千歳の言葉にリクは少しためらうように目を伏せてから、改めて千歳、常磐を見て凜とした声で告げた。

「では結果を申し上げます。私の調査した薬はおそらく生き物から老いを奪い、寿命を延ばす事が可能です。ですが死を免除する事は出来ません」

「それは」

千歳は声が震えぬように必死に抑え込んで言葉を発した。

「それは不老不死ではなく不老長寿と言う事か」

「その通りでございます」

静かな声で、リクは答えた。

その声に、その言葉の告げる事実が背筋が冷たくなった。

果たしてこれは人が手出しをしていい領域なのか。人の命を、老いていずれば土に還るという道理を覆すなど、それは本当に人が行っても良いものなのか。

まるで世界そのものと敵対したような、そんな得体の知れない恐怖を覚えた。

だがそんな恐怖を覚えたのは千歳だけだったらしい。  
「素晴らしいことだ！」

先程まで顔を引きつらせていた常磐が歓喜の声を上げた。

「それを飲めば、俺は永遠に老いることがないという事だな？　里玖」

「はい」

リクの静かだが確かな答えに、常磐は満足げに笑う。

「人の身に毒となるか否か。それも私が身を以て試しましたが試行錯誤の結果、あらゆる害となるものを除くことにも成功致しました」

「つまり、害なく不老長寿だけを得られるということだな？」

「はい」

その答えを聞いた常磐は尚一層、笑みを深めた。

「お聞きになりましたか？　父上、兄上」

「うむ」

父は厳しい表情を崩しリクを見た。

「良くやつてくれた、里玖」

「勿体ないお言葉に存じます」

深々とリクは頭を垂れた。

「千歳、俺達は大陸の皇帝ですら得られなかった不老長寿を得られるんだぞ」

常磐は力強い笑みで千歳を見た。

「あ、ああ……そうだな」

「何だ。その答えは。さては嬉しすぎて言葉にならないか？」

そうじゃない、とは口に出せなかった。

常磐も父も兄も手放しで喜んでいる。

だが千歳だけではどうしても喜ぶより先、得体の知れない恐怖があった。

先を見たわけじゃない。見る気も起きない。

ただ漠然と、本能的な恐怖を感じる。

だが何に？

それをうまく言葉にすることは出来なかった。

「それではこの丸薬を二粒お飲み下さい」

「それだけでいいのか？」

「はい。それで常磐様、千歳様の不老長寿は確かなものとなります。延いては峯家の繁栄を絶対の物とするでしょう」

「里玖。そなたも薬は飲んだのだったな？」

二枚の懷紙にそれぞれ丸薬を二粒ずつ乗せていたリクは、兄の言葉に手を休めて頷いた。

「はい」

「ではそなたも不老長寿を得たと言う事か？」

「そうなります」

そう頷いてから、リクは千歳と常磐の前にそれぞれの懷紙を置いた。

常磐は興味深そうに目の前に置かれた丸薬を眺めていたが、千歳はそんな気分にはなれず膝の上に置いた手を握りしめていた。リクが座敷の隅に用意されていた水を碗に注ぎ、薬の横にそれを置かれても固く握りしめた手を緩めることはできなかった。

それどころか、逃げだしたいという気持ちすら起き始めていた。

「二人とも、飲みなさい」

父の声に常磐は高揚した様子で丸薬を二つ口に放り込み、水で流し込んだ。

「千歳」

兄の声に千歳も薬へと手を伸ばした。

横目で常磐を見ると、特に変わりが無いがその表情は満足げだ。

……常磐は何も感じていない。

ならばこの不安は、頭の隅で鳴る警鐘は気のせいだ。

自分と常磐は同じモノを見るのだから。

だからこれは気のせいだ。

その間も父と兄、常磐、そしてリクの目は千歳に向けられていた。それは無言の圧力となり、千歳に早く薬を飲むように命じてくる。

千歳は薬を二つ手に取り、それらを口に放ってから碗の水と共に飲み込んだ。

丸い粒が二つ、喉を伝って体の奥深くへ落ちてゆく。その感触を消し去ろうと、碗の中の水を一滴残らず口の中へ注いだ。

たったこれだけ。

これだけで今まで誰ひとり得られなかった不老が得られる……？  
俄かには信じ難いほど、呆気ない。

喉から薬の感触が消えると、もう後には引き返せないのだと言う恐怖にも似た感情とそれに反して、こんなものと安堵する自分がいた。

碗を畳に置くと同時に、父と長兄の顔に笑みが広がった。

「これで峯家は安泰ですね」

「私も安心して隠居出来るというものだ。」

里玖

「はい。大胆那樣」

リクは居住まいを正して父と向き合った。

「そなたには是非今後とも峯家を見守ってほしい。無論、衣食住の保障だけでない。最高の客人としてもてなそう」

父が稀に見るほど上機嫌に言う。

「私などでよろしければこの命の限り、峯家にお仕えしたく存じます」

「うむ。しかし惜しい事をしたな」

独り頷く父は唐突に言った。

その父の次の言葉に千歳は言葉を失った。

「そなたがもう少し早く当家を訪れていてくれれば、千歳の嫁はそなたとしたものを」

目の前が真っ赤に染まるのと、鋭い音を立てて陶製の碗が割れたのはどちらが先だっただろう。

碗を拳で叩きつけた千歳の右手からは血が零れ落ちる。

「おい、千歳……」

「それはどういう意味ですか？ 父上」

常磐の声を遮り、千歳は父を睨み据えた。

父は不快げに眉をひそめた。

「何だ、その反抗的な態度は」

「答えて下さい。どういう意味ですか？　里久が俺の妻では不都合でも？」

血を流す右手が熱い。

父はその様子を見て、深く息を吐いた。

「下らん。里玖、直ぐに手当をしてやれ」

「はい」

千歳の手を取ろうとしたリクの細い手は強い力で振り払われる。

リクは呆然と千歳を見上げたが、当の千歳は彼女を見やることすらしない。

ただ真つ直ぐに父を睨み据える。

「答えを頂いていません」

父の鋭い眼光が千歳に向けられた。

「わざわざ口にしなければ分からねか。そなたの良くない噂はただでさえ近隣の村々までも知れ渡っているというのに、そんな中でどんな娘を連れてきてもそなたがと妻としなかった中で唯一受け入れたのが里久だけだった。だが里久は貧しい百姓の娘。何の取り柄もない百姓の娘と峯家の男子であるお前、つり合いが取れるわけがなからう」

吐き捨てるような父の言葉を全て聞き終わる前に千歳は立ち上がり、足音も荒く父の前まで歩いて行った。

「千歳っ！」

父の胸倉に手を伸ばした時、兄と常磐の声が座敷に響き渡った。

それに一瞬躊躇し、そのまま千歳は常磐に羽交い締めにされた。

「離せ、常磐！」

「頭を冷やせ！　お前、自分が何をしようとしているかわかっているのか！？」

「分かっているに決まっている！　自分の妻が侮辱されて黙っているか！！」

暴れる千歳とそれを抑え込もうとする常磐。



父は渋面で千歳から離れ、兄とリクに一言二言告げて座敷を後にした。

「離せっ！」

「いい加減にしろ、千歳！　ここで父上に手を上げてみよ！　お前の立場だけではなく里久や興太郎も処罰されかねないのだぞ！」

初めて聞く長兄の怒声に千歳は暴れることをやめた。

兄の言う通りだ。

父は自分の思い通りにならないことを許さない人間だ。もし千歳が父に手を上げるなどということがあったらなら千歳だけでなく、その原因となった存在である里久、それにその子である興太郎をも罰したか、良くて離縁させられかねない。

改めて自分の浅薄さに気付かされ、千歳は俯いた。

「……有難うございました、兄上。頭が冷えました」

「お前の気持ちもわからなくはない。だが、正論をかざしてもどうにもならないこともある。守りたいものがあるのなら、時には己を殺すことも覚えよ」

「……はい」

離れに戻る頃には日はすっかり落ち、辺りは灯りを持たなくては歩くこともままならないほど暗くなっていた。その暗闇が暗がりにな落ちたような千歳の胸の内をますます暗くさせる。

何度目かの溜め息を吐いて廊下を渡りきり、離れへと戻ると灯りと共に里久が出迎えてくれた。

「お帰りなさい。昭ちゃん」

「……ただいま」

彼女の変わらない笑顔に無性に泣きたくなった。

無邪気に見えて里久は鋭い。

千歳が母屋へ呼び出された理由など、とうに察しているだろう。それでも里久は自分から言うまで待つてくれる。自分で気持ちの整理がつくまで聞かないでくれる。

「……里久」

「うん？」

「リクの調合した薬は、本当に苦いんだな」  
それしか言えない。

こんな遠まわしにしか言う事が出来ない自分が情けない。

里久は少し間を置いてから、笑った。

千歳のよく知る、温かい太陽のような笑顔で言った。

「でしょ？ 泣きたくなっちゃうくらい、苦いでしょ？」

「ああ、本当に」

泣きたくなるほどに舌も胸の内も苦い。

「今なら興太郎もよく寝てるから泣いてもいいよ？」

屈託のない笑顔で里久はそんなことを言ってくる。

「父親になって泣けるかって」

「気にしない、気にしない。どうせもう泣きそうな顔してるんだから」

里久の手が伸びてきて千歳の頭を抱えるようにして抱いた。

母親も乳母も、こんな風に抱いてくれた記憶はない。

甘えることなど誰ひとり許してくれなかった。汚らしい畜生腹の子供だった頃も、予言の子として峯家の一員として認められるようになってからも。

気味が悪い。同じ顔が二人だなんて……。

峯家の男子として強く在りなさい。人の上に立つ者が弱みをさらすなどあつてはなりません。

理由は違えど、突き放されてきたのは同じだった。

唯一、そんな自分を抱きしめてくれたのが里久だった。

「……里久」

里久の肩に顔をうずめて小さくその名を口にのせる。

「うん？」

幼子をあやすように里久は背をさすってくれながら答えてくれる。  
両目が熱くなる。

すぎるように、里久の細い体に両手を回す。

「薬、苦かった」

「うん。苦いよね」

「……どうしようもなく、苦かった」

強く強く、里久の体を抱きしめて呟く。

里久は千歳の右手にそつと手を重ねてきた。

碗を割った時に怪我をして、今は白布が巻かれている。

「怪我したの？ 痛くない？」

「……痛い」

体中が痛い。

苦しくて痛くて、逃げ出したい。

何から？

あの傲慢な父から？

永遠に老いないかもしれない、ますます人間離れした自分から？

わからない。

わからないけれど、怖くて不安で仕様がなない。

「里久」

「うん？」

「……俺を、独りにしないで」

何故そんな事を口にしたのか。

大の男が年下の女にすぎるなんて、情けなくて愛想を尽かされた  
っておかしくないのに。

なのに、それでも里久は笑って答えてくれるんだ。

「大丈夫。あたしは昭ちゃんというよ」

そんな明るい声に、呆れるほどに涙が溢れた。

## 背理の末

数え十七の秋、千歳と常磐の時は止まった。それから何年経っても彼らは老いることなく十七のままだった。

それでも季節はめまぐるしく巡り、それでも各国の情勢も安定は見られず。そんな世でも峯家は確実に勢力を広げて行った。

その頃から峯家の人々は綾峯と姓を変える。綾は模様を織り出した上等の薄い絹のこと。そんなきららしい字すら今の峯家には相応しいと言われるほど綾峯家は隆盛を極めた。

隆盛の中、千歳と常磐の父が逝き、長兄も隠居してその跡を常磐の唯一人の子が継ぎ、千歳の子供四人が綾峯分家を興した。その四人の興した家が二ノ峰から五ノ峰と呼ばれるようになるのだが、それはまだ先の話である。

そうして千歳と常磐の周囲も大きく変わっていった。

自分たちは老いずとも周囲の者は老いて、そして土に還って行く。それは千歳の妻として例外ではなかった。

末の娘が他家に嫁いだ春、里久は床に就いた。

いつの間にか髪は白く、細い手は枯れ木のようになっていた。人の身の老いを、千歳はその時初めて実感した。そして自分が異形の者であるという事に否応なく気付かされた。

予言をする以外は幼い時分から何一つ変わらぬ生活を送ってきた千歳は、片時も彼女の側を離れようとはしなかった。今にも自分の手の中から離れてしまいそうな妻を、必死で繋ぎとめようとするように。

「そんなにずっとついていてくれなくても大丈夫なのに」

痩せた頬で、里久は床の中から微笑む。

千歳は書物から顔を上げて彼女を見た。

「もともと俺は先を見て何かしら言葉を言う以外はこの家で望まれてないんだよ。むしろ何もするなってね。ならせめて妻の看病をす

る」

看病と言っても本当にすることは何もないのだが。せいぜい食事の時に体を起こすのを手伝い、薬を飲ませ、話相手になることくらいしかできない。

もうどう手を尽くしても里久はそう長くもたない。

千歳と常磐と同じく、時を止めたままのリクがそう告げた時は目の前が真っ暗になった。誰よりも千歳が動揺した。

どうにかならないのか。

呪術でも外法でも何でもいい。

自分から老いを消し去ったように、彼女からも消し去ってくれと恥も外聞もなくリクにすがりついた。

だが、リクの答えは無情なものであり当然のものであった。

無理です、と。

人魚の肉はない。

薬ももうない。

何より、もしそんなことを千歳が言い出しても聞き入れないでくれと、里久に以前から言われていたと言う。

かつて感じた不老への不安。それはこれだったのかと絶望の片隅で思った。

老いないということは、里久と同じ時を生きられないということ。

里久だけじゃない、子供達とも。

里久や子供達が老いていても、自分は変わらない。

ずっとずっと、大事な者を見送り続けなくてはいけない。

ずっと、置いて行かれ続ける。

そして独りになる。

それがこの世の摂理に反して不老を得た代償。

「 昭ちゃん」

里久の穏やかな声が、暗闇に落ちた思考を拾い上げてくれる。

「ん、何だ？」

何とか平静を装った千歳に、里久は母のような優しい声で言った。

「リクちゃんを困らせちゃ駄目だからね」

それは里久に不老を言ったことか。平静の仮面は一瞬で崩れ去る。

里久はそんな千歳を見て目元を和らげた。

「あたしが死んだ後、生き返らせようなんてことも考えちゃ駄目だからね」

「やめろよ！ 死んだ後なんて……」

千歳の怒声に里久は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに落ち着いた表情に戻った。

里久にはもう長くないということは知らせていない。

知らせてはいないが自分の体のことだ。分かるのだろ。別離の時は近いという事が。

リクは彼女の身体を診る者として知っている。

常磐は先を見て、近い将来起こる出来事として知っている。

千歳は医学の心得などないから彼女の寿命を知るすべはない。わざと里久の未来を見ないようにしているから、先に起こることも知らない。

そうして千歳以外は皆、現実を受け入れた。

「昭ちゃん」

里久は窘めるような声で千歳を呼んだ。

その先を拒絶するように千歳は立ち上がろうとした。だが里久の細すぎる指先が衣を弱々しい力で握ってきた。

「昭ちゃん。あたしね、昭ちゃんのお嫁さんになれて本当に幸せ。有難う。たくさんあたしを大切にしてくれて、幸せにしてくれて」

優しい声が今は突き刺さるように痛い。

千歳はきつく目を閉じて、その別れのような言葉を否定するように首を振った。

「……昭ちゃんを置いて行くのはちよつと心配だけど、昭ちゃんは父様になってしっかりしたから大丈夫だよ」

しっかりなどしていない。いつまで経っても自分は幼いままだ。

変わらないのは外見だけじゃない。中身もだ。

「死んだらあたしの心は昭ちゃんにあげる。だから寂しがらないで。あたしはちゃんと昭ちゃんと一緒にいるから」

唇を強く噛みしめ、もう何を言う事も出来ない。

言葉が出てこない。

言葉にならない。

「それでいつか、昭ちゃんがあたしじゃない別の誰かに寂しくない場所を見つけたらあたしを捨てて、過去の人にして。忘れてしまってもいい」

「……そんな奴、現れるもんか」

やっと出たそんな言葉に、里久は小さく笑う。

「あたしは昭ちゃんの幸せを祈ってる。寂しくないように、幸せな気持ちで過ごせるように祈ってる。だからきつといつか、昭ちゃんが寂しくないって思える人と出会えるよ。それまでしつこく祈ってるから」

そんな人間、いない。

里久さえいればいい。

それ以外なんていない……誰も何も、いない。

「昭ちゃんには今だってあたしだけじゃないでしょう？ あたしと昭ちゃんの子供達だっている」

その言葉に千歳は顔を上げた。

里久はゆっくりと衣を掴んでいた手を千歳の髪に伸ばした。

「あの子達はあたしと昭ちゃんが一緒にいられた証。大事な大事なあたし達の子供。皆体は大きくなってもまだまだ子供だから、父様の昭ちゃんが側にいてあげて。あたしが叶わない分、見守ってあげて」

「……わか、ってる」

そうだ。

自分の世界には里久だけじゃない。

里久と自分の血を、面差しや性質を少しずつ受け継いだ子供達。

大事な宝物。

千歳は里久の手を取り、両手で包み込むように握った。

「あいつらの前ではちゃんと立派に父親をするよ。だから安心していい」

「そう？　じゃあ安心する」

にこりと里久は笑った。

「昭ちゃんと子供達がいてくれて、あたしは幸せ。大好きよ、昭ちゃん」

「……ああ。俺も大好きだよ」

それからひと月も経たないうち、里久は眠るように静かに逝った。別離の痛みで気が狂ってしまったほうが楽だろうと何度も思ったが、子供達を前では意地を貫き通して父親ぶった。

そうして葬儀も埋葬も終えてから独りで泣いた。

人の前に出る時は笑顔を貼りつけて。

そして独りになってから里久の死を悼んだ。

不変の存在であるはずの常磐の身に変化が現れたのはそれからしばらくしてだった。

最初は誰も気付かなかったが、着物の着丈が短くなっていた。気のせいだと思い誰も口にはしなかったが、気付いた時には常磐は千歳より背丈が伸びていた。かつては全く同じ背丈だったはずの、共に十七で時を止めたはずの弟よりも。

常磐は酷く動揺してリクに詰め寄った。

リクは涼しい顔で答えた。

『薬効が薄れてきたのでしょうか』

何故千歳とリクは変わらない？

その問いにも簡潔に答えた。

『千歳様は不老となる以前にも、常磐に代わって様々なものを口にしておられますからその影響でしょう。薬が完成するまでに私も様々なものを口にしましたので私もそのようなものかと』



不老が失われつつある身を前にして、常磐は半狂乱になって取り乱した。

だがリクは言った。

『策は講じてあります』

そしてリクは語り始めた。

千歳と常磐が不老となった後、リクと亡き父は万が一薬効が切れた際のことを話し合ったという。

人魚の肉などそうそう手に入るものではない。何か他の手段はないものか。

千歳も常磐も預かり知れぬところで、そんな会話が交わされたのだという。

そうしてリクが辿りついた答え。

人魚の肉に代わるものがあればいい。

リクの呪術と残った人魚の肉。これを以て、人魚の肉に代わるものを永遠に峯家に置くことが出来るとリクは父に言った。

それは人魚の肉とリクの受け継いできた呪術、そして人の身があればよいのだという。

父は、どんなものでもいい。予言の子たちを峯家に留め置いてくれと言った。

リクはその呪法について説明した。

以前使い、残しておいた人魚の肉を峯家の血の者に食べさせる。

そしてその後リクが呪いを施す。

それだけのものだった。

それだけで、人魚の肉の代替品が出来上がる。

リクの呪術を受けた人間の血は、千歳と常磐にとって人魚の肉と同じように不老長寿をもたらす。

そして呪術を受けた人間の血を受け継ぐ子々孫々は、全てではないが同じように人魚の肉と同じ効果を持った血を流し生まれてくる、と。

同じ血族の血を口にしても不老を望むか。

そうリクは父に尋ねた。

父はためらうことなく頷いた。

そして本家当主……常磐の子がその呪術の対象に選ばれた。本家ならば何をしておいてもその血が耐えることはないはずだ、として。

当初は自分の子に自分のあずかり知らぬところでに奇妙な呪いを施したリクに掴みかからんばかりの勢いだった常磐も、次第にそれによって自分の不老が保たれるならと大人しくなっていた。

常磐は子の血を口にし、再び老いることのない身となった。千歳が自らのために子の血をすすめるのかと非難すると常磐は言った。

何も死ぬほど血を奪うわけではない。

答えた常磐の笑顔は、千歳の知る常磐のものではなかった。その顔は狂気に満ちていた。

それから千歳も血を口にするようにとリクと常磐が勧めてきた。

だが千歳はそれを拒んだ。

これ以上異形となるのは御免だ、身内の血をすすってまで生きながらえるつもりはない、と言って。

そうして拒否し続けた千歳の説得にあたったのが、彼の子供達だった。

父上。どうか血を口にして下さい。

父上と伯父上なくして、綾峯家は成り立ちません。

後生です。父上。

『見守ってあげて』

リクの言葉が耳に蘇った。

そついう意味じゃない。

歪んだ存在となつてまで、生きろという意味じゃない。

それは分かっていた。けれど、今や自分にとって子供達以上に大切なものなどない。

やがて千歳は頷き、甥の血を口にした。

それから時折生まれる人魚の肉と同じ効果のある血の者は『当たり』と呼ばれるようになり、代々千歳と常磐にその血を捧げ、大切に育てられた。

当たりと知る手段はあるのかと当初不満げだった常磐の心配は杞憂に終わり、当たりの者は千歳と常磐の側にいると、自分がそうである血が騒ぐのだと本人達が言った。

そうしてその血は受け継がれていった。

綾峯家の繁栄と共にその血も呪いも延々と。

時代が変わり綾峰と字を変え、どれだけの人間が変わっていてもそれだけは変わることなく。

「……これが、綾峰本家の呪い」

静かに厳かに、千歳は告げた。

「五百年、続いてきた呪い。子孫の血をすすって俺はこの家で生きてきた。……俺がこの家の呪いだよ」

そう言っただけ千歳は小さく笑った。

今にも壊れてしまいそうな、そんな不安定な笑みで。

何か言わないと思うのに言葉が出てこない。言葉を探す私の前で千歳は言った。

「結患の血が『当たり』って意味はもうわかっただろ？」

「……私の血は、千歳の老化を止める」

やっと出た言葉に千歳は頷いた。

「そう。だから『当たり』の子供は綾峰家最奥に永遠に縛られる。逃げられないように、俺を生かすために、その自由を奪われこの家に縛り付けられる」

「じゃあ、私も……？」

千歳は足を投げ出し、軽く息を吐いた。

「当たり前だって他の奴らに報告すれば、逃げることは難しいだろうな。最後に当たりの血を飲んだの、けっこ前だから」

いい加減新しい血が必要なのかもな。

そう、他人事のように呟いた。自分のことなのにまるでどうでもいいように。

それがとても不安で胸をかきむしられるようで、そして『今』生きている自分自身に頓着がない千歳が哀しくて仕方なかった。

この人のために何かしたい。そんな傲慢を思いながらも、その何かを思いつくこともない自分が心底虚しくて苛立たしかった。

## 真実は黒の子

一度気を落ち着けようと思ったが、色々な事がめまぐるしく頭を巡るばかりだ。

千歳が神隠しにあつた先祖二人のうちの一人で。

本当に予知し、予言してきて、不老長寿で。その不老を長引かせるのに私の血が必要で、そのくせ私は千歳のために出来ることなくて何もなくて……。

そして多分、本家が絶対的な権威を持つのは人魚の肉と同じ『当たり』の血の人間が産まれるからだろうと、混乱する頭の片隅でいやに冷静に考える自分がいた。

「わけわかんない……」

額に手を当て俯き、思わず口から零れた言葉に千歳は笑う。

「だよな。神隠しに予知に人魚に不老長寿。普通驚くよな」

「驚いたって言うか……」

顔を上げると千歳と目が合った。今にも泣き出しそうに見えるその目と。

「……千歳は五百年くらい生きてきたんだよね？」

「うん。実はギネスに載れるくらいご長寿なんだよ、俺」

戸籍はないけど、と言つて千歳はまた小さく笑みを零した。

「だからさ、もう俺自身が何かを犠牲にしてまで生きようなんて思わないんだ」

「え？」

千歳の陰るような笑顔が胸に刺さる。

「子供達は、里久が遺してくれた子達は俺を望んでくれた。その子供達もそのまた子供達も。望んでくれるなら俺は生きたいって思うけどそうでないならいつ死んだっていいと思うんだ」

「千歳……」

「結恵が『当たり』だつて広まれば、もう結恵は永遠にこの家から

逃げられなくなる。死ぬまで綾峰に縛られることになる。それを嫌だと思ふならそう言っていんだ。結恵は選べる。自分でこの家の『当たり』になるかどうかを」

それはこの家に縛られるか、それとも何事もなかったかのように日常に戻るかを選べるということ。

そこでふいに気付いた。

「おじいちゃんは選んだの？ 私と同じように当たりだったおじいちゃんは……」

私と同じように当たりだったという祖父。けどその祖父はかけおちして家を出て、死んでもこの家に帰る事はなかった。

本当に『当たり』だったのなら、千歳が言う通りならそんなこと出来なかっただろうに。

「義将が当たりつてのはけっこう知られてた。あいつは生れた時からこの家にいたから。……だから選ばせた。この家に縛られるか、

この家を捨てるか」

「どういう意味？」

千歳は目を閉じて笑った。

「義将が好きな女ができたって言うてきたんだ。それでその人と結婚したいって」

「それって、私のおばあちゃん？」

「そう。けど当たりの人間は綾峰本家の中でも特に大事にされるから、一族の中から結婚相手を選ぶことになってる。でもそれじゃあ義将は自分の好きな相手と一緒にすることもできない。だから選べって言った」

「それでおじいちゃんは選んだの？ この家を、千歳を捨てる道を」

私の言葉に千歳は苦笑する。

「捨てたって言ってるなよ。俺はあいつの所有物じゃないんだからさ」

「い、ごめん」

「別に謝らなくてもいいけど、うん、とにかくそういうことだな。あいつは結恵のばあちゃんと結婚するためにこの家を出た。当然色々うるさく言う連中はいたけど、あいつを追ったら俺が舌嚙んで死ぬって大騒ぎして納まった。不老って言っても死なないわけじゃないからな。ま、あの頃はまだ桂子も結婚してなかったからそっちの子供に期待が持てるって状況だったってのもあるんだけど」  
明るく言っけれど、実際はとんでもない騒ぎになったんじゃないのか。

この家が今まで一度として没落して来なかったのは千歳とその双子の兄が先を見てそれを予言してきたからで、もしそれがなくなったらこの先の保証なんてなくなるのだから。

千歳の緩やかな寿命を待つか、それともその場で自害させるか。当時の綾峰の人々に大問題だっただろう。

……あれ。

ここですよやく、つい忘れていたことがあったことに気付いた。

「ねえ、そう言えば草次郎って人は？ 常磐っていう人はどうなったの？ あの人だって血を必要としてたんでしょ。おじいちゃんがこの家を捨てて逃げた時、その人は何も言わなかったわけ？」

話を聞いていただけではとてもそうは思えないが。

けれどその言葉がきっかけになって、次々と疑問が浮かぶ。

「そうだよ。常磐って人だけじゃない。リクって人。千歳と常磐を不老にした人は？ 本家に呪いをかけた人は……」

そこまで言っと思って至る。

「ごめん。話がぼんぽん飛んで悪いんだけど、先に言わなきゃいけないことがあった」

顔を上げてまっすぐに千歳を見る。

「ん？」

「千歳は自分をこの家の呪いだって言っただけど、違うよ。千歳は呪いなんかじゃない」

反論なんて許さない強い声で、一寸の迷いなくそう口にする。

だって事実だ。千歳は呪いなんておどろおどろしいものじゃない。だから自分で自分を傷つけるように、そんなことを言わなくていいんだ。

「千歳は友達で、私の遠いご先祖の兄弟で、ちょっと長生きなだけで、寂しくて、ありえないくらいマイペースで、信じられないくらい優しくって……私の大事な、大好きな人だよ」

千歳から視線を逸らしそうになるのを、両手に力を入れて堪える。そうでもしないと逃げ出してしまいそうだから。

告白と言うには足りない言葉。

けど私にとつては告白にも相当する言葉。

出来るなら自分の中の誰にも侵されない場所で静かに眠らせておきたい気持ち。

自分にとつてもまだまだ曖昧な、千歳に対する『好き』って気持ち。

家族が好きって気持ち。

友達が好きって気持ち。

かわいい物や楽しい物が好きって気持ち。

……あるいは、これ以外の好きって気持ち。

千歳に対して抱く『好き』はこの中のどれだろう？

それともこれ以外の好きなんだろうか？

それはまだわからないけれど、確かなのは私は千歳が大事だということ。傷ついてほしくないということ。

そんな、自分が無価値みたいに思わないでほしいということ。

「千歳は他に代え難い、大事な人だよ」

千歳は黙ったまま大きく目を見張った。

「呪いなんかじゃない。具体的に呪いが何かなんて知らないけど、多分人を不幸にするものでしょ？ だったら千歳は呪いなんかじゃない。絶対に」

千歳は理解不能な出来事が起こったかのような顔で私を見ていた。「……千歳が人を不幸にするようなものなら、私のおじいちゃんは



この家を出れなかった。おばあちゃんと結婚できなくて、お父さんも生まれなくて、つまりは私もここにいなかった」

「ああ、まあ……そうか」

千歳の曖昧な相槌に胸を張って答える。

「そうだよ。千歳のおかげでおいしいちゃんはおばあちゃんと結婚できた。私も……しんどいこといっぱいあるけど、でも生まれてくれて良かったって思う。苦しい事も嫌な事もいっぱいある世界だけど、それ以上に嬉しい事も幸せな事もたくさんあるこの世界に生まれてくれて本当に良かったって、そう思う。それは全部、千歳のおかげだよ」

「そんな大袈裟な」

軽く笑う千歳の顔面に手近なクッションを投げつけた。

「大袈裟なんかじゃない！」

千歳はもろに顔面で受けたクッションを拾い上げながら、呆けたように私を見てきた。

前にも確かこんな会話をしたな。

今さらになって気づく。千歳は自身に対して過小評価だ。五百年も生きていれば達観したようになってても無理はないと思うけれど、それにしたって自分をそんなに卑下することないのに。

「千歳は自分のことどうでもいいみたいく言うけど、私にとってはどうでもよくないの！ 家族とか友達とか、大事な人間が自分をどうでもいいって思ってた嬉しい奴なんているもんか！ だからそんな風に言わないで！」

私には大事と考える人間なんて数少ないからこそ思う。

呆けたような顔のまま、千歳の口が何か言おうと開きかけた時。

「結恵の言うとおりだ」

唐突に割り込んできたその声に、私と千歳は揃って息が止まりかける。反射的に声のほうを見ると、少し離れた場所に無表情なのにどこから怒りを滲ませた鷹楓が立っていた。

「鷹楓！？ え、何でここにいるの！？」

「どっから入ってきたんだよ……？ うわ。全然気付かなかった」

鷹槻は私と千歳の疑問には答えず、偉そうにやってきて私の隣にどっかりと腰を降ろした。そして腕を組んで、どこの王様だというくらい偉そうに言い放った。

「普通にいつもの入口から」

「いつものって……」

私が初めてここに来た時、鷹槻と出て行った隠し扉のほうを見るがそこは壁と一体化して全くわからない。

一体いつ開いて、いつ鷹槻はこの部屋に入ってきたのか。全く気配がなかったのだが。

千歳は呆れ半分驚き半分に鷹槻を見た。

「今日は隠し扉だけでなく、本家屋敷全体の警備がいつもより厳しいはずなんだけど？」

「知ってる」

ふんぞりかえって鷹槻は言う。

「だからわざわざその警備を掻い潜ってきたんだろうが。警備に抜け道ができる時間帯とか調べさせてだな」

「調べさせてって……誰に？」

話についていけないながらも尋ねると、鷹槻はしれっとした顔で言った。

「あいつら」

「あいつら？」

その言い方は私も知っている相手、ということだろう。と言うと、四葉達？

目を白黒させて鷹槻を見ると、彼は黙ってると言うように口元に人差し指を当てる。

そして千歳に視線を向けた。

「さつき結恵の言ったとおりだからな。お前、もう少し自分のこと大事にしろよ」

それは鷹槻とは思えないほどに強い口調で。

いつもの淡々とした、抑揚少なで無表情な彼なんてどこにいったのかというくらい、強い意志を持った声でそう言う。

「お前はお前の事どうでもいいって思ってたもな、俺らはそうじゃねえんだよ。お前がいなくなったら俺はこれから誰に茶を淹れさせればいい？ 寝れない夜に誰のところに暇つぶしにくればいい？」

早口にけっこう勝手な事をまくしたてる鷹槻に啞然としてしまう。鷹槻ってこういう奴だったのか……。

だけど鷹槻も千歳が大事なんだってことは伝わってくる。大事に思ってるからこそ怒っている。

「家が居心地悪くてどうしようもない時ここに置いてくれたこと、俺は感謝してる。こんな呪われた家、大嫌いだけどお前のおかげで今日までやって来れたんだからな。俺が珍しく他人に感謝なんてしてるんだ。素直に受け取っておけよ」

鷹槻の言い方は一方的で、ともすれば傲慢もいいたころで。

それでも鷹槻なりに千歳に伝えようとしてる。

私達は千歳が大事で、大好きなんだってこと。

千歳は呪いなんかじゃないってこと。

「お前らは……」

千歳は固まっていた相好を崩した。

そして両手を私と鷹槻に伸ばしてきて抱き寄せた。

「んつとにいい子に育ったよ。お前らは」

「ガキ扱いかよ。クソジジイ」

「子供扱いやめてよ」

私と鷹槻の抗議もどこ吹く風。

千歳は私達を抱き寄せたまま俯いた。

「……お前らみたいのにこうして直で会えて、五百年生きてきて良かったって思うよ」

呟きにも似た言葉に、私と鷹槻は顔を見合わせた。

千歳には見えないように鷹槻は小さく笑った。つられるようにして私も笑った。

「だろ？ その上俺達は千歳が今思っている以上にいい奴らだぜ？」

鷹槻の自信に満ちた言葉に千歳は顔を上げた。

その顔と目が合うなり、鷹槻ははつきりとした声音で言い放った。  
「俺達がお前の呪いを解いてやる」

「……お前、何を？」

千歳の端麗な顔が驚き一色に染まる。

だが鷹槻は一切動じない。

そしてそれは私もだ。

「私はまだ詳しい話は知らないけど、千歳はどう考えてもこの家の犠牲者じゃなか。だから、私達が千歳の呪いを解く。もう二度と自分なんかどうでもいいみたいな考え持たせないから、覚悟しとけ」  
「結恵まで」

鷹槻は千歳の腕から離れ、ぐるりと部屋を見回した。

「俺がこの家の歴史を聞いた時は『あいつ』には会えなかった。けど、この家のどこかにいるんだろ？」

「あいつ？」

鷹槻は小さく頷く。

その目はまさに鷹のように鋭く千歳に向けられた。

「この家に呪いをかけた張本人、里玖」

「鷹槻……リクは」

千歳の咎めるような声音にも鷹槻は怯まない。

「俺をなめるなよ、千歳。この家のあらゆる文書は全て目を通してある。それこそ千歳が生まれた直後のものから近代のものまで」

千歳は黙って鷹槻の言葉の先を待った。私もただその言葉が発せられるのを待つしかできない。

そして鷹槻は口を開いた。

「千歳と常磐を不老にし、本家の血に呪いをかけた張本人、里玖はただの殺人者だ」

「……え」

鷹槻はまっすぐに千歳を見据えていた。

千歳は目を伏せ、重い息を吐いた。

「千歳？ 何、どういうこと？ 殺人者って……鷹槻も説明してよ」  
千歳は目を伏せたまま私から手を離し、ソファに深く腰掛けた。

## 黒に歪み堕ちる

黙り込んだ千歳の代わりに鷹槻が口を開いた。

「そのままの意味だ。この家の裏歴史みたいなもの……たとえば千歳達が不老を得た事とか、稀にあったお家騒動みたいなもの。そういうのがごく一部の人間しか見れない記録として残ってるんだよ。どんなものでもこの家を形作ってきた歴史には違いないからって。そういうのには全てが書かれていた」

更に鷹槻は続けた。

「三年かかった。ただでさえガキの手の届くところなんかには置いてない文書だった上、古文書だ。更には暗号じみた部分もあった。けどそれを全て読んだ。読んで、知った」

鷹槻の声が低く鋭く砥がれる。

「五百年前にこの家に雇われた呪術師、里玖について」

千歳は顔を上げず黙ったままだった。

室内を支配する空気が重苦しい。

それから逃れたくて、私は鷹槻の袖を引いて先を促した。

鷹槻は一度頷きそして口にした。

「第三者目線の記録だった。そこに書かれていたのは、年老いない綾峰家お抱えの薬師、里玖がその薬によって綾峰一族を助け、そして殺してきた記録」

その低い声に、最後の短い言葉に息を呑む。

声を出そうとする私を鷹槻は目で制して続けた。

「里玖は確かにある意味では綾峰に忠実な奴だ。綾峰にとって不要な、あるいは不穏分子になりかねない人間を次々とその薬だの呪いだので殺して行っただけだからな」

「……お前の歳でそこまで調べた奴は初めてだよ」

千歳は俯いたまま深く息を吐いた。

「千歳は知ってたの？ 千歳が今まで生きてきたのは里久さんが遺

した子供達に望まれたから、子供達を守りたいって思ったからなんでしょ？　なのに何で黙って……」

「こいつは意外に鈍いんだよ。妙なところで他人を信じすぎる」  
言い募る私を抑えるように鷹槻は言った。

「え？」

鷹槻は千歳へ視線を向けて言った。

「里玖って女の本性に気づけなかった。そうじゃねえの？」

千歳は答えない。

答えないという事こそがその問いに肯定している。

「でも、もう知ってるんだろ？　里玖って奴は、お前の……」

「鷹槻！！」

その淡々とした声は千歳の怒声によってかき消された。

今しがたの声がとても千歳から発せられたものとは思えなくて、言葉を失う。それは私だけでなく鷹槻もだ。

いつだって温厚な千歳がこんな風に激昂するなんて、想像もつかなかった。

たった今目前にしたというのに、それすら幻だったのではないかとすら思ってしまう。

「……悪い」

千歳は肩で息を整えながら、ソファに座り直した。

鷹槻はそれを見てから小さく言った。

「俺も……悪かった」

鷹槻の謝罪に千歳は首を振った。

「いや。お前の言うとおりだから。本当の事だっただけでわかってるから自分を抑えられなかった。……全く。いい年して俺もガキかったの」  
乾いた笑い声をあげてから千歳は私を見た。

今にも崩れてしまいそうなその表情が痛々しくて、観ているこちらのほうが泣きなくなった。

「結恵に至っては何が何だかわかんないよな？　悪かった」

「……ううん」

「千歳」

鷹槻の静かな呼びかけに千歳はそちらに視線を向けた。

「言葉にしたいくないなら俺が言う。千歳には悪いと思うけど、でもこのまま結恵をあいつに会わせる気はねえ。結恵自身が何と言おうと、全部教えてからじゃなきゃ行かせない。結恵はもう俺にとって『身内』だ」

淡々としているのに強い声音。

その強い目と口調を見定めるようにしてから千歳は眉根を寄せ、重たい口を開いた。

「……リクは、俺の妻の里久を殺したんだ。今となつては証拠は……ないけど」

「え」

「あの当時の綾峰一族の命はリクが握っていたと言ってもいい。ちよつとした不調や怪我にも腕のいい薬師だったリクが全て任されていたから。……そんなだったから」

「毎日のちよつとした不調の薬の代わりに緩やかにしに至らしめる毒を混ぜる事くらい、造作もない」

辛そうな千歳の言葉を引き継ぐように、鷹槻が言った。

「うそ」

思わずそんな言葉が口から転げ落ちる。

「だって千歳、幸せだったって……三人で」

たった今、三人で幸せに過ごしてたって聞いたばかりなのに。

そんなことって……。

だけど千歳は唇を噛みしめ、俯いてしまった。膝の上で組んだ手が微かに震えている。

それが全て真実なんだと教えてくれる。

「何で、何でリクが……千歳の奥さんを……？」

私は顔を上げて鷹槻を見た。

「何で、千歳の口からこんなこと言わせるの？　こんなの……」

「人の口から言われるほうが嫌なことだってある」



鷹槻はまっすぐに私の目を見て言った。

あまりにまっすぐに見つめられるものだから私のほうが悪いような気がするきて、つい目を背けてしまう。

「でも……でも、何で今言う必要があったの!？」

どうしても話さなきゃいけないことなら、千歳のいないところで教えてくれればよかったのに。

それでも千歳が話さなきゃいけないことなら、せめて前もって話してくれって言うておけばよかったのに。

鷹槻が言ったようにどんなに辛い事でも他人の口から話されたくない気持ちも分かる。

鷹槻だつて千歳を気遣つてゐるって分かつてる。

でも私は……千歳にこんな辛い顔してほしくない。

「結恵。鷹槻を責めてやるな」

気付けば千歳は疲れた顔で微かに笑っていた。

「千歳……」

「そいつもお前のことを思つてやつてゐるんだから」

「え」

鷹槻を見ると、今度は鷹槻が目を逸らした。

千歳は小さく笑ってからその表情から笑みを消し、まっすぐに私を見据えた。

「結恵がもし、自分を『当たり前』だと言うなら、結恵はこれからリクのもとへ行くことになるから」

「……いるの？ リクが」

目を見開いて千歳を凝視してしまう。

千歳は無言で頷いた。

「一応これも代々の慣例なんだ。『当たり前』はリクの元へ挨拶に行く。リクは綾峰に多大な恩恵をもたらした人間として、生き神のよくに扱われているから」

「生き神……」

その言葉をいつか聞いた。

そう、律の怪談だ。

半魚になった綾峰の祖先。

実際は祖先ではなく、その祖先に仕えた人間だったわけだが。

「けど」

千歳は言った。

「当たり前はずれを見極めることは他人には出来ない。その血を口にするまでは。だから基本的には自己申告になるんだ。つまり、結恵が『当たり前』だと言うなら結恵は当たりの子。外れだと言うのなら外れになる」

「……選べってそういうこと？」

震えるように発せられた言葉に千歳は一度だけ頷いた。

脳裏を以前聞いた言葉が過る。

逃亡者の血。

以前、三ノ峰だという大人は祖父を『逃亡者』と呼んだ。

祖父はこの家に縛られることよりも祖母と生きることを選んだ。

それがこの家の絶対を揺るがすことになるとしても、この家を出た。本人が逃げたつもりはなくてもこの家からすれば立派な逃亡だっただろう。

祖父は私とは違って『当たり前』だと多くの人間に知られていたというのだから。

……私はまだ、逃げられる。

この家から。

血の呪いから。

私はまだ、正々堂々とこの家から出ることが出来る。

そう思いながらきつく目を閉じ、両手を握りしめた。

逃げることは悪い事じゃない。時には必要な選択。

どんなに悔しくて不本意で、他人に後ろ指さされることがあろうとも。

責任を捨て去り逃げることに。無謀を知らながら敢えて逃げないこと。

前者は自身の矜持への裏切り。

後者は自身を軽んじる行為。

時として選択は非情な物だ。以前、祖父にそう言われた。

選ぶことは同時に何かを捨てるという事でもある。だからこそ自分の信念を持て。捨てた痛みを引きずることがあっても、その選択を後悔することのないように確かな意志を持ちなさい。自分の決めた事は、最後まで貫き通しなさい。自分の選択に、生き方に誇りを持ちなさい。

優しい手はそう言って私を撫でてくれた。

強く優しい人だった祖父。

あの人ならどうするだろう？

優しくて、怒ると怖くて、頭がよくて、時々大人げなかった自慢の祖父は。

……ああ、きつとこう言う。

私の言うかもしれないことを想像している暇があつたら自分のすべきことを考えなさい。私と結恵は別の人間なのだから、いつまでも私のことばかり気にして自分を疎かにするんじゃない。

そんな風に怒られる想像がリアルに出来てしまい、つい身が竦む。いつだって確固たる自分を持つおじいちゃんに強く憧れていた。憧れて、ああなりたいと思っていた。

だからおじいちゃんの行動をなぞろうと努力した。

けどそれでは結局、私の憧れのおじいちゃんの行動から外れて行っているのだから笑い話だ。私は他人の行動の猿真似しかできない自分になりたいわけじゃないのだから。

私はゆっくりと瞼を持ち上げ、千歳を見据えた。

「決めたよ」

千歳と鷹槻の視線が向けられた。

ひと呼吸して、私は私の選択を口にする。

「私は『当たり前』だ」

千歳の目が大きく見開かれ、鷹槻は全くと言っていいほど反応が

ない。

そんな対照的な二人の反応を見ながらひとつひとつ、私の思いを言葉にして行く。

「私は綾峰を利用するつもりでここに来た。この家の地位と権力を以て、私が私でいるために。ここに縛られようが何だろうが、私の当初の目的は果たす。むしろ、それだけ深く綾峰に関係すれば私の地位は絶対安泰でしょ！　そういうわけで、私は『当たり前』！　さあ敬え！」

そう言い放ち、呆然と私を見やる二人に胸を逸らす。  
言葉がないとはまさにこのことか。千歳は軽く口を開けてそれこそいつかの私のように瞳孔が開きっぱなしになりそうだ。

鷹槻は軽く眉を顰め、無表情に近い顔に軽く困惑の色を滲ませている。

私はその空気に耐えきれず、軽く二人を睨んだ。

「……何さ」

「………お前、バカだよな」

そう言ったのは鷹槻。

眉を顰めたまま、まっすぐに私を見てくる。

「バカじゃないっつの」

「バカだろ？　いや、変人か」

鷹槻は意地悪げに半眼になって薄い唇を吊り上げた。

そう言えば言われた。この家の全てを聞いて、それでもこの家に残りたいと思うことが変人のようなことを。

滅多に表情を変えない鷹槻の希少な笑顔に、私は挑むように噛みつくように言う。

「変人上等。変人くらいのほうが大成するんだよ」

「まあ歴史を見てもだいたいそうだな。常識に捕らわれる人間はある程度までしか行けない。本当に上に行くなら型破りが過ぎるくらいのほうがいいだろ」

「そーいうこと！」

「……お前らは」

千歳が心底うんざりしたように額に手を当てて、低く呟いた。

「平穩無事に人生送ってほしいって親心を少しは察しろよ」

その言葉に私と鷹槻は顔を見合わせる。

「親心って、何か千歳、急に老けこんだね」

「ひいひいひいひい……とにかく、大昔のじいさんだろ？」

「あーそうはつきりじいさんとか言われると腹立つけどな、この際それは置いておこう。今はそれよりも結恵だ。短慮もほどほどにしておけよ？」

「短慮って失礼な。私だってちゃんと物を考えてます！ 考えに考え抜いて、それでちゃんと答えたのに何て失礼な言い草。頭から決めてかかる嫌な大人みたいなこと言わないでよ」

「ちゃんと考えた人間がこの家にわざわざ……」

「ここで全部忘れてこの家を出たら、私は一生後悔する」

千歳の言葉を遮るように言い放つ。

「自分が選んだことを後悔なんてしたくない。痛みが残って結果辛い事があったとしても、自分の選択を失敗だったと思うような生き方したくない。どんな結果になったとしても、胸を張って私はその時最善のことをしたって言える生き方をしたい」

そんなこと、土台無理な話なのかもしれないけれど。自分自身に後悔せずに生きて行くななんて理想論でしかないのかもしれないけれど。

でもそう思うんだ。

「今ここで何もなかったことにしてこの家を出て行ったら、私は絶対後悔する！ まだこの家に来て日は浅いけど、おばあ様や千歳や鷹槻や皆が大事だって思うんだよ。大事な人達放って、自分ひとりが何事もなかったフリして生きて行くななんてそんなの絶対嫌だ！」

千歳は渋い顔で私を見た。

「それでも……」

「俺達の意見を最大限に尊重してくれるんだろ？ 遠いご先祖の千

歳サマは」

鷹槻の堂々たる声が、千歳の言葉を遮った。

「義将じいさんがこの家を出た時も、お前の子供達が血を口にして永遠に生きるって言った時だってお前は止めなかったんだろ？ 本人達の意見尊重ってことで。なのに何で結恵の意見は聞き入れてやんねえんだよ」

「……鷹槻」

千歳が何か言おうとするが、鷹槻は構わずに続けた。

「お前の個人の意見大事にするとは好きだよ。感謝もしてる。……でもだったら、千歳も千歳のことを大事にしろよ。子孫が大事だって言い訳にして、今のお前は自分の思いを隠してるだけだろ！？」怒鳴るような鷹槻の言葉に、千歳の瞳から色味が失せる。

「五百年も血が繋がってるって理由だけで他人に生き方決められてんじゃねえよ！ お前にだって生きてるからには自分で考えて自分で生きる権利があるんだからな！」

鷹槻がこんなにも感情的に怒って、饒舌で。

千歳がこんなにも人間的でただの人に見える。

それはとても不思議な気分だった。

私が見てきた千歳はどこか浮世離れた不思議で掴みどころのない、人離れた人で。

鷹槻は感情なんてないように無表情で言葉少なで、喋っても何を考えているのかなんてさっぱりわからなくて。

言葉も出ずにそんな二人を見上げていると、千歳が深い溜め息と共に口を開いた。

「……俺にそんな口きいた奴は初めてだ」

「五百年間誰も言わなかったってことのが不思議なくらいだ。……千歳。お前はこの家にとつちや呪いだけど、でもその呪いはいつだってお前が望めば解けるはずだった」

「そつだな。うん、そつだ」

千歳はひとりごちるように言った。

「この家の呪いがいつまでも続いたのは鷹槻の言う通り、俺の責任が大きい。俺が不老長寿を拒めば。人間として生きていればこの家はこんなにも歪む事はなかったんだろうな」

ぼつりぼつりと一言一言を紡いでいく。

その姿に酷く胸が締め付けられる。

千歳ひとりが重い重い責任を負っているようで。今まで生きてきた千歳を彼自身が否定しているようで。

千歳と鷹槻の言葉は正しいのかもしれない。

けど正しいことが必ずしも良いことではない。その見極めはとても難しいことだけれど、少なくとも今までの自分を否定する千歳を見ることは辛い。

鷹槻だつて千歳を大事だと言つたのに。なのに何でそんなことを言つんだと声を上げようとした時、鷹槻は言つた。

「じゃあ今から呪い解きに行こうぜ」

その言葉に千歳は目を丸くして鷹槻を見上げた。

そんな千歳を見下ろしながら鷹槻は強い調子で言つた。

「言つたろ？ 俺達がお前の忌々しいことこの上ない呪いを解いてやるつて。な？ 結恵」

突然話を振られ、一瞬硬直する。

だがすぐに大きく首を縦に振つた。

「呪われた家なんて今時流行らない。そんな家で私の野望を果たせるもんか。つてわけで、解く！」

半ば自分に言い聞かせるようにそう言う。

本当にそんなことが出来るのだろうか、と虚勢を張った胸の内では思いながら。

五百年もの間、続いてきた人智を超えた非現実的な存在。その中心であるうリクに対する得体のしれない恐怖を感じながら。

室内を沈黙が重く覆つ。

鷹槻は強い目線で千歳を見下ろし、千歳は唇を噛みしめ俯いている。

そして私はそんな二人の動向を見つめるしかできない。

やがて、千歳は私へとそのアーモンド形の目を向けてきた。今までにない、畏怖すら抱かせるほどに強く真摯な瞳を。

「もう、後戻りはできないからな」

低く発せられた声に、一瞬躊躇いそうになる自分を抑え込んで強く頷く。

「わかってる」

そう答えた私の反応を探るように千歳は私を見ていたが、しばらくして以前鷹楓が使っていた隠し扉である壁の前まで歩いて行った。壁に手をついてから千歳は顔だけで振り返った。

「ついて来い。これからお前をリクの元へ案内する」



## 歪んだ場所

感情の欠けた事務的な声がそう告げた。

「ここで本来一番偉いはずの千歳が案内役だなんて、そのリクって人は随分お偉いんだね。雇われの身じゃなかったっけ？」

先程のリクの話に対する反発心からつい皮肉めいた物言いをする  
と、千歳は静かに言った。

「俺は予知し予言する者。リクはその俺を永遠に綾峰に留め置く者……俺達は二人揃う事で生き神のように扱われ、この本家の庇護の元で生きてきた」

だから俺達を置き、血を与える本家は綾峰の中で最高権力を握る。そう付け足して千歳は壁を押した。

軽やかに壁は回り、室内と石造りの廊下を繋げた。

「まだこの屋敷には隠し部屋があるのか？」

訝しげにそう訊ねたのは鷹槻だ。

「本家屋敷のだいたい隠し扉、隠し部屋については把握していたつもりだったんだけどな」

「歴代当主と当たりの血。それに二ノ峰から五ノ峰の戸主だけが知らされる、この屋敷一番の秘密だからな」

千歳は言って鷹槻を振り仰いだ。

「お前はここまでだ。鷹槻」

「『当たり前』じゃない俺はリクに会う資格がないってことかよ？」

千歳はそれを無言と言う形で肯定する。

鷹槻は小さく舌打ちして苛立ちを隠すことなく顔を歪めた。

「これから呪いを解くつつってんだろ？ その呪いの元凶とその周りの連中が定めた決めごとなんて知ったことかよ」

「そうだな」

刺々しい鷹槻の言葉にも千歳は軽い調子で肯定した。

その顔には出会ったばかりの頃のような、綺麗だけれど食えない

笑み。

「『これ』はこの家に約束された永遠を生きる奴だけが従わなければならないルール。つまり逆に言うなら」

「それに従わないならそのルールに従う必要はないってことか」

鷹槻の言葉に千歳は満足そうに唇を歪めた。

そんなやり取りを見ていて、どこか安心してゐる自分がいた。

今日ここに来て、この家の歴史を話し出した時から千歳の表情は私を知るものと違った。どこか陰が潜んでいて、笑った時ですらそれは辛そうな印象を与えた。

それがさっきの鷹槻の啖呵を聞いてからいつもの千歳のペースに戻ってきた。

私や鷹槻を子供扱いし、十のうち三くらいしか敢えて言葉にせず、その反応を楽しむようなどこか意地の悪さを発揮して。

……これでこそ、千歳だ。

そう思うと何だか嬉しくなってきた、この先何があっても大丈夫だなんて思えてくるからおかしい。

千歳は千歳で、鷹槻は意外とキレやすいけど頭がよくて行動力がある。

頼もしい限りの二人がいれば、私にも無茶が通せるような気がする。不思議な高揚感と共に、力が湧いてくる。

「千歳、何でもいいから早く案内！」

「何だ？ 急に元気に」

千歳が不思議そうに首を傾げる。

「て言うか、何でもいいって何だ。何でもいいって」

鷹槻が不満そうに口にするがかまわない。どうせ私が何を言わなくたって、鷹槻は自分でどうこうする力を持っている。

「ま、いいや。……じゃあ、行くか」

そして石造りの廊下へと一歩踏み出した。

にっと笑った千歳の顔が一瞬だけ陰って見えたのは気のせいじゃないと思う。すぐにまた笑顔を張り付けたけれど、千歳にとってリ

クという人は複雑な存在なのだろう。

ひと口で彼女に抱く感情を現すなんて到底無理だろうと、千歳自身の口から聞いた言葉、鷹槻との会話を思い出しながら考える。

五百年。

言葉にするのは簡単だけれど、途方もなく長い時間だ。

私には想像もつかないような気が遠くなるような長い時間を、千歳は何を思っ生きてきたんだろう。

リクという人の裏切りとも言える行為に気づいてから、どうやって生きてきたんだろう。

薄暗い廊下を歩み出した千歳の背を負いながら、そんなことを思う。そのすぐ後ろから鷹槻もついてくる。

黙って一列になって、私達は前へと足を進めた。

初めて千歳に出会った時に一度だけ通ったこの隠し廊下。

だからうる覚えではあるが、多分ここが丁度中間点といったところだろう。

そこで千歳は歩みを止めて足下のランプのひとつに手を伸ばした。その灯りが消えると、どこからか重い音がする。

「な、何？」

「隠し扉だろ」

全く動じずに鷹槻が答える。

そう言えば彼はこの屋敷の隠し通路やら何やらはだいたい把握しているというようなことを言っていた。

「鷹槻はここ……」

「知らなかった」

「だよな」

知っていたらこんな回りくどいことをせずとも、もっと早くにリクの元へ辿り着いていただろう。

そんな私達は気にも留めず、千歳は消えたランプの上方の壁を押した。それと共に千歳の部屋にあるあの隠し扉と同じように壁が回転し、壁の向こうに更に続いていた通路を暴き出した。

「また廊下？」

千歳の視線の先には人ひとりが通るのがやつとの、灯り一つない暗闇に覆われた通路。

今いる廊下の微かな光に照らされて、何とかそこがまっすぐな通路になっているのが見えるが、ほんの少し先は真っ暗で何も見えない。

「そんなに歩かないさ」

そう言っただけ千歳が先に進むと、それに反応するかのように足元から小さく灯りが灯って行く。

「うわ」

「熱感知センサー式の灯りが足元を照らすようになってるから、人が通る時だけ灯りが点くんだ」

「レトロな洋館が売りだと思ってたのに、妙なところハイテク……」

「レトロなのは外観と人間だけだ」

私の呟きに鷹槻が皮肉っぽく言う。

「どういうこと？」

背後を振り仰ぐと、鷹槻は隠し扉を閉めながら答えた。

「この屋敷の扉は指紋と虹彩センサー式。この屋敷の庭も実は相当の防犯カメラやなんかで囲まれてる」

言われてみれば大富豪の居住地。それくらいの設備があってもおかしくはない。外界と隔絶されたような異様な空間について防犯なんという概念を失念していたが。

「あれ。じゃあ鷹槻ってこの間とか今日とか、千歳のところまで来るの大変だったんじゃないの？ この間の話を聞いてた限りじゃ割としょっちゅう隠し通路から来てるみたいなのに」

「あー見逃されてたんだろうな。ガキの頃は俺も監視カメラとかそこまで気にしてなかったし、どっかしらで本家のセキュリティに引っかかってもおかしくない。けど今までお咎めがなかったのは、やっぱりお前が口添えしてくれてたってことだろ？ 千歳」

「さあ？ どうだろなー」

前を向いたままなのでその表情は読み取れない。けれどその口調はどこか楽しげで、鷹槻の言葉は事実なのだとわかる。

それからまた黙って私達は千歳の後に従った。三つの足音が狭い廊下に響き、それに反応するように前方に明かりが灯って行く。

やがて遠目に扉らしいものがうつすらと見えてきた。

……あの向こうにいるのか。

今千歳は、鷹槻はどんな表情をしているのだろう。

それでも足だけは前へと進んでいく。

この家に……千歳に呪いをかけた人物へと一步一步、近づいて行く。

そして扉の前まで来て、千歳は立ち止まって振り返った。その顔に表情らしい表情はない。

「この先にリクがいる」

「……うん」

「リクに『当たり前』だと告げたらもう戻れない」

「わかってるよ」

千歳は観念したように息を吐いた。

「わかった。この強情娘。……で、その反逆者まがいはどうする？」

千歳の視線が私を通り越して背後の鷹槻に向けられた。

「決まってるだろ。わざわざ聞くなよ、過保護」

顔を見ずとも分かる。

この偉そうな口ぶりから、またあの偉そうな顔をしているんだろ  
うと容易に想像がつく。

「あーわかった、まったく可愛くないよなー」

そう言って千歳はくりと背を向け、千歳の部屋のものほとんどデザインの変わらない扉に手をかけた。扉は錆びたような、少し重い音を立てて開いていく。

中は薄暗いが、広い洋間だと一目で分かる。ルームランプのような明かりがいくつか室内に灯っていて、部屋の中央に大きなベッド

が置かれている。天蓋つきの、まるで眠り姫が眠っているかのようなベッド。

心臓の音が主張し始める。

一歩一歩、広い室内を千歳の後を追って進む。

部屋の中央へ。

白い霧のようなレースがヴェールのようにベッドを覆っていて中の様子はよく見えない。ただぼんやりと、眠っているような影が見えた。

今更だが、女性の部屋に声もかけずに無断で入っていいものなのか。だがベッド上にいるらしい部屋の主が何も言わないからいいのか？

そう言えば勝手に室内にドカドカ踏み込んだというのに、何も言われない。眠っているらしい影を見ても、微動だにしない。よほどよく眠っているのか。

「リク」

千歳がその名を呼んだ。

そしてレースを退けて、ベッドの上の人物を覗き込む。

私と鷹槻も千歳の後ろからその姿をそつと覗いた。

そこには墨のような黒い艶やかな髪が白いシーツの上に広がり、白い単衣ひとえを着た、私とそう年の変わらない少女が固く瞼を閉じていた。

その右目から頬にかけては包帯で覆われているが、磁器のような白い肌と左目の長く濃い睫毛、小さな赤い唇はまるで極上の日本人形のようなだった。

これが、リク。この家に呪いをかけた……。

だが今日の前にいるリクはぴくりとも動かず、寝息すら感じられない、それこそ本当の人形のようなだ。

困惑混じりに千歳を見ると、千歳はリクにかけられた布団をまくりあげた。

「千歳？」

何を、と聞く間もなく千歳は躊躇いなくリクの単衣の襟を開いた。  
「ちよつ、千歳!？」

実年齢は五百歳近くても、一応相手は女だ。同じ女として千歳の暴拳は見逃せない。そう思つて千歳の手を取ろうとしたが視界に入つてきたモノがその意識を奪う。

「……何、これ？」

リクの白い素肌は左胸を中心に、墨で読めない文字のようなものがぎっしりと書かれた包帯で巻かれている。

千歳はそれらをゆっくりと解きながら答えた。

「今、リクは生きてない」

「え？」

鷹槻と揃つて声を上げた。

千歳はそれでもリクから目を逸らさずに、しゅるりしゅるりと音を立ててどこか異様な包帯を解いて行く。

「この文字の書かれた布。これはリクの作った呪術らしくて、これが巻かれている間は仮死状態になるんだってさ」

「仮死状態？」

「そ。リクは『当たり』の人間との対面の時や当主や各家戸主が挨拶に来る時にだけ目覚める。普段はこうして眠つて……いや、死んでるんだ」

道理で生きている気配がしないわけだと思つと同時に、何でそんな面倒をと思う。リクは千歳と常磐と同じく不老長寿なのに、と。

鷹槻と目線を交わし合うと、千歳はその気配を感じ取つたように言つた。

「俺達の呪いは不死じゃないから。今だって俺は殺せば死ぬ。それに常磐のことで話したよな？ この呪いは放っておけば解けて普通の人間に戻る。老化し始めていずれば朽ちる。リクや綾峰の一族はそれを避けたいんだ」

「仮死状態の間に呪いが解けることはないの？」

「リクの話では生きている人間に有効なのが呪いなんだそうだ。だ

から最低限しかリクはこの世を生きない。綾峰の有事の時だとか、『当たり』の人間の挨拶の時とか。……少しでも呪いが解ける日を遅らせるために」

低く千歳は呟いた。

その言葉に疑問を覚えると同時、鷹槻がそれに疑問に対する解答となる声を上げた。

「その女は綾峰の血族じゃないから、『当たり』の人間の血が人魚の肉と同じ作用は働かないってか？」

「そういうことだ。リクには人魚の肉に相当するものがない」

千歳は答えながらも包帯を巻き取っていく。

床に落ちた包帯には墨で模様のようにも見える文字が書かれ、どこか不気味で異様だ。

「なるほど。そうやってこの女は守られてきたってわけか……大層な身分だな」

苦々しげに鷹槻は呟いた。

千歳は何も言わず黙々と包帯を解いていく。少しずつリクの白い肌と痩せた体が露わになっていく。

随分と細い。

鎖骨はくつきりと浮かび、腕など枝のようだ。軽々しく手を触れたら折れてしまいそうなくらいに。

そんなことを考えているとふいに千歳が口を開いた。

「この包帯が全部解けたらリクが目覚める」

その言葉に、弾かれたように私と鷹槻はリクの体に残った包帯を見やる。もうその細く白い体を覆う包帯はほとんど残っていない。

対峙の時は近い。

この部屋に入る直前の緊張が蘇ってきた。

これからどうする。

そればかりが頭を巡り、却って焦るばかりで答えなど出るわけもない。

そして千歳は再びその名を口にした。



「リク」

私達は動きを止めてリクを見た。

包帯は全て床に落ち、単衣の襟元は千歳によって正されている。

隠されていない長い睫毛が微かに震えるのを見て、無意識に私達は身構えた。

ゆつくりとその瞼が開かれる。闇色の大きな瞳はまっすぐに千歳を捕らえ、小さな赤い唇が開かれる。

「千歳様」

硝子のように透き通った声。衣擦れの音と共にリクは身を起こし、花のような笑みを浮かべてその手を千歳へと伸ばす。その長い黒髪が滝のようにベッドから零れる。

「千歳様。千歳様」

宝物のように、何度も千歳の名前を呼ぶ姿はただただ純粹無垢な少女のようで、とても彼女がこの家に呪いをかけ、まして里久を殺したなんて考えられない。

隣に立ち尽くす鷹楓からも困惑が伝わってくる。

この場で唯一、リクに身を寄せられた千歳だけが異様なほどに平静だった。

「……リク。今日は連れてきた」

リクは大きな目を瞬かせ、千歳から私達へと視線を向けた。

大きな漆黒の瞳とまっすぐに私へと向けられてきた。

何故だろう。

とても綺麗なのにその瞬間、全身に何とも言えない悪寒が走った。隠された右半分など気にならないくらい、リクの顔立ちには可憐に整っている。

白い肌と、漆黒の瞳と髪。そして緋色の唇。

その時初めて、私は自分が震えていることに気付いた。ああ、私は目の前の彼女に恐怖しているのだとようやく悟った。

リクはにっこりと赤い唇で笑みを形作った。

綺麗なのになぜ彼女の笑みはこうも怖いと思えてしまうのだろうか。

そんな心情を顔に出さないように必死に体を抑え込んでいると、透き通った声が告げた。

「はじめまして。貴女は千歳様のために選ばれた子。誇りなさい。千歳様のために生き、そして死ねる事を」

## 里玖

何故だろう。

怖い。

得体の知れない不気味さが。

リクの微笑みと言葉を前に、もう全身の震えも恐怖も隠すことは出来なかった。

最後の意地で、睨みつけることしかできないなんてまるでケンカで負けた子供だ。それでも何か言葉をとった時だった。

「随分偉そうだな。陰湿な呪い女風情が神にでもなったつもりか？」  
私のすぐ隣に立つ鷹槻が腕を組み、厳しい表情でリクを睨みつけていた。

ふとリクの大きな黒目がちの瞳がゆっくりと鷹槻へと向けられ、そしてまた千歳へと戻された。

「千歳様。当たりの子が二人生まれたのですか？」

愛らしく首を傾げ、リクは問う。

だが千歳の真一文字に口を引き結んだまま答えず、代わりに鷹槻の絶対零度の響きを持った声が告げる。

「俺は当たりじゃない」

「……当たりではないの？」

本来この家のルールでは、鷹槻にリクと対面できる資格はない。それを破ったことを明言したにも等しい鷹槻に、リクは一体どんな反応をするのかと心臓が縮む思いで事の成行きを見守っていると、彼女は軽く目を伏せてから鷹槻を見上げた。

そしてゆっくりと言った。

「では何故貴方はここにいるの？ 当たりの子でないのなら、貴方は千歳様のお役には立てない。ただ緩慢な人としての時を生きて死になさい」

当たり前のようにリクは人の生死にを命ずる。

鷹槻ではないがその傲慢ぶりにいい加減腹が立ってきた。そしてそれが恐怖を抑え込む。

「……あんた一体何様のつもり!？」

つい感情のままに怒鳴りつけると、他の三人の目が一齐に私に向けられた。

しまった、と思いはするがもう後には引けない。

「何が生きて死ぬよ。私も鷹槻も、あんたなんかに命令されて生き死に決めるほど安上がりな人間じゃない。あんたの言動は言うならば人権侵害よ」

リクは大きな目を一層大きく見開いたかと思えば、不快げに眉を顰めた。

「貴女たちは千歳様のためだけに生まれてきたの。確かに貴女たちの生死を決める権利は私にはないわ。だってこの綾峰という家は全て、千歳様のためにあるのだから」

「全部を千歳に押しつけないでよ! それはあんたの傲慢でしかない。あんた、千歳の意見とか聞いたことあるの?」

「聞かなくても分かるわ」

緋色の唇から発せられたのは、昏い昏い響きを孕んだ声。

冷たいものが背筋を這うような感覚がした。

真っ黒な瞳が深い深い底のない闇のように思えた。

「私には千歳様の全てが分かる。私は千歳様のためだけに生きているのだから」

闇そのもののような瞳が、今は奇怪にしか感じられない鮮やかな緋色の唇が千歳に向けて笑みを作る。

「……リク」

千歳は眉根を寄せ、きつく両手を握り締めた。

リクは笑う。

「私はいつだって千歳様だけのことを想っております。ですから千歳様は何を憂う事もあります」

くすくすくす。

鈴を転がすような笑い声が室内に響く。

リクの目は千歳だけしか見ていない。少なくとも、リク本人はそう思っている。

だけど第三者の私や鷹槻。そして当の千歳もリクが本当は何も見  
ていないことに嫌でも気付かされる。

リクは正気じゃない。

彼女に感じる異様な恐怖。それはリクの内にある狂気へのものだ  
った。

「……草次郎、いや常磐は」

鷹槻は低く呟いた。

「常磐はどうした？」

鷹槻の鋭い視線を受け、リクは首を傾げた。

「何故、そんなことを聞くの？」

「その言い方じゃ、まるで聞かれたら困るみたいに聞こえるな」

「困らないわ。困らないけれど何故貴方が常磐を気にかけるの？」

貴方は綾峰の人間でしょう？」

何か、変だ。

全身から嫌な汗が吹き出す。

「貴方は、千歳様のことをだけを考えればいいの。常磐のことなど考  
えなくていいの」

「……お前に指図される覚えはねえ。答えろ」

その低い声にこちらの身が竦む。

「鷹槻。常磐は……」

言いかけた千歳を鷹槻が制する。

「千歳は黙ってるよ。俺はその女に聞いているんだ」

「貴方、千歳様に向かってなんて口の聞き方をするの？」

僅かにリクの声に怒りが滲む。

「躑が足りないわ。きちんと躑け直すようにさせなくては……」

「俺の質問に先に答えろ」

ぴしゃりと鷹槻は言い放つ。

「常磐はどうした？」

リクは感情の起伏を一切なくした声で答えた。

「死んだわ」

綾峰本家が呪いを受けたのは、常磐を永遠に生かす人魚の肉の代わりとなるため。

常磐を生かすことによって常に先を見て綾峰家を守り、永遠に繁栄させるため。

なのにその常磐はもういない？

何故？

そう思ったのは一瞬。

鷹槻とリクの会話で、薄々気付いていた。鷹槻も察してはいただろう。それを敢えてリクから答えを引きずりだした。でも何のために……？

「常磐もお前が殺したのか？」

思わずリクから視線を外し、鷹槻を見上げた。

鷹槻はリクだけをまっすぐに睨み据えている。

「常磐についてこの家の一部の人間しか見ることができない記録にあった。三百年前、常磐は死んだ。女癖、酒癖の悪かった常磐は妾の一人に殺されたってな」

「殺され……？」

綾峰の生き神。

先見をする予言の子。

綾峰の宝。

その最期がそれ？

「……この家の記録は全部見たって言ったろ」  
鷹槻は私を見ずに小さく言った。

「け、けど……！」

千歳達是不死ではない。それはさっきも言っていた。

だがその存在を何より珍重された常磐がそんな最期を遂げるなんてことがあるのか？

そんな私の困惑を読み取ったように、鷹槻は言った。

「お前がそう仕向けたんだろ。妾を焚きつけて」

その言葉は刃のようにリクへと向けられた。

リクは無表情に鷹槻を見ていた。

「それが何か問題なの？」

悪びれないと言うレベルじゃない。心からの疑問とでも言うように、リクは尋ねてきた。

「だっていらないうでしよう？ 綾峰には千歳様がいるのだから。常磐なんていらないう。だから死んでいいの」

ああ、もう本当に狂ってる。

千歳の握りしめられた両手は細かく震えていて、伏せられた顔は髪に隠されて窺うことはできない。

リクはそんな千歳を心配そうに見上げた。

「千歳様？ どうなさったの？ お体の具合でも悪いのですか？」

細い手がそつと伸ばされる。だがその手は、当の千歳によって乾いた音をたてて払われた。

千歳は自分の行動が信じられないかのようだったが、一瞬泣きそうな顔をしたかと思うとそのまま俯いた。

リクは払われた手を見やって、また千歳を見上げた。

「千歳様？ どうなさったの？ 千歳様」

無垢。

リクを例えるならきつとそれ。

けれど色に例えるなら純白じゃない。

純黒。全ての色を吸収してしまう、実際にはありえない形而上の黒色だ。

あり得ないほどに深くどこまでも純粹な黒。まるでリクそのもののような。

「……本来綾峰に必要とされたのは双子の兄の常磐のほうじゃなかったのか？」

鷹槻の問いかけにリクはこの世の道理を述べるように毅然と言い

放った。

「綾峰は愚かな家」

黒の瞳は千歳だけを見上げたまま、リクは続ける。

「千歳様が先に生まれてきたら常磐の立場であつたのは千歳様。そうであればきつともつと綾峰は繁栄したわ。千歳様は常磐などとは比べ物にならないほどに素晴らしい御方。それに気づけなかった綾峰はとても愚か」

「愚か、愚かつて……その家に雇われてたんでしょ？ あんたは」  
キャッチボールもままならない会話に苛立つて私は一歩踏み出して敵愾心も剥き出しに言った。

そこでリクの底なしの闇のような瞳が私を映した。

「そうよ。この愚かな家から千歳様を守るために」  
闇に染み入るような声がそう告げる。

「お前は千歳達の父親によって雇われたって聞いた」

鷹槻の言葉にもリクは淀みなく答える。

「そう。私は呪術師で薬師。依頼を受け、達成したら綾峰を去るつもりだった。……けど、私は綾峰家で見つけたの。私が生まれてきた理由。生きる理由。呪術を学んできた理由を」

「それが、千歳か」

絞り出すような鷹槻の言葉に、リクは綺麗過ぎるほどに綺麗な笑みを浮かべた。

「そう。私の千歳様。私の顔の火傷すら厭わない、美しくて優しい御方。この世の何より尊い御方。この人に会えた。この方に出会うために、この方の災いとなるものを全て取り除くために私は生まれて来たの」

夢見るように、うつとりとした表情でリクは言う。

「……くだらねえ」

低く唸るように鷹槻は呟いた。その表情は険しい。

「それはてめえの妄想だ。夢見がちなんて言葉で済ませられると思うなよ。お前が今までしてきた事の重さはそんなものじゃ済まない」



今までで一番強い口調で声音でそう言う。

まるで断罪者のように。

リクの柳眉がひそめられる。

「貴方の言っていることの意味がわからないわ」

「わかってもらおうなんて思っていないから安心しろ。さつき結恵も言っただけな、お前のソレはただの独りよがり、自己満足だ。千歳を理由にして、お前は自分に降りかかる責任から逃げているだけだ。人を殺したことも、全て千歳のためだと言ってその責任を千歳に押しつけているだけだ」

「千歳様に負うべき責なんてないもの。千歳様の前には誰の命も塵芥も同然<sup>あくた</sup>。あつてもなくても変わらない物。そんな物を駆除するのに責任もないでしょう？」

……一体私は彼女に何を言おうとしていたんだろう。

どこまでもまっすぐに、どこまでも深い闇にあるその目を見て、私は何を伝えようとしていたんだろう。

伝える？

そんなこと不可能だ。

私からリクには何も伝わらない。生きている時間の流れ、思考の存在する場所……そんなものが全く違う。

彼女とはどう足掻いても相容れない。理解し合う事など出来ない。私の中でどれだけ大事な人間だろうと、それと比較して他人の命を無価値なものとして扱う事は出来ない。『誰かのため』と銘打つても、私には人は殺せない。出来たとしてもきつと罪悪感で自分が死ぬ。

私とリクはまるで違う場所を歩いていて、それは永遠に平行線を辿るんだ。

それくらい私達は違う。

一向にまともな会話が成り立たず、さすがに鷹楓にも苛立ちが見え始める。

それはリクも同様のようだった。私の態度といい、当たり前でもな

い鷹楓の物言い、そんな状況を気に入るわけもないのだろう。  
とにかく今はこの状況を何とかしなければ。

ちらりと千歳に見ると、俯いたまま全く動かない。

千歳にとってリクはずっと信頼してきた相手だ。その相手の本性を知ったら、さしもの千歳とてショックは大きいのだろう。

「……とにかく！ 私は『当たり前』！ ここで宣言する。綾峰結恵は当たりの血。この家にとってなくてはならない血！」

腹の底からの言葉にも、リクはさしたる関心も向けない。

「さつきも聞いたわ。貴女は本家の者ね？」

「そうだけど」

何だか不快な言い方だ。

リクは不愉快そうに眉をひそめ、白い袖で口元を覆った。

「愚かな常磐の血の子供。……それに本家ということは、桂子の娘の子かしら？ それともその子供？ あのふしだらな娘の血の者なんて、ろくでもないわ。当たり前でなければ千歳様の視界になど入れさせないのに」

吐き捨てるような言葉に、頭に血が昇る。

「あんた、おばあ様を侮辱する気？」

「おばあ様……誰のこと？」

リクは軽く首を傾げた。

「綾峰の当主、桂子おばあ様。私の実の大叔母様のことよ！」

「大叔母？ 貴女、桂子の孫ではないの？」

「私は綾峰義将の孫。桂子おばあ様の兄にあたる人の孫よ！」

リクの目が一瞬見開かれたかと思うと、それは酷く険しいものへと変わった。

「義将の、孫。……千歳様を見捨てた男の孫。何故そんな輩がここにいるの？ 一度は千歳様を見捨てたくせに、厚かましい」

まるで呪いの言葉のように、低く這うような声。リクがどれほど祖父を恨んでいるか嫌と言う程に思い知らされるような重い声。

「常磐の血を引く、身勝手なあゝの忌々しい子供の孫。何故貴女など

が」

憎悪に満ちた黒々とした瞳に射竦められる。本能的な恐怖を煽る彼女に、思わず退き身震いしている自分がいた。

鷹槻ですら強く睨みつけながらもそれ以上は動けないでいる。

リクは人間の本能に訴えかけてくる恐怖そのもののよう。

それがその狂気故か、それとも生れついでのものかは知らない。

……そう。そんなことはどうでもいいんだ。

問題は、どうするか。

千歳の呪いを解くなんて言うておいて、一秒先にどうしたらいいのかすら分らない。

（考えたってどうにもならなそうな状況が、更に悪化してるじゃない）

鷹槻なら何か……一瞬そう思って首を振る。

いつまで人に頼ってばかりいるつもりだ。綾峰に来る前、一人で生きていけるようになるために、その力を得るためにこの家に来ようと決めたのに。なのにこの期に及んでまだ人任せにするのか、私は。

リクなり常磐なりに会いさえすれば何とでもなると思ってた。

だがその常磐はいない。

リクひとりを前にして、逆にその不可能性を認識させられた。

……こんなじゃ、千歳の呪いを解くなんて出来ないじゃないか。

「リク」

静かな、夜の海のように静かな声がその名前を呼んだ。

その声の主はずっと黙っていた千歳だった。こんなにも静かな声を発する千歳は見たことがない。静かすぎて怖いほどに、静かな彼は。

## 黒い純粹

千歳は顔を上げてリクをまっすぐに見下ろした。

「どうされましたか？ 千歳様」

リクは別人のように穏やかな声で聞き返した。さっきまでのやり取りなどなかったかのような豹変ぶりに呆れるよりも怖さが立つ。

猫を被るとかそういうレベルじゃない。

多分私と鷹槻は、本当の意味ではリクの視界に入っていないんだ。ただ成行きを見ているしかできない私の前で千歳は無表情に、まるで台本を読み上げるような調子で言った。

「答えてくれ……リクは、里久も殺したのか？ 毒を飲ませて殺したのか？」

リクは落ち着いた笑顔でその言葉を聞いた。

問いかけられた本人よりも、私と鷹槻のほうで動揺したくらいだ。「随分率直に言ったな」

ぼつりと鷹槻が漏らし、私も無言でそれに同意する。

リクにとって絶対的存在である千歳に罪を暴かれる。それはただでさえ先の見えない今後をどう変えるのだろうか。

千歳なら既に分かっているのだろうか？ 先見をして、今後どうなるかを既に知っているのだろうか？

冷たい緊張感が室内に張りつめる。

リクの大きな瞳がゆっくりと瞬いた。そうして開かれた瞳はやはり千歳だけを映している。千歳以外の何も映していない。

そしてその小さな赤い唇が開かれる。

「はい。千歳様の仰るとおりです」

軽やかな鈴のような声で、柔らかに開いた花のような笑顔でリクはそう答えた。

言葉が出ない。

足元から崩れおちそうになるのを何とか堪える。

怖い。

今、心から思う。リクの内が怖い。もう何が正しいのか分からないほどに歪みきった彼女が、怖い。

喉が異様に乾いて、思考が止まったまま動かない。

「……んで」

そうして無意識に言葉を紡いでいた。

「何で」

そんな疑問がリクの耳に届くのかも疑わしい。だけど聞かずにはいられなかった。

「何で、千歳の大事な人を殺したの……？」

それに対しリクの答えは簡潔なものだった。

少しだけ首を傾けて、柔らかな笑顔で私を見て答えた。

「だって彼女は千歳様に相応しくなかったのよ」

思わず息を呑む。

「ふさわし、くなかったって……そん、なの……」

声が震え、その震えは全身にまで及ぶ。床に崩れかけたところを鷹槻が支えてくれたが、まだ震えは止まらない。肩を支えてくれる鷹槻も信じられないという顔をしていた。

それすら見えていないかのように、リクは慈悲深い聖女のような笑みで続けた。

「見目も平凡、何に抜きん出たわけでもない凡庸きわまりない女。千歳様の素晴らしさを一も理解できない無知でうるさく騒ぐしかできない女……そんな女が、千歳様にふさわしいわけないでしょう？」

千歳から五百年前の話を聞かされた時、里久とリクは仲が良かったのだと感じた。

千歳もそれを好ましく思っていたのだと感じた。

幸せな時だった、と千歳は話してくれた。

その真実が、これ。

やりきれない。色々なものが零れおちていくような錯覚に陥る。もう何もかもが嫌になる。

「何故泣くの？」

リクは笑顔のまま私に尋ねた。

「……っ」

リクの言葉には答えず、私は俯いた。

目からは勝手に涙が溢れ頬を伝い落ちていく。ぐちゃぐちゃになった感情に全身を支配されて、言葉が出ない。

ただ、嫌だ。

胸が痛くて、息が詰まって、悲しいのか何なのか自分でもわからない。ぽたぽたと涙が床に落ちるのを見ているしか出来ない。

肩を抱いてくれている鷹槻の両手に力がこもる。

けどお互い、何も言えない。何も出来ない。

「結恵」

静かで優しい声に、涙でぐちゃぐちゃになっているであろう顔を上げた。

千歳は笑っていた。

少しでも泣きそうに、けれどとても優しく笑っていた。

「ありがとうな、結恵。泣いてくれて」

そんなことを言われて反射的に首を横に振る。お礼を言われるようなことなんてない。何もできずにみつともなく泣いているだけなのに。

「鷹槻もありがとう。お前は昔からマジで怒ると無言になるんだよな」

「……うるせえな。気色悪いよ、お前のそんな殊勝な態度」

鷹槻は顔を歪ませてそっぽを向いた。

そんな様子を優しく笑いながら見ていた千歳の顔から一切の表情感情が消えたのは、本当に一瞬のことだった。

全ては一瞬のこと。

まるで時が止まったように。

千歳の両手がリクの細い首にかけられたのも、リクが驚愕の表情を浮かべたままベッドに倒れ込んだのも。

憎悪も何もない千歳の綺麗に整った、今は無機質なばかりの造形が一切の揺らぎなくリクの首を締めるのを、私達は息を呑む間もなく見ていた。

それは整った二つの造形が、舞台上で何かを演じているようで。

私達はその場に縛り付けられたかのように、ただ目で追うしか出来ずに。目の前で何が起こっているのかも理解できないままに。苦しげに吐き出されたリクの声に、ようやく目の前の出来事を理解させられた。締め上げる両手の意味を、やっと理解した。

「千歳っ！」

悲鳴とも怒声ともつかない声を上げて、鷹槻とほぼ同時に千歳の元へと走った。

だけど千歳はベッドに仰向けに倒れ込んだリクの首を締める手を離そうとはしない。必死にその手を引き剥がそうとするが、どこにこんな力があるのかというほどに千歳の腕はびくともしない。

リクは抵抗しようとしているのか、迷っているのか千歳の両腕のあたりに手をさまよわせている。けれどその口からは苦しげな声が途切れ途切れに聞こえてくる。

「やめてっ、やめて千歳！！」

「バカやってんじゃねえよ！！」

鷹槻が叫び、千歳の頬をリクから引き剥がすように殴りつけた。

その瞬間、リクの首は千歳の手から解放され、千歳は殴られた衝撃でよろめいたまま鷹槻に両肩を掴まれていた。

「何やってんだよ！ てめえは！！」

ゴホゴホと苦しそうにリクが咳き込んでいる。その白い首には千歳の手の痕がうつすらと残っていた。それがつい先ほどの千歳の行動は本気だったのだと思ひ知らせ、薄ら寒いものを感じると共に、また涙が溢れてきた。

……何でこんなことになったんだろう？

呪い？

誰が？

何が？

「……鷹槻。邪魔をするな」

「ふざけんなっ！ お前、自分が何しようとしたのか分かってるのかよ！？」

鷹槻の怒声に顔を上げた千歳の顔からはすっかり生氣が抜けたように、まるで知らない人のようだった。

「呪いは俺から始まった」

千歳が小さく言った。

「俺がいたことで、この家は歪んだ道を辿ることになった。……俺が、リクを狂わせた」

千歳はゆっくりとその目線をベッドの上で呆然としているリクに向けた。哀れみでも憎しみでもない、けれど見ていて酷く胸が痛くなるような目でリクを見て言った。

「本当は考えたことはあったんだ。もしかしたら常磐も、それにうちから不自然に死んでいった人間達も……唐突なまでに老いていった里久の死も、リクが何かしら関わっているんじゃないかって」

感情の抜け切ったような声がそう告げる。

「けど俺はそれを確かめなかった。リクの中の何かが狂い出したことにも気付くことなく。そして里久も常磐も死んでいった。俺が何もしなかったから。俺のせいであいつらは死んでいった」

「……そ、それは千歳のせいじゃない！」

「俺のせいだよ」

千歳は私を見ずに言った。

「リクも俺がいたことで狂い出した。いつからかは知らないけれども俺がいたからこんな風になってしまっただけで多くの人間が死んで行って、そして綾峰は歪んだ。……この家の呪いの始まりには確かに俺がいるんだ」

自分に言い聞かせるように千歳は呟き、肩に置かれた鷹槻の手を外した。そして僅かに声を低くした。

「本当はもっと早く、何とかしなきゃいけなかったんだ」



「……何とかつてのは、この女を殺すことか？」

鷹槻は外された手で千歳の腕を押さえつけるように掴んだ。

千歳はやっぱりと、今にも壊れそうな微笑みを浮かべて言った。

「リクも俺も。本当はこの時代に存在しちゃいけないだろ？ 歪みは正さなきゃな。それが呪いの原因になった俺のやるべきことだと思っし」

何となく、その言葉の意味を察した。

「……それは、リクを殺して自分も死ぬ、みたいに聞こえる」

千歳は私を見て、本当に本当に綺麗な笑みを浮かべた。声を上げて泣きたくなるくらいに。このまま消えてなくなってしまうんじゃないかというくらいに。

「結恵は優しくて聡い」

柔らかな声がそう言う。

「俺の自慢の子供」

嫌だ。

やめて。

「鷹槻も。器用なのに不器用で、でも優しい人間に育った」

そしてふっと笑う。

「歪みの元が消えることで、お前たちが少しでも優しい時間を過ごせるように祈るよ」

「やめて……やだ。遺言みたいなこと、言わないでよっ」

震える口から何とか言葉を絞り出す。

鷹槻も一層厳しい表情で千歳を睨んだ。

「全くだ。変なこと言うなよ、クソジジイ。お前までどうかしたのかよ！？ この女を殺して自分も死ぬだなんてふざけたこと言ってんじゃないえよ！！」

耳が痛いほどの声で鷹槻は怒鳴り、千歳の胸倉を掴み上げた。

「そんな真似、絶対させねえからな！」

怒りで熱くなっている鷹槻とは対照的に、千歳は残酷なほど静かに落ち着き払っていた。

「俺がいたからリクは『俺のために』ってこれだけのことをしてた」

「そんなのはその女が勝手にしたことだ。お前には一切関係ねえ」  
きつぱりと言い切る鷹槻に、千歳は首を横に振った。

「それでも俺はリクかもしれないってことを疑いはしたんだ。疑える土台があつたのにそれを怠った。その結果がこれだ。俺は自分が気付かないふりをしたことで里久が死んだって考えたくなかった……だから今まで考えないようにしてきた。けど、その勝手にこんなにも長い間この家は呪われてきた。歪んだ家にしてしまった」

「疑わしきは罰せずとか言うだろ。……里久についてはある種の事故だ。全部でめえでかぶろうとするな。この家の連中が歪んでるのだつてお前のせいじゃない。勝手にお前を生き神だとか祀り上げて勝手に歪んでいったんだ。お前は悪くねえ！」

千歳の胸倉を強く掴んで鷹槻は俯いてしまった。

「悪くなんかねえ……だから、頼むからそんなこと言うなよ……」

千歳は微笑笑して鷹槻の背をあやすように軽く叩いた。

そして顔を上げた千歳と私の目が合った。けれどどんな顔をしていいのかわからなくて、思わず目を逸らしてしまう。

どうしていいのかわからない。

まだまだこの家のことをわかってない私には、千歳のことを全部否定することが出来ない。

けど千歳にそんなことをしてほしくない。

それをどうしたらうまく伝えられる？

どうしたら千歳を止められる？

そんな埒の明かないことを考えた時だった。擦れた声が割って入った。

「……千歳、様」

そこにはベッドの上で首元を押さえながら苦しげに荒い呼吸を繰り返し、赤く潤んだ瞳で千歳を見上げるリクの姿があった。

「千歳様は私の死を、お望みですか？」

千歳は答えない。

それでも構わずにリクは続ける。

「貴方の望みを全て叶えて差し上げる……それがあの日、貴方様に初めて出会った日。私を不快だと思わないと言って下さった日から、それだけが私の望み。生き甲斐」

彼女の狂気を目の当たりにしたばかりだというのに、そう言つて儚げに笑うリクが綺麗だと思つた。

黒い無垢。

きつと彼女は無垢すぎてこうなつた。

誰が悪い、何が悪いとか、もう思えなくなつていた。

思つのは、どうしてこんなことになつたのかという痛みを伴う疑問。

多分リクは本当に千歳が好きで。その方向はねじれてしまつたけれど、本当にただ純粹に千歳が好きだつたんだ。

千歳は……里久さんが好きだつた。

その子供達が大事だつた。

二人それぞれ、ただ大切なものを想つていただけのはずなのに。

想う事は悪いことなんかじゃないはずなのに、どうしてこんな風になつてしまふんだろう？

「……おい」

鷹槻が低く、私だけに聞こえるくらい小さく言つた。

「ほだされるなよ。どんな経緯だろうと、物を言つのは全て結果なんだからな」

まるで私の迷いを全て見透かしたようにそう言つ。

「どんな理由があれ、この女がしてきたことは許されることじゃねえんだ」

「わかつてる。わかつてるけど……！」

リクがこれまでどれだけの人間を葬つてきたのかは知らない。

それがどんな人達だったのかも知れない。

けど、リクがこの五百年に人の命を奪つてきたのは確かなんだ

。

「千歳様」

リクは薄らと笑みを浮かべて千歳を見上げる。

「貴方が望むのなら、私は喜んで死にましよう」

「……おいつ、舌嚙ませるな!!」

鷹槻がリクへ手を伸ばそうとした時、千歳の腕がそれを制止した。

「最後の責任くらいは俺も果たすよ」

「千歳……お前、何言ってやがる」

身動きすることすら忘れた私と鷹槻の前で、千歳はまたリクの首へと手を伸ばした。

「ごめんな」

## この夜の終わり

千歳のそれが誰に向けたか、何への言葉なのかはわからない。けどその時、私の中で何かが切れた。

「いい加減にしろっ！！」

真っ赤になった頭で、喉が痛むほどに叫ぶ。

ビリビリと空気を震わすほどの声に、鷹槻も、千歳もリクも、自分すら驚いた。

怒声の余韻がまだ残る中、私はまっすぐに千歳に向って歩いて行った。そして驚いて顔を上げた千歳とまっすぐに対峙する。

「……結恵？」

驚いたような声音が何だか妙に癪に障った。

その苛立ちのままに、私はさっき鷹槻がしたように千歳の頬をつ叩いた。もちろん鷹槻ほどの威力なんてなくて乾いた音だけ。そして、千歳は叩かれても呆然と私を見ていたけれど。

「悪かったから、死んでなかったことにしてめでたしめでたし、なんて本気で思ってるの！？ バツカじゃない！ 今時そんな辛気臭いの流行らないんだよ！」

力いっぱい叫んで千歳を指差す。

「て言うか、そんな後味悪い思いさせられてたまるもんか！ 千歳がどう思っようと私も鷹槻も千歳が大事なんだよ！ だから呪いなんてバカげたものを解いて、それで大団円のハッピーエンドにしたいんだよ！ それをこんな何百年も前に使い古された悲劇みたいな終わらせ方なんて勝手にしないでよ！！」

そして千歳の胸倉を掴んだ。

「絶対死なせない！ 千歳もリクも。そんな気分悪い終わらせ方、絶対させない！ 歪んでようが、呪われてようが、正しくなろうが、千歳に人殺しなんかさせない！ これ以上の痛みなんか背負わせない！！」

千歳もリクも、目をまん丸にして私を見ていた。

私以外の誰も口を開こうとしなくて、居心地悪くなつてつい睨むように鷹槻を見た。

「……鷹槻だつてそう思うでしょ！？ 千歳の呪いとか何とか解くんだつたら、こんな夢見の悪そうな不愉快極まりない終わらせ方なんてさせたくないでしょ！？」

「お、おう……当然だ」

鷹槻は気圧されたように答えたかと思えば、私のすぐ隣まで歩いてきて千歳に言った。

「つつーわけだ。俺だつてそんな後味悪いのはごめんだ。俺らはお前の呪いを解くつて言つただろ。それはこんな後味悪いやり方じゃねえよ。俺だつてお前に人殺しなんてさせねえ。この女は……ム力つくけど、でも殺させねえ」

鷹槻は少し顔を赤くして舌打ちしたかと思えば、ベッドに座り込んだリクを見下ろした。

「だからお前も死なせねえ。千歳のために生きるとか言うなら、これ以上千歳に重苦しい思いさせんじゃねえよ。全部千歳に押しつけんじゃねえ。自分のしたことくらい自分で責任もつて生きやがれ」

リクは迷い子のように頼りない目で千歳を見上げた。

「け、ど……わた、私は……」

「千歳も！」

私はリクの声を遮るようにして、呆然としている千歳の胸倉を引っ張った。

「もういいじゃん。自分の意思を犠牲にして綾峰のために生きるとか……あんたの奥さんが望んだのつてそんなことじゃないでしょ？ ただあんたに幸せになつてほしかったただけでしょ？」

そう簡単に長い間胸の底に燻っていた気持ちが割り切れるとは思わない。頭で分かっていたつてそう簡単に気持ちがついていかないことくらい、私だつて知っている。

だけど思う。

里久さんが千歳に望んだように、私も千歳に幸せになってほしい。難しいことでも、幸せな時を過ごしてほしいって思う。

「……私があんたの奥さんだったら、今のあんたを見るのは辛いよ。私はあんたが好きだから、幸せになってほしい」

まっすぐに見下ろしてくる千歳の視線を受け止めて、一番に思う事を言葉にする。

胸倉を掴んだ手はそのままに。

千歳は泣き喚く子供を見るように私を見下ろしていたかと思えば、急にその手を頭に乘せてきた。

「千歳？」

「ガキの前で、ろくでもないことしようとしたな。俺」

苦笑して千歳は頭を撫でてきた。そして手を引いたかと思うと、そっと抱き寄せられた。

「ちっ、千歳っ!？」

「ごめんな。俺、どうかしてた。ごめんな」

厚く着込んだ着物越しに、千歳の体温を感じる。生きてるって、伝わってくる。

「バカなことやってごめん。もう言わない」

優しく抱きしめられながら、その言葉を聞いた。

「ほ、本当に？」

「本当に。大人げなくてごめんな。だから鷹槻もそんなに睨むのやめてくれよ」

微かな笑いを含んだ声に、私は千歳の胸から顔を上げて鷹槻を見た。そこには眉根を寄せて惘然とした表情でこちらを睨んでいる鷹槻の姿があった。

「勝手なことばっか言いやがって。どこまで手がかかるんだよ、大馬鹿クソジジイ」

「悪かった。本当に悪かった」

千歳は私を離して深く頭を下げた。それから顔を上げてリクを見やった。

「リク」

「千歳、様……私は……」

リクの両目からは涙が溢れ、声は哀れなくらい震えている。

「わたつ私は……貴方のために出来る事はないのですか……？ 生きることも死ぬことも、貴方のためには出来ないのですか……」

カタカタと身を震わせて、呆然とリクは呟く。

千歳は薄く口を開きかけ、一度嚙んでから改めて口を開いた。

「リクが……俺を大事に思ってくれるのはありがたい。けど、もういいんだ。リクもリクのためだけに生きていいんだ……多分、お前が里久にしたことは簡単には許せないだろうけど。けどお互いもう、この家に縛られることはない」

「でも私は……これからどうすればいいのですか？ 私は貴方のために生きるしかわからない……貴方に必要とされない私は、どうしたらいいのですか？」

人形のように綺麗な顔が歪んで、止め処なく涙は溢れてくる。

「貴方が必要としてくれないのなら、生きてなどいたくない……けどそれも許されないのなら、私はもう何も無い」

「勝手なことを……！」

声を荒げかけた鷹楓を手で制して、千歳は言った。

「俺もこの家のためって名目で生きてきたからこれからどうしていいかわからない。もう長いこと屋敷の外へは出ていない。そんな状態で外へ出るのは不安だし、怖い。けど、何もないから新しいことは何だつて出来る。そうする。……そのために綾峰の力は存分に使う。長くこの家に尽くしてくれたお前にも惜しませない」

そう言つて千歳は軽く目を伏せた。

「もういいだろう。俺もお前も。余生つてやつに浸つても。第二の人生つてやつを生きても」

リクは嗚咽を漏らしながら俯き、それ以上何も言おうとはしなかった。

否定も反論もせず、ただ泣いていた。



けれど鉛のようだった空気は少しだけ軽くなった気がした。これで一応の決着はついたのだと、私は甘い考えを持っていたから。

重苦しい扉が再び開かれるその瞬間まで。

「我々に何の相談もなく、勝手な事を申されては困りますね」

低い声と幾つもの足音が、再び室内の空気を重く息苦しいものとした。

室内に入ってきた人々を見た鷹槻が目を見張る。それから低く砧いのような声を発した。

「……こんな所まで何しに来たんだよ。二ノ峰、三ノ峰戸主が分家まで連れてぞろぞろと」

挑むように、だけど驚きを隠せないままに鷹槻は彼らに向かってそう言った。

「戸主……ってことは」

鷹槻の鋭い視線の先にいる一人の人物。

四人いる五十代半ばほどの男性達の先頭に立つ、仕立ての良いスーツに眼鏡の奥の鷹のような鋭い眼光の男性。その顔立ちにはどこか鷹槻と鷹久、それぞれに通じるところがある。

「……もしかして」

「お初にお目にかかります。結恵様」

その男性が一步進み出て慇懃に礼をした。

「私は二ノ峰家戸主、綾峰義鷹よしたかと申します。愚息共がお世話になっております」

「愚、息……」

と言うことはやはり。

「あんたのお父さん？」

鷹槻は無言で頷いた。

「義理のだけだな。鷹久にとっては間違いなく父親だけど、俺にとっては正確には伯父にあたる」

「鷹槻。千歳様、里玖様、そして本家令嬢の御前だ。口を慎みなさい」

義鷹の一睨みに、鷹槻は軽く舌打ちして口を閉ざした。

「義鷹に和典かすのりか」

千歳はさほど驚いた様子もなく呟いた。

その声に応じるように、義鷹の背後から彼より少し若く少し背は低い、強い威圧感を持った男性が姿を現す。

「先日はお世話になりました。千歳様」

その声に聞き覚えがある。

千歳の部屋に訪ねてきて私が隠れた時の…… そうだ。確かあの人も三ノ峰って言っていた。

…… そうだ。祖父を歪みと言った人物。

「特に世話なんてしてやってないし、社交辞令はいいさ。後ろの二人が三ノ峰分家と三ノ峰分家か。顔を合わせるのは初めてだな」

千歳はあくまで軽い調子で口元だけで笑うと、後ろに控えていた二人が深く頭を垂れた。その様子を見ながら千歳はあくまで軽い調子で言う。

「シキタリじゃリクの部屋まで来るのは各家戸主だけで、それも当たりの子の披露目の時だけじゃなかったか？」

「はい。ですが非常時ですので幾らかの例外は目をお瞑り下さい」  
そうして三ノ峰家戸主の視線が私に向けられる。

「初めてお目にかかります。三ノ峰家戸主、綾峰和典と申します。義将様の直系であらせられる結恵様におかれましては本家にお戻り頂き恐悦至極に存じます」

人の実の祖父のことを逃亡者だの歪みだの言っていたくせに、白々しい……。

思い切りなじってやりたい衝動に駆られたが、これから綾峰で生きていくならそれは得策じゃない。何も知らない顔で、ありきたりに返しておけばいいんだ。

「……綾峰結恵です。初めまして。不慣れなことも多いのでご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、今後ともよろしくお願い致します」

一礼して顔を上げると、四人の二ノ峰・三ノ峰の関係者達のガラス玉のような無機質で感情のない視線が不躰なまでに私に注がれていた。

値踏み、とまではいかないがこうもじろじろ見られては気分のいいものではない。そんなに『逃亡者』の孫が珍しいのかと内心苛立っていると思槻の義父・義鷹が口を開いた。

「ええ。今後、結恵様には千歳様のお側で過ごされるにあたって不自由なよう綾峰一族一同、尽力致しますのでご心配には及びません」

「……え」

私が声を上げると、鷹槻が一步進み出て噛みつくような勢いで義鷹に言った。

「どういうことだよ。義将じいさんの代わりにこいつを縛りつける気か？　ただ孫っただけでじいさんの身代りになれなんて随分な話じゃねえの？」

そうだ。まだ私が『当たり前』だっことを知っているのは私自身と千歳と鷹槻、そしてリクだけだ。

確かに私は自分で『当たり前』として生きることを選んだけれど、この人達にはまだ知られていないはずだ。

けれど義鷹は冷え冷えと鷹槻に一瞥くれてやり、言った。

「結恵様は『当たり前』なのだろう？」

瞬間、私と鷹槻、千歳も身を強張らせた。

しばらくの沈黙の後、千歳は皮肉るように笑って言った。

「監視カメラに盗聴器……そんなところか。俺の部屋か、それともこの部屋か……全く気付かなかったよ。まったく俺も身内に甘いところの上ないな」

「監視カメラって……」

義鷹も和典も、他の二人もまるで動じない。そして鷹槻は予想の範疇だったのか、驚いたのは私だけだ。リクも眉ひとつ動かさない。「内密にしておりますが無礼はお許し下さい。ですが、監視カメラ

等を設置しましたのはこの部屋のみ。千歳様のお部屋には最低限のプライバシーを守るよう取り計らわせて頂いております」

「最低限、か」

千歳は唇を歪めて笑った。

「ま、俺も隠され養われの身で贅沢は言えないか。リクのほうも様子を見ておかないと、万一知らないところでリクに何かあったりしたら大変だもんな？」

おどけた様子で千歳は首を傾げる。

「その通りでございます。これも里玖様の御身の大事を思つてのこと。どうか御容赦を」

リクは色味のない目で義鷹達を見ていたが、状況についていけないのか興味がないのか分からないが、ただ黙っていた。

「盗撮とは随分いい趣味だな。ご立派な地位の人間が揃いも揃つて」  
鷹槻は侮蔑を隠す様子もなく吐き捨てるように言う。

「この女の大事？ 違うだろ。義将じいさんに逃げられて次こそは確実に『当たり』のガキを逃がさないために見張つてたんだろ。この部屋に来るのは『当たり』の奴だけだからな」

「鷹槻。言葉を慎めと言つたはずだ」

「……俺は元当主も現当主も認めた本家の関係者だ。そんな口をきいていいのか。二ノ峰家戸主」

とても義理とはいえ親子の会話とは思えないような口ぶりで鷹槻は言つた。

その言葉に義鷹は眉をひそめる。

「そう言えば、俺は極力桂子ばあさんに近づくなつてガキの頃から散々言われてたっけか。悪いな。たつた今まで忘れてたから、だいが前から桂子ばあさんとは個人的に色々と話してるんだ。その上で俺は先代当主の子として認められている。本家の関係者として」

この家で最大に物を言うのは本家。

千歳と里玖を庇護し、綾峰の繁栄になくってはならない存在である千歳の身を保証する血筋。

鷹槻は婿養子である先代当主の子だから正確には本家の血筋とは言えないが、それでも名目上は立派にこの家最大の権力者の一人だ。義鷹が苦々しげに顔を歪めると、和典が冷静に割って入った。

「二ノ峰。口論はまたの機会に。今は先にすべき事があるでしょう」  
「……ああ。その通りだ」

咳払いをし、義鷹は仕切り直すように私を見た。

「お見苦しい所をお見せしましたが、そういった事情もあつて我々は既に貴女が綾峰家にとってなくてはならない御方であると存じ上げております」

ああ、そういうことか。

ちらりとこの部屋唯一の扉を見る。

二ノ峰と三ノ峰の分家だっという男が二人。強行突破は無理だ。鷹槻と私、それに千歳も数に入れたとしても、あちらは年はいっているとは言え大の男が四人。

それに強引にこの部屋を抜けたとしても意味はない。

綾峰の当主である大叔母に次ぐ権力者の二人が既にここにいる以上、どうせもうこの敷地から逃げられたとしても、この国……いや、この世界から逃げることはできないだろう。

それを鷹槻も感じているのだろう。義鷹を強く睨みつけたまま何かを思案するように黙っている。

……逃げる、か。

そつと一度瞼を伏せてから、義鷹と和典を見上げる。

二人の私を見る目は、あくまでこの家に必要な道具。それ以上でもそれ以下でもない。

これが、綾峰の呪い。歪み。

この家は呪われていると言った律達。

歪めせたと言った千歳。

一番呪われているのは千歳だと言った鷹槻。

その言葉の意味が、今ならよく分かる。

目の前のこの大人達が考えているのは衰えることない綾峰。

そのための犠牲など路傍の石も同然。

命あるものだろうが、意志あるものであろうが、絶対的存在である強い綾峰という家のためならば。

呪いはこの家、この家の人間。

「結恵」

静かで深みのある声が私を呼ぶ。

その声のように静かな目をした千歳が私を見て言った。

「逃げていいんだ。お前は綾峰であって綾峰じゃない、外から来た義将の孫。お前までこの家に縛られることはない。歪みに捕らわれることはないんだ」

「千歳様」

千歳を窺めようとする義鷹に、千歳は静かだけれども強い威圧感を持った視線を向けた。

「本家の者はこの家の絶対王、だろ？ それに結恵の意思に反して彼女をこの家に捕えようなんてつまらないことをするのなら、それこそ俺はこの場で舌を噛み切って死のう」

「義将様の時のような脅しはおやめ下さい」

「五十年前と違って脅しじゃない。今度は予言だよ」  
薄い三日月のように口を弛めて千歳は笑う。

「……そんな予言はいらないよ、千歳」

私の口からは自分でも驚くほど落ち着いた声が出た。

もつと震えたり、感情的になったりすると思っていたのに。ただ今の私は妙に凧いだ心地だ。思いはもう決まっている。

義鷹たち綾峰の大人達を見つめ、口を開く。

「さっきまでの会話を聞いていたのなら話は早いです。私は『当たり』だから」

一瞬、空気が冷たく張り詰める。

「結恵」

千歳の明らかに納得のいつていない声に、私は視線だけを向けて答えた。

「言ったじゃん。絶対死なせないって。千歳の呪いは解くって」  
そう言って笑う。

自分でもわかるほど、可愛げのない笑みで。

「貴方達がお偉方なら丁度いい。この家の方々にお伝えを。綾峰結恵は『当たり』。この家にとってなくてはならない人間。綾峰本家の人間」

「承知致しました。皆喜ぶことでしょう」

うやうやしく義鷹を筆頭として頭を下げてくる。

こうして形だけでもへりくだってくる相手に、私はさらに追い打ちをかけるんだ。

「それから、いずれ私がこの家の王となった暁にはこの家の呪いとやらはぶっ壊してやりますので、何卒ご留意を、と」

「……は？」

驚きに満ちた顔を上げてくる義鷹に、より一層意地悪く笑って言う。

「たった今の言葉の通りです。私はこの家の……と言うか千歳の呪いを解く気満々です。他でもない、この綾峰家の絶対的な力を以て千歳ではないですけど、予言します」

啞然とした様子で義鷹も和典も、他の大人達も私を凝視してくる。困惑が伝わってくるが、それでもこの発言を撤回する気なんてない。どうせこの抜け目なさそうな大人達のことだ。私が素直に家に縛られるなんて思ってもいないだろう。

だったら先手を打って、こちらから宣戦布告しておいてやろうじゃないか。

にっこりと、私の得意な『大人受けのいい笑顔』を作って言う。  
「そういうわけですので、どうぞよろしくお願い致します。綾峰の歪みの皆々様」

隣で鷹楓が呆れ混じりに笑みを零し、千歳が疲れたように息を吐くを感じながら、もう一度私は大人達へとにっこりと笑ってやった。





## 夜、深まり

夜明け前の暗がりの道を、迷うことなく慣れた様子で二つの影が抜けていく。

「よろしかったので？ あのようなことを言う者を本家に置くなど」

義鷹の後を歩く和典は未だ表情に困惑を残しながら尋ねる。義鷹は振り返らずに答えた。

「……構わないだろう。所詮はまだ子供。いずれはこの『呪い』の重要性が分かるだろう。最早綾峰の呪いの影響は当家だけの問題ではないのだ」

世界的企業と化した綾峰が万が一にも瓦解することがあれば、大規模な経済的混乱は避けられない。

綾峰家が零落することがあったとして、被害が及ぶのは綾峰一族だけじゃない。傘下の企業、関連企業、今や世界的企業となった綾峰家が終わることがあれば、世界経済にも大きな影響を与えることは避けられない。

それがどれほどのことか。あの本家の子供はその重みをまだ分かっていない。

まだまだ視野の狭い、経験浅い、世間知らずの子供。

「それに、万が一にも千歳様の呪いが解けたとしても問題はないだろう」

義鷹は足を止め、綾峰家敷地内の外れにある林の奥の崩れかけた小さな木の祠（むら）の前で足を止めた。

それは敷地内の人間には綾峰家の氏神（うじがみ）を祀っているとされる祠だ。

「先人達も、ひとつしか手札を用意せず、五百年もこの家を守ってきたわけではないのだ」

今にも崩れそうな祠の中には格子越しに石碑を覗くことが出来る。

その石碑に崩し文字で書かれている文字は、常磐。

常磐塚と呼ばれる石碑の更に奥に守られるものを知る者は、千歳と里玖の存在を知るものよりもさらに少ない。

千歳と里玖ですら知らない、その存在。

「万が一の際には、起きて頂けばよいだけだ」

その石碑が三百年、守ってきた者に。

「常磐様に」

そこに眠る屍と呼ぶこともためられる屍に。

「必要ならば、常磐様にお言葉を賜ればいい」

それがどれだけ人の道から、世の理から外れたことだとしても。

歪んだ形で生き続ける千歳。

歪んだ術で死にながらに生きる常磐。

何がこの家を歪ませたのか。

何が真の歪みなのか。

今となつては誰にも知れない綾峰家の、呪いという名の秘密。

## 夜明けの晩

綾峰家最奥へと赴いて二週間後に一族への正式な披露目があった。その席で改めて私は綾峰本家の人間として紹介された。

最奥から地上へと帰って全てを大叔母に報告すると、大叔母は複雑な顔をしたがそれでも私を家族として迎え入れてくれた。

それから今現在、私の数少ない友達と言える律達。

私自身もいまいち把握しきれていないあの夜の出来事をどう話したものと迷っている、あの場にいた鷹槻が「気持ちが悪くなる、それで話す必要があれば話したい事を話せばいい」と言ってくれたのでそうすることにした。だから年が明けた今も、実はまだ話せていない。あの晩、鷹槻が千歳の部屋へとやって来れたのは彼らの協力の元だったようだから何かあったのだということは気づいているだろうが、私が話さない以上話すまで待つてくれるらしい。

そして年末年始は両親も一時帰国して綾峰家で過ごした。

何があったかまでは流石に話せなかったが綾峰の跡取り候補になった、と話した時は二人して固まって、とりあえずさやかに反対された。私が一般家庭、一般育ちだと言う事を一番よく知っているのは何と言っても両親だから無理もないが。それを絶対に今更退かない！と大騒ぎして、両親も「まあどうせ他の親族が今さら認めないだろう」くらいの意識で認めてくれた。

それでも久々に会ったお父さんとお母さんは、ここに来るまでより私がずっと生き生きしていると喜んでくれた。確かに以前の私は復讐心にも似た感情ばかりに突き動かされる、今になって思えば根暗で性格がねじ曲がっていて、両親も心配だったのだろう。

ちなみにお父さんはもしかしたら『当たり前』なんじゃないかと思ったりもしたが、当人にはそんな素振りは全く見られず、私の猫かぶりはこの人から遺伝したに違いないという見事な猫を被って大富豪邸宅暮らしを満喫していた。根っからの庶民派だと自負するお母

さんは委縮しきっていたが。

それから私に一応友達（薫子や四葉達）が出来たと知るとこれとても喜んでくれた。嬉しそうに皆に私をよろしく頼むと頭を下げていたから、本当に私は心配をかけ通しだったんだなと少しばかり罪悪感を覚えた。

そして三箇日を過ぎた頃に両親は帰国。何かあったらいつでも連絡しなさい、と言って大叔母のご厚意でファーストクラスで帰って行った。久しぶりに家族に会うとやっぱり私みたいな人間でも別れは寂しくて、少しだけ泣きそうになった。素直に家族の存在が嬉しくて、愛してくれているのだと分かっただけ、少しは私も進歩したのだろうか。

それから猛勉強の日々。

鷹槻達と同じエスカレーター式私立高にコネで入れるとは言うても、コネだからこそプライドこそ大叔母の面子をつぶすような真似出来るわけがないし、いざ入学しても全然授業についていけないようじゃ困る。ただでえ私立と公立じゃ授業の進度も違うというのに、一年以上も学校に行っておらず、内申点はゼロだ。ちよつとやそつとの勉強じゃ駄目だろうとそれこそ普通の受験生以上に勉強していた気がする。

そしてあつという間に時は過ぎて入試を終え、それなりの手応えを感じたところで無事に春から鷹槻達と同じ高校に通うことが決まった。

「そうか。入学決まったかあ」

合格を報告して一番、千歳は笑って喜んでくれた。

「がんばってたもんな。新年に入ってから全然遊びに来なかったし退屈だったんだぞ」

「俺が来てたろうが」

鷹槻が呆れがちに振る舞われた紅茶にたっぷり砂糖を突っ込んで口にする。

千歳の部屋での優しいひと時。ローテーブルに美味しそうなケーキやスコーン、チョコレート、サンドウィッチなどが夜も遅いというのに並べられている。

「だってお前、かわいくないことばっか言うじゃんか」

千歳が拗ねたように口を尖らせる。

「俺がかわいいこと言ったら不気味だろうが」

「うん。それはそれですっげー不気味」

千歳は真顔で答えて、それからまた楽しげに声を上げて笑いだした。

あんなことがあった後、千歳との関係はどうなるんだろうって心配もしたけれど、千歳自身は何事もなかったように接してくれる。

鷹槻もそう。全ては最初に会った日と変わらないように、楽しくてわけがわからなくて、でも大好きな時間に還って行く。

「……そうだ！」

アフタヌーンティーのごとくテーブルいっぱいのお菓子を見て思いつ出した。

「今日ってバレンタインじゃない？ だからチョコ渡そうと思ってただけど、こんなにあるんだったら邪魔になるかな」

「チョコ？」

千歳が目を輝かせる。子供みたいだ。

そんな顔をされると何だか本当にコレを渡していいのか困ってしまふ。

「や。作ったんだけどさ、ベルギー産でもブランド物でもない、て言うか私が作ったごくごくありきたりでかつ美味しいかも微妙な……」

「けっこう美味かったぞ」

しどろもどろな私に、鷹槻は目の前のサンドウィッチを選びながら言った。

「え、何だよ。鷹槻はもうもらったのか！？」

千歳が軽く不満そうに私を見る。

すると鷹槻はどうでもよさそうにサンドウィッチから目を逸らさずに言った。

「昼間、薫子と四葉と一緒に俺ら全員にくれたんだよ。女同士で交換もしてた揚句、その上俺達はチヨコを用意してないのかとか聞いてきやがった」

「昨今は男性も女性に渡すものでしょ？」

「だからって堂々と『チヨコくれ』はないだろ」

鷹槻は呆れがちに溜め息を吐いた。

「だって鷹久と標葉さんと令はくれたよ。くれなかったのは鷹槻と律だけ」

「バレンタインは女がくれる日でいいだろうが。だいたいあれだろ？ どうせ今日チヨコをくれてやったって、お前らホワイトデーにも何かよこせとか言ってくる気だろ？」

「当ー然」

にこおつと笑うと鷹槻は冗談じゃない、と私から目を逸らしてサンドウィッチを頬張り始めた。

「そっかそっか。じゃあ俺も結恵に何かあげないとな」

千歳はにこにこ言うのと部屋の隅の簡易キッチンに向かって、しばらくしてカップをふたつ持って帰ってきた。

「ほら。結恵だけじゃかわいそうだからな。鷹槻にもくれてやろう」  
笑顔で千歳は私達にカップを手渡してきた。カップからは甘い濃厚な香りが。

「ホットチヨコ？」

「そ。この間ロイズの通販で買ったんだ。なかなか美味いぞ？」

にこにこ笑って千歳は自分の分のカップを取りに行った。

千歳は何気に通販好きだ。まあこんな地下にずっといるのだから無理もないが。

特に各地の美味しい食べ物が気になるらしく、何かとお取り寄せしては私たちが遊びに来た時に振る舞ってくれる。

「男からのチヨコなんて気色悪い」

「別に無理して飲まなくてもいいぞー」

「もらえるものはもらっとく」

鷹槻は何だかんだ言いながら嬉しそうにカップに口をつけた。彼も美味しいものが好きだから、よっぽど嫌いな人間からとかでない限り断ったりはしないだろう。

ちなみに学校ではバレンタイン、鷹槻はあちらこちらの女子からチョコを渡そうとされるらしいが、よほど親しい人間以外からはもらわないのが彼の流儀らしいと薫子から聞いた。最初それを聞いた時、私がチョコをあげても突っ返されるのではと思ったが、一応受け取ってくれたのでひと安心した。

さすがに私だって、それなりに仲良くなったと思った相手に突き返されたら傷つくし。

そんなことを考えながら私もホットチョコに口をつけた。

「おいしい」

甘くて美味しくて体が温まる。思わず頬も弛む。

「だろー？」

千歳が嬉しそうな顔で戻ってきて私の前に座った。

「こんな美味しいものもらった後にチョコ渡すの悪い気がしてきた……」

「何で？」

「だって本当にそんな大したものじゃないんだって。手作りとかしないで買ってくれば良かったー！」

一応ここに来てからお世話になりっぱなしなんだから感謝の気持ちをもったのだけど、舌の肥えてそうな綾峰家の人々相手にとんでもない無謀を働いたかもしれない。そして突っ伏する私に、鷹槻が至極冷静な口調で言った。

「だからお前のも美味かったって」

「……お世辞でもありがとう」

「俺がお世辞とか言う出来た人間に見えるか？」

顔を上げると、真顔で鷹槻が偉そうにふんぞり返っていた。本当

に王様め。

「思いません」

よし、と言うように鷹槻は頷くとカップ片手に息を吐いた。

「だいたいな。俺達は毎年四葉の作る、こしあんとチョコと味噌をブレンドした恐ろしい食い物といっていいのかも微妙なものを完食してるんだぞ？」

「味噌……」

果たしてそれはチョコに入れていい物なのだろうか。

こしあんも微妙な気はするが……。

「あいつは驚異的に料理センスがないんだ」

そう言われると今日チョコをあげた時、とってもいい笑顔の四葉とは対照的に、皆の顔が曇っていったのを思い出す。それでもその場で「食べてねえ」と言った妙に威圧感ある四葉の笑顔に圧されたのか皆無言でチョコを食べていた。

今の涙は嬉し涙じゃなかったのか。四葉からのチョコ、まだ食べてないのにどうしよう。

「そんなわけだから、とつとこの誰からもチョコもらえず、挙句の果てに自分でチョコ買ってるかわいそうなジジイに早いとこ渡してやれよ」

「お前、本当かわいくないな」

鷹槻の毒舌に、千歳は乾いた笑いを浮かべる。

そんな二人を眺めながら私は持ってきた紙袋からリボンでラッピングした箱を二つ、ローテーブルの上に置く。

「二つ？」

千歳と鷹槻が同時に聞いてくる。

「ホワイトチョコと普通のチョコなの。ちょっと多く出来たからどうかと思っただけだ。……よかつたら鷹槻も食べて」

昼間食べさせて、今は軽食を食べていて、その上さらにチョコを食べるっていうのもどうかと思うんだけど。

鷹槻はじつと二つの箱を見ていたかと思うと、そのうちのひとつ



の箱を手を取った。

「どっちがホワイトチョコ？」

「え、そっちだけど」

片方を指さすと鷹槻はその箱を手を取った。

「じゃあ俺はこっちもらう。昼間もらったのにはホワイトチョコなかつたからいいだろ？」

「おい、俺もホワイトチョコも食いたいんだけど」

千歳が鷹槻に手を伸ばすと、鷹槻はさっと立ち上がってそれをかわした。無表情に、けどしっかりとチョコの箱を持って。

「じゃあ俺はそろそろ帰る。ホワイトデーにはちゃんと何かしらくれてやるからありがたく思え？」

「ありがたくって……何であんたそんなに偉そうなのよ」

私の軽いツツコミをスルーして、鷹槻は慣れた調子で千歳の部屋の隠し扉の前に立った。

「じゃあな」

そう言ってさっさと鷹槻は部屋を後にした。まるで風のように。

「な、何だったんだろ？ 鷹槻」

何だか今日はいつにも増して変だった気がする。

すると千歳が笑いながらチョコの包みを開けていた。

「嬉しいんだろうな」

「チョコが？ だって鷹槻、くれる人いっぱいいるって薫子が言ってたよ」

「嬉しいんだよ」

更に笑って千歳は言った。

「バレンタインだから」

「何それ。もうちょっとわかりやすく言つてよ」

「これ以上分かりやすく言つたらあいつがかわいそうだろー？」

「あいつって鷹槻？ 何で？」

「……不憫だなあ、鷹槻」

だから何が不憫なんだらう？

疑問だらけの私を置いて、くつくつと笑いながら千歳は包み紙をとった箱を開けた。

「トリユフ？」

箱の中にはココアパウダーのついた丸いチョコが八個。

「トリユフ……ではないと思う。前にお母さんに教えてもらったやつで」

「あ、中がスポンジ」

人の説明を聞かずに千歳はひと齧りしたチョコを見てぱあっと顔を輝かせた。

千歳のマイペースは健在だ。

「そう。スポンジケーキをちぎって丸めてチョコでコーティングして、それでココアをふるったやつなの」

「へえ。本当に美味い。初めて食ったー」

にこにこ千歳はひとつめのチョコを食べ終え、既に二個目に手を付けていた。

「……ケーキ固いけど、平気？」

スポンジを丸めて入れるのはいいけど、ケーキだった時の柔らかさはチョコに根こそぎ奪われてしまい、けっこう固くなっているのだけ。

「ん、平気。新触感って言うか美味いよ。マジで。結恵も食う？」

「んーじゃあひとつ」

「よし。じゃあ口」

「……口って何？」

千歳はきらきらしい笑顔で私の前にチョコをひとつ差し出した。

「何って、「あーん」ってやつ？」

その言葉に、顔が一気に沸騰したかのように熱くなる。触ってもいないのに、耳まで熱い。

「ななななな何言ってるの!？」

「何って食わしてやろうって言ってるじゃん。ほら、口」

千歳はどこまでも平然と、でもその笑顔を崩すことなくチョコを

持ったまま言ってくる。

脳みそまで沸騰しているに違いないと思いながら、私が口を開けると千歳はにつこりと笑って口の中にチョコを放り込んできた。もぐもぐと必死に口を動かしていると楽しげに聞いてきた。

「俺と鷹槻の言ったとおり、美味いだろ？」

正直味なんてとてもわからない。わからないけれど必死に首を縦に振った。

千歳はそんな私の様子を見てまた笑いながら新しいチョコを口に入れた。

そんな風に二人で真夜中のお茶会をしながら他愛ない話をしていくと、あつという間に時間は過ぎていく。

本当はもう堂々と千歳の部屋に来てもいいのだけど鷹槻は微妙なところらしく、やはり夜こっそり来ることが多いので自然と私も夜に足を運ぶようになっていた。

あの日、リクの部屋へに行った日以来、千歳はどこか元気がなかったから鷹槻も私も口には出さなかったけど千歳が心配で出来るだけ顔を出すようにしていた。

あれからリクはどうなったか。

リクはまた深い眠りについた。

今度は呪いによる仮死状態でも何でもなく、純粹な眠り。

私が鷹槻の父親たちの前で宣言してしばらく、リクは糸が切れたようにその場に倒れ込んだ。

すぐさま秘密裏に綾峰お抱えの医師が呼ばれちよつとした騒動になりかけたが、ただ眠っているだけだと分かり私と鷹槻、千歳は『もう遅いから』と大人の子供を追い払う常套句でリクの部屋から追い出された。

それからリクはあの部屋でまだ眠っている。一度として目を覚まさないまま深い深い眠りにについている。

詳しい原因は現代の医療技術を以てしてもわからなかったらしいが千歳が言うには、長く自身に呪いをかけ続け、気力体力が削がれ

たからだろうとのことだった。呪いのことなんて私は何一つ分らないけど、千歳は千歳で大昔から不老になってから自分なりに色々調べていたらしい。

とにかくリクは現在も綾峰の監視下で昏睡状態だ。

彼女の目が覚めた時どうなるのかなど想像もつかないけれど、少しでも千歳の心が安らかであればいいって思う。

「はー甘いものって癒されるなー」

呑気な笑顔で持ってきたチヨコやら元からテーブルの上に置かれていた軽食やらを完食した千歳を見ながら、そう思う。

その笑顔が唐突に私に向けられる。

「結恵？ 何だよ、ぼーっとして」

「あ、えーと……」

別にぼーっとしてたつもりはないけれど、千歳の目にはそう映ったらしい。

「もしかして眠いのか？ あーもうこんな時間だもんな」

ひとりで納得したように、千歳は地球儀型の時計を見た。

午前四時半。深夜と言うより既に早朝だ。いつの間にそんなに時間が経ってたのか。

チヨコのラッピングに思ったより時間がかかって、ここに来た時間自体がいつもよりも遅かったんだけど。実はリボンだとか包装紙だとか相手にかなり四苦八苦したのは千歳達には秘密だ。

雑誌の特集見て練習していたのに慣れないことはするものじゃない。つくづく自分は女の子らしいことに向いていないという事実に直面せざるをなくて何だか軽くへこんだ。やればやるほどぐちゃぐちゃになっていったリボンと包装紙を思い出し、知らず溜め息も漏れる。

「結恵ー？ 眠いならもう部屋に戻ったらどうだ？」

千歳が気遣うように言ってくれる。

「いや……眠いわけじゃないんだけどさ」

千歳の気遣いが嬉しい半分、自分の不器用さが情けない半分でま

すます息が重くなる。

「何て言うか、私って本当に普通の女の子ってカテゴリーから外れちゃったよなーと思って」

すると千歳は目を瞬かせて言った。

「……何を今さら」

その言葉がざっくり突き刺さる。確かに今さらだけど、今さらだけど……。

普通の女の子は人魚の肉だの呪われた金持ち一族だの、そんなものに自分から足を踏み込んだりはしないだろう。顔のいい同世代の親戚達と初対面から火花散らして協力関係になったりする十五歳もそうそういないだろう。さらに親世代の学校の先生なんかよりやら威厳溢れる親戚相手に啖呵切ったりもしないだろう。

こうしてひとつひとつ冷静に考えると自分は十五歳女子としてこれでいいのかと軽く疑問が湧いてくる。

「結―恵―？ 何だよ、へこんでる？」

「べーつにー……」

「そんな人生悲観したみたいな顔でそう言われてもなあ」

呆れがちに千歳は言う。それから俯き加減な私の頭に手を置いて撫でてきた。

「『普通』ってのが全国でも全世界平均でも何でもいいけどさ、それって言うなら没个性的ってことでもあるだろ？ それを望む人間も多いんだろうけど、俺は他人と違った自分の道を選ぶ人間のが好きだぞ？」

優しい手に嬉しさと安堵を覚え、目頭が熱くなる。

顔を上げられずにいると、小さく笑う気配がした。

「ま、結恵くらいのは悩むだけ悩め。そのほうが面白い大人になれる」

「面白いつて」

お笑い芸人じゃないんだから、という気持ちで千歳を見上げる。すると千歳はにこにここと屈託なく笑っていた。その笑顔を見てい

ると反論する気も失せる。

「……じゃあせいぜい面白い大人になれるように頑張るよ」

「うん。楽しみだなー」

言って千歳はまた笑う。それからふと、思いついたように言った。

「面白いと言えばさ」

「ん？」

「ずっとここに籠り切りつても退屈なんだよな」

「？ うん」

千歳が何を言おうとしているのかわからず、つい曖昧に返してしまふ。

「最後に屋敷の外に出たのって、義将がガキの頃なんだよ」

祖父が子供の頃。祖父はこの間八十歳で亡くなったのだから、子供の頃を十歳と考えて……。

「それって七十年は前ってこと！？」

「多分それくらいだな。第二次大戦前だったと思う」

軽い調子で言う千歳に言葉を失う。

これはもう箱入り息子とか大事にされてとかそういうレベルじゃない。監禁レベルじゃないか。

「よく今まで無理矢理外に出なかったね！？ 出させてもらえなかったとは言え」

「んー出せって言えは出れたんだろうけど、俺自身がけっこうどうでもよかったんだよな」

急に冷めた声で千歳は言った。

「何か自分が生きてるって意識も薄かったし、あんまり興味なかったんだよ。自分がどうするとか。だから外に出たいとか、どうしたいとか考えなかったからさ」

それは私が今まで見てきた千歳からは想像もつかない。私が見た千歳はマイペースで、よく笑って、楽しいことが好きで、明るい性格で。少なくともあの正式な夜の一件がなければ、信じられなかったと思う。

奇しくも千歳の別の一面を知ることになった、リクの部屋へ行った夜がなければ。

「……でも今は……違う？」

恐る恐る尋ねると、千歳はにっこりと笑った。

「違うからこうして言えるんだよ」

「……ごもつとも」

だからここにいることを退屈って感じるんだろう。そんなことを考えていると、千歳が子供のように無邪気な笑みで言った。

「だからさ、これから少し外に出てその辺歩いて来ようと思うんだ」

## この日の夜明け

「外に……って、屋敷の外!？」

「うん、そう」

「ど、どのくらい!？ 少し歩いてってどのくらい少し!？」

思いもよらない千歳の言葉に、頭が混乱して言葉がおかしい。けれど混乱しきった私とは対照的に千歳は冷静。

「んーとりあえず冬の朝じゃ寒いし、庭をちよつと歩いてくるくらいだな。回廊歩くくらいしかしないから俺ちゃんとした防寒具持っていないし。冬の空は星が綺麗だよなー。空気が澄んでてさ。あ、でもあれから七十年も経ってたら昔ほど星は見えないかな」  
楽しげに千歳はひとりごちる。

「明日は晴れだって言ってたから、朝焼けは多分見れないよな。あ、結恵知ってるか？ 朝焼けだとその日は雨になるっての。昔はそう言われててなゝあとは不吉だとかも……」

私を見た、千歳の言葉が途切れた。

「……どうした？ おもしろい顔になってる」

「その暴言はさておくとして……それってうるさい大人に知られたらえらい騒ぎになるんじゃないの？」

たとえば鷹槻のお父さんとか三ノ峰戸主とか。いかにも頭が堅そうで、綾峰の歪みにはまってそれを正しいものとして生きる人達が知ったら。

そんな私の心配を打ち払うように、千歳は太陽みたいに明るい笑顔で言った。

「だから誰にも言わずに。いつも鷹槻が来る隠し通路、あれ使えば直接外に出れるし」

それでも不安が顔から消えない私に、千歳は事もなげに聞いてきた。

「結恵も来るか？」



「え？」

「朝日を拝みに」

そしてにつこりと笑う。

「朝日を見るのは百……何十年振りだっけか。楽しみだなー」

「本当に行くの？ 寒いし見つかったら絶対面倒なことになるし……」

「うん。だからこうして結恵も巻き込んで、共犯者になってもらおうと思って」

しれっと笑顔でそんなことを言っただけ。

巻き込んで共犯者……。

いい様に使うと本人を前に明言するかと思いついても、それも悪くないと思っている自分がいる。前の私だったら殴って暴言吐いてそれでおしまいだっただろうに、千歳に対してはそれが出来ない。本気でただ人を利用してようとしてんじゃないとわかっているというのもあるけど、多分それだけじゃない。

「……コート、私のでよかったですら貸すけど。少し大きめがあるから」

「お。一緒に行くか」

そんな嬉しそうな顔をされるともう何も言えない。

「桂子達にも秘密だぞ？ 誰にも見つからないようにな。今から俺と結恵は共犯者なんだからな」

共犯者だなんて、少し物騒な響きすら嬉しいと思ってる私は重傷だ。

「……じゃあコート取ってくる」

「おう。頼む。くれぐれも人に見つかるなよー」

「はいはい」

けど千歳はすごく楽しそうで、それだけで私まで楽しくなってくる。

笑いたくなってくる。

うつん、考える前に笑ってる。

「こっちの回廊使うのは久々だなー」

私のロングダウンコートを着た千歳は、遠足に向かう子供のような笑顔で回廊の先を歩く。

私には少し大きめサイズだったおかげで、細身の千歳には難なく着ることが出来た。よかったと言えばよかったのだが、ダイエットしたほうがいいのかと考えたり乙女心は複雑だけど。

「いつもは結恵がいつも使ってくるほう……屋敷内に直結した回廊をうろろしてるんだよな」

「そんなに頻繁に歩いてたの？」

外から流れてくる冷氣から逃れるように、今年買ったばかりのコートに顔をうずめて尋ねる。

千歳は私の前を歩いたまま楽しげに答えた。

「だってずっと部屋にひきこもってたら健康によくないだろー？ たまには歩かなきゃな。変わり映えはしない回廊でも、季節によって空気が違うなーとか考えながら歩くのも俺の趣味」

「へえ」

こういうところ、やっぱり千歳は少しばかりお年寄り臭い。

「初めて結恵と会った日もそうだったんだよ。鷹楓が来るって言うた時間までヒマだったから、じゃあ歩いてきて時間つぶすかって」

「ああ、それであんな所にいたんだ」

「そう、それで結恵に会って、見かけない奴だし使用人でもなさそうだったから声かけたらぶん投げられた」

「……スミマセン」

そう言えば投げた。無我夢中で投げ飛ばしたんだった。こう、心靈現象の類だと思つて。

……思い出すだけで顔から火が出そうだ。

「ははっ。あれはだいぶ痛かった」

「ご、ごめんって」

申し訳ないのと恥ずかしいのとで声がどんどん小さくなっていく。  
「本っ当にスミマセンでした」。と言うか、千歳は予知とかできちゃうんだからそれくらい防いでくれればいいのに」

そう口にしてから気付いた。

「そう言えば千歳、あの時私に会うつて知らなかったよね？ 最初私のことわからなかったし」

「うん、わからなかった」

千歳は顔だけ振り返ってにつこり笑った。

「何で？ 千歳って未来のことが分かるんだよね。それくらい分かりそうなもののに」

「んー前に少し話したけど、俺は予知をある程度コントロールできるんだよな。視たい時に視て、知りたいことを知るって。だから普段は可能な限り予知はしないようにしてる」

「え、何で？」

純粹な疑問に目が丸くなる。

すると千歳は苦笑した。

「予知って便利っぽいけどさ、けっこう怖いんだぞ？ 俺と常磐が最初に見た未来は、生まれ育った村が火に巻かれて人が焼け死ぬ場面。今も目に焼き付いてる」

静かに話しながら、千歳はまた前を向いて歩き始めた。

「そんな光景をいくつも視ているうちに、俺は怖くなった。ふとした拍子に近い将来現実になる出来事が俺の意志とは無関係にわかってしまうんだ」

それは……とても怖いことなのかもしれない。

嬉しいことだけじゃない。

近い将来起こる避け得ない悲しい出来事、恐ろしい出来事がわかってしまうということは。

知ること回避できるのならそれも良かったと思えるかもしれない。けど、それがどう足掻いても変わらない未来だったら……。

「だから自然と視ないように視ないようにってしていつて、気付いたら自分の意志で先を知ること知らないことができるようになった。それが逆に常磐を増長させた。綾峰の未来は俺たちの機嫌次第ってね」

千歳は軽く息を吐いた。

そしてほんの少し、後悔を滲ませる声音で言った。

「まあ俺も似たようなモンだけど。俺達の機嫌を損ねられないのを知って随分ワガママ通してきたよ」

「おじいちゃんのことか？」

間髪入れずに口にした言葉に、千歳はもう一度振り返った。少しだけ目を丸くして。

「おじいちゃんがこの家を出れたのは千歳のおかげでしょう？」

「んーまあ、少し、は？」

居心地悪そうに千歳は目を逸らし、また前を向いて少し早足で歩き始めた。

私も離されないように歩調を速めてついて行った。

「ありがとう。おじいちゃんを助けてくれて」

「助けてって言うか」

「おじいちゃんとおばあちゃん、すごく仲が良かったんだって。おばあちゃんは私が生まれる前に亡くなってたから話に聞いたただけなんだけど。でもすごく仲良かったってお父さんたちから聞いている。そのおばあちゃんとおじいちゃんが一緒になれたのは千歳のおかげだから。だからおじいちゃん達の分までありがとう」

「……あいつが幸せに過ごせたのなら……良かった」

微かに笑う気配がして、そして千歳は黙った。

静かな回廊に二人分の足音。

冷たく切るような冬の空気が頬を撫ぜる。

外が近いんだ。

腕時計を見てみると、日の出時刻が近い。この調子なら夜明けを見れるだろう。

「結恵は」

前を向いたまま、唐突に千歳が口を開いた。

「結恵はいいのか？」

「何が？」

「義将はこの家を出たがっていた。今さらだけど、結恵もこの家に留まること、後悔してないのかと思って」

前を歩く千歳がどんな顔をしてそう言っているのかはわからない。でも明るい顔で、楽しい気分で聞いてきたんじゃないってことだけはわかる。

「……私はおじいちゃんの血の繋がった孫だけど、おじいちゃんとは別の人間だよ」

「うん」

「だからおじいちゃんがこの家を出たいって思ってたんだとしたとしても、私もそう思うとは限らない」

「うん」

「実際私は今もまだ、この家を出てやる気なんてさらさらないし。当たりかどうかわか選べって言われた時から変わらない。あのまま中途半端に退いたら、今私は絶対にものすごく後悔してた」

「……そっか」

柔らかな声が相槌を打つ。

「そっだよ。それにね、おじいちゃんに言われた。自分で決めたことなら貫き通せて。私の座右の銘なの。だから、貫き通す」

力を込めてそう言っていると、千歳は少しだけ振り返って微笑んだ。

「そっか」

「うん」

強く頷くと、千歳はまた笑って前を向いた。

冷たい風が前から流れ込んでくる。行き止まりのように立ちはだかった回廊の終着点でもある壁の前に、千歳は立ち止まって壁に手をかけて押した。すると庭に繋がっている隠し扉が開かれる。

今まで以上に冷たくて強い風が吹きこんできた。

そして薄い藍色に染まった夜明け前の空が、視界に広がる。澄んだ空気が肺いっぱい満ちる。

「……外」

ぼつりと漏らしたのは私。

そんな声に後押しされたかのように、千歳はゆつくりと石の廊下から芝生の地面へと一歩踏み出した。

枯れた芝生を踏みしめて千歳は空を見上げ、大きく息を吐いた。

「変わらないなーこの家の庭は。俺が最後に見た時のまんま！」

振り返って千歳は歯を見せて笑った。

「あの外灯とかもそうだし。屋敷の外観も大きくは変わってないのな」

「明治時代に建てられて以来、出来るだけ外観を損なわないように補修しながらやってきたって聞いているよ。庭もそうみたい。古い写真を見たら大きくは変わってなかったから」

「ふーん。なんか変な感じだな。俺が最後に外に出たのって生物的に言うといけない時間が経ってるはずなのに、ついこの間のことみたいだ」

いつも千歳は基本的に笑顔だけど、今日は特に楽しそうだ。遊園地に来た子供みたい。

「あーせっかくだしこのままコンビニとか行ってみたい！一日中空いて何でも売ってるんだろ！？ 人類の進化すごいよな。俺の時はまだ楽市楽座だったのに！」

「え、コンビニって人類の進化？」

それはちよつと違う気がするが。そして千歳は戦国時代初期の生まれなだけあって楽市楽座経験者か。

「あとな、ほらあのデカイ耳のネズミがいる遊園地行きたい！上に東京ってつくから東京にあるもんだと最近まで信じてたんだよねそれからー……いっそ京都とか行って変わってない物探しとか、でもそれならついでに海外とか」

本当に本当に、楽しそうに嬉しそうにそんなことを言う。

「俺、飛行機って乗ったことないんだ。あんなでっかい鉄が空飛ぶなんて理論説明されてもさっぱりだし。結恵は乗ったことあるか？」  
「何回かはあるよ」

「マジで？　どんな感じだった？」

「最初は耳鳴りしたりするけどあとはフツーだったよ？　窓の下に雲が見えてようやく空にいるんだなって思ったくらい」

「へーっ！　いいなあ本当に空飛べるのか！　不思議だなー空飛ぶっていったら鳥か妖怪くらいのもなのだったのにな！」

飛行機なんて今を生きる私達からしたら珍しいものでもなんでもない。こんなに目を輝かせて、珍しがって楽しがるほどのものじゃない。

改めて千歳が遠い昔に生まれて、本当に長いこと隠されて生きてきたんだということを思い知る。

少なくとも屋敷の地下のあの部屋に七十年。きつと屋敷が建てられる前から似たような状況ではあったのだろうけれど。

「……」

小さく両手を握り締める。

白み始めた空を背にはしゃぐ千歳を見て、今まで何度も何度もしてきた決意を改めて口にする。

「千歳」

「んー？」

空に浮かんだ星を数えていた千歳が振り返る。

「絶対にこの家の呪いなんて全部ぶっ壊すから」

千歳はこの家で最も大切にされている。大切に大切に……そういう名目で綾峰の小さな檻に閉じ込められたままである事は変わらない。綾峰内部の人間ですら未だにほとんどが千歳の存在すら知らないことがそれを示している。

それが先々代当主の取り決めだったらしい。危険な世になってきたから、千歳の存在はごく一部の間の者達以外には知らせてはならないと。出来る限り千歳をこの屋敷から、あの部屋から出さないこ

と。

祖父と大叔母様の父親……私の曾祖父のその言葉は今も生きている。

本人はもうとつくの昔に死んでいるのに他の綾峰の人間にまでその言葉は浸透し、今もそれが法となっている。

娘である大叔母様よりも重く扱われる、近代における綾峰の繁栄に一役買ったという先々代の言葉。

いつまでもいつまでも、千歳を縛る言葉。

「私がひいじいさんの言葉なんて絶対撤回させてやるから！ そうしたらコンビ二でも遊園地でも海外旅行でも好きに行くといいよ。絶対に近い将来、そうさせるから！」

一族が何も言えないくらいこの家の当主にふさわしくなって、先々代を凌ぐくらいに強くなって、そうして私が綾峰の王になる。そうしたら今度こそこの家の呪いなんて解けるんだ。

ずっとはしゃいでいた千歳はいつの間にか落ち着いた大人びた笑顔になっていた。

「頼もしいな」

「……もしかして、余計なお世話？」

こう息巻いていても所詮それは私の勝手に、千歳がそれを望んでいるのかはわからない。

けど千歳は笑って首を横に振った。

「いや。そうなら嬉しいよ。異界帰りでもなく、予言の子でもなく、隠された存在でもなく、ただの人として生きられたらそれはとても幸せなことだ。けど」

声のトーンが微かに落とされ、千歳の瞳が幾分鋭くなる。

「この家の呪いはきつとまだ他にもあるから」

「……リクのこと？」

「さあ」

千歳はポケットに両手をつっ込んで、肩を竦めた。

「何、どういう意味？ はぐらかさないでちゃんと教えてよ」



「俺もわかんないから」

「え？」

自分でも声が刺々しくなるのがわかった。

鼓動が早まり、冷気のせいだけじゃなく体温が下がる。

「あの時、義鷹達の引き際が随分あっさりしてたろ？ 結恵が呪いをぶっ壊すって言った時」

「……まあ、そう……なのかな」

千歳は小さく笑いを零して続けた。

「まだ何かあるんだろうな。例えば俺がいなくなっても平気な保険とか」

「何か、って何？ 千歳に代わるものなんてないでしょ！？ だからこの家はずつと千歳を閉じ込めて……」

「うん。そーなんだよな。けどさ、この数百年で何度かそういう感じがしたことはあるんだ。俺の代わりになる『何か』を一族は隠し持ってるんじゃないかっていう感じ」

強い風が高い庭木を揺らし、轟音と共に突き抜けて行った。

その後に残るのは冷たい空気。

「この家の呪いはひとつ、ふたつじゃないのかもしれない」

「そんな……」

この家は底無し。

以前鷹楓が言った言葉が蘇る。

もし千歳の言葉が本当だとしたら……だったら、本当だったとしてもまた壊せばいい。

「いくつ呪いがあるうと関係ない。この家の呪いという呪いは全部私が跡形もなく壊す！ 千歳が大手を振って出歩けるように、そんな辛気臭いものは全部片付けて焼却処理してやる！」

「焼却……」

啞然と千歳は呟く。

私は頷いて、自分にも言い聞かせるように声を張り上げた。

「私は千歳の呪いを解くって言ったんだから解く！ でもって、千

歳は幸せすぎて涙が出るまで幸せにしてあげる！」

千歳の目が大きく見開かれた。かと思えばにやりと意地悪げに笑って私を見てきた。

「それ、プロポーズってやつ？」

そんな風に冗談めかした言葉を口にした。

途端、顔中に熱が集まってくるのがわかった。

「わっ、私は本気で言ってるの！」

人が真面目に行っているのにこの本来ならギネス記録ご長寿は！

「うんうん。嬉しい話だ。いい子だなあ結恵は」

「子供扱いすんなあっ！」

「してないしてない……あ」

にこにこと頷いていた千歳の視線が上へ向く。

つられるようにして私もそちらへ視線を向けると、いつの間にか薄い藍色だった空に光が漏れ始めている。

「夜明けだ」

遠くに見える緑と点在する家々の間から眩しいほどの光が昇り始めている。

「……こんなに、太陽の光って強かったか」

千歳はごく薄い藍色から明るい色に変化を始めた空を、夜闇を切り裂くような強い朝日に目を細め、深い感慨を込めた声を出した。

彼が今何を思っているのかは分からない。

想像もつかないくらい久しぶりの夜明けを前に、何を感じているのかなんて分からない。

けどその横顔がとても綺麗で、とてもとても綺麗で胸が締め付けられた。

「……ねえ千歳」

「んー？」

お互い朝日からは目を離さない。

「私、千歳好きだよ」

空気に溶けてしまいそうなほど、自分でも不思議なくらい自然に

その言葉は口から出た。

千歳は一度私を見てから、また相好を崩した。

「俺も結恵が好きだよ。大事な大事な俺の子供。おんなじ血の、大切な子」

そう言つて頭を撫でられた。

「遠い遠い、子孫。我が子も同然の」

そんな意味で言つたんじゃないのに、ものすごくいい笑顔で言ってくれる。

……本当にちゃんと伝わってるのだろうか。私がどういう意味で言つたか。

小さくため息をついて、ただ自棄になつてもう一度口にする。

「大好きだよ」

「うん。俺も」

頭を撫でる手が強くなつて、いい様にあしらわれる子供みたいだ。やっぱり千歳の中で私は子孫で子供か。予想はしていたが悔しいというか、悲しいというか。

そんなことを考えていたから、遠くで轟々と鳴る風の音に紛れた千歳の言葉は聞こえなかった。

「鷹楓に恨まれるな」

苦笑混じりに落とされたその言葉は耳に届かない。

「今、何か言つた？」

「んー特に何も？」

胡散臭いまでの笑顔で言われるとそれ以上聞く気も失せる。

「朝日、綺麗だなー。まさかまた太陽拝める日が来るとは思わなかった！」

「良かったねえ」

「人間わからないものだなー」

「そうだねえ」

千歳の楽しそうな顔を見ていたら何だか気が抜けてきた。

「時間が動きだしたって感じだな」

「は。時間？」

あまりに唐突な言葉に、つい眉をひそめる。

けど千歳は気にした様子もなく笑顔のままで。

「俺にとつて未来はずーっと同じようなもので興味なんてなかったけど、外に出たからかな。あー明日はまた違うんだろうなとか、今そんな風に思ってる」

「それは……前向きになったようでよかったよ」

「うん」

満面の笑みで千歳は頷いた。それから少し意地悪く笑って言う。

「だから明日、明後日、一年後は今とは違うかもなつて。もしかしたら鷹楓と火花散らす日も来るかもしれないし」

その言葉の意味は、まだまだ自分のことで精いっぱい私には理解できなくて。

「何それ？ 鷹楓と火花散らすつて……ケンカでもする気？」

「ケンカつてほど可愛らしいものだといいなー。泥沼になりたくないよな。あいつだつて俺の子だもん」

「わけわかんない」

「うん。わからなくていいよ」

「何それ」

千歳のマイペースな喋りっぷりに和むと同時に笑いが零れる。

本当にこの不思議な空気、嫌いじゃないんだよな。

「そろそろ戻るか。けっこう冷えるな」

「まだ二月だからね。冬真っ只中」

「あーそりゃ寒いよな」

言いながら千歳は隠し扉を開けて、私の手を取った。

「じゃあ帰るか」

「うん」

その手を握り返して頷いた。

明日、明後日、一年後、五年後、十年後……先がどうなるかは分からない。閉ざされた扉は開かれて、新たな時を刻み始め、少しずつ

つ、少しずつ変わっていく。

呪われた予言の子も、盤石を誇った絶対王制の家も。

この先がどうなるかなんて知らないし知る気もないけど、出来るなら少しでも楽しくて優しい未来を。

分からないからこそ、私は祈る。

好きな人達が幸せな時を過ごせるように、少しでも多く笑って過ごせるように。

了

## この日の夜明け（後書き）

不可侵区域、これにて完結です。ここまでおつきあい下さった読者の方には心からお礼申し上げます。

以前携帯小説として書いたものを気休め程度に手直ししてこちらで公開させていただいたのですが、こちらでも自分で思っていた以上の方に読んでいただけたようで作者冥利につきます。

数年前、少年マンガの打ち切りエンドみたいに「俺達の冒険はこれからだ！」みたいなノリの終わり方をさせたいと何となく思い、絶対的なハッピーエンドではない、今後にまだ何かありそうな雰囲気を残した終わらせ方をしようと不可侵区域を書き始めました。

そんな自分本位で始めた話ではありますが続編をと言って下さる方もいらして、書けないかとも考えたのですが当時も今現在も私の技量では到底納得のいく終わらせ方はできないと、この曖昧な終わり方で不可侵区域は完結しています。

本編とは関係のない番外編のような短編はいくつか書きましたが、今もこの不可侵区域のキャラクター達には愛着があるのでいずれこちらでも公開させていただくかもしれません。もしその機会がありましたらまたお目にかかれればと思います。

それでは最後にもう一度、読者の方に心からのお礼を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4031p/>

---

不可侵区域

2011年9月5日03時13分発行